福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告

—4—

福岡市早良区賀茂所在野芥大薮遺跡第１次調査

１９９８

福岡市教育委員会

福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書－４－　正誤表

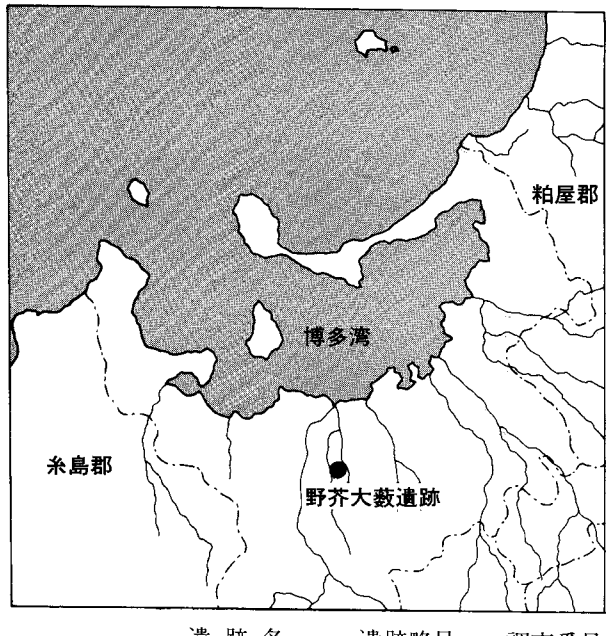
頁	行	誤	正
II	5	(3)ＳＤ0111　２号ベルト土層	(3)ＳＤ0111・0112　３号ベルト
		(4)ＳＤ0111・0112　３号ベルト	(4)ＳＤ0111　２号ベルト土層
1	6	必要になり	必要となり
7	7	8752㎡	8750㎡
22	38	三葉の葉で、左右蔓草が	三葉で、左右唐草が
25	2	、4.3cmを測る。	、器高4.3cmを測る。
26	9	平行叩きで	平行タタキで
	19	平行叩きで	平行タタキで
42	10	鋤の柄の未製品である。	槽の握手か鋤の柄か。
54	4	下の方は灰黄色粘土ブロックを混入、部分的に黒色砂を混入する	下の方は灰黄色粘土ブロックや部分的に黒色砂を混入する。
67	9	真っ直延びる	直線的に延びる
69	25	左右蔓草がある。	左右唐草がある。
図版表紙		工事が進む福岡外環状道路（南東から）	工事が進む福岡外環状道路（東から）
ＰＬ.12		(3)ＳＤ0111　２号ベルト土層	(3)ＳＤ0111・0112　３号ベルト
		(4)ＳＤ0111・0112　３号ベルト	(4)ＳＤ0111　２号ベルト土層
ＰＬ.17		遺物番号155	ＳＫ0106　遺物番号155
		遺物番号177・182	遺物番号178・183
ＰＬ.18		遺構面　遺物番号254・257	遺構面　遺物番号255・259
ＰＬ.22		遺物番号63・61	遺物番号64・63

福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告

—4—

野芥大薮遺跡第１次発掘調査報告



遺 跡 名	遺跡略号	調査番号
野芥大薮遺跡	NKO-1	9307

１９９８

福岡市教育委員会

序

福岡外環状道路は、福岡市西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原までを結ぶ都市計画道路で、延長26.4kmの路線をいいます。本道路は福岡市の交通問題の解決の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれています。現在、志免町と月隈間、片江、姪浜と野芥間など一部区間の供用が行われ、他区間も供用に向けて工事や事前の発掘調査が進みつつあります。

今回報告する野芥大薮遺跡は、早良区の賀茂二丁目から野芥二丁目地区に所在する遺跡で、平成5年から6年にかけて発掘調査を実施いたしました。

調査では、縄文時代後期から晩期にかけての河跡、古墳時代初め頃の土坑と溝からなる集落、奈良時代頃の溝と井堰、江戸時代の屋敷地など各時代の遺構・遺物を検出し、多大な成果を得ることが出来ました。

最後になりましたが、発掘調査とその整理・報告に際しましては、建設省福岡国道工事所の関係者及び地元の方々をはじめとし、多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表します。併せて、本書が市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、広く活用して頂けることを願う次第です。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　町田　英俊

例　言

1．本書は、福岡外環状道路の建設省施工区間にあたる福重・野芥間の道路建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会が1993年５月から1994年６月にかけて発掘調査を実施した野芥大薮遺跡第１次調査の報告書である。福岡外環状道路関係の埋蔵文化財調査報告書としては第４集にあたる。

2．発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄（現福岡市博物館学芸課）が行った。

3．遺構番号は、福岡市の遺構記号の基準に拠っている。

ＳＡ…柵、ＳＢ…掘立柱建物、ＳＤ…溝（自然流路）状遺構、ＳＥ…井戸、ＳＫ…土坑、ＳＰ…柱穴、ＳＸ…その他の遺構

ピット以外の遺構は各調査区毎でその性格を問わず通し番号で登録し、ピットについても各調査区毎に独自で番号を付している。各調査区の遺構番号はⅠ区…001～、Ⅱ区…2001～、Ⅲ区…3001～、Ⅳ区…4001～、Ⅴ区…5001～から始めている。

4．遺構の実測は、山崎龍雄、瀬戸啓治、俵寛司、坂本憲昭、金子由利子、清原ユリ子、内野亜香が行った。また遺物の実測は、井上加代子が主に行い、一部を山崎が補足した。石器の一部は福岡市博物館の吉武学が行った。

5．本書使用の写真は山崎が撮影し、遺構の全体写真は株式会社空中写真企画が撮影を行った。

6．本書使用の図面の浄書は山崎と井上が行い、石器の一部は吉武の協力を得た。

7．本書で用いる方位は国土地理院座標第２系による座標北である。磁北との偏差は西偏約６°40′である。

8．本書の執筆・編集は山崎が行った。Ⅰ区出土の動物骨については鹿児島大学農学部教授の西中川駿先生に分析を依頼し、また、井堰出土の杭や旧河川出土の流木や種実などについては、株式会社パリノ・サーヴェイに分析を依頼し、Ⅳの付論として収録した。

9．調査に係る記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用して行く予定である。

野芥大薮遺跡第１次調査概要

遺跡調査番号	遺跡略号	分布地図番号	調査地地籍	調査実施面積	調査期間
9307	NKO-1	083-2448	早良区賀茂二丁目 134-1他	8,750㎡ Ⅰ区 5,109㎡ Ⅱ区 723㎡ Ⅲ区 444㎡ Ⅳ区 2,427㎡ Ⅴ区 47㎡	1993.05.18～ 1994.06.27

本　文　目　次

頁

I　はじめに……1
　1．調査に至るまで……1
　2．1993・1994年度の調査体制……3
II　遺跡の立地と歴史的環境……4
　1．遺跡の立地……4
　2．遺跡の歴史的環境……4
III　調査の記録……7
　1．調査の概要……7
　2．Ⅰ区の調査……7
　3．II区の調査……53
　4．III区の調査……64
　5．IV区の調査……69
　6．Ⅴ区の調査……78
　7．小結……80
IV　付論1　野芥大薮遺跡における自然科学分析……82
　付論2　野芥大薮遺跡第1次調査におけるウシ・ウマの遺体……97

図　版　目　次

PL.1　(1)野芥大薮遺跡調査区全景　(2)Ⅰ区全景
PL.2　(1)Ⅰ区東側上面遺構検出状況　(2)同南側
PL.3　(1)Ⅰ区東側下面遺構検出状況　(2)Ⅰ区中央部遺構検出状況
PL.4　(1)Ⅰ区中央部SD019・020　(2)Ⅰ区西側遺構検出状況
PL.5　(1)Ⅰ区南西隅遺構検出状況　(2)同下面遺構検出状況（北西から）
PL.6　(1)Ⅰ区西側遺構検出状況　(2)同検出状況
PL.7　(1)SB085（北から）　(2)SD001・002（東から）　(3)SK068（北から）
　(4)SK0122（南から）　(5)SK0160（北から）　(6)SK065（北西から）
　(7)SK090（西から）　(8)同家畜骨検出状況（北から）
PL.8　(1)SK066（南から）　(2)SK079（南から）　(3)SK086（南から）
　(4)SK087（北から）　(5)SK088（北から）　(6)SK0110（東から）
　(7)SK067（北東から）　(8)同下面遺物出土状況（北から）
PL.9　(1)SK096（北東から）　(2)SK0102（南から）　(3)SK0108（南東から）
　(4)SK0109（北東から）　(5)SK0116（北西から）　(6)SK0140（北西から）
　(7)SK099（北西から）　(8)SK0101（西から）
PL.10　(1)SK0115（北から）　(2)SK0121（東から）　(3)SK0124（西から）
　(4)SK0142（北から）　(5)SK0143（南東から）　(6)SD019堰検出状況（南から）
　(7)SD019堰検出状況（西から）　(8)SD019堰断面（南から）

ＰＬ.11　(1)ＳＤ019内ＳＸ0123（南東から）　(2)ＳＤ019内木製品出土状況
(3)ＳＤ019北壁土層（南から）　(4)ＳＤ019　2号ベルト土層（北から）
(5)ＳＤ019南壁土層（北から）
ＰＬ.12　(1)ＳＤ020東壁土層（西から）　(2)ＳＤ020西壁土層（東から）
(3)ＳＤ0111　2号ベルト土層（南から）　(4)ＳＤ0111・0112　3号ベルト土層（南から）
ＰＬ.13　(1)ＳＤ0117・0118北壁土層（南から）　(2)ＳＤ0118ベルト土層（北から）
(3)ＳＤ0118南壁土層（北から）　(4)ＳＤ0119・0131北壁土層（南から）
ＰＬ.14　(1)ＳＤ0137土層（東から）　(2)ＳＤ0149　2区東壁土層（西から）
(3)Ｖ区遺構検出状況（西から）
ＰＬ.15　Ｉ区出土遺物１（縮尺不統一）
ＰＬ.16　Ｉ区出土遺物２（縮尺不統一）
ＰＬ.17　Ｉ区出土遺物３（縮尺不統一）
ＰＬ.18　Ｉ区出土遺物４（縮尺不統一）
ＰＬ.19　(1)II区全景（西から）　(2)II区全景（南から）
ＰＬ.20　(1)ＳＤ2016（西から）　(2)ＳＫ2007（南から）　(3)ＳＫ2008（南から）
(4)ＳＫ2012（西から）　(5)ＳＫ2024（東から）
ＰＬ.21　(1)ＳＫ2025（東から）　(2)ＳＫ2028（南西から）　(3)ＳＤ2016ベルト土層（北から）
(4)同南壁土層（北西から）　(5)ＳＤ2005・011内杭検出状況（北から）
(6)同遺物出土状況（東から）
ＰＬ.22　(1)ＳＤ2010遺物出土状況（西から）　(2)II区出土遺物（縮尺不統一）
ＰＬ.23　(1)III区全景（東から）　(2)ＳＤ3001（東から）　(3)ＳＫ3009（南東から）
(4)ＳＫ3010（南から）
ＰＬ.24　(1)ＳＤ3003（南から）　(2)ＳＤ3005（南から）　(3)ＳＤ3005土層（南から）
(4)III区南壁土層（北から）　(5)III区出土遺物（縮尺不統一）
ＰＬ.25　(1)IV区全景　(2)IV区北東側全景
ＰＬ.26　(1)IV区南東側全景　(2)IV区北西側全景
ＰＬ.27　(1)IV区東側第２面全景　(2)IV区南西側全景（北から）
ＰＬ.28　(1)IV区南西側第２面全景　(2)IV区北西隅（東から）　(3)ＳＸ4001（南から）
(4)ＳＸ4031（南から）　(5)ＳＫ4036（東から）
ＰＬ.29　(1)ＳＫ4048（南から）　(2)ＳＫ4022（西から）　(3)ＳＫ4063（南から）
(4)ＳＤ4008（南東から）　(5)ＳＤ4012・013（東から）　(6)ＳＤ4025（南東から）
(7)ＳＤ4042流木検出状況（北東から）　(8)同流木検出状況（北から）
ＰＬ.30　(1)ＳＤ4002北壁土層（南から）　(2)同ベルト土層（南から）
(3)ＳＤ4012ベルト土層（東から）　(4)ＳＤ4043　2区東壁土層（西から）
ＰＬ.31　(1)ＳＤ4042・043　2区北壁土層（南から）　(2)ＳＤ4041・43　2区南壁土層（北から）
(3)ＳＤ4060西壁土層（東から）
ＰＬ.32　(1)IV区出土遺物（縮尺不統一）　(2)Ｖ区出土遺物（縮尺不統一）

挿　図　目　次

Fig. 1　福岡外環状線道路路線図 …… 1
Fig. 2　福岡外環状道路IV工区調査遺跡位置図 …… 2
Fig. 3　野芥大薮遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000） …… 5

Fig. 4　調査区全体図（1/1,000）…… 6
Fig. 5　ＳＢ085（1/80）…… 8
Fig. 6　ＳＫ004～006・009・018・021・022（1/30）…… 9
Fig. 7　ＳＫ027・044・ＳＥ032（1/30）……10
Fig. 8　ＳＫ045・049・050・052・053（1/30）……11
Fig. 9　ＳＫ057・060（1/30）……12
Fig.10　ＳＫ065・068・077・0103・0122・0160（1/30）……13
Fig.11　ＳＫ070・092・0162（1/40）……14
Fig.12　ＳＫ007・010・011・018・ＳＥ032出土遺物（1/4）……16
Fig.13　ＳＫ046・049・053・055・069出土遺物（1/4）……17
Fig.14　ＳＸ024・043・0161（1/20）……18
Fig.15　ＳＸ024・033・042・043・091出土遺物（1/8）……19
Fig.16　家畜骨出土土坑１（1/30）……20
Fig.17　家畜骨出土土坑２（1/40）……21
Fig.18　ＳＤ008・059・062・091出土遺物（1/4）……22
Fig.19　その他の遺構出土遺物（1/4）……23
Fig.20　ピット出土遺物（1/4）……24
Fig.21　ＳＫ011・ＳＥ032・ＳＰ013・ＳＸ048出土石器（1/3）……24
Fig.22　遺構面出土遺物（1/4）……25
Fig.23　ＳＫ067・095～097・099・0101・0102・0106・0107（1/30）……27
Fig.24　ＳＫ0108・0109・0116・0140（1/30・1/40）……28
Fig.25　ＳＫ067出土遺物１（1/4）……29
Fig.26　ＳＫ067出土遺物２（1/4）……30
Fig.27　ＳＫ067出土遺物３（1/4）……31
Fig.28　ＳＫ067出土遺物４・096・097・0108出土遺物（1/4）……32
Fig.29　ＳＫ0108・0109・0116・0140出土遺物（1/4）……33
Fig.30　ＳＫ0115・0120・0124・0139・0142・0143（1/30・1/40）……34
Fig.31　ＳＤ019・020土層図（1/80）……36
Fig.32　ＳＤ019堰及び出土遺物（1/60・1/4）……37
Fig.33　ＳＤ019内ＳＸ0123（1/30）……38
Fig.34　各溝出土遺物（1/4）……39
Fig.35　ＳＫ069・ＳＤ019・0117出土木製品（1/4・1/8・1/12）……40
Fig.36　ＳＤ019堰出土杭（1/6）……41
Fig.37　ＳＤ0117・0118土層図（1/80）……43
Fig.38　ＳＤ0117・0118・0141・ＳＸ0130出土遺物（1/4）……44
Fig.39　ＳＤ0111・0112・0128・0137・0138・0141・0147土層図（1/60）……46
Fig.40　ＳＤ0149・0150土層（1/80）……47
Fig.41　ＳＤ019・0104・0111・0117出土石器（1/3）……48
Fig.42　ＳＰ022（1/20）……49
Fig.43　ＳＸ0136北壁土層・12・13区トレンチ北壁土層図（1/80）……49
Fig.44　遺構面出土遺物（1/4）……50
Fig.45　遺構面出土石器（1/3）……51
Fig.46　Ⅱ区遺構配置図（1/200）……53
Fig.47　ＳＫ2007・008・012（1/30）……54
Fig.48　ＳＫ2024・025・028～030（1/30）……55

Fig.49　ＳＫ2001・007・012・024出土遺物（1/3・1/4）……56
Fig.50　ＳＤ2005・010遺物出土状況（1/40）……57
Fig.51　ＳＤ2005・011出土遺物１（1/4）……58
Fig.52　ＳＤ2005・011出土遺物２（1/4）……59
Fig.53　ＳＤ2005・011・016土層図（1/40・1/60）……60
Fig.54　II区北壁・南壁・東壁・ＳＫ2014・ＳＤ2005・011土層図（1/60・1/80）……折込み
Fig.55　ＳＤ2005・011杭列（1/30・1/6）……61
Fig.56　各溝出土遺物（1/3・1/4）……62
Fig.57　III区遺構全体図（1/200）……64
Fig.58　ＳＫ3006～009・011（1/40）……65
Fig.59　ＳＫ3010（1/40）……66
Fig.60　III区北壁・南壁・ＳＤ3001・006土層図（1/30・1/60・1/80）……折込み
Fig.61　ＳＤ3001出土遺物（1/4）……67
Fig.62　ＳＫ4022・026・036・048・063（1/30・1/40）……70
Fig.63　ＳＸ4001・031と出土遺物（1/30・1/4）……71
Fig.64　ＳＸ4031・4048・4056出土遺物（1/4）……72
Fig.65　IV区北壁・南壁・３号・５号トレンチ土層図（1/80）……折込み
Fig.66　ＳＤ4002・012・013・042土層図（1/60・1/80）……73
Fig.67　ＳＤ4002・012・013・029・060・062出土遺物（1/4）……74
Fig.68　ＳＤ4041～043土層図（1/80）……75
Fig.69　IV区西壁・ＳＤ4060土層図（1/80）……折込み
Fig.70　各遺構出土遺物（1/3・1/4）……77
Fig.71　Ｖ区遺構全体図・土層図・出土遺物（1/4・1/60・1/200）……78
Fig.72　各調査区出土石器（１～９は1/1、10～12は2/3）……79

表　目　次

Tab.1　ＳＤ2005・011出土杭一覧表……63

付論１　図表一覧
　表１　年代測定結果
　表２　樹種同定結果(1)・(2)
　表３　種実遺体同定結果
　図版１～７　木材(1)～(7)
　図版８　木材(8)・種実遺体

付論２　図表一覧
　表１　野芥大薮遺跡の土坑別ウマの出土骨片数
　表２　野芥大薮遺跡の土坑別ウシの出土骨片数
　図Ｉ　各土坑ウマ・ウシ出土状況
　図II・III　各土坑ウマ・ウシ

付図１　Ｉ～IV区　遺構全体図（1/200）
付図２　Ｉ区東側上面近世後半代主要遺構配置図（1/200）

Ⅰ　はじめに

1　調査に至るまで

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された都市計画道路、井尻粕屋線・井尻姪浜線で、西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原間の延長26.4kmの道路である。今回調査の対象となっている部分は、建設省施工の福重から月隈間の16.2kmの、一般国道202号福岡外環状道路と呼ばれる区間である。

福岡市では、平成７年度に大学生の世界的なスポーツの祭典であるユニバーシアード大会を福岡で開催することとなり、それに向けての都市基盤整備の推進が必要になり、福岡外環状線道路建設が具体化してきた。平成元～３年に、建設省福岡国道事務所（以下国道事務所とする）より、福岡外環状道路予定路線内の埋蔵文化財の事前調査願いが埋蔵文化財課（以下埋文課とする）に提出された。これを受けて、埋文課は東側からⅠ～Ⅳ工区と番号づけられた各工区で、用地買収が終了した部分について、試掘調査を実施した。

各工区で随時、試掘調査を実施した結果、Ⅰ工区では、博多区井相田、立花寺、板付、笹原地区、Ⅳ工区では橋本、次郎丸、免、干隈、野芥地区などで遺跡を確認した。これらの試掘の結果を受けて、遺跡が確認された地区について、国道事務所と協議を行い、発掘調査が必要となった部分について、調査費用を建設省が負担するということで、調査を実施することとなった。

調査は平成３年度にまずⅠ工区の井相田地区で行われ、その後、ユニバーシアード福岡大会までに部分開通が必要となったⅣ工区の調査を優先して行うこととなった。平成４年度から７年度にかけて次郎丸遺跡群、次郎丸高石遺跡、免遺跡群、野芥大薮遺跡、野芥遺跡群、橋本一丁田遺跡、橋本遺跡群の調査が行われた。今回の報告は平成５（1993）年５月から平成６（1994）年６月にかけて実施した、野芥大薮遺跡第１次調査の調査記録である。

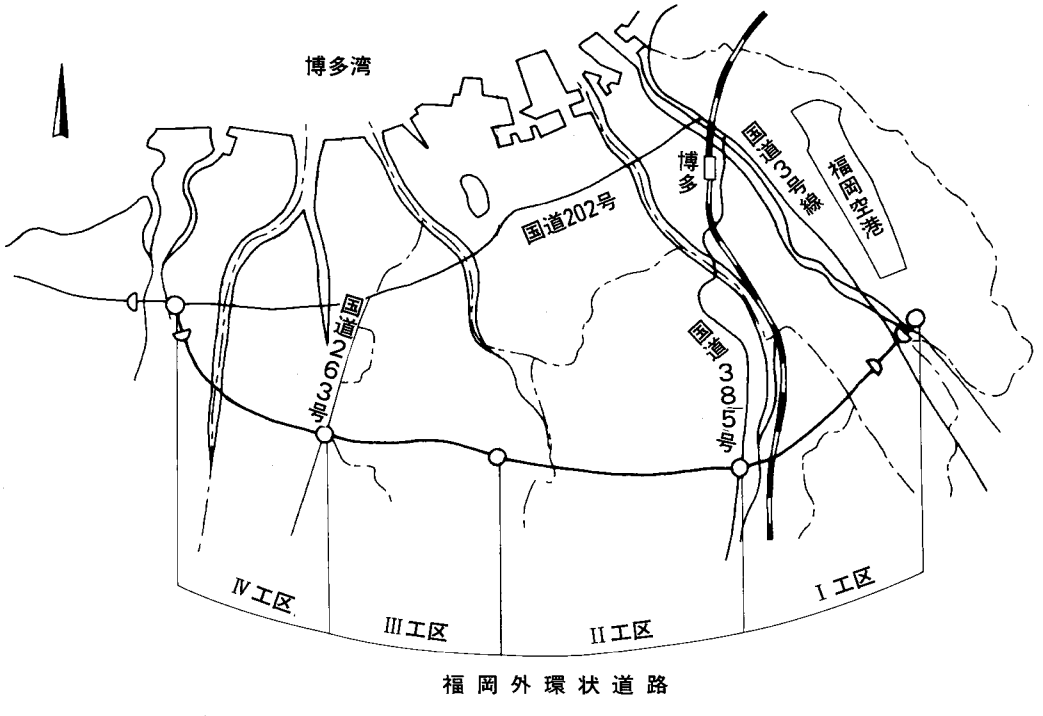


Fig. 1　福岡外環状線道路路線図

Fig. 2　福岡外環状道路Ⅳ工区調査遺跡位置図

2　1993・1994年度の調査体制

1993年度はⅣ工区を94年度に福岡で開催するユニバーシアード大会に開通を間に合せるという目標の為に、3名の体制で工区内の調査にあたった。まず前年度からの継続調査である免遺跡を山口譲治・池田祐司・中村啓太郎が担当し、山口が山崎と交替した後は2名で引き続き担当し、その後は橋本一丁田遺跡の調査を担当した。山崎は次郎丸遺跡第2次調査と今回報告する野芥大薮遺跡を担当した。、94年度は調査もほぼ目処がついたので、山崎のみの体制となり、野芥大薮遺跡の残りの部分と野芥遺跡の調査を行い、95年度は杉山富雄が最後に残った橋本遺跡の調査を担当し、これでⅣ工区全体の調査を終了した。

調査については、建設省福岡工事事務所および本市土木局外環状道路推進部をはじめとする関係者各位の協力をもとに、順調に終了することが出来た。記して感謝の意を表する次第である。

1993・94年度調査体制

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
教育長　尾花　剛（前任）　町田英俊
文化財部長　後藤　直（前任）　平塚克則
埋蔵文化財課長　折尾　学（前任）　荒巻輝勝
大規模遺跡調査担当課長　塩屋勝利（前任）

1993年度調査担当　山口譲治（主任文化財主事、4月まで　現同課第二係長）…免遺跡担当
山崎龍雄（主任文化財主事、5月から　現福岡市博物館学芸課）…次郎丸遺跡・**野芥大薮遺跡**担当
池田祐司、中村啓太郎（文化財主事）…免遺跡・橋本一丁田遺跡担当

1994年度調査担当　山崎龍雄…**野芥大薮遺跡**・野芥遺跡担当

試掘調査担当　井澤洋一（主任文化財主事）　瀧本正志、加藤良彦、吉武　学（文化財主事）

庶務担当　入江幸男（前任）　小森　彰

調査指導　磯　望（西南学院大学教授）　下山正一（九州大学助手）
西中川　駿（鹿児島大学教授）　野井英明（北九州大学助教授）

調査・整理調査員　井上加代子、加藤隆也（現本市埋蔵文化財課文化財主事）、加藤周子、瀬戸啓治、俵寛司（九州大学大学院）

調査・整理協力者　井上八郎、金子啓佑、清川朋和、橘良平、横尾泰広、吉川春美、島崎昭二、甲斐正耕、木須昭三、松尾熙介、中野三平、加島定次郎、上野道朗、真田弘二、木村国司、弥吉達己、大塩皓、勝田慎一、中村宏、吉永道博、平川務、田中榮、西畑盛行、平田勇雄、徳永洋二郎、内野亜香、金子由利子、金子ヨシ子、清原ユリ子、坂本ハツ子、佐藤テル子、正崎由須子、永井ゆり子、西尾タツヨ、土生ヨシ子、平野ミサオ、堀川ヒロ子、門司弘子、大穂栄子、大穂アサ子、俣野志津代、大穂やす子、尾園佳枝、土生ヒサヨ、永末京子、東園直美、中園啓子、池水美吉子、下司昭枝、水野由美子、井釜康子、石橋マサ子、松本ミツ子、鬼塚友子、指山歌子、指山浩子、高木陽子、川岡涼子、牧ノ口豊子、網田美代野、川口シゲノ、西島マツコ、西嶋ムラ子、西嶋洋子、原ハナエ、平田タマエ、平田千鶴子、平田政子、森山早苗、山下アヤ子、脇坂チカ、脇坂ミサヲ、赤星攝、有吉千栄子、池田礼子、吉良山益美、武田祐子、手銭恭子、大賀順子、坂木智子、岩下郁子、釘崎由美、上野裕子、塚本直子（順不同）

II　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地

野芥大薮遺跡は、福岡市の西南部に位置する早良平野の中央部東側、飯倉丘陵よりの地点に所在する。国土地理院の五万分の一の地図（福岡）では、上から27cm、右から28.5cmの地点である。

早良平野は中央を南北に貫流する室見川と、その支流や十郎川によって形成された扇状地と沖積地から形成される平野で、西側は長垂丘陵、南側は背振山塊、東側は油山と飯倉丘陵によって限定され、その形状は博多湾に向かって扇形に展開する。今回調査の野芥大薮遺跡は室見川の支流の金屑川の東側、標高12～16m前後を測る扇状地状を呈する低位段丘上に立地する。

2．遺跡の歴史的環境

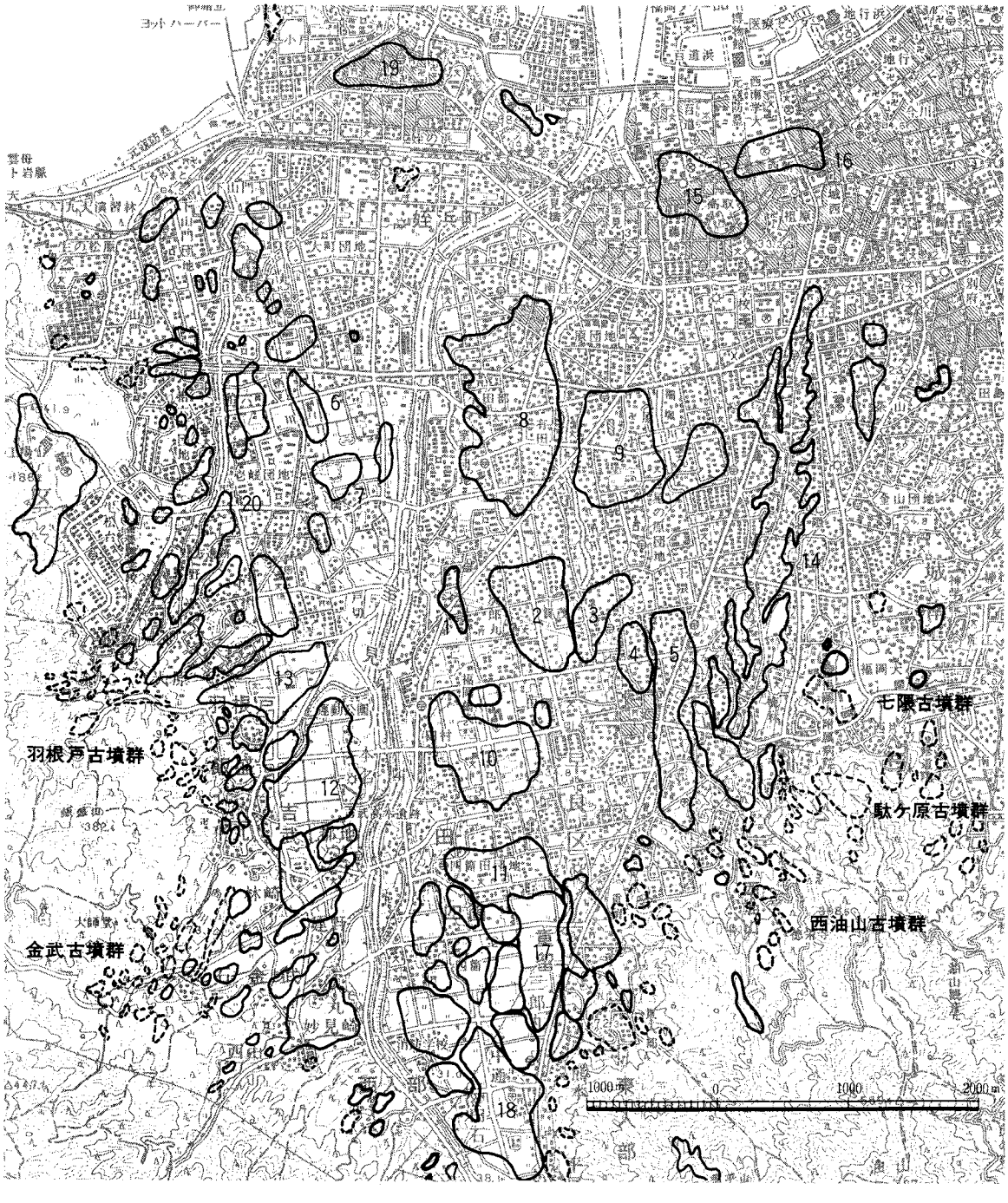
野芥大薮遺跡が立地する早良平野は旧石器時代から遺跡が知られている。旧石器時代の遺跡は数は少ないが、平野周辺の室見川西岸の早良西台地の吉武遺跡や平野部中央の小田部台地上の有田遺跡群が知られている。縄文時代は周辺の丘陵や台地、内陸部の内野から四箇、田村あたりにかけての扇状地上に早期から晩期にかけての遺跡が立地する。特に内陸部の内野あたりには古い時期の遺跡が分布している。晩期末になると下流の有田、福重あたりまで遺跡は広がる。

弥生時代になると、水田農耕が始まるという生業形態の変化から、遺跡は下流低地部から海岸砂丘部まで広がる。有田遺跡群では縄文時代末から弥生時代前期にかけての環濠集落が早良平野で初めて出現する。室見川中流西岸の吉武遺跡では弥生時代前期末から中期にかけて、多数の副葬品を持つ木棺墓、甕棺墓が調査されており、弥生時代のクニの王墓と考えられている。ほかに有田遺跡群や飯倉遺跡、東入部遺跡などの拠点遺跡が存在している。野芥大薮遺跡西側の免遺跡群では昭和48年と平成５年の外環状線の調査で、旧金屑川の河道に構築された弥生時代以降の水利施設の井堰が調査されている。

古墳時代の遺跡は前時代と同様に分布する。海岸砂丘部の藤崎遺跡では方形周溝墓が調査され、多量の外来系の土師器共に、主体部から副葬品として三角縁神獣鏡が出土し、また海岸部の五島山古墳では前期の古墳が調査されている。ただ前方後円墳は少なく、今のところ拝塚古墳や樋渡古墳、梅林古墳などが知られているだけである。後期になると群集墳が西側の長垂・飯盛山山麓や東側の油山山麓に多数造営される。周辺の主な集落遺跡としては、北側に有田遺跡群、原遺跡群、南側に田村遺跡群、東側に野芥遺跡などがある。平成６年度に調査された野芥遺跡第４次調査では後期の住居、第５次調査では前期から中期にかけての住居が検出されている。

古代は早良郡であり、早良郡には７郷があったことが知られ、当遺跡周辺は野芥郷となる。周辺には「三十田」「池ノ坪」などの条里制地割の地名が残り、都市化が進む前迄は、水田、道路などに条里の遺制が良好に残っていた。また有田遺跡群では７～８世紀頃の早良郡の官衙かと思われる大型建物群が確認されている。

中世の鎌倉～戦国時代は野芥荘の一部であり、南西側の田村遺跡や西側の次郎丸遺跡、北側の原遺跡、南側の清末遺跡などで平安末から鎌倉時代にかけての集落が調査されている。これらの集落は微高地上に立地し、その周辺低湿部に生産基盤を確保した遺跡である。特に清末遺跡では在地土豪の館と考えられる建物跡、堀跡などが検出されている。



1	次郎丸遺跡群	6	橋本一丁田遺跡	11	四箇遺跡群	16	西新町遺跡
2	次郎丸高石遺跡	7	橋本遺跡群	12	吉武遺跡群	17	重留遺跡群
3	免遺跡群	8	有田遺跡群	13	羽根戸原C遺跡群	18	東入部遺跡群
4	野芥大薮遺跡	9	原遺跡群	14	飯倉遺跡群	19	姪浜遺跡群
5	野芥遺跡群	10	田村遺跡群	15	藤崎遺跡群	20	野方久保遺跡

Fig. 3　野芥大薮遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

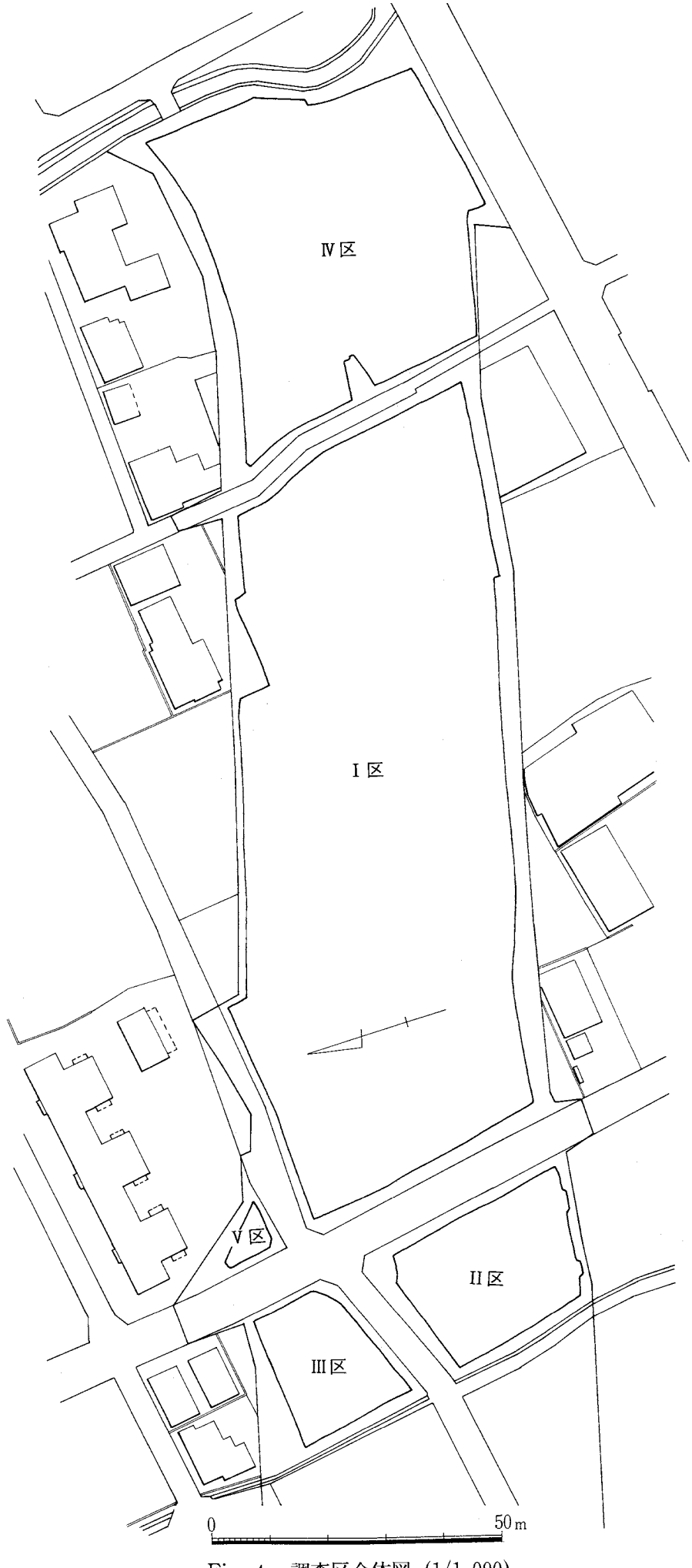


Fig. 4　調査区全体図（1/1,000）

III　調査の記録

1．調査の概要

調査地は早良区賀茂２丁目地内に所在する。東側は用水路を挟んで野芥遺跡群、西側は200mほど離れて免遺跡群が隣接する。いずれも外環状道路建設時に発掘調査されている。

調査区は既存道路を基準にＩ～Ｖ区の５区画に分割した。調査は1993年５月18日、Ｉ区から重機による表土剥ぎを開始し、その後II区・III区・Ｖ区と調査区を展開し、立ち退きの遅れで調査が翌年度に一部ずれ込んだIV区の調査を94年６月27日に終え、無事全て終了した。途中、部分的に調査が終了した部分から工事が始まり、最後は工事と並行しての調査であった。調査総面積は8752m²である。調査の方法として国土座標軸を基準に西から南北をＸ軸方向、東西をＹ軸方向とし、それぞれ10m間隔のグリッド（番号はＸ方向Ａ～Ｚ、Ｙ方向０～とする）を設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。調査前の状況は水田または宅地であり、水田部分は耕作土を除去するとすぐ遺構面となったが、宅地部分については盛土が厚くなされていた。遺構面の標高14.5～13mで、東から西へ緩やかに傾斜して行く。Ｉ区では東側に近世後半代の屋敷地の遺構が検出され、その下からピットや縄文時代の旧河川が検出されたことから２面の調査となった。

2．１区の調査

①　調査の概要

延長約140m、幅約45mを測る最大の調査区である。西側は水田、東側は宅地となっていた。調査区の東側では近世後半以降の遺構が確認されたため、その調査を行ったあと、下面の調査を行った。遺構面は場所場所で異なるが、暗褐色から灰黄褐色粘質砂質土からシルト粘土である。検出された主な遺構は縄文時代の旧河川、古墳時代の土坑群、古墳時代末から奈良時代の水路１条と井堰、中世の溝２条、江戸時代の溝・土坑群・井戸２基・建物１棟である。

②　近世以降の遺構（上面の調査）

掘立柱建物

ＳＢ085（Fig.5、PL.7—(1)）　主軸をＮ－8°30′－Ｗに取る南北方向の建物である。規模は梁間全長3.80～3.90m、桁行き全長6.00～6.45m、床面積は24.0m²を測る。柱穴は南西隅柱が不明であり、また柱間隔も東桁側が３間でほぼ等間隔の他は、不規則で柱筋も通らない。埋土は暗褐色から灰褐色土である。柱穴からの出土遺物はないが、近世後半以降のものであろう。

土坑

調査区東側で検出した、近世から近代にかけての土坑である。

ＳＫ004（Fig.6）　16Ｇ区で検出した不整円形状を呈する土坑。規模は長軸95cm、短軸83cm、深さ38cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘質土で炭を含む。**遺物**は近世の陶器の甕の細片などが３点出土している。

ＳＫ005（Fig.6）　16Ｈ区で検出した、溝ＳＤ008・ＳＫ006を切る不定形状を呈する土坑。規模は長軸推定92cm、短軸74cm、深さ19cmを測る。埋土は暗褐色砂混じり土、**遺物**は近世から近代の染付磁器・陶器片、セルロイド、炭などが少量出土している。

ＳＫ006（Fig.6）　ＳＫ005に切られる楕円形状を呈する土坑。底面は階段状を呈し、中心にはピットがある。規模は長軸推定130cm、短軸73cm、深さ51cmを測る。埋土は褐色土である。**遺物**は近世以降の染付磁器片、土器片、鉄釘、炭などが少量出土している。

ＳＫ007出土遺物（Fig.12）　図示していないが、ＳＤ008に切られる土坑から出土した遺物。遺物は近世後半代の染付片、陶器片などが少量出土している。１は白磁の紅皿1/4片である。復元口径4.6cm、器高1.4cmを測る。型造りである。

ＳＫ009（Fig.6）　15Ｈ区で検出した隅丸方形状の土坑。規模は長軸127cm、短軸113cm、深さ34cmを測る。**遺物**は近世以降の陶器・磁器片が少量出土している。

ＳＫ010出土遺物（Fig.12、PL.15）　ＳＫ009の西側で検出した不定形の井戸状の土坑から出土した遺物。遺物は近世から近代の染付磁器片、陶器甕・スリ鉢片、弥生土器片、窯道具片、土人形片などが少量出土している。２～４は磁器。２青磁釉の小碗である。口径８cmを測る。３・４は染付である。３は肥前磁器の碗1/3片で、復元口径8.9cm、器高5.3cmを測る。見込に五弁花のコンニャク印版、外面に丸紋がある。18世紀代のものか。４は瓶である。口径1.7cmを測る。５は京焼系の土瓶片である。復元口径7.4cm、器高12cmを測る。注口などを欠く。６・７は窯道具の王冠状トチンである。小さいもの６と大きいもの７がある。底径は15cmと21cm、いずれも上部は波状で、波の頂点には釉や胎土がこびり着く。６の外面には三と書かれたヘラ記号、７には外面カキ目で円形透し孔がある。８は土錘。1/2弱片である。全長5.8cm、直径４cmを測る。外面調整はユビナデ。９は陶器の大甕の口縁部片。復元口径57cmを測る。外面はハケ、内面はナデでにぶい橙色を呈する釉が薄くかかるようである。焼成は良い。４・６・８以外は井筒内出土である。

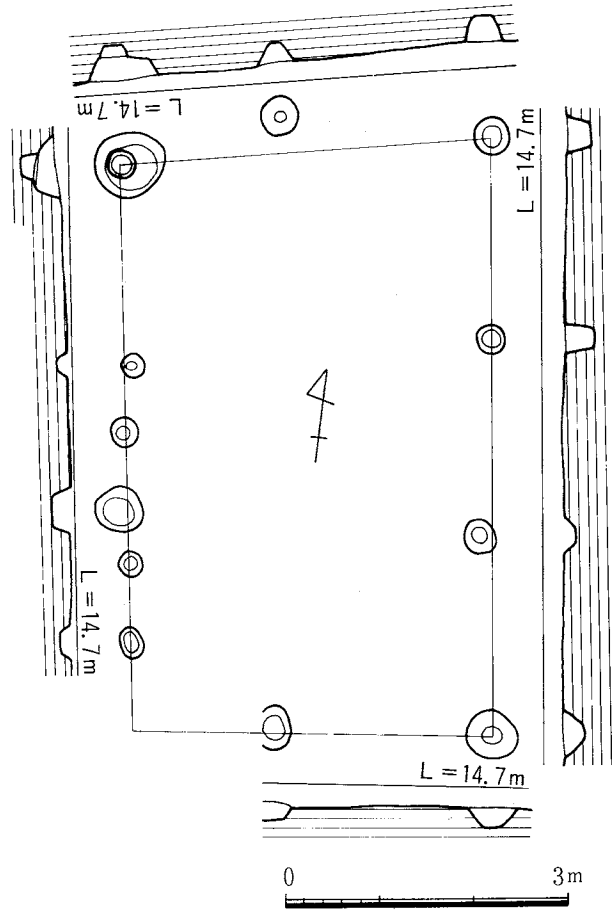


Fig. 5　ＳＢ085（1/80）

ＳＫ011出土遺物（Fig.12･21、PL.15）　近世から近代までの染付磁器片、陶器片、窯道具片、瓦質土器片、土鈴、土師器･須恵器片などが少量出土している。10～12は陶器、10･11は深めの皿1/2片。11の内底は蛇の目状に釉を掻き取る。12は湯呑碗1/2片である。口径は11.5cm、12.4cm、９cm、器高は4.4cm、５cm、4.8cmを測る。13は灰オリーブ色の青磁釉の筒形碗1/2片である。内底にセメント状の付着物がある。14は白磁の仏飯器の脚部片。15は19世紀前頃の肥前磁器の染付広東碗底部1/4片。

ＳＫ018（Fig.6）　15Ｆ・Ｇ区で検出した隅丸方形状の土坑。規模は長軸177cm、短軸105cm、深さ40cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物（Fig.12）　近代の陶器・磁器、鉄片、スレート瓦、櫛・簪、炭などが出土している。16

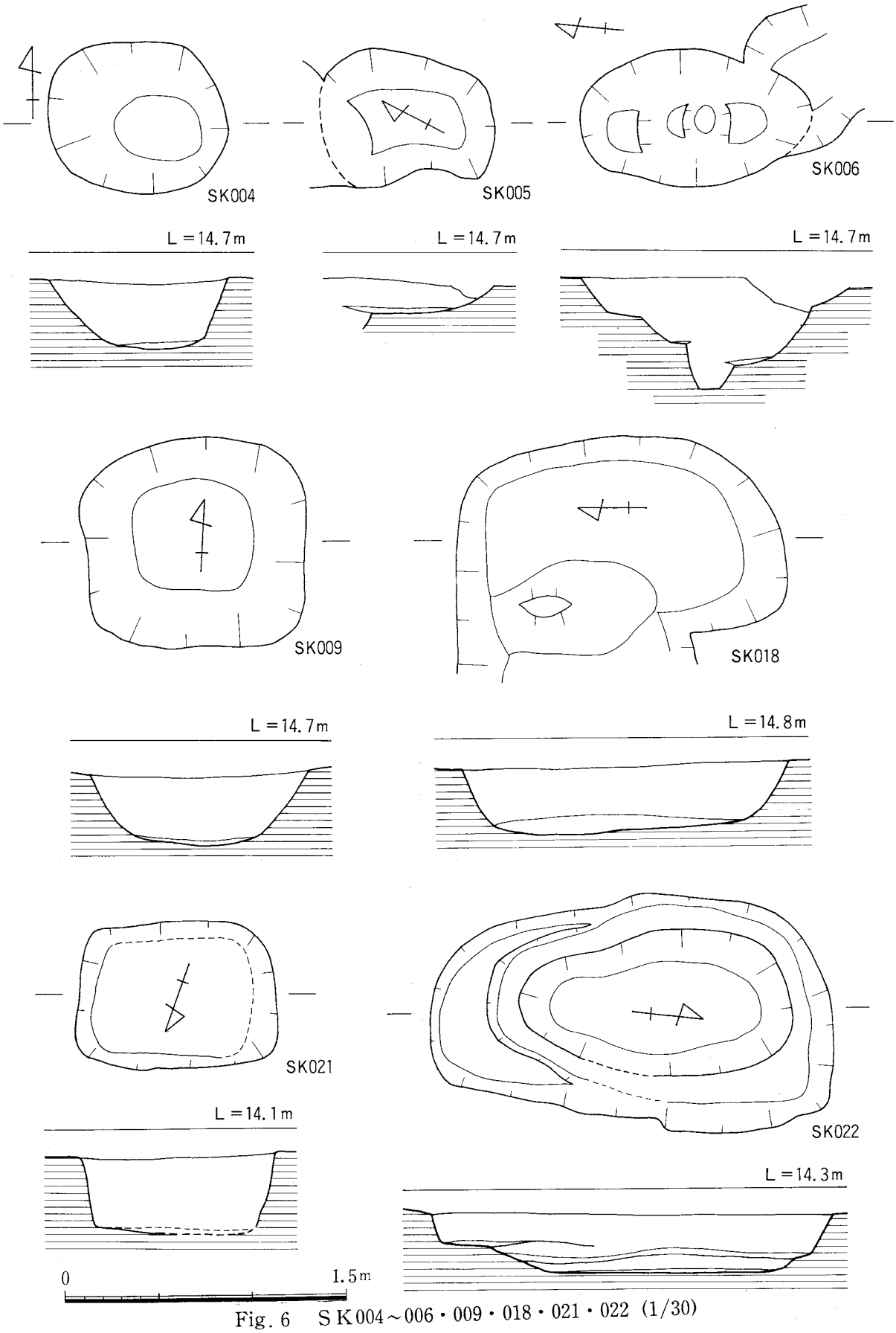


Fig. 6　ＳＫ004～006・009・018・021・022（1/30）

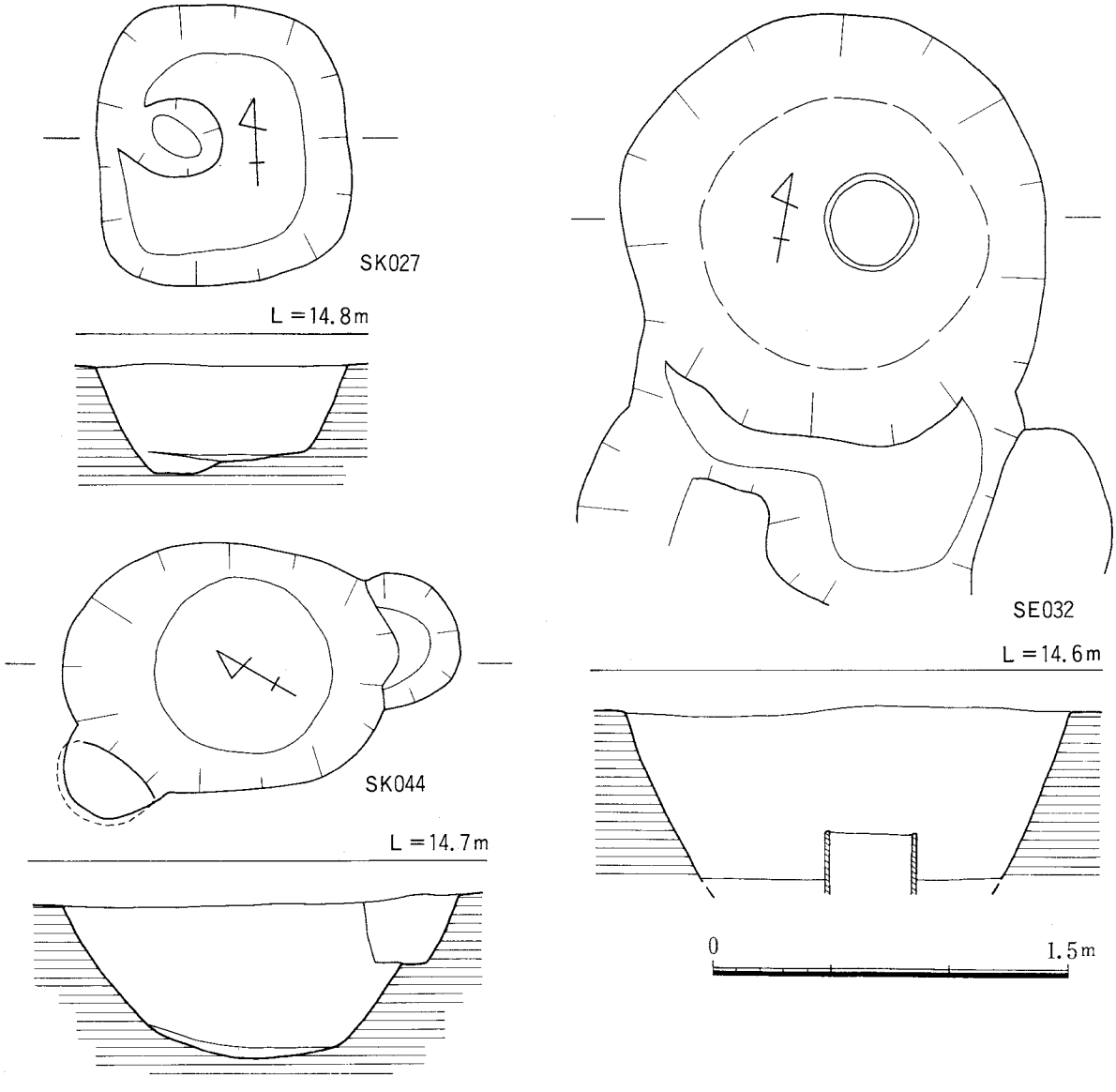


Fig. 7　ＳＫ027・044・ＳＥ032 (1/30)

は須恵器の坏底部1/6片で、ハ状に開く高台が付く。復元高台径9.4cmを測る。17は算盤状を呈す土製品。直径3.3×2.7cm、厚さ1.6cmを測る。17は薬のアンプルカッターである。つい最近迄使われていたものである。

ＳＫ021 (Fig.6)　11Ｃ区で検出した隅丸方形状の土坑。規模は長軸106cm、短軸78cm、深さ45cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で黒褐色土を混入する。遺物は近世の陶器・土師器皿・白磁の細片、コークスが各１点出土している。

ＳＫ022 (Fig.6)　13Ｇ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸214cm、短軸125cm、深さ32cmを測る。底面は階段状に深くなる。埋土は上層が暗灰褐色粘質土で黒灰色粘土ブロックを含む。下層は黒色粘土と黒灰色粘土ブロックの混合。**遺物**の出土はない。

ＳＫ027 (Fig.7)　15Ｇ区で検出した隅丸方形状の土坑。規模は長軸120cm、短軸107cm、深さ46cm

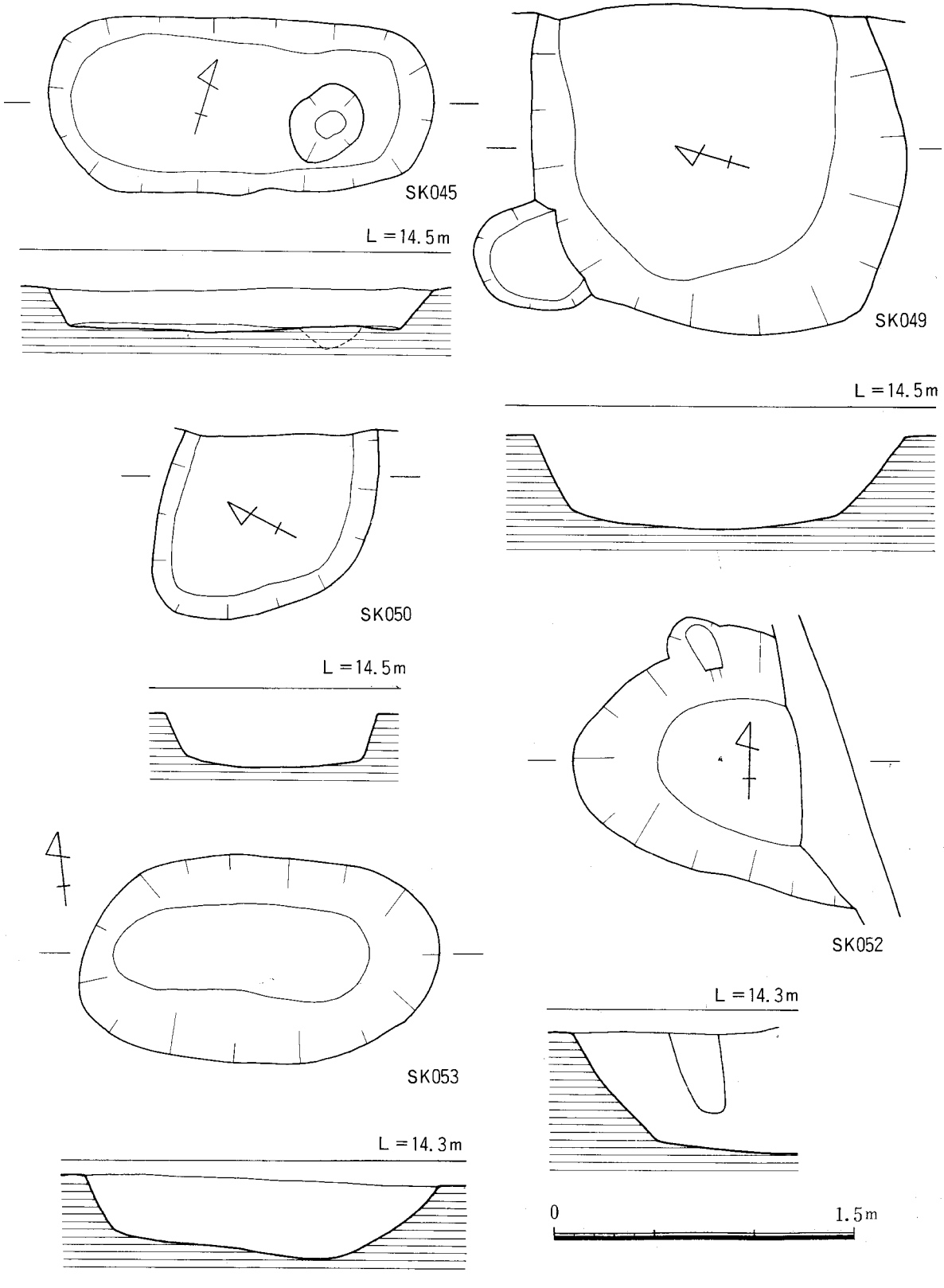


Fig. 8　S K045・049・050・052・053 (1/30)

を測る。底面西側はピット状に落ち込む。埋土は暗褐色砂混じり土である。**遺物**は近世から近代の陶

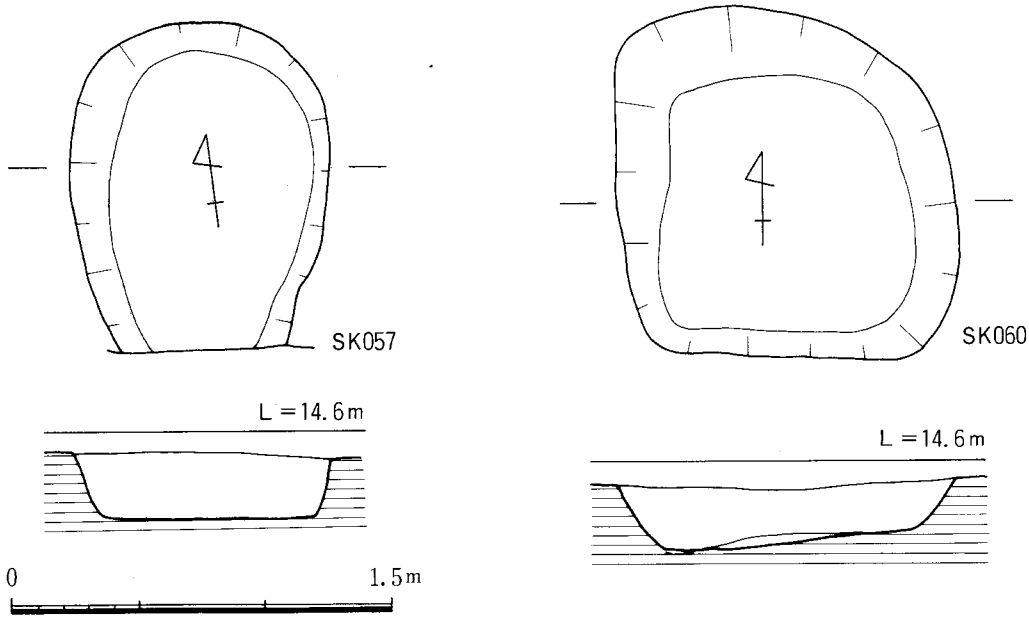


Fig. 9　SK057・060 (1/30)

器、土師器片、黒曜石剝片が少量出土している。

SK044 (Fig.7)　14E区で検出した楕円形状の土坑。規模は長軸142cm、短軸107cm、深さ70cmを測る。西側と南側をピットで切られる。埋土は暗褐色砂混じり土である。**遺物**は近世の陶器片が1点出土している。

SK045 (Fig.8)　15E区で検出した隅丸長方形状の土坑である。規模は長軸191cm、短軸90cm、深さ28cmを測る。底面は平坦で東側に直径40cm、深さ10cmほどのピットがある。埋土は暗褐色砂混じり土である。**遺物**は陶器・瓦質土器、古墳時代前期の土師器の小片が少量出土している。

SK046出土遺物 (Fig.13)　SK045の北側の土坑から出土したものである。27は素焼きの陶器甕底部1/4片。復元底径23.2cmを測る。外面ハケ状工具の回転ナデである。

SK049 (Fig.8)　16F区の東側境界にかかる隅丸方形状の土坑。規模は南北187cm、東西165cm以上、深さ53cmを測る。埋土は黒色砂混じり土で黄灰色粘土を含む。

出土遺物 (Fig.13、PL.15)　近世の磁器、陶器片などが少量出土している。28～32は肥前の染付磁器碗。28・30は底部片。29は復元口径11cmを測る。28の外面は二重網目文。29は網目文である。30の見込には昆虫文がある。31は丸文である。32は秋草である。時期的には18世紀代のものであろう。

SK050 (Fig.8)　16E区の東側境界にかかる隅丸方形の土坑。規模は南北103cm、東西100cm以上、深さ27cmを測る。埋土は黒褐色土である。**遺物**は近世の陶器甕、染付、瓦片がごくわずかに出土している。

SK052 (Fig.8)　16D区の東側境界にかかる楕円形状の土坑。規模は南北127cm、東西143cm、深さ60cmを測る。埋土は灰色砂質粘土である。**遺物**は動物骨が出土している。

SK053 (Fig.8)　15D区で検出した長楕円形状の土坑。規模は長軸132cm、短軸104cm、深さ36cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘土である。

出土遺物 (Fig.13)　動物骨片と陶器碗片が3点出土している。33は焼きの悪い染付磁器か。底径4.2cmを測る。内面砂が付着する。

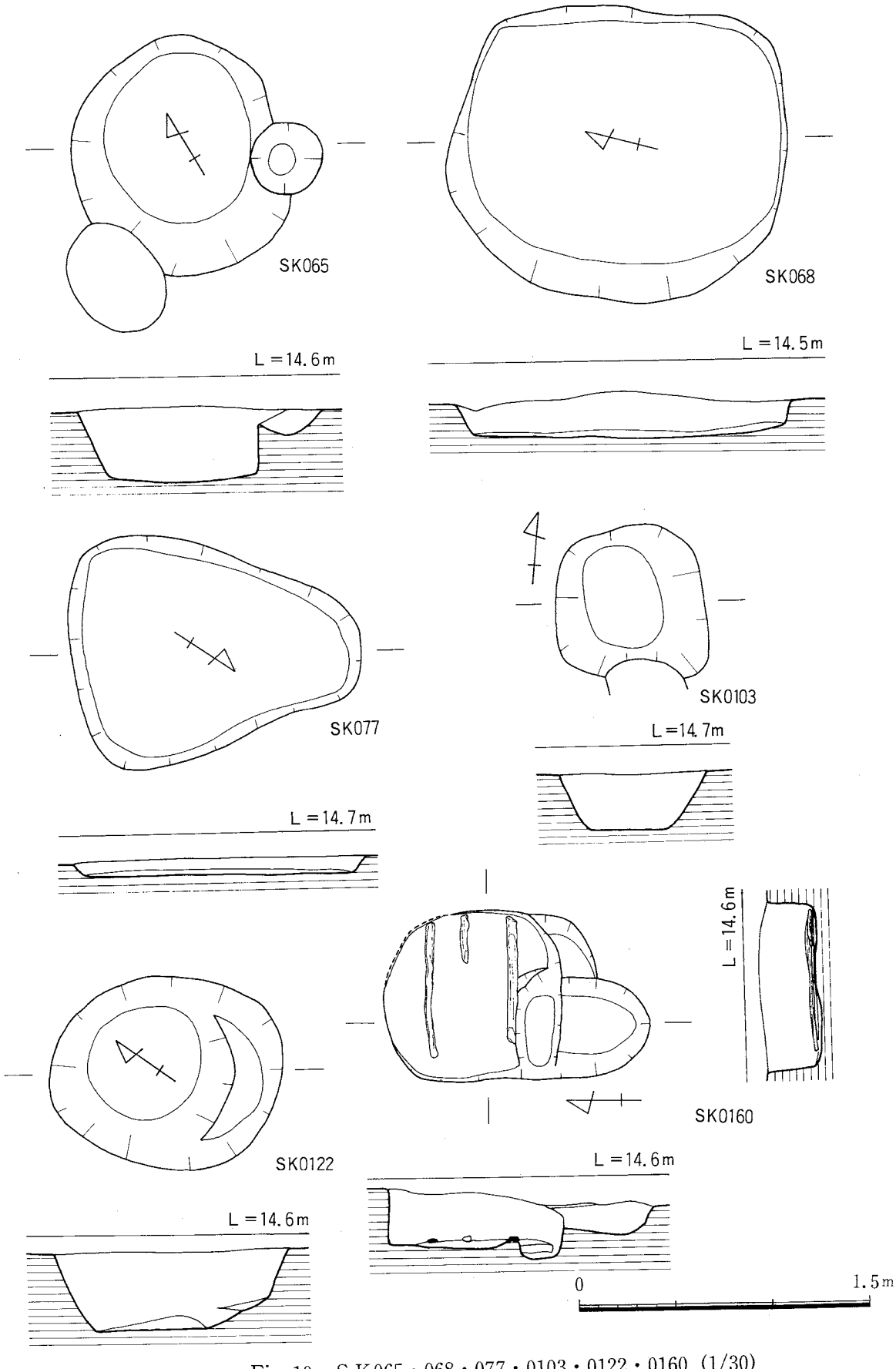


Fig.10　SK065・068・077・0103・0122・0160（1/30）

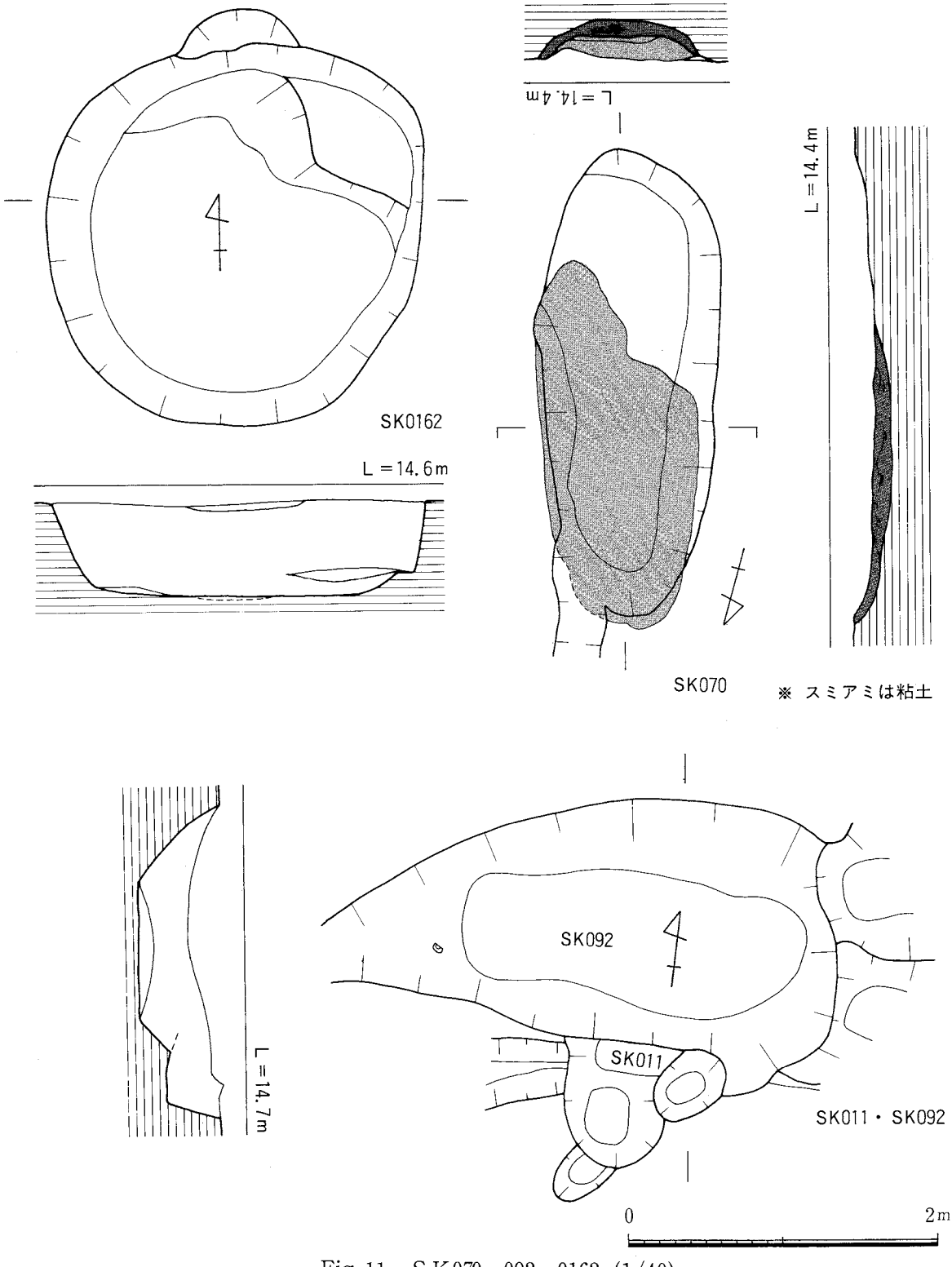


Fig.11　SK070・092・0162 (1/40)

SK055出土遺物 (Fig.13)　15E区で検出した円形の土坑から出土したもの。34は陶器碗1/3片である。復元口径11.3cmを測る。見込は蛇の目状に釉を掻き取り、砂が付着する。35は染付皿2/3片。復

元口径12.8cm、器高3.1cmを測る。高台には砂が付着する。見込には斜交線文である。

ＳＫ057（Fig.9）　15Ｅ区で検出した楕円形状の土坑。規模は長軸130cm以上、短軸103cm、深さ27cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘土である。**遺物**は陶器、土器、瓦片が少量出土している。

ＳＫ060（Fig.9）　14Ｅ区で検出した方形状の土坑。規模は長軸135cm、短軸140cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色から黒褐色砂混じり粘質土である。**遺物**は近世の青磁、染付、陶器、古墳時代前期の土師器の小片が少量出土した。

ＳＫ068（Fig.10、PL.7-(3)）　13Ｇ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸175cm、短軸152cm、深さ27cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘土。**遺物**は近世後半の陶器の擂鉢、土師器の小片が出土した。

ＳＫ069出土遺物（Fig.13･35、PL.15）　13Ｆ区で検出した土坑から出土したもの。36は陶器の大型の擂鉢口縁部1/4片である。復元口径は38.5cmを測る。口縁部が丸く肥厚し、内面には櫛歯の卸し目がびっしりと入る。卸し目はかなり擦り減っている。198は蓋板の一部。長さ24cm、幅7.3cm、厚み1.1cmを測る。両側面に小孔があり、板を組み合わせた蓋であろう。

ＳＫ070（Fig.11）　13Ｅ区で検出した長楕円形状の土坑。規模は長軸255cm、短軸118cm、深さ16cmを測る。床面には灰褐色砂を含む黄褐色粘土が貼られており、北側2/3の範囲に残っている。粘土の厚さは最大で10cm程である。この粘土の下には粗砂が薄く敷かれている。埋土は黒褐色砂混じり粘土である。**遺物**としては陶器の破片、コークスなどが各１点出土しており、近代の時期であろう。

ＳＫ077（Fig.10）　13Ｄ区で検出した三角形状の土坑。規模は長軸148cm、短軸122cm、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり土で炭を含む。**遺物**は近世後半代の染付碗片が出土している。

ＳＫ092（Fig.11）　15Ｈ区で検出した不定形状の土坑である。規模は長軸400cm以上、短軸250cm、深さ60cmを測る。埋土は暗褐色砂混じり土である。この土坑の西側は小溝ＳＤ091に繋がる。**遺物**は近世陶磁器や瓦、窯道具類などが出土している。

ＳＫ0103（Fig.10）　ＳＫ004の北側で検出した隅丸方形の土坑。規模は77×80cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘土で炭を少量含む。**遺物**は土器片を２点含む。

ＳＫ0122（Fig.10、PL.7-(4)）　10Ｄ区で検出した卵形の土坑で、旧河川ＳＤ020を切る。規模は長軸122cm、短軸100cm、深さ40cmを測る。埋土は上層が暗灰黄褐色粘土、下層が灰黄褐色粗砂礫で、黒色粘土や灰色粘土ブロックを混入する。**遺物**の出土はない。

ＳＫ0160（Fig.10、PL.7-(5)）　14Ｇ区で検出した隅丸方形状の土坑。規模は92×88cm、深さ29cmを測る。底面には幅５cm前後、厚さ２cm前後、長さ25～70cm前後の板材が３本、間隔をおいて置いてあった。この上に何かを置いたのであろうか。埋土は黒褐色土で黒色砂を混入するが、下層はやや暗い。**遺物**は古墳時代の土師器や、近世から近代にかけての土器、磁器の細片、コークスなどが少量出土している。

ＳＫ0162（Fig.11）　14Ｅ区で検出した不整円形状の土坑。規模は直径250×243cm、深さ62cmを測る。埋土は暗褐色砂混じり土である。**遺物**の出土はない。

井戸

ＳＥ032（Fig.7）　15Ｆ区で検出した井戸である。掘方は円形で直径180cmを測る。この中やや西側に直径40cmの井筒がある。井筒は陶器製である。調査区内では他にも井戸はあるが、これが一番しっかりしている。建物の北側にあり、井戸として最後まで使われていたものであろう。

出土遺物（Fig.12･21、PL.15）　井筒や掘方から遺物が出土している。19～22は染付磁器。19～21

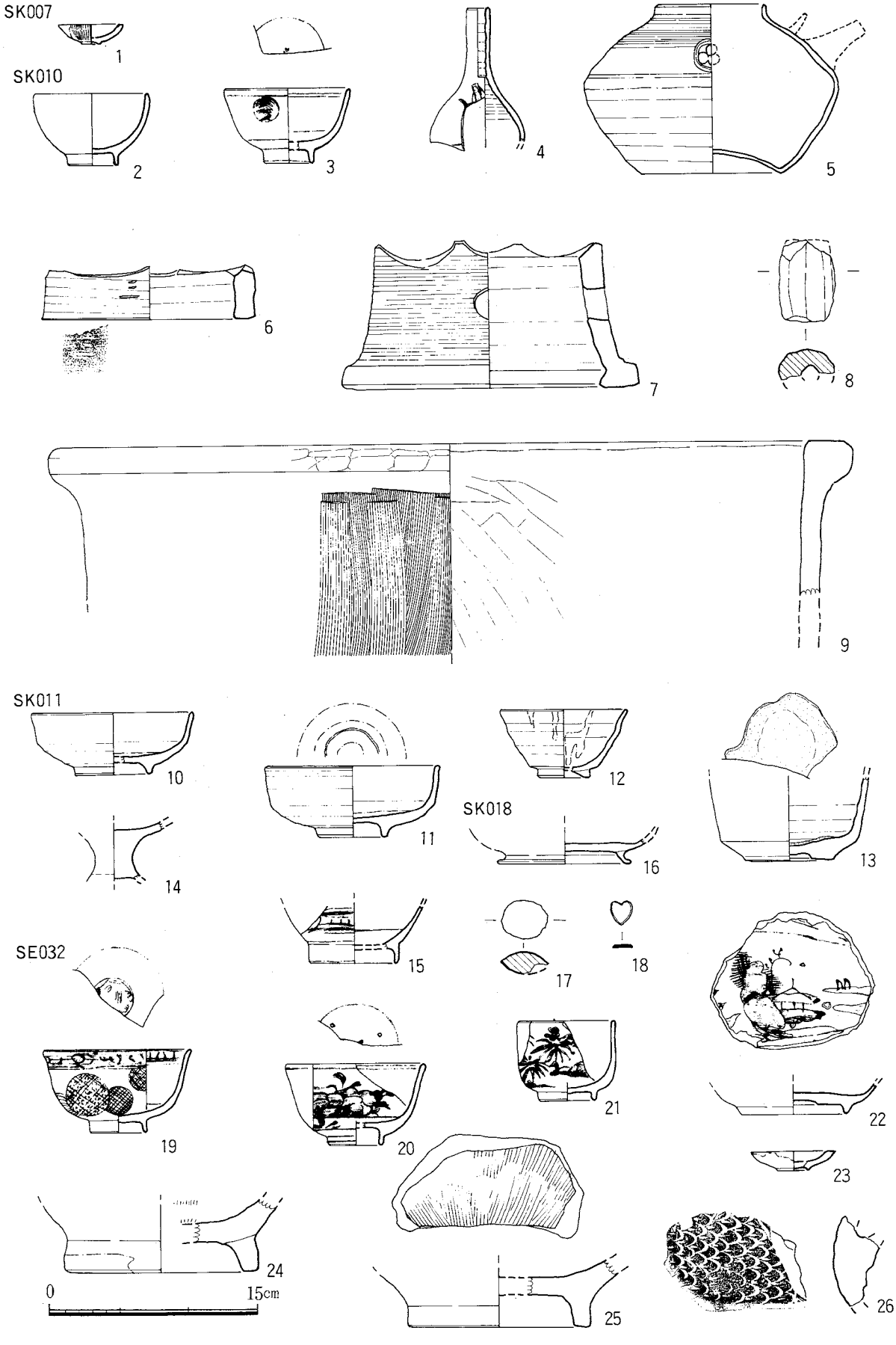


Fig.12　SK007・010・011・018・SE032 出土遺物（1/4）

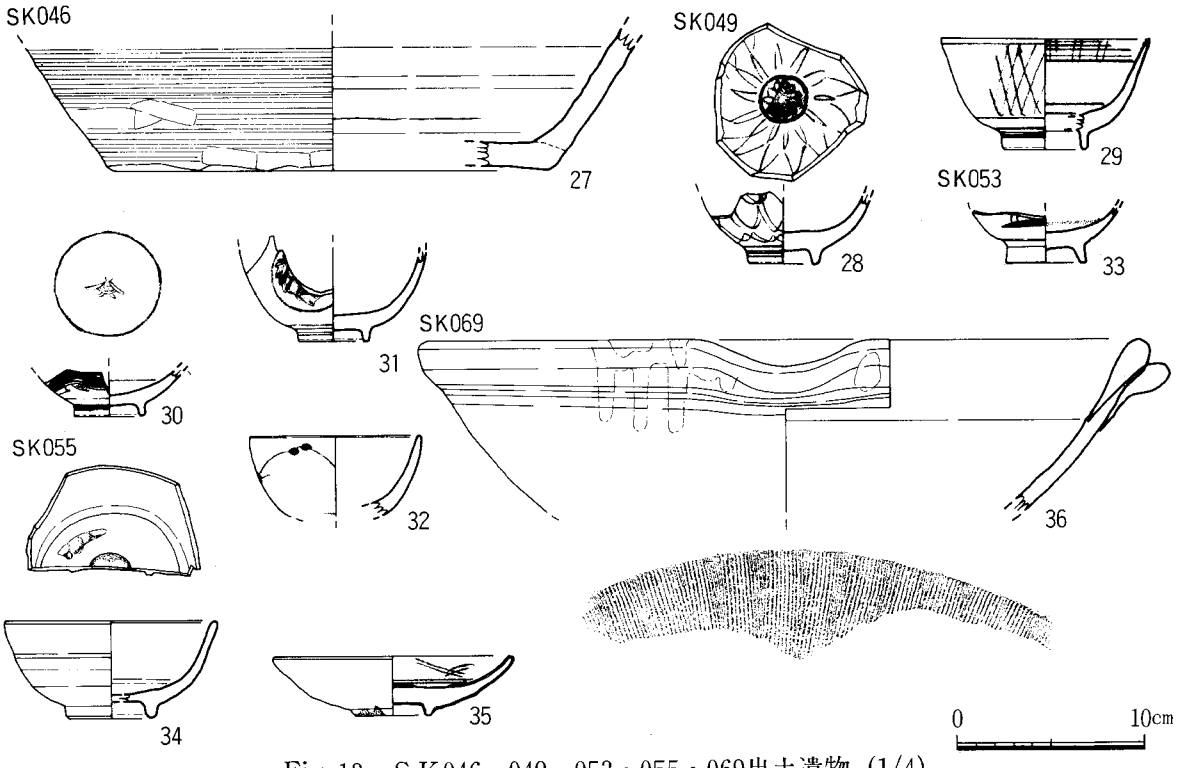


Fig.13　ＳＫ046・049・053・055・069出土遺物（1/4）

は碗。復元口径10.2cm、10cm、7cmを測る。21は湯呑茶碗である。20の見込にはハリ支え痕がある。22は皿底部片。復元高台径は7.4cmを測る。見込に楼閣山水を描く。ハリ支え痕が４ケ所残る。18世紀後半代である。23は型造りの白磁紅皿1/2片である。口径６cmを測る。18世紀以降。以上５点は肥前磁器である。24・25は褐色の釉がかかる擂鉢底部1/4・1/3片。復元高台径13.8cm、13cmを測る。櫛歯の卸し目が粗く残る。26は鯱鉾瓦の鱗部分の小片である。

埋甕

ＳＸ024（Fig.14･15、PL.15）　15Ｇ区で検出した。直径55×53cm、深さ31cmの円形土坑の中に甕下半部が据えられていた。これと隣接した土坑ＳＸ033出土の甕口縁部が接合している。37はＳＸ033から出土した素焼きの土師質の大甕口縁から肩部片で、復元口径45cmを測る。肩部に花弁状の扁平の飾りが付く。肩部に二段に沈線が巡る。38は胴下半部片で、復元底径20cmを測る。37と同一個体である。

ＳＸ043（Fig.14･15）　14Ｆ区で検出したもので南北に並んでいる。北側はセメントの様なものを、壁と底面に２cmの厚さで貼っている。形態は円形で規模直径50×48cm、残存深さ21cmを測る。南側は直径55×52cm、深さ32cmを測る円形土坑に、41が据えられていた。41は土師質の甕で、口縁部から胴部上半は欠失する。底径は19.7cmを測る。胴部中央に意図的な打ち欠きがある。ＳＸ043は屋外の便所もしくは肥壺と考えるが、41に孔があるのが判らない。器壁は剝落が著しい。

ＳＸ0161（Fig.14・15）　ＳＫ090の上面で検出した陶器の甕底部片。底径29cmを測る。

この他ＳＸ033から39、ＳＸ042から40が、ＳＸ081から42が出土している。39は瓦質の広口の甕で、口径44cm、器高42.3cmを測る。器壁は荒れるが、内外面ヨコハケが施される。外底部は同心円状にハケ目を施す。40は濃褐色釉がかかる陶器甕底部片。底径17.0cmを測る。外底部周縁と、内底周縁には

重ね積みの痕跡が残っている。42は東側境界の16G区で検出した溝状を呈する遺構からの出土である。県内産の陶器甕口縁から胴部1/3片である。復元口径28.5cmを測る。白濁した透明釉の上にモスグリーンの釉が肩から流れるようにかかる。(Fig.15、PL.15)

家畜骨出土土坑

調査区東側からⅣ区にかけて分布し、Ⅰ区では10基出土している。出土した家畜骨の分析については付論.2を参照のこと。

ＳＫ065(Fig.10、PL.7-(6))　14Ｅ区で検出した円形土坑。規模は長軸120cm、短軸108cm、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘土である。内部より大量の家畜骨が出土した。**遺物**の出土はない。

ＳＫ066 (Fig.16、PL.8-(1))　14Ｆ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸142cm、短軸73cm、深さ21cmを測る。底面東側はピット状に落ち込む。家畜骨は底面より浮いた状態で検出された。歯や四肢骨片でバラバラであった。埋土は暗褐色砂混じり土である。**遺物**の出土はない。

ＳＫ079 (Fig.16、PL.8-(2))　15Ｅ区で検出した不整楕円形状を呈する土坑。規模は長軸213cm、短軸106cm、深さ10cmを測る。底面中央に直径20cm余り、深さ18cmのピットがある。骨は南側底面より少し浮いている。確認した骨は四肢骨や背骨などである。埋土は暗褐色砂混じり土に黒色土を混入する。**遺物**の出土はない。

ＳＫ086 (Fig.16、PL.8-(3))　16Ｆ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸127cm、短軸87cm、深さ15cmを測る。骨は四肢骨などが散漫に底面に密着している。**遺物**の出土はない。

ＳＫ087(Fig.16、PL.8-(4))　ＳＫ086の南側の隅丸方形状の土坑である。規模は長軸113cm、短軸102cm、深さ10cmを測る。骨は西半分で、下顎骨などが少量出土している。**遺物**の出土はない。

ＳＫ088 (Fig.16、PL.8-(5))　16Ｇ区境界側で検出したＳＫ081に切られる不定形状の土坑。規模は長軸100cm、短軸65cm、深さ21cmを測る。四肢骨や顎や歯などが重なって、底面より浮いた状態で出土した。**遺物**の出土はない。

ＳＫ089(Fig.16)　16Ｈ区のＳＫ003に切られる不定形状の土坑。規模は長軸102cm、短軸95cm、深さ37cmを測る。骨は流れ込むような状況で出土している。埋土は黒褐色砂混じり粘土である。**遺物**の出土はない。

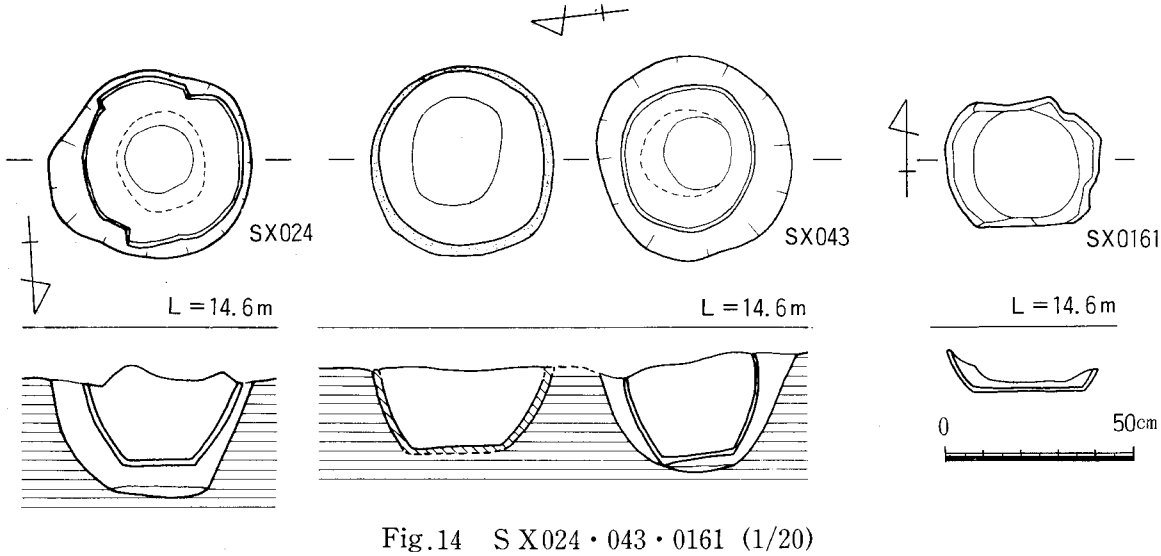


Fig.14　ＳＸ024・043・0161 (1/20)

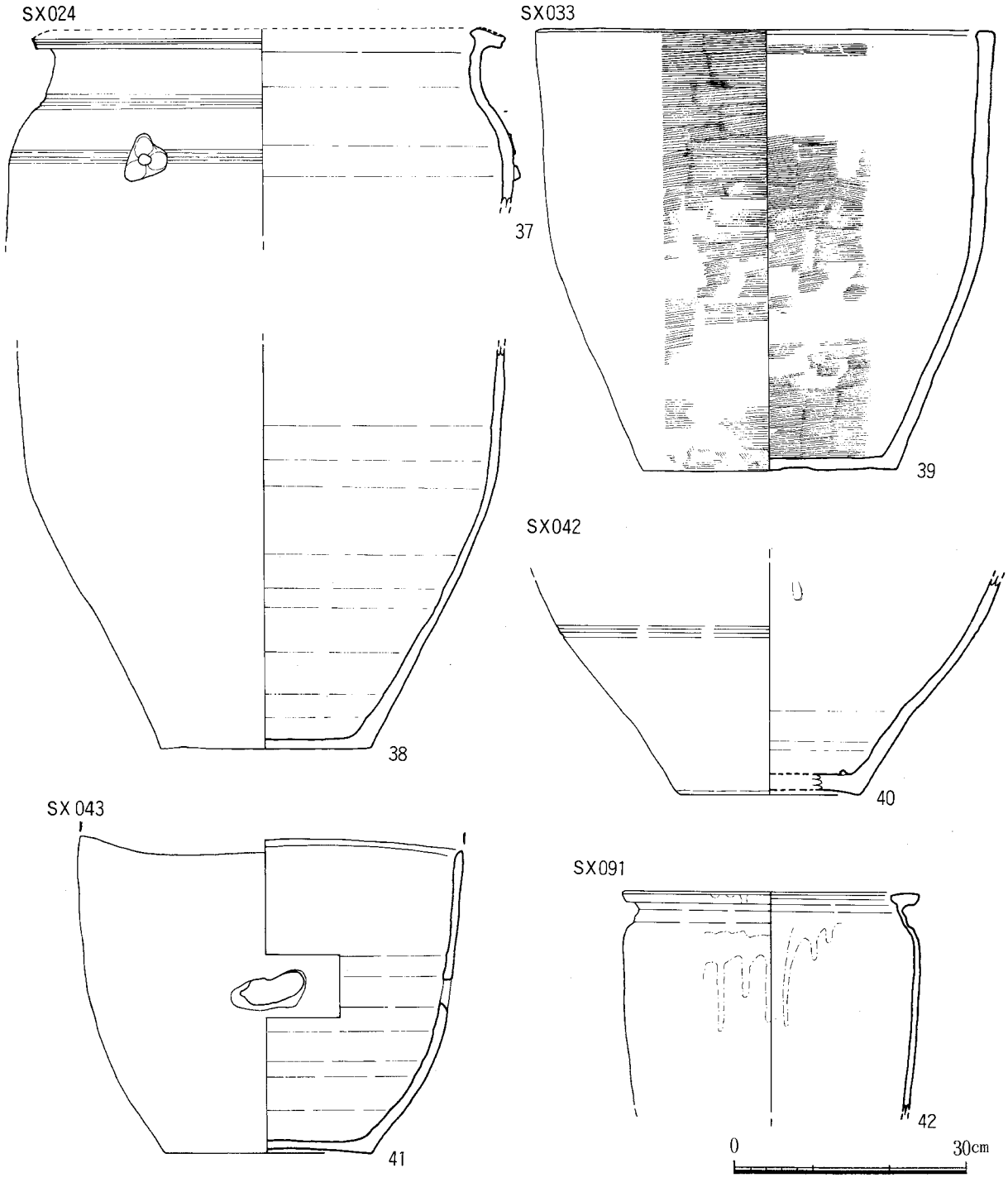


Fig.15　ＳＸ024・033・042・043・091出土遺物（1/8）

ＳＫ090（Fig.17、PL.7-(7)・(8)）　14D・E区で検出した東西方向の溝ＳＤ059の西側で検出した土坑。長さ5.4m、最大幅1.27m、最大深さ0.55mを測る。底面はほぼ平坦である。骨は下顎骨と四肢骨が離れて出土しているが、底面より浮いており、流れ込んだような状況を示している。埋土は暗褐色砂混じり土である。**遺物**は近世後半代の染付磁器、陶器の破片などが出土している。

ＳＫ0110(Fig.16、PL.8-(6))　15E区で検出した土坑で、南側が切られる。規模は長軸130cm以上、短軸85cm、深さ10cmを測る。土坑は残りが悪い。この土坑の中央に四肢骨と頭蓋骨が並べたように出

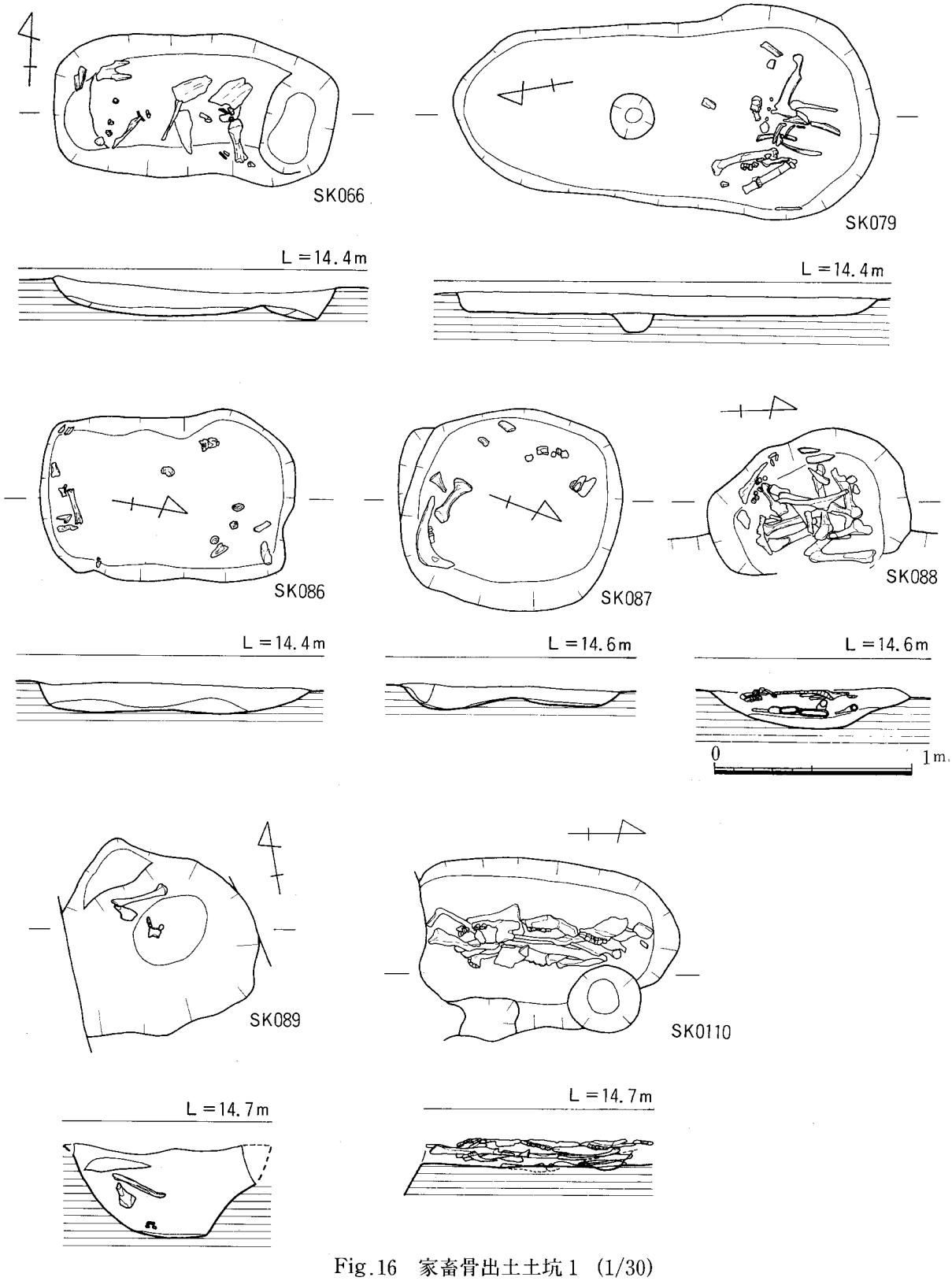


Fig.16　家畜骨出土土坑１（1/30）

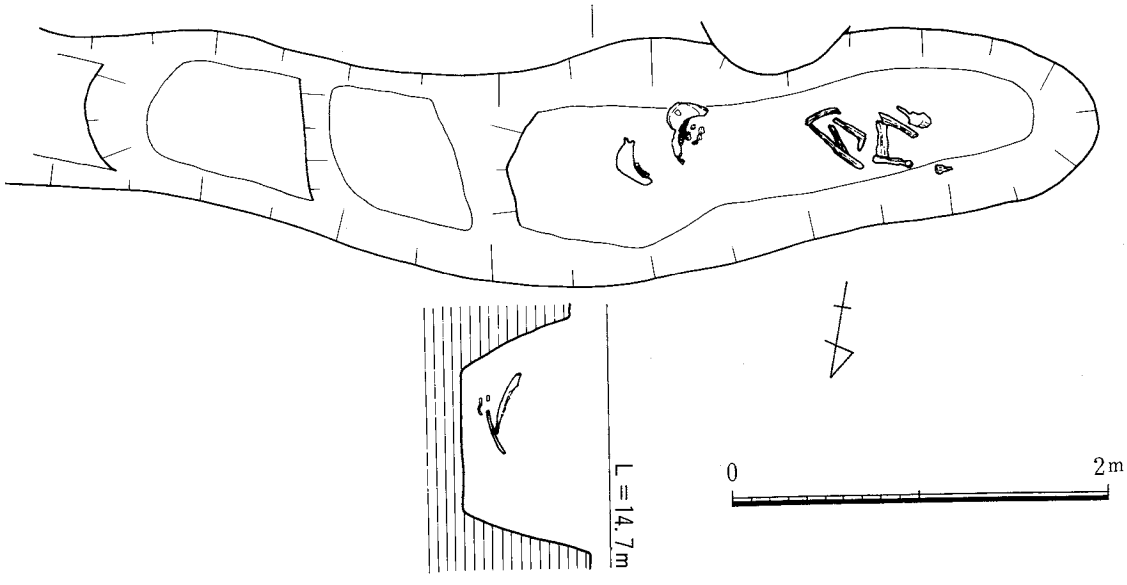


Fig.17　家畜骨出土土坑２（1/40）

土した。**遺物**の出土はない。

溝状遺構

屋敷地に伴う区画の溝や排水溝、畑の痕跡である。遺物が出土したものを中心に述べる。

ＳＤ001・002(PL.7-(1))　調査区南側で検出した南北溝。並行しており、南側がＳＤ001、北側がＳＤ002である。幅はＳＤ001が50～120cm、40～50cm、深さは20～25cmを測る。時期的にはＳＤ002が新しい。埋土はＳＤ001が黒灰色砂混じり粘土、ＳＤ002が灰色粗砂混じりシルトである。北側１～２m離れて小溝が並行しており、その間が通路と思われる。また北側溝が途切れる所があり、そこが入口であろうか。**遺物**は近世から近代初期にかけての陶器・染付・瓦などの破片や鉄釘片が出土している。

ＳＤ003・013　ＳＤ002の北側に並行する溝である。003と013は途切れるが一連のものであろう。溝は土坑などの他遺構に切られてずたずたである。幅は原状を残す所で45～115cm、深さは20cm前後を測る。この溝も何回か付け変わっている（ＳＤ008)。埋土は暗灰褐色シルトから暗褐色粘土、黒褐色土などを主体とする。

出土遺物（Fig.18）　陶器、染付、土瓶や櫛の破片などが少量出土している。43は陶器の土瓶底部片。内面に濃緑色の釉が付着する。44は鼈甲の櫛の破片である。

ＳＤ028　ＳＢ085北側で検出した東西方向の小溝。確認長は9.3m、幅30cm、深さ10cmを測る。ＳＤ001～003などと並行している。埋土は黒褐色粗砂混じり土である。**遺物**は近世以降の陶器や染付破片、縄文土器片が少量出土している。

ＳＤ034～040　ＳＢ085西側で検出した小溝で幅50～100cm間隔で東西方向に並行する。畑の跡であろうか。埋土は黒褐色から暗褐色砂混じり土である。**遺物**は陶器・白磁・土器、鉄の破片や炭などが出土している。

ＳＤ059　調査区北側で検出した弧状の東西溝である。西側はＳＫ090と切り合う。確認長は約13m、幅25～90cmを測り、深さは最大20cmで浅い。埋土は暗褐色から黒褐色砂混じり粘質土である。

出土遺物（Fig.18）　近世以降の陶器・磁器の破片が出土している。45・46は陶器。45は碗2/3片で、復元口径11cm、器高4.8cmを測る。内面見込は蛇の目状の釉の掻き取り、外面ケズリ。46は角形の瓶の肩部片。胴部中央がやや凹み、褐色釉で外面緑色から白色の藁灰釉がかかる。47・48は染付碗。47は口縁から胴部1/3片。復元口径9.9cmを測る。二重の網目文で、18世紀後半代の肥前磁器である。48は底部片。高台径4.1cmを測る。見込に崩れた五弁花のコンニャク印判と外底部に渦福銘がある。

ＳＤ062　北側で検出した弧状の小溝。3.45m、幅45cm、深さ５cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物（Fig.18）　近世以降の陶器片が少量出土している。49は陶器の湯呑茶碗片。復元口径９cm、器高５cmを測る。黄灰褐色の釉がかかる。

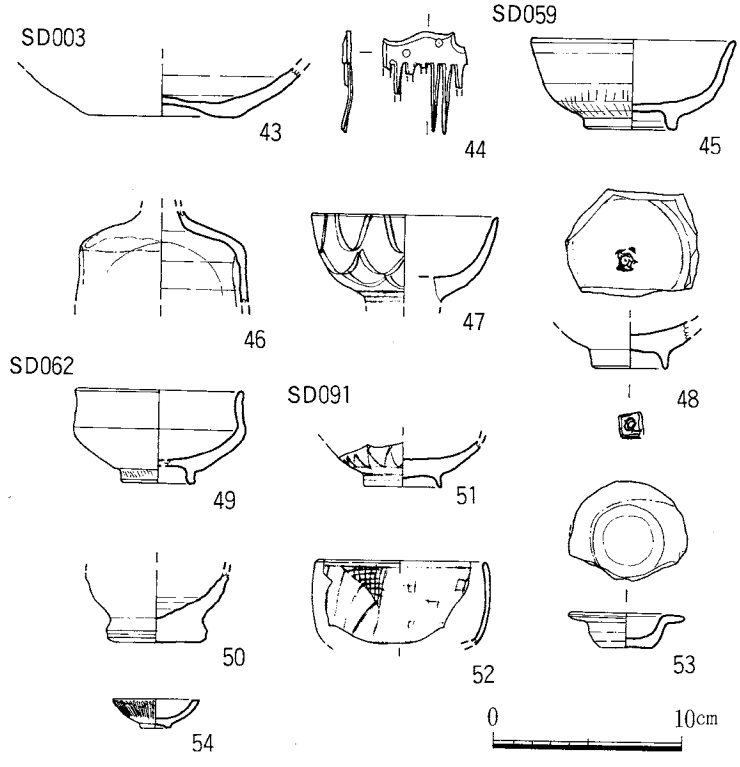


Fig.18　ＳＤ008・059・062・091出土遺物（1/4）

ＳＤ071　ＳＤ091から続き、北に直角に曲がる小溝である。ＳＫ068を切る。確認長は撹乱ＳＸ075から西に２m、北に12mの長さで、幅は20～60cm、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色砂質土。**遺物**は陶器・染付片、牛の歯などが出土している。

ＳＤ091　ＳＫ092から続く小溝である。確認長約５m、幅60cm、深さ10cmを測る。ＳＤ013などに並行する。

出土遺物（Fig.18）　陶器・染付・土師質土器・瓦器・瓦・レンガか・窯道具・鉄製品の破片などが出土している。50は陶器の瓶底部片で、底径5.3cmを測る。褐釉が厚めにかかり、外底部は回転糸切りである。51・52は肥前磁器の染付碗。51は底部片で、底径4.1cmを測る。網目文で、18世紀後半代のものか。52は丸型湯呑み碗1/3片で、復元口径9.2cmを測る。19世紀前半から中頃のもの。53は陶器の蓋3/4片で、口径6.3cmを測る。18世紀後半以降か。54は完形の型造りの肥前の白磁紅皿。口径4.6cm、器高1.4cmを測る。18世紀後半から19世紀前半のもの。

ＳＤ0131　調査区北側、ＳＤ0119を切る溝である。溝は北側でしか確認していない。確認規模長は６m、幅１m、深さ0.15～0.3mを測る。埋土は黒褐色粗砂混じり土が主体である。遺物は古墳時代から近世にかけての土師器、陶器の細片が少量出土した。

その他の遺構出土遺物（Fig.19、PL.15）　主なものを上げるが、時期的には近世後半から近代にかけてのものである。

55・56はＳＸ024出土。55は黒色の燻がかかった軒平瓦であるが、左側端がせり上がっており、特殊な場所に葺かれていたのであろう。中心飾りは三葉の葉で、左右蔓草が二回転する。瓦頭面長24.5cm、幅4～5cm、全長27cmである。56は肥前磁器の型造りの白磁紅皿1/2片、復元口径4.6cmを測る。57・58

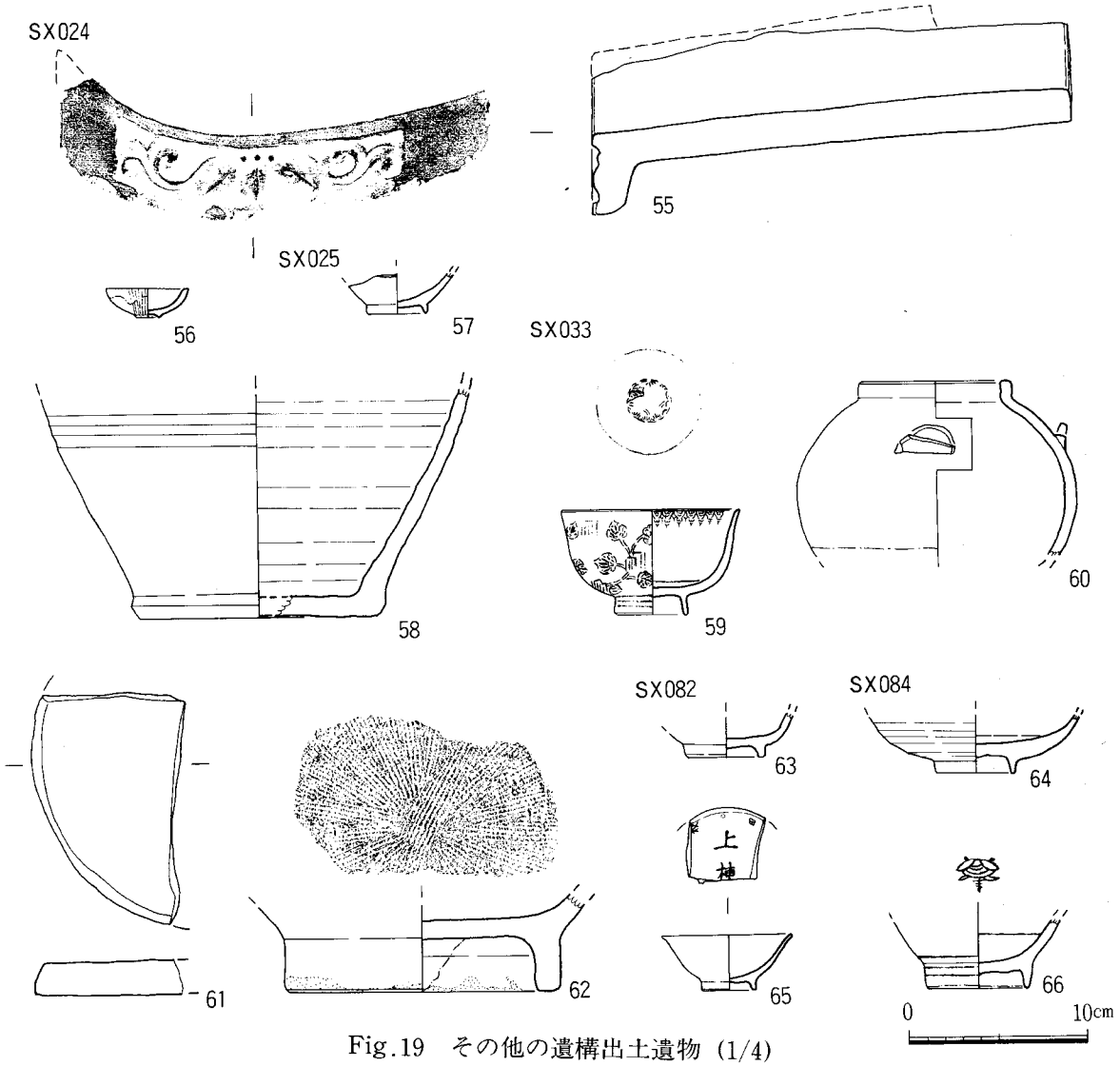


Fig.19　その他の遺構出土遺物（1/4）

はＳＸ025出土。57は染付の小碗底部片。高台径3.4cmを測る。58は素焼きの土師質の甕底部片で、底径13.2cmを測る。胴部はナデで、外面は剝落がひどいが焼きは良好。59~62はＳＸ033出土。59は肥前磁器の染付湯呑茶碗1/2片。口径10.1cm、5.9cmを測る。型紙刷りで、明治時代初年から10年にかけてのもの。60は黒釉がかかる陶器の土瓶片か。復元口径8.2cmを測る。口端から口縁部内面は釉がかからない。61は円板状の窯道具のハマ片である。上下両面は丁寧に磨かれ、砂が付着している。62は陶器の擂鉢底部1/2片。復元高台径15cmを測る。卸し目が密に入るが、擦り減っている。高台部には粗砂が付着する。63はＳＸ082出土の磁器瓶底部片か。高台径は4.2cmを測る。内面は露胎、外面灰オリーブ釉がかかる。64～66はＳＸ084出土。64は白磁皿2/3片で、復元高台径4.4cmを測る。内面見込には重ね積みの砂が付着し、鉄漿が塗られている。65は白磁の小盃1/5片。復元口径7.4cmを測る。内面に「田…校」が青色で、「上棟…」が墨で書かれている。66は肥前磁器の染付広東碗底部片。高台径は5.5cmを測る。見込に昆虫文がある。18世紀末～19世紀前半である。

柱穴・ピット出土遺物（Fig.20、PL.15）　67～70はＳＰ005出土の染付磁器の碗。67は広東碗底部片、高台径5.2cmを測る。外面山水か、見込に昆虫文がある。19世紀前半頃のもの。68は1/2片で、復

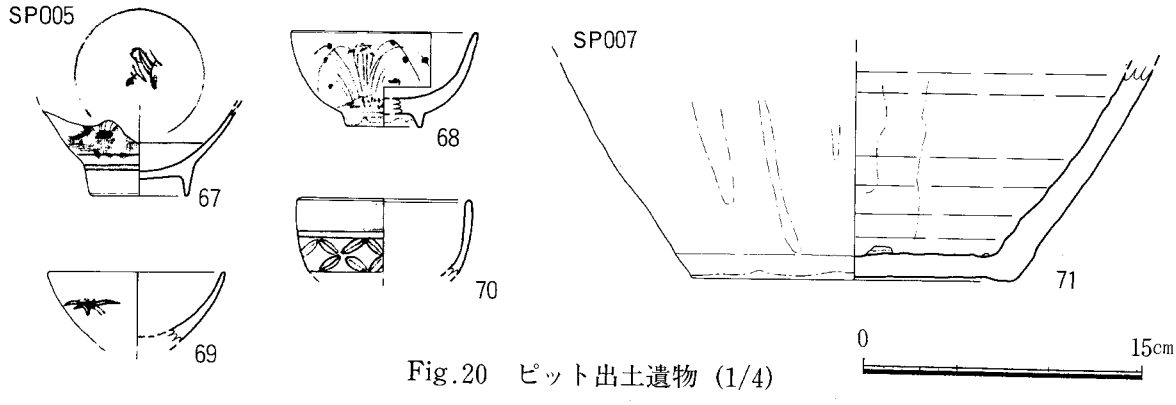


Fig.20　ピット出土遺物（1/4）

元口径10cm、器高5.1cmを測る。外面に秋草を描く。69は1/3片で、復元口径9.4cmを測る。70は丸型の碗1/3片で、復元口径9.3cmを測る。外面には帯状に七宝繋ぎの文様がはいる。71は陶器甕底部1/2片で、復元底径17cmを測る。褐釉の上に青白い藁灰釉がかかる。外底部は露胎で離れ砂が輪状に付着する。高取系と思われる

各遺構出土石器（Fig.21、PL.15）　72は磨石か。六角形状で、長径8.1cm、短径7.3cm、厚さ2.7cmを測る。縁辺は面取り、叩き調整、上下両面は磨きである。73は粘板岩製の砥石の小片。74は滑石製の有溝石錘。全長5.9cm、最大幅3.0cm、重さ68gを測る。調整は削りから研磨であるが、表面はかなり傷付く。75は頁岩の砥石の破片。76も砂岩製の砥石片。現存長6.4cm、幅6.7cmを測る。上下両面を砥面として使用している。77は硯。暗灰色の粘板岩を使用。全長21.5cm、最大幅7.6cm、厚さ3.2cmを測る。陸部は使用により凹みが大きく、海部には墨の痕跡がある。底面は研磨されており、砥石に再利用されているのか。72はＳＫ011出土、73～75はＳＥ032出土、76はＳＰ013出土、77はＳＸ048出土である。

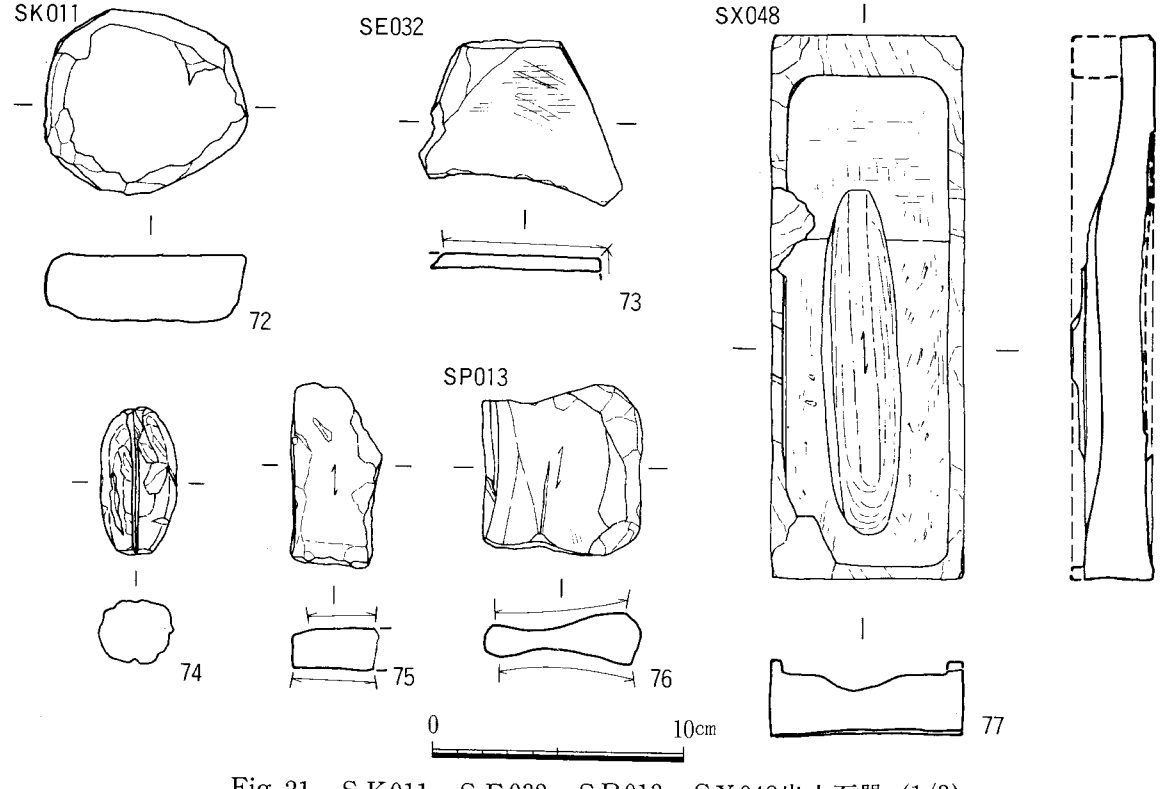


Fig.21　ＳＫ011・ＳＥ032・ＳＰ013・ＳＸ048出土石器（1/3）

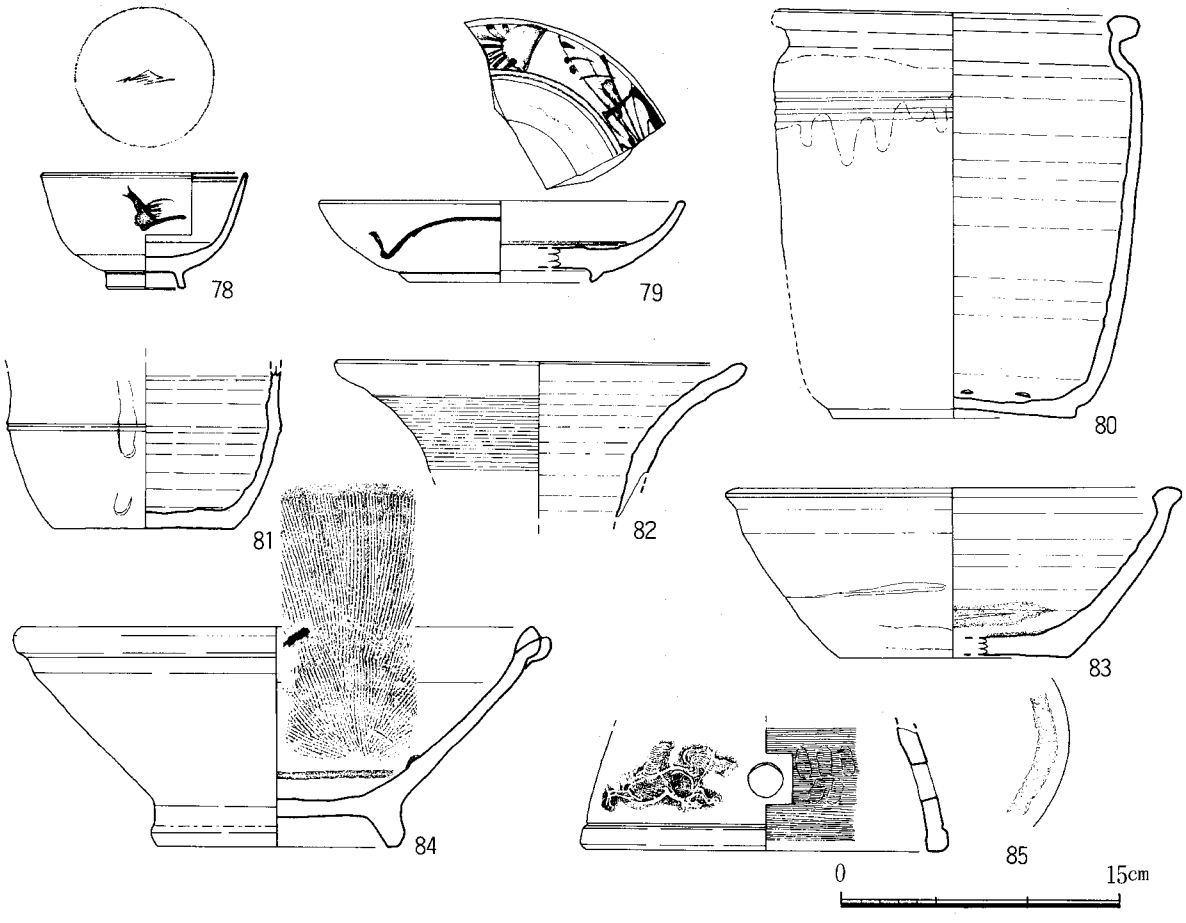


Fig.22　遺構面出土遺物（1/4）

遺構面出土遺物（Fig.22、PL.15）　78･79は染付磁器。78は碗1/2片で、復元口径11cm、6.2cmを測る。見込に荒磯文がある。79は中型の皿1/4片で、復元口径19.5cm、4.3cmを測る。見込は蛇の目状に釉を掻き取りし、砂が付着する。高台部にも砂が付着する。80～84は陶器。80は甕のほぼ完形品。口径19.6cm、器高21.6cmを測る。暗オリーブ色釉の上に肩部から白色から黒褐色の釉がかかり、外底は褐色の下地釉がかかる。内底には目痕がある。81は竹型の徳利底部2/3片。小石原焼か。82は無釉の壺口縁部片で、復元口径21.8cmを測る。外面カキ目が入る。83は鉢1/3片で、復元口径24cmを測る。褐色から黒色釉が厚めにかかり、内面には重ね積みの痕跡が残る。外底にも輪状の目痕が残る。84は擂鉢1/3片。復元口径27cm、器高11.7cmを測る。内面には櫛歯の卸し目が密に入り、輪状の重ね積みの跡が残る。高台部にも重ね積みの痕跡が残る。85は博多七輪の底部小片。底径は19.5cmを測る。直径1.8cmの円孔と天馬のスタンプがある。外面はナデ、内面はヨコハケで指押さえ痕が残る。

② 近世以前の遺構

土坑

ＳＫ067（Fig.23、PL.8-(7)･(8)）　10区で検出したＳＤ019に切られる円形状の土坑。規模は長軸117cm、短軸107cm、深さ42cmを測る。埋土は黒褐色土である。弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土した。土器を廃棄した土坑であろう。

出土遺物（Fig.25～28、PL.16・17）　甕・壺・高坏・鉢・器台などの破片が多量に出土した。小破

片が多く、完全に復元出来なかった。86～100は甕である。86～88は小型の甕。86はほぼ完形で、口径15.4cm、器高16.8cmを測る。底部はわずかに丸みをもった平底の名残を残す。内外面ハケで下半はナデる。外面上半にススが付着する。87・88は口縁～胴部1/2・1/4片で、復元口径13cm、15.6cmを測る。88の胴部外面はハケ、内面はヘラ削り。89は直立気味の口縁部1/3片で、復元口径15.3cmを測る。外面平行タタキ、内面は粗いハケ。90は口縁部3/4片。復元口径20cmを測る。91～93は口縁から胴部片。復元口径は17.3cm、21cm、24.8cmを測る。91・92は内外面ハケでススが付着する。93の口縁外面には縦方向の短い沈線が連続して入る。94・95は長胴の甕で、94は底部を、95は1/3片を欠失する。復元口径21.2cm、22cm、器高31cm、35.8cmを測る。94の胴部下半はナデでススが付着する。95の胴部上半は平行叩きでススが付着する。96はやや肩が張る器形で、口径16cm、器高33cmを測る。外面は胴部上半はハケ、下半は工具ナデでススが付着する。内面はハケ。97～100は布留式の甕の口縁から胴部1/2から1/4片。復元口径は17.8cm、17.8cm、16.7cm、18.3cmを測る。胴部外面はハケまたはナデで、内面はヘラ削りである。器壁は薄い。110の外面はススが付着する。101～105は壺である。101は算盤状を呈す胴部1/2片。復元最大胴径は12cmを測る。内面はハケで、外面はハケ後ナデで底部に穿孔がある。102は広口の短頸壺1/3片。口径14.6cm、器高17.7cmを測る。口縁外面はハケ後ヘラ研磨、胴部はハケのちヨコヘラ研磨、内面は丁寧なヨコハケ。103は把手付きの広口壺で、口縁部と底部は欠失するが、底部は平底である。肩部に一対の把手が付き、径9㎜の円孔があく。胴部外面はハケで一部ススが付着し、内面はヘラ削りである。104は103と同じ器形の把手片である。105・106は大型の壺の頸部片と胴底部片である。同一個体と思われる。復元頸部径17.6cm、復元胴部最大径41.3cmを測る。胴部外面は平行叩きで下半はナデ、内面は表面の剝落が著しいがハケ目が残る。107～114は高坏。107は丸底の坏部1/3片で、外に開く口縁を持つ器形。類を見ない器形で、朝鮮半島系の形態か。調整は外面ハケ、内面ハケで暗文が入る。108～110は坏部で、復元口径は108が1/2片で27.5cm、110が18.6cmを測る。108は坏底部から屈折して開く口縁部を持つ。110は坏底部からそのまま開く口縁部を持つ。外面はハケ、内面はナデ。111～114は脚部片で、脚端径は復元16.5cm、14.5cm、13.9cm、19.7cmを測る。いずれも脚部に円形の透し孔3個、112は2個を持つ。114は低く開く脚である。111～113の外面はヘラ研磨、113の坏部は丹塗りである。114の外面は細かいヨコハケである。115～117は鼓形器台。115は口縁部1/3片で、復元口径は21.6cmを測る。116・117は脚部の小片と1/2片である。脚端径は約18cm、16.8cmを測る。外面はナデ、内面はヘラ削りである。118～126は鉢である。118～121は脚台が付く椀形の鉢。118は復元完形で、口径17.2cm、器高13.2cm、脚端径11cmを測る。調整はハケでナデる。119は復元口径12cm。120と121は1/2・1/4片で、復元口径20.5cm、22.6cmを測る。120の器面の調整はナデでハケが残る。121の外面はハケである。122は胴部から屈折する口縁を持つ鉢の小片。内外面ハケでススが付着する。123～125は椀形のもので、復元口径は16cm、14.7cm、15cmを測る。123の内外面はハケである。126は2/3片で、平底気味で底が深い器形である。口径は14.4～15.6cm、器高は9.3cmを測る。外面上半はハケ、下半はヨコヘラ研磨。内面はハケで工具痕が残る。底部には黒斑がある。

ＳＫ095（Fig.23）　7Ｆ区で検出した楕円形状の土坑。規模は長軸80cm、短軸59cm、深さ27cmを測る。埋土は黒褐色砂である。**遺物**は古墳時代前期の土師器細片が少量出土している。

ＳＫ096（Fig.23、PL.9-(1)）　7Ｅ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸226cm、短軸83cm、深さ50cmを測る。埋土は黒色砂質土で炭化物を少量含む。上面を中心に土器片が出土しており、ある程度埋まった段階で土器片を廃棄したものであろう。

出土遺物（Fig.28、PL.17）　古墳時代前期の土師器のほか、砥石片が出土している。127は布留式甕の口縁から胴部片で、復元口径は16.5cmを測る。胴部外面はハケで下半はナデ。肩に櫛状工具によ

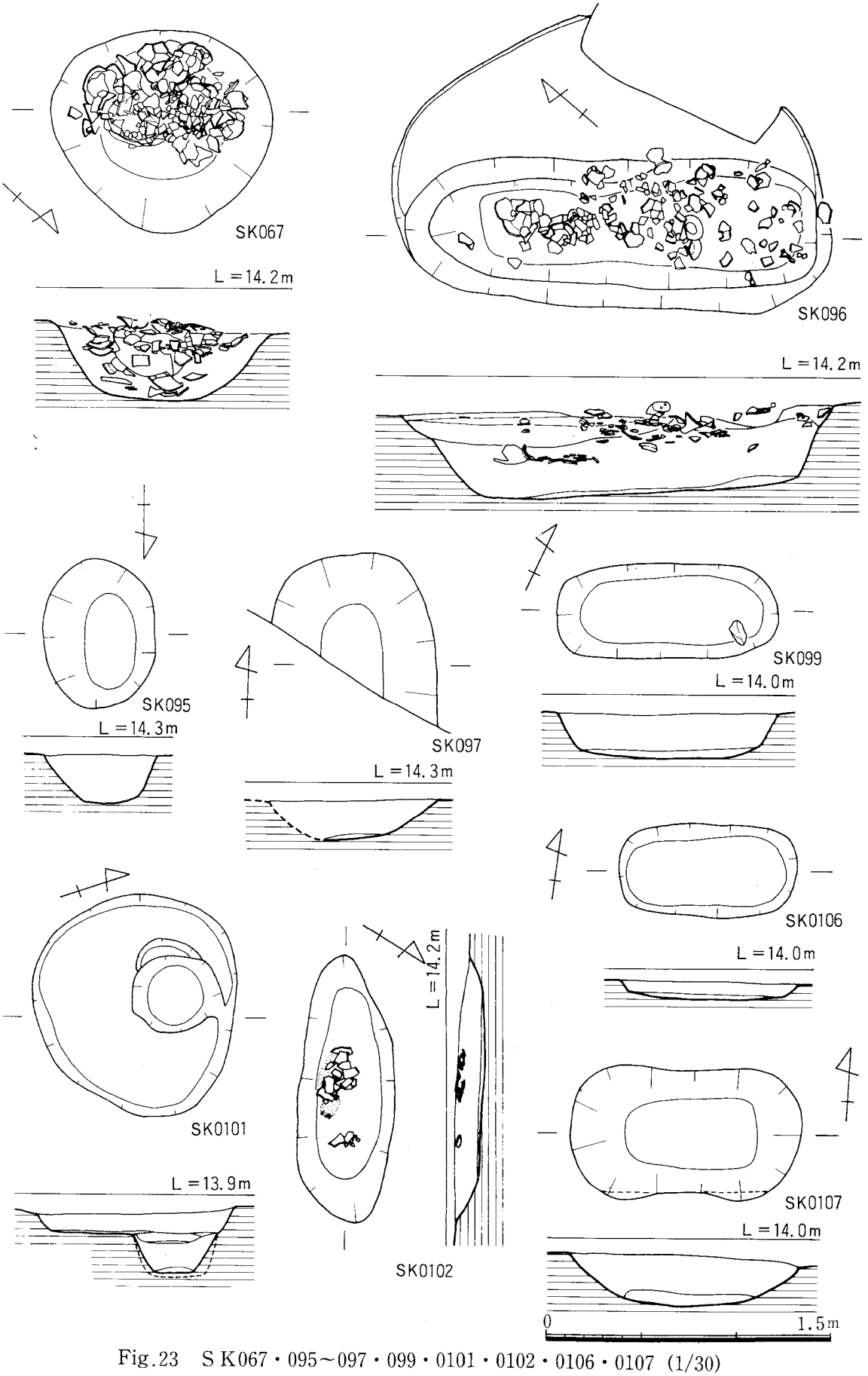


Fig.23　SK067・095～097・099・0101・0102・0106・0107 (1/30)

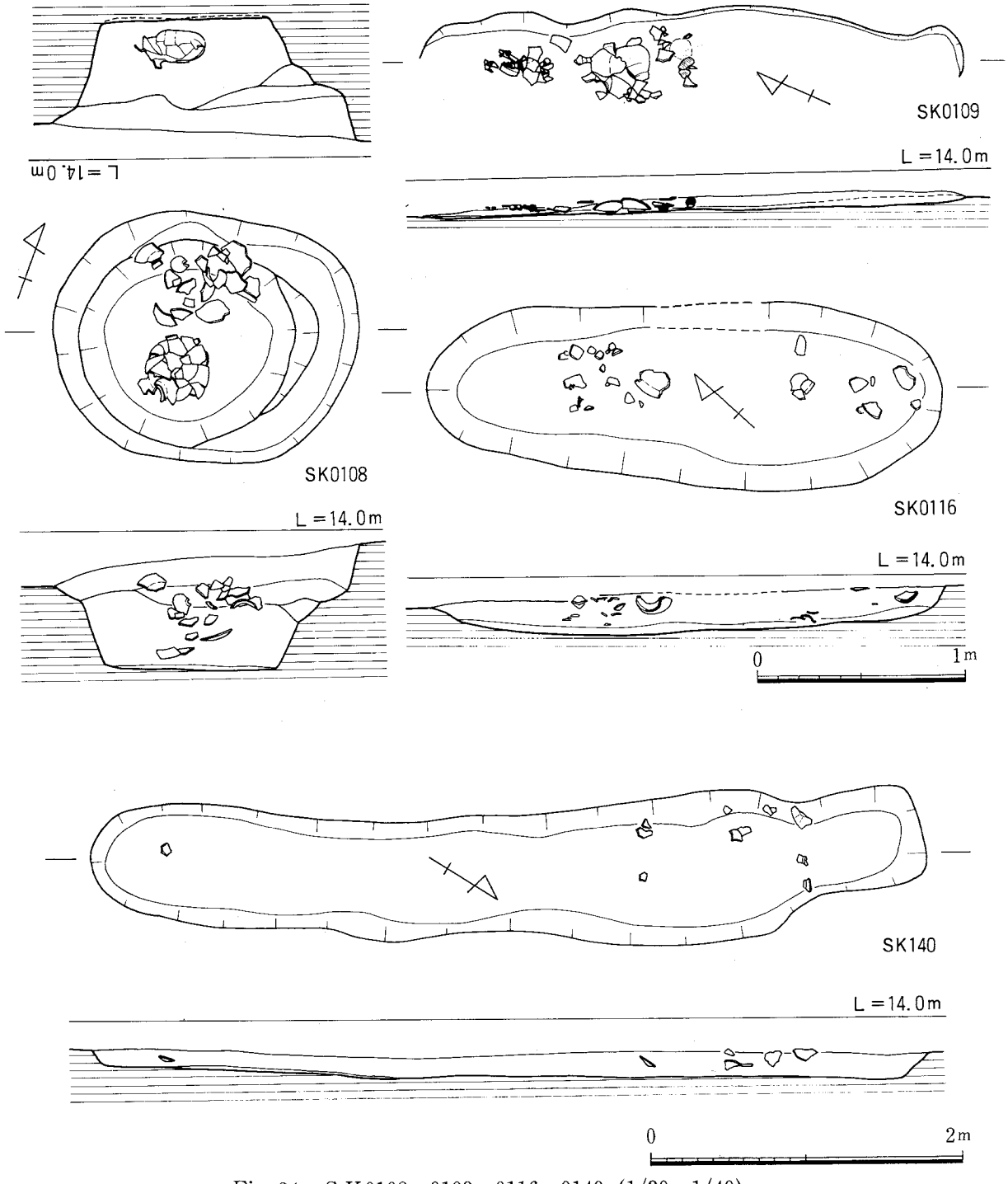


Fig.24　SK0108・0109・0116・0140（1/30・1/40）

る刻目がつく。内面はヘラ削り。128は複合口縁状の壺口縁部1/4片。復元口径13.3cmを測る。外面はナデ、内面はヘラ削り。129～131は高坏。129は坏部1/4片で、復元口径20.7cmを測る。内面に暗文が入る。130は坏から脚部片。磨滅がひどいがナデのようで、円形の透し孔が4カ所入る。131は脚部片で、脚端径は13.8cmを測る。脚裾に円形の透し孔が3カ所入り、坏部との接合面はヘラで深く刻んでいる。132・133は鉢で、132は脚台部片。脚端径6.2cmを測る。133は平底の鉢1/3片。復元口径10.6cm、器高3.8cmを測る。内外面指押さえ痕が残る。

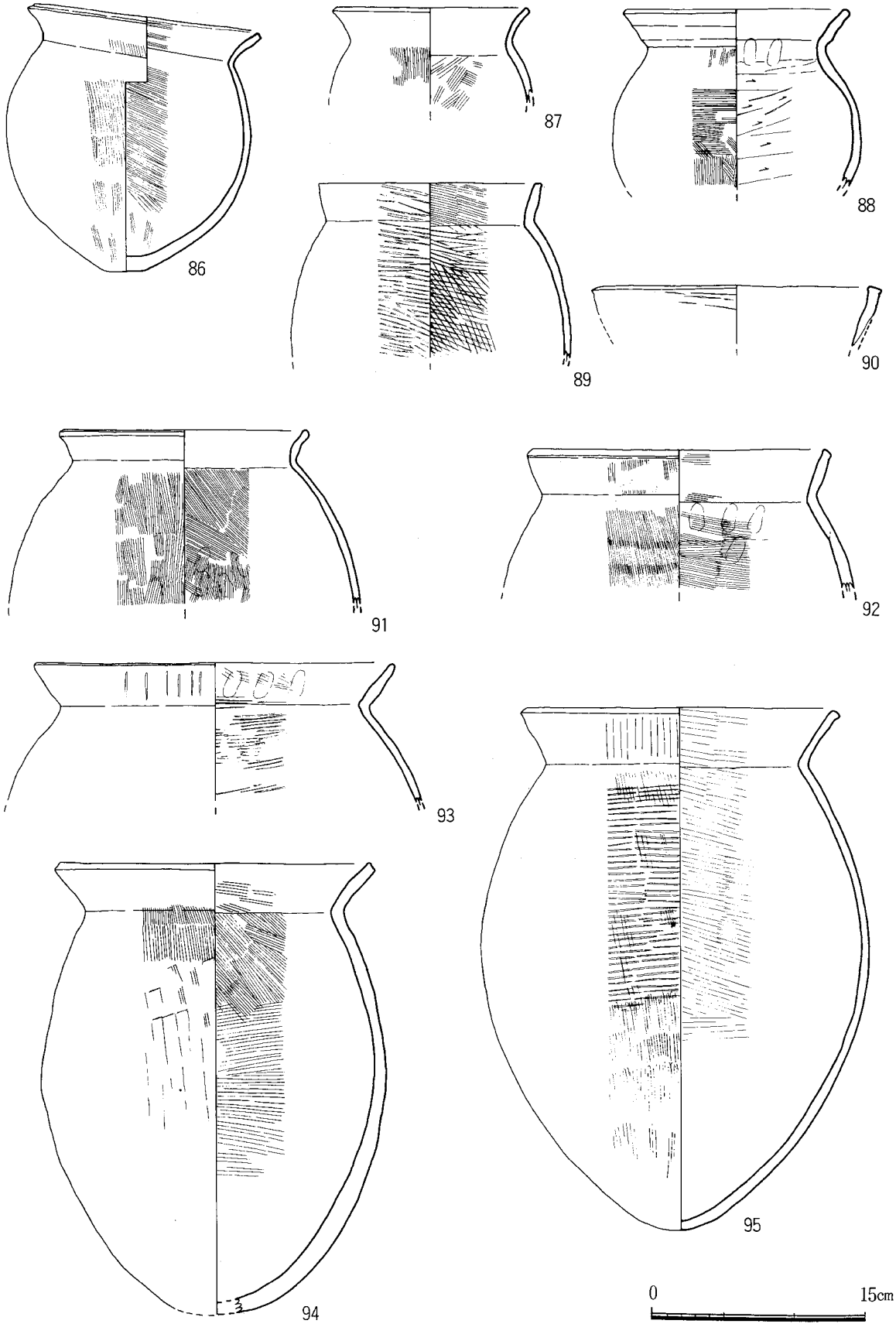


Fig.25　ＳＫ067出土遺物１（1/4）

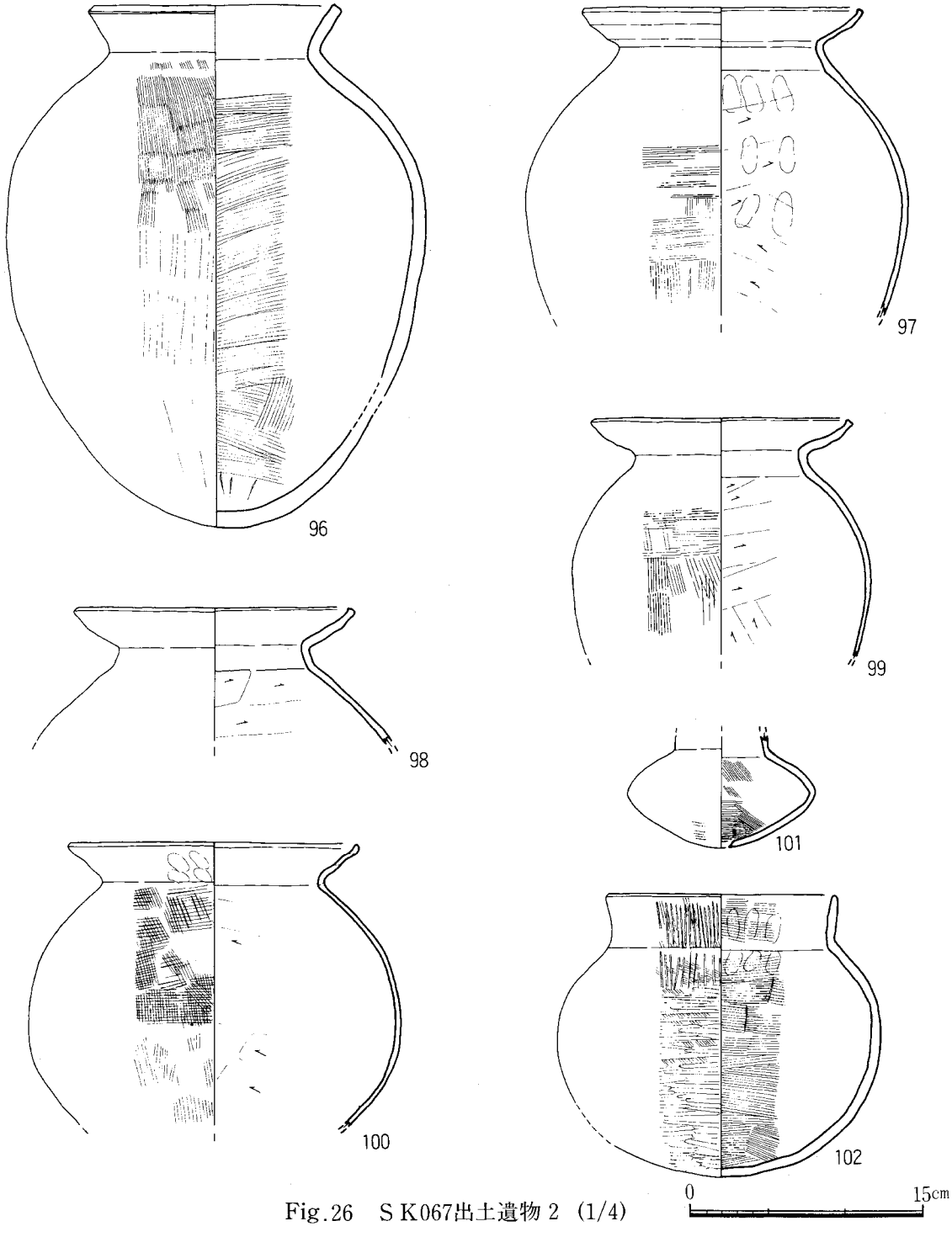


Fig.26　ＳＫ067出土遺物２（1/4）

ＳＫ097（Fig.23）　ＳＤ098を切り、南壁にかかる土坑。確認規模は南北90cm以上、東西86cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粗砂である。

出土遺物（Fig.28、PL.17）　弥生から古墳時代の土器片が少量出土した。134は土師器の鉢の脚台部1/2片。脚端径８cmを測る。内外面ナデである。

ＳＫ099（Fig.23、PL.9-(7)）　6Ｄ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸117cm、短軸50cm、深さ24cmを測る。埋土は暗灰褐色砂混じり粘質土に黒色粗砂をブロック状に含む。**遺物**は弥生から古

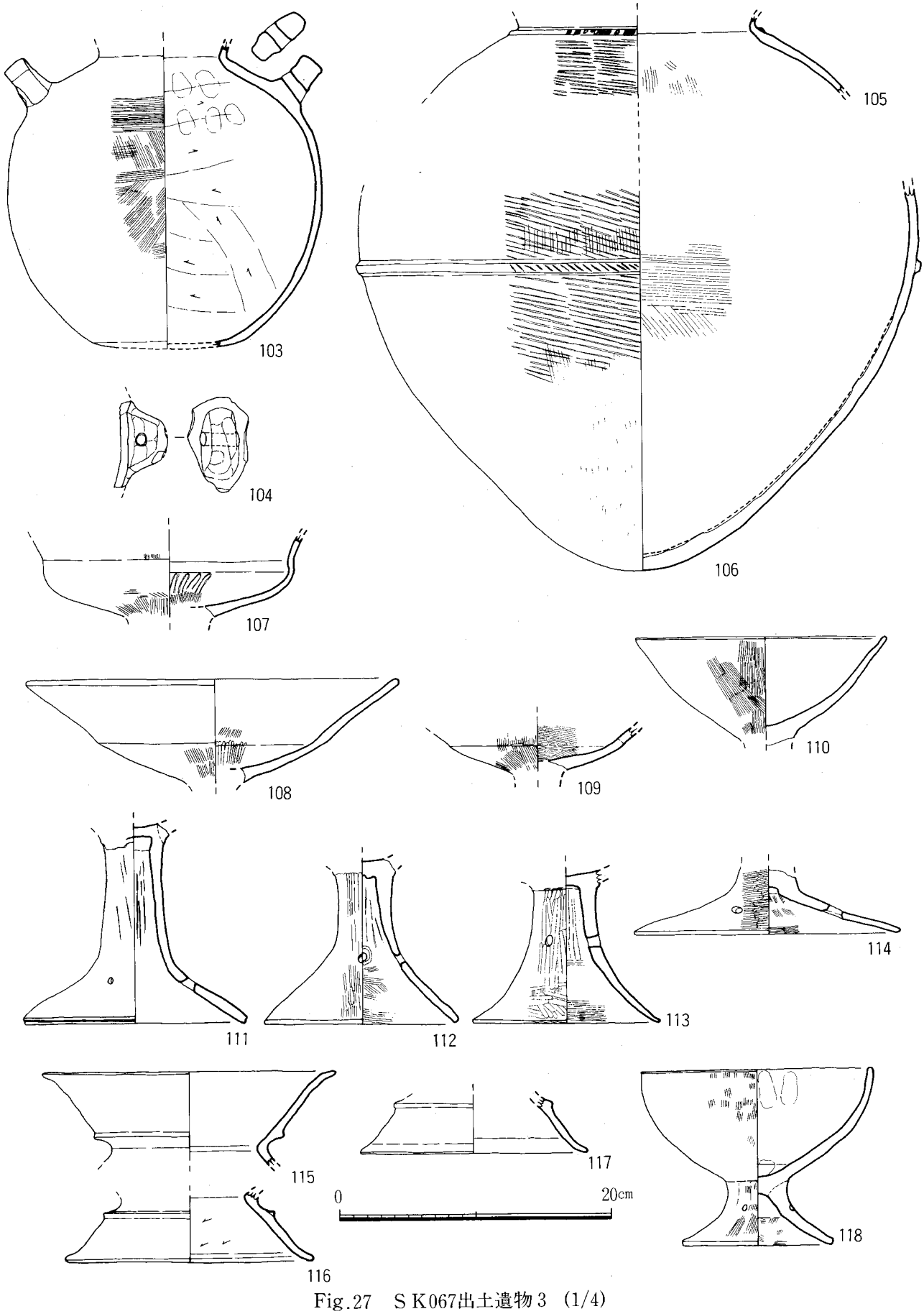


Fig.27　ＳＫ067出土遺物３（1/4）

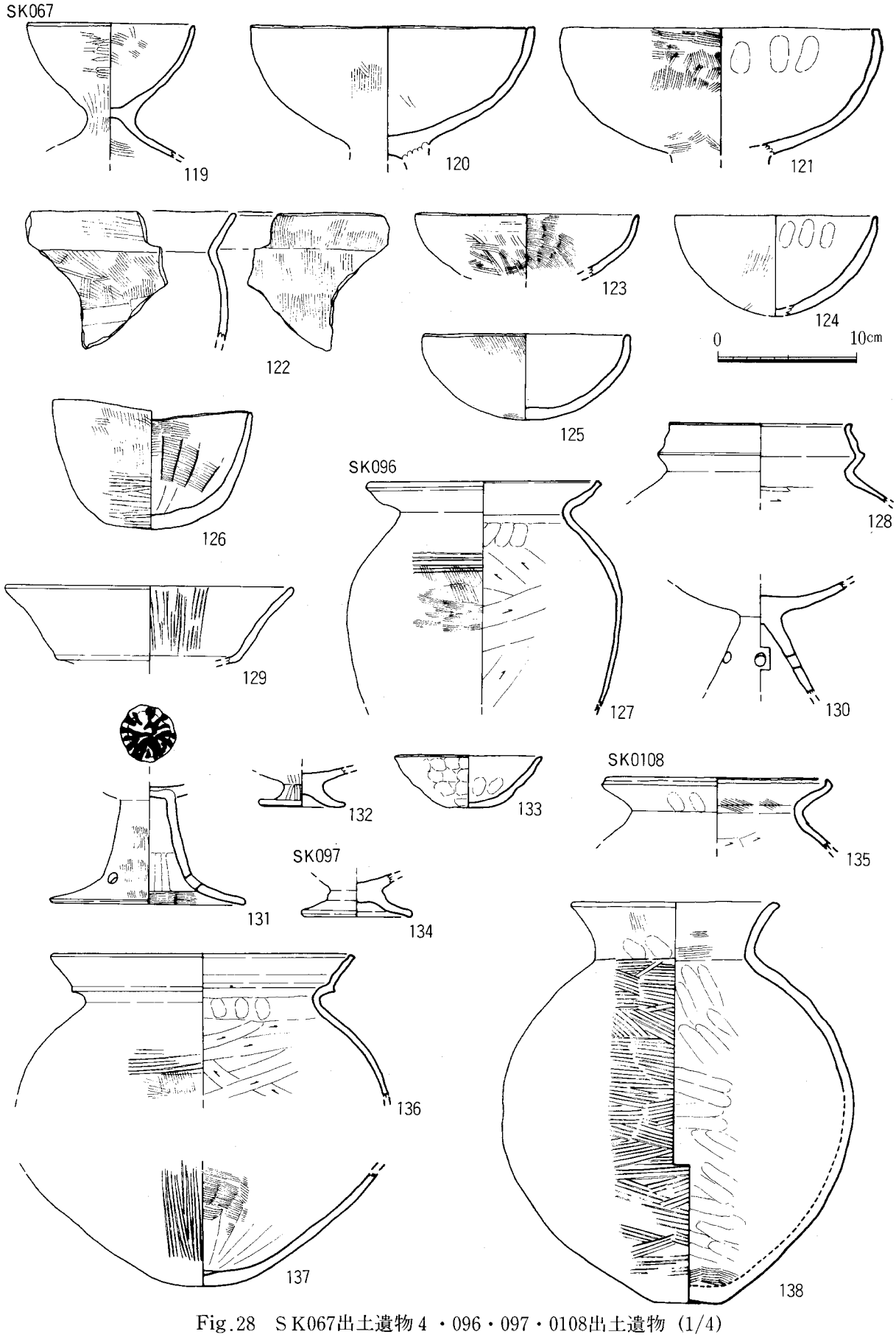


Fig.28　ＳＫ067出土遺物４・096・097・0108出土遺物（1/4）

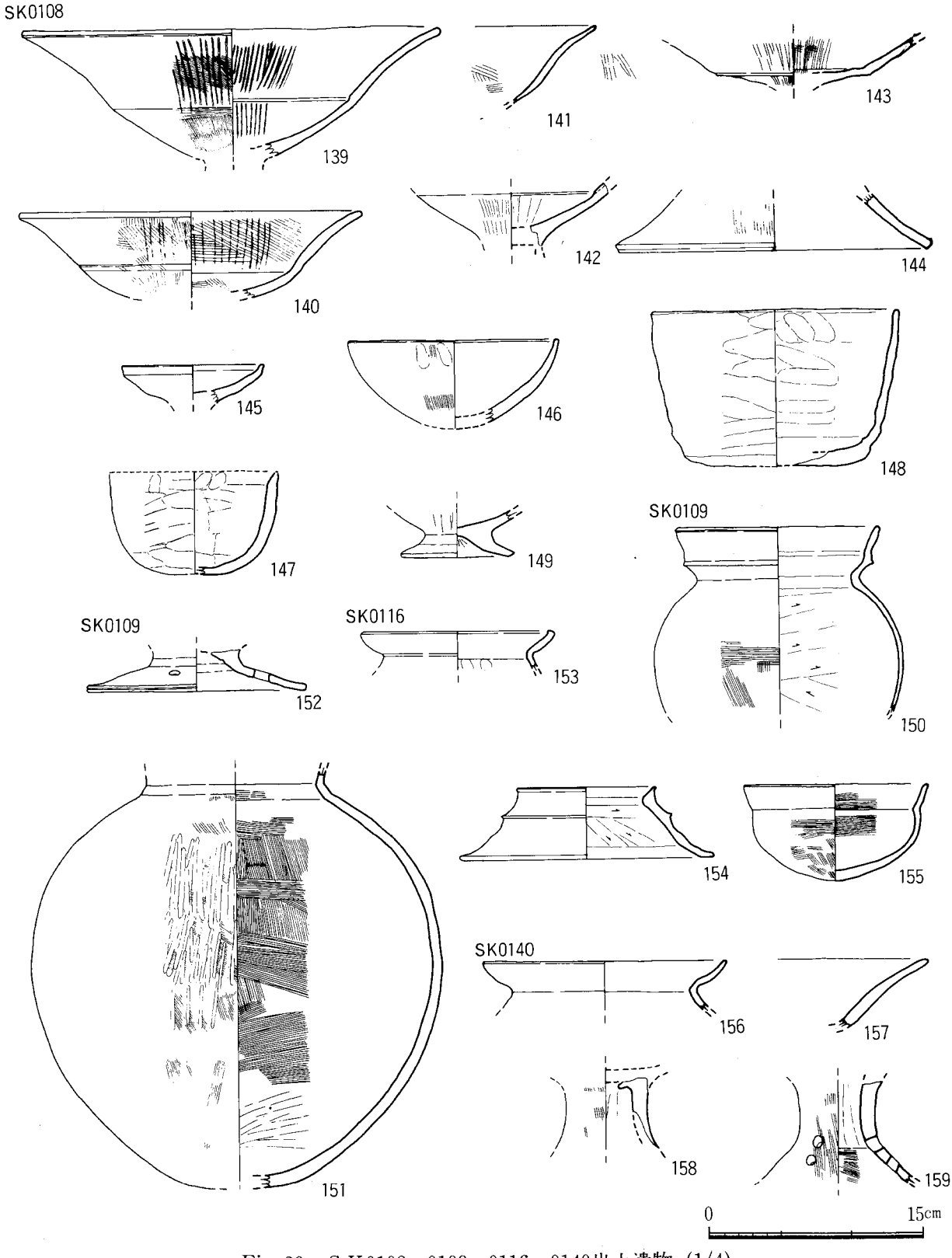


Fig.29　SK0108・0109・0116・0140出土遺物（1/4）

墳時代の土器片が少量出土している。

SK0101(Fig.23、PL.9-(8))　6D区で検出した不整円形の土坑。規模は長軸119cm、短軸110cm、深さ15cmを測り、底面の北側には直径40cm、深さ24cmのピットがある。埋土は暗い黒褐色粗砂で炭化

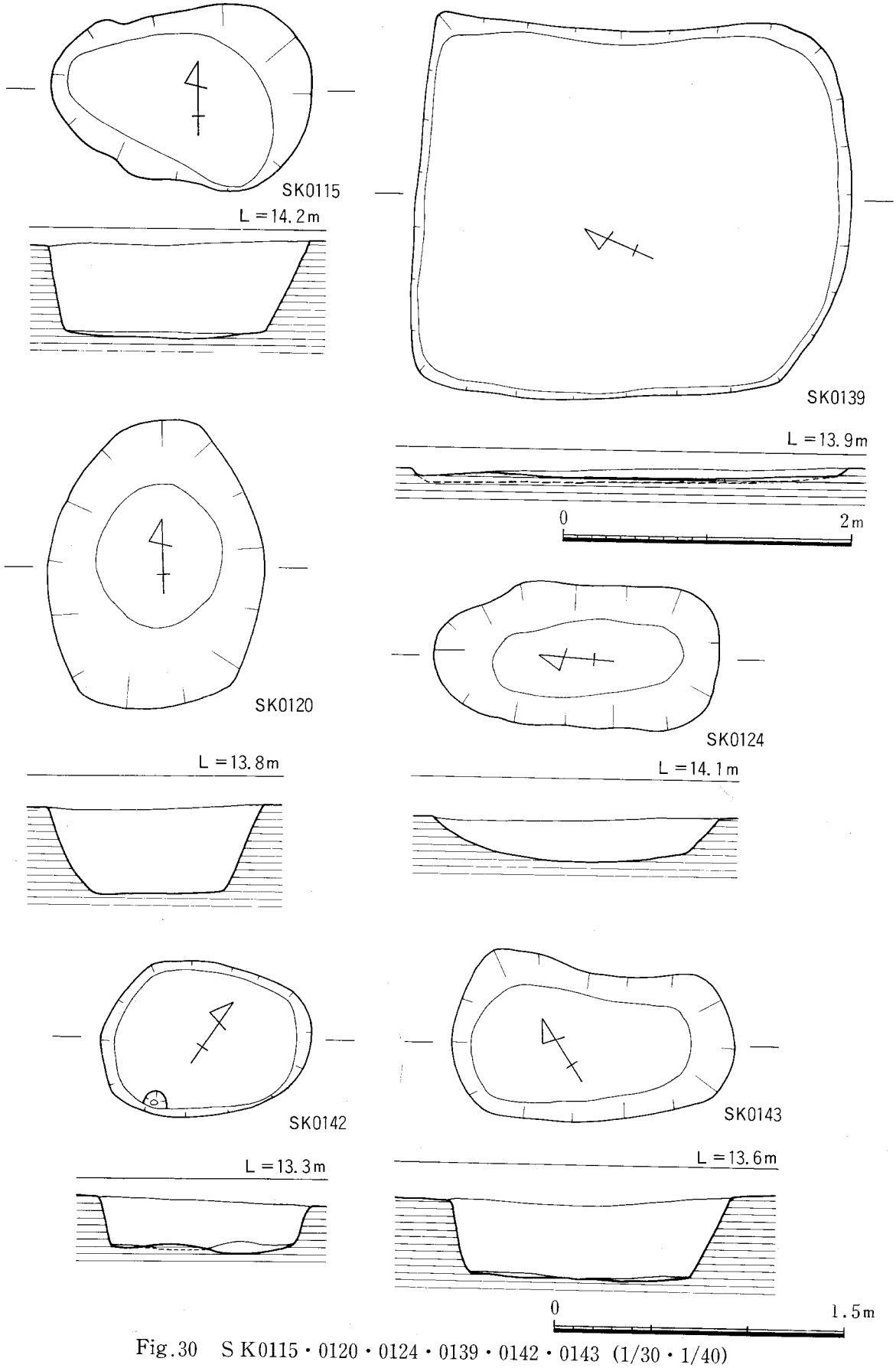


Fig.30　S K0115・0120・0124・0139・0142・0143 (1/30・1/40)

物を含む。**遺物**は弥生終末から古墳時代前期の土器片が少量出土している。

ＳＫ0102（Fig.23、PL.9-(2)）　７Ｆ区で検出した不定形状の土坑。規模は長軸142cm、短軸50cm、深さ17cmを測る。底面は西にやや傾斜している。埋土は暗灰色砂質粘土で、黒色粘土と灰色粗砂ブロック、炭化物を含む。**遺物**は弥生終末から古墳時代の壺や甕の破片が出土している。

ＳＫ0106（Fig.23）　７Ｄ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸94cm、短軸49cm、深さ11cmを測る。埋土は暗灰色砂質土に黒色粗砂ブロックを混入。**遺物**の出土はない。

ＳＫ0107（Fig.23）　７Ｄ区で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は長軸122cm、短軸65cm、深さ27cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土と黒色砂混じり粘質土で、下の方程暗くなる。**遺物**は弥生土器片などが少量出土している。

ＳＫ0108（Fig.24、PL.9-(3)）　５Ｄ区で検出した不整円形状の土坑。規模は長軸146cm、短軸120cm、深さ60cmを測る。東側は一段テラスを持つ。埋土は上層が黒色砂質土、下層は黒色粘土で粗砂を含む。遺物は北から流れ込むような状況で出土している。

出土遺物（Fig.28･29、PL.17）　弥生終末から古墳時代初めの遺物が出土している。135～137は甕。135は口端部を摘み上げる口縁部1/4片である。復元口径16cmを測る。外面はナデ、内面はハケとヘラ削りである。136は複合口縁の口縁から胴部1/6片である。復元口径は21.8cmを測る。胴部外面はハケ、内面はヘラ削りである。137は底部片。外面は粗いタテハケ、内面はハケとナデ。138はほぼ完形の壺で、不安定なわずかに上げ底の底部を持つ。口径14.8cm、器高29cm、底径5.3cmを測る。胴部外面は粗いハケ、内面は指ナデで内底にはハケを加える。下半部には黒斑がある。139～144は高坏。139・140は大きく開く口縁の坏部1/4片・2/3片で、復元口径28.5cm、23.4cmを測る。内外面には暗文を施す。141は口縁部小片。142は坏底部片である。磨滅するが内外面ヘラ研磨か。143も坏底部1/2片。内外面暗文が入る。144は脚部1/6片。脚端径は21.6cmを測る。145は器台の口縁部1/2片である。口径9.7cmを測る。146～149は鉢である。146は1/6片で、復元口径14.6cmを測る。外面ナデでハケが残る。147･148は直立気味の口縁を持つ平底の鉢1/3･1/5片である。口径は11.3cm、17cm、器高７cm、10.8cmを測る。外面は指ナデ、内面は147が雑なヘラ削り、148は指ナデである。149は脚台部片で脚端径7.9cmを測る。内外面ナデ。

ＳＫ0109（Fig.24、PL.9-(4)）　６Ｄ区で検出した不定形の土坑で、残りが悪く、西側の壁は消滅している。残存規模は長軸260cm、短軸45cm以上、深さ７cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。土器は北側につぶれた状況で出土した。

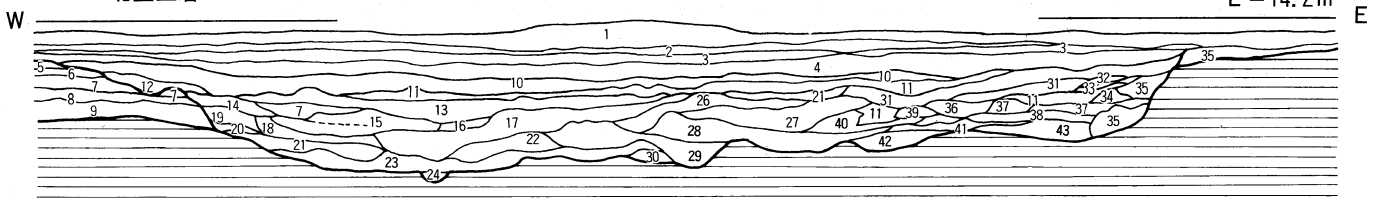
出土遺物（Fig.29、PL.17）　古墳時代前期の土師器片が出土している。150･151は壺。150は複合口縁を持つ壺の口縁から胴部1/3片、復元口径14cmを測る。胴部外面下半はハケ、内面はヘラ削り。151は丸みをもった胴部1/2片で、復元胴部最大径は28cmを測る。外面はハケ後ヘラナデと研磨、内面はヨコ又はナナメのハケ。内底はヘラナデ。152は脚部1/3片で、脚端径は15cmを測る。裾部に円形の透し孔がある。

ＳＫ0115（Fig.30、PL.10-(1)）　10Ｇ区で検出した不整楕円形の土坑。規模は長軸179cm、短軸130cm、深さ68cmを測る。埋土は暗灰褐色粗砂に灰色粘土を含む。**遺物**は土器片が少量出土した。

ＳＫ0116（Fig.24、PL.9-(5)）　６Ｄ区で検出した長楕円形状の土坑。規模は長軸247cm、短軸92cm、深さ23cmを測る。埋土は黒褐色粘質砂で炭化物を含む。

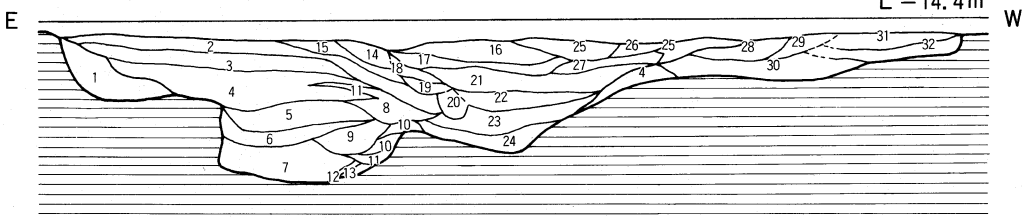
出土遺物（Fig.29）　古墳時代前期の土師器片が出土している。153は甕の口縁部1/6片で、復元口径13.2cmを測る。154は鼓型器台1/3片であるが、上端部はこの面で生きている。復元口径は9.4cm、器高4.9cm、底径17.4cmを測る。内面はヘラ削りである。155は胴部から屈折して外に開く口縁の鉢1/2片

SD019 北壁土層



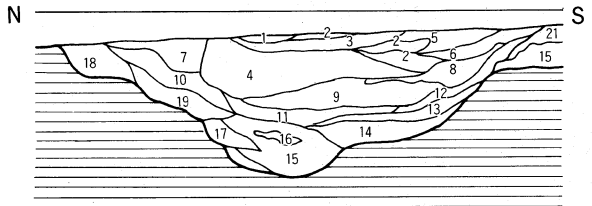
SD 019 北壁土層名称
1 黄灰色土(水田耕作土)
2 暗黄灰色土(床土)
3 黒褐色粘質土(粗砂混入)
4 3(より粗砂の混入多い)
5 黒褐色粘質土
6 暗褐色粘土
7 黒褐色粘土
8 暗黄褐色粘質シルト(粗砂混じり、地山土)
9 にぶい黄色シルト粘土(地山土)
10 黒褐色粘質土(粗砂混じり)
11 黒色粘土
12 にぶい黄褐色砂(暗灰黄色粗砂礫をレンズ状に含む)
13 黒褐色砂
14 黒褐色粘質細砂
15 黄褐色粗砂礫(薄く黄灰色細砂を挟む)
16 黒褐色細砂
17 黄褐色粗砂礫(7ブロックを混入)
18 14(薄く灰黄褐色細砂・粗砂礫を挟む)
19 黄灰色砂と灰黄色砂の互層
20 灰黄色細砂
21 灰白色粗砂礫(黄橙色粗砂礫を多量混入)
22 21(黄灰色粘質細砂、流木・杭を含む)
23 にぶい黄褐色砂(杭・流木を含む)
24 暗黄灰色粗砂礫
25 11よりやや暗い
26 暗灰黄色砂(25を少量混入)
27 26(25を多く混入)
28 灰オリーブ粗砂礫(灰色粘質細砂を混入)
29 17(黒褐色粘土大ブロックやや多く混入)
30 11(黄灰色細砂混入)
31 黒色粘質土
32 31(黄灰色粗砂礫をレンズ状に含む)
33 明黄褐色細砂(縞状に堆積)
34 11(粗砂礫を多く含む)
35 黒色粗砂混じり土
36 3(黄灰色粗砂礫を少量混入)
37 浅黄色粗砂礫(黄灰色粘質細砂を互層状に挟む)
38 37(間に黄灰色粘質細砂を挟む)
39 灰オリーブ粗砂礫
40 39(11ブロックを混入)
41 浅橙色砂
42 41と褐灰色粘土の互層
43 浅黄色細砂(黄灰色粘土大ブロックを多量混入)

SD019 2号ベルト土層



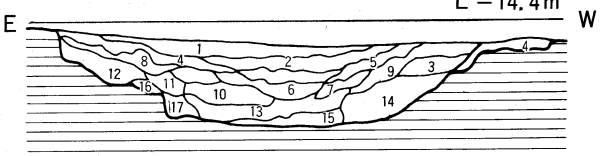
SD 019 2号ベルト北壁土層名称
1 黒褐色砂質粘土
2 褐灰色シルト質細砂
3 褐灰色粘質シルト
4 黒褐色粘土
5 4とにぶい黄褐色中粒砂の混合
6 4と褐灰色粗砂の混合
7 6で4の割合が少ない
8 黒色粘質砂
9 にぶい黄橙色粗砂
10 褐灰色粘土と12の混合
11 灰白色粗砂
12 褐灰色シルト質粘土
13 12と13の混合
14 暗灰黄褐色シルト質粘土
15 1(細砂)
16 灰色粘土・にぶい黄色細砂・黄褐色粗砂の混合
17 灰色シルト
18 オリーブ黒色砂質粘土
19 灰色粘土・暗灰黄褐色粘土・灰色細砂の混合
20 黒色粘土
21 灰色粘土・灰白色粗砂・明黄褐色粗砂の混合
22 淡黄色細砂と黄灰色細砂の混合
23 にぶい黄色粗砂と明黄褐色粗砂の混合
24 黒褐色粘土・灰色粗砂・明黄褐色粗砂の互層
25 褐灰色砂質粘土(粗砂混じり)
26 にぶい黄褐色粗砂
27 灰色粘土とにぶい黄橙色砂の混合
28 黒色砂質粘土
29 暗褐色粘質細砂
30 褐色粗砂
31 にぶい黄橙色粗砂
32 4と31の混合

SD020 東壁土層



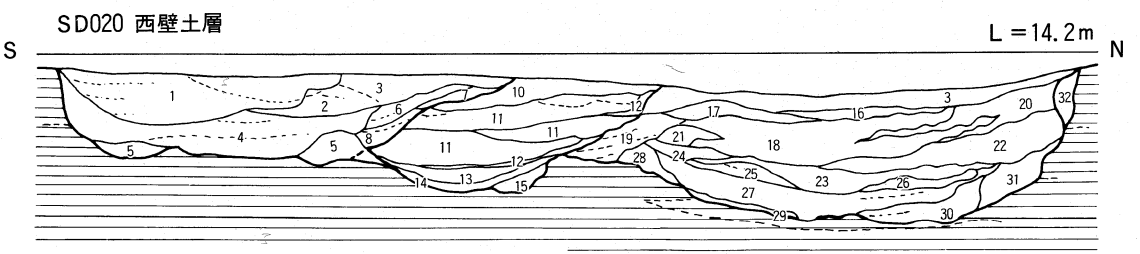
SD 020 東壁土層名称
1 暗褐色粗砂礫
2 褐色中粒砂
3 灰色粗砂
4 オリーブ褐色粗砂
5 明褐色シルト
6 暗灰色粘質シルト
7 暗褐色シルト
8 オリーブ黒色粘質シルト
9 明褐色粗砂と暗褐色粗砂の混合
10 黒褐色砂質粘土
11 灰色細砂・明褐灰色中粒砂・明褐色粗砂の混合
12 黒褐色粘質シルト
13 灰色粗砂と黒色粗砂の互層
14 灰色粗砂と黒色粗砂の互層
15 黒褐色粘土
16 明褐色粗砂
17 黒褐色粘土と黄灰色粗砂の混合
18 暗オリーブ褐色砂質粘土
19 オリーブ褐色砂質粘土
20 灰色粘土と緑灰粘土の混合
21 緑灰色粘土

SD019 1号ベルト土層



SD 019 1号ベルト土層名称
1 黄灰色シルト粘土(上層に灰黄褐粗色を含む)
2 黒褐色砂質粘土と浅黄色粗砂の混合
3 黒褐色砂質粘土と灰色細砂の互層
4 黒色粘土
5 灰白色粗砂・黄褐色粗砂・黒褐色砂質粘土の互層
6 黒褐色粘質細砂(褐灰色細砂少量混入)
7 暗灰色粘土
8 4(粗砂を少量混入)
9 黒褐色砂質粘土と灰黄褐色粗砂の混合
10 7(灰白色粗砂礫多量混入)
11 4(粗砂を多く混入)
12 黒色粗砂混じり粘土
13 灰色粘質細砂(薄く層状に入る)
14 4と15の混合
15 暗灰黄色粗砂
16 4(軟質が強い)
17 4(やや砂質が強く、軟質)

SD020 西壁土層



SD 020 西壁土層名称
1 灰白色と橙色粗砂の互層(褐灰色粘質シルトを挟む)
2 褐灰色シルト質細砂(灰白色シルト質細砂を互層状に挟む)
3 暗灰黄色細砂
4 にぶい黄色粗砂の互層(間に褐灰色粘質シルトを挟む)
5 黒色粘土(にぶい黄色粗砂を混入)
6 暗灰黄色細砂(にぶい黄色細砂を混入)
7 黒色砂質粘土
8 6(黒色粘質シルト混入)
10 黒褐色粘質粗砂礫
11 灰白色粗砂(黒褐色粗砂・褐灰色粘質シルトを多量混入)
12 黒色粘土
13 黒色粘質シルト(灰白色粗砂を互層状に挟む)
14 12(灰白色細砂を薄く互層状に挟む)
15 黒色粘土と灰白色粗砂の混合
16 3より明るい(粘性が強い)
17 3と16の漸移層(粘性が強い)
18 12(軟質)
19 18(灰黄色粗砂をブロック状に含む)
20 18(粗砂礫を多く混入)
21 暗い褐灰色粗砂
22 18(砂質が強く、北側は粗砂を多く混入)
23 12(植物多く混入)
24 21(暗い褐灰色粗砂)
25 暗い褐灰色粘質シルト(暗灰黄色粗砂を混入)
26 黒褐色粘質砂(互層状に混入)
27 暗灰色粘質細砂(灰白色細砂を縞状に混入)
28 黒褐色粘質粗砂
29 灰白色細砂
30 27(暗灰色・オリーブ黒色粘土多く混入)
31 黒色粗砂混じり粘土
32 暗褐色粗砂混じり粘土(地山)

Fig.31 SD019・020土層図 (1/80)

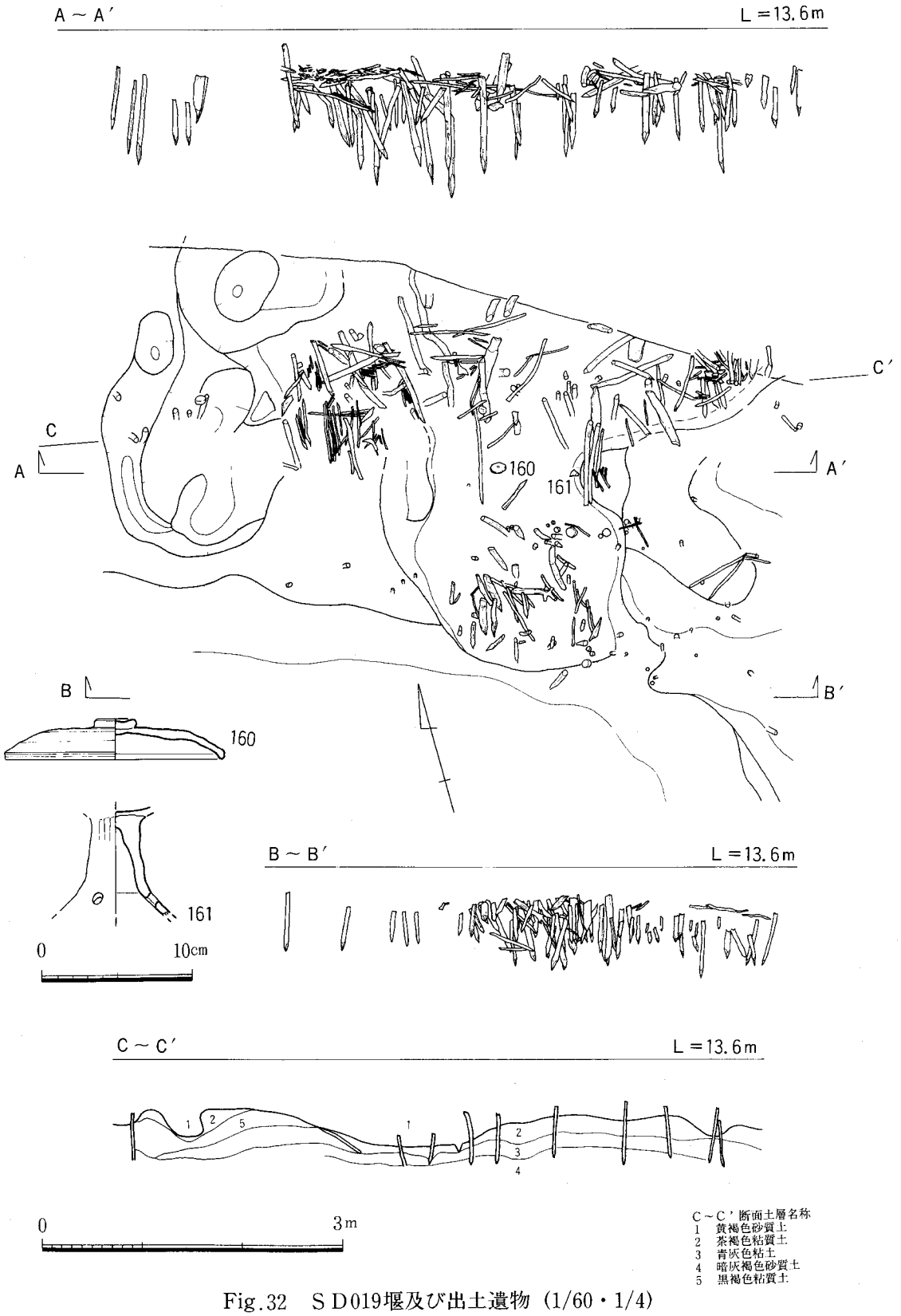


Fig.32　ＳＤ019堰及び出土遺物（1/60・1/4）

で、復元口径12.7cm、器高6.6cmを測る。内外面ハケである。

ＳＫ0120（Fig.30）　５Ｆ区で検出した不整楕円形状の土坑。規模は長軸200cm、短軸152cm、深さ64cmを測る。埋土は黒色砂質土である。遺物は古墳時代の土師器の細片が少量出土している。

ＳＫ0124（Fig.30、PL.10-(3)）　10Ｅ区で検出した不定形の土坑。規模は長軸200cm、短軸100cm、

深さ35cmを測る。埋土は黒色粘土と青灰色粘土の混合である。**遺物**は土器や近世以前の磁器の細片が少量出土している。

ＳＫ0139（Fig.30）　７Ｃ区で検出した隅丸方形の土坑。規模は長軸303cm、短軸260cm、深さ12cmを測る。埋土は黒色砂混じり土である。**遺物**は古墳時代前期の土師器片が少量出土している。

ＳＫ0140（Fig.24、PL.9-(6)）　６Ｃ区で検出した溝状の土坑。規模は長さ538cm、幅59～98cm、深さ19cmを測る。埋土は黒褐色粘質砂である。

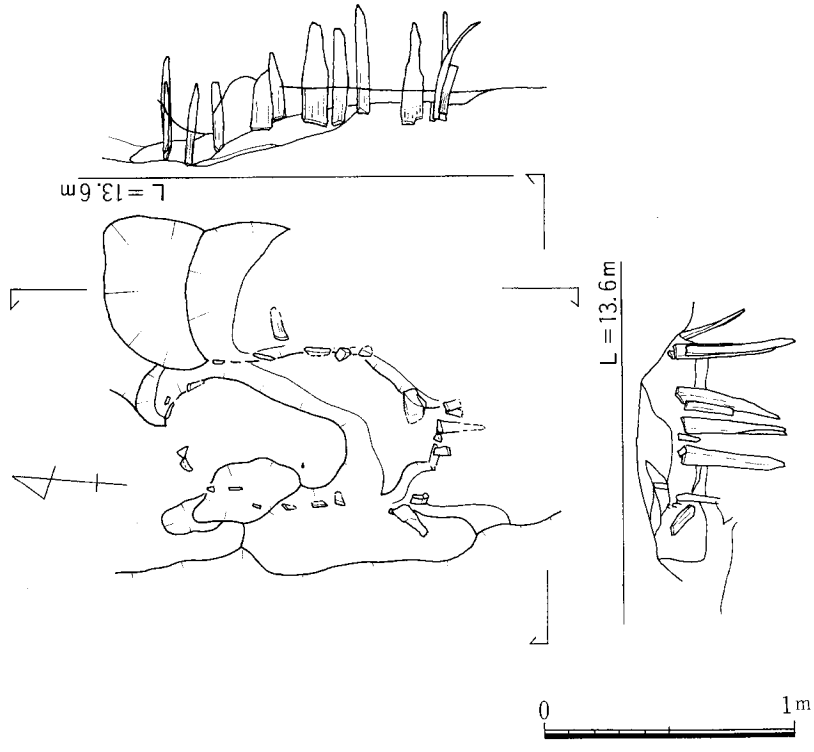


Fig.33　ＳＤ019内ＳＸ0123（1/30）

出土遺物（Fig.29）　古墳時代前期の土師器片が出土している。156は甕口縁部1/6片。復元口径16.6cmを測る。157～159は高坏。157は口縁部の細片。158･159は脚筒部片。159は内外面ハケで、裾部には二段の円形透し孔が３カ所入る。

ＳＫ0142（Fig.30、PL.10-(4)）　７Ｂ区で検出した不整楕円形の土坑。規模は長軸109cm、短軸82cm、深さ28cmを測る。埋土は黒色砂混じり土で、下層は粘土となる。**遺物**の出土はない。

ＳＫ0143（Fig.30、PL.10-(5)）　９Ｄ区で検出した不整長方形状の土坑。規模は長軸146cm、短軸85cm、深さ44cmを測る。埋土は黄灰色粘土ブロックと黄橙色粗砂の混合である。**遺物**は古墳時代前期の土師器の細片が１点出土している。

溝・自然流路

大小様々な溝があるが、大半は自然流路である。全景写真では何条もの埋没流路が認められるが、時間の都合から全面的な調査は出来なかった。主なものを報告する。

ＳＤ019（Fig.31・32、PL.4・10-(6)～(8)・11）　調査区中央を南北に流れる溝である。北側では縄文時代の旧河川ＳＤ020などを切っているので、底面は凹凸が激しい。規模は幅が南側で約5.2m、北側で約12m、深さは南側で約１m、北側で約1.2mを測り、川下の北側は溝幅を広げる。埋土は黄灰色シルト粘土から黒褐色砂質粘土、黒色粘土、暗灰色粘土で、下層は灰色粘質細砂、暗灰色粗砂である。北側には堰があり、南側には木板が楕円形状に打ち込まれた遺構ＳＸ0123があった。堰は二段になっているが、長さ最大1.3mほどの丸杭や割材や枝などの先端を削って尖らせ、基盤層まで打ち込み、その間に横木を組んで堰としている。堰の間には細い小枝や木の葉などが詰まっていた。堰の杭は北側に傾斜しているものが多く、その幅は６mである。この堰の間から８世紀前半の須恵器の坏蓋160が出土している。

ＳＸ0123（Fig.33、PL.11-(1)）は長さ８～45cmの板状の割材を基盤層に楕円形に巡るように打ち込でいる。規模は長軸105cm、短軸60cmを測る。東壁に近くある。

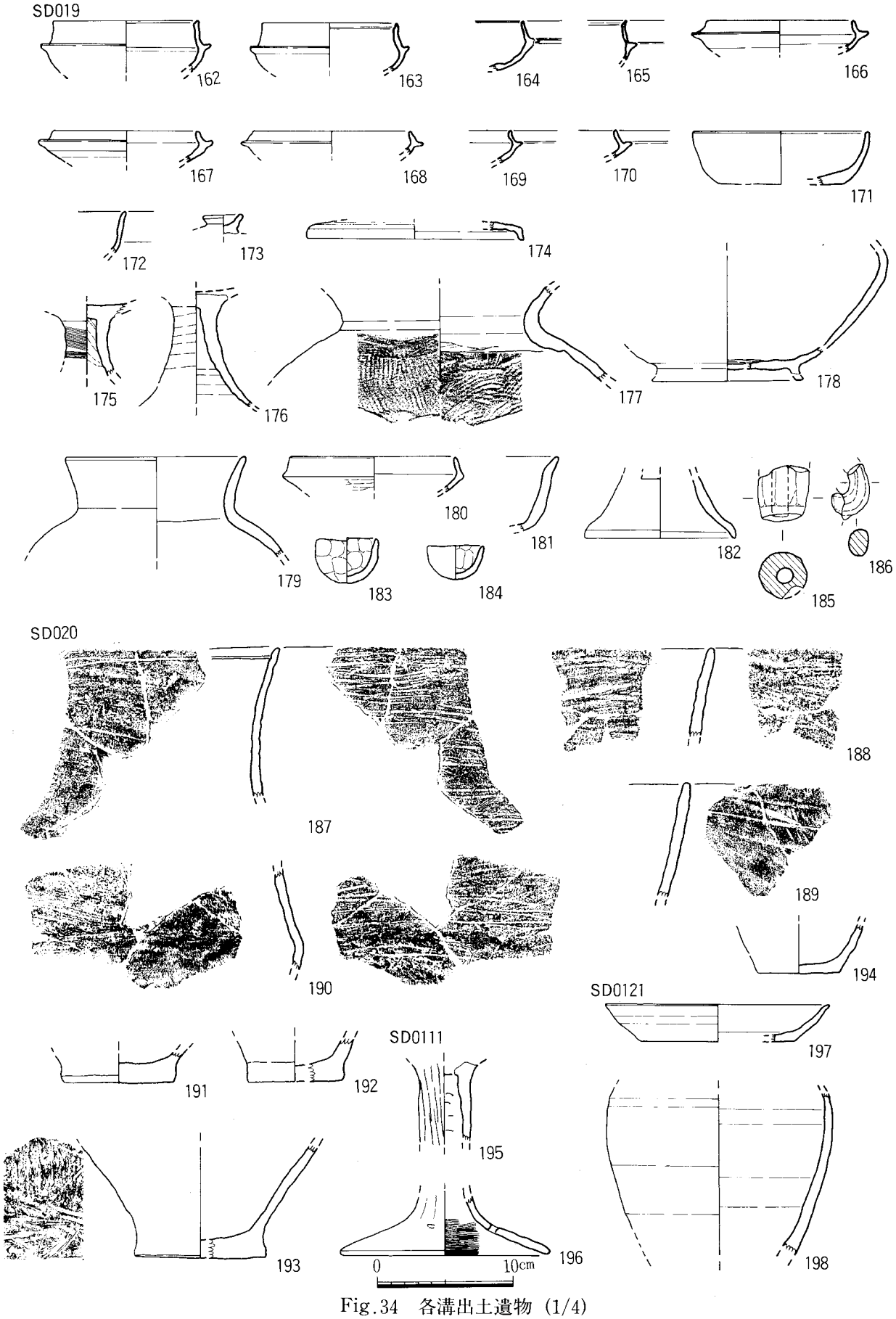


Fig.34　各溝出土遺物（1/4）

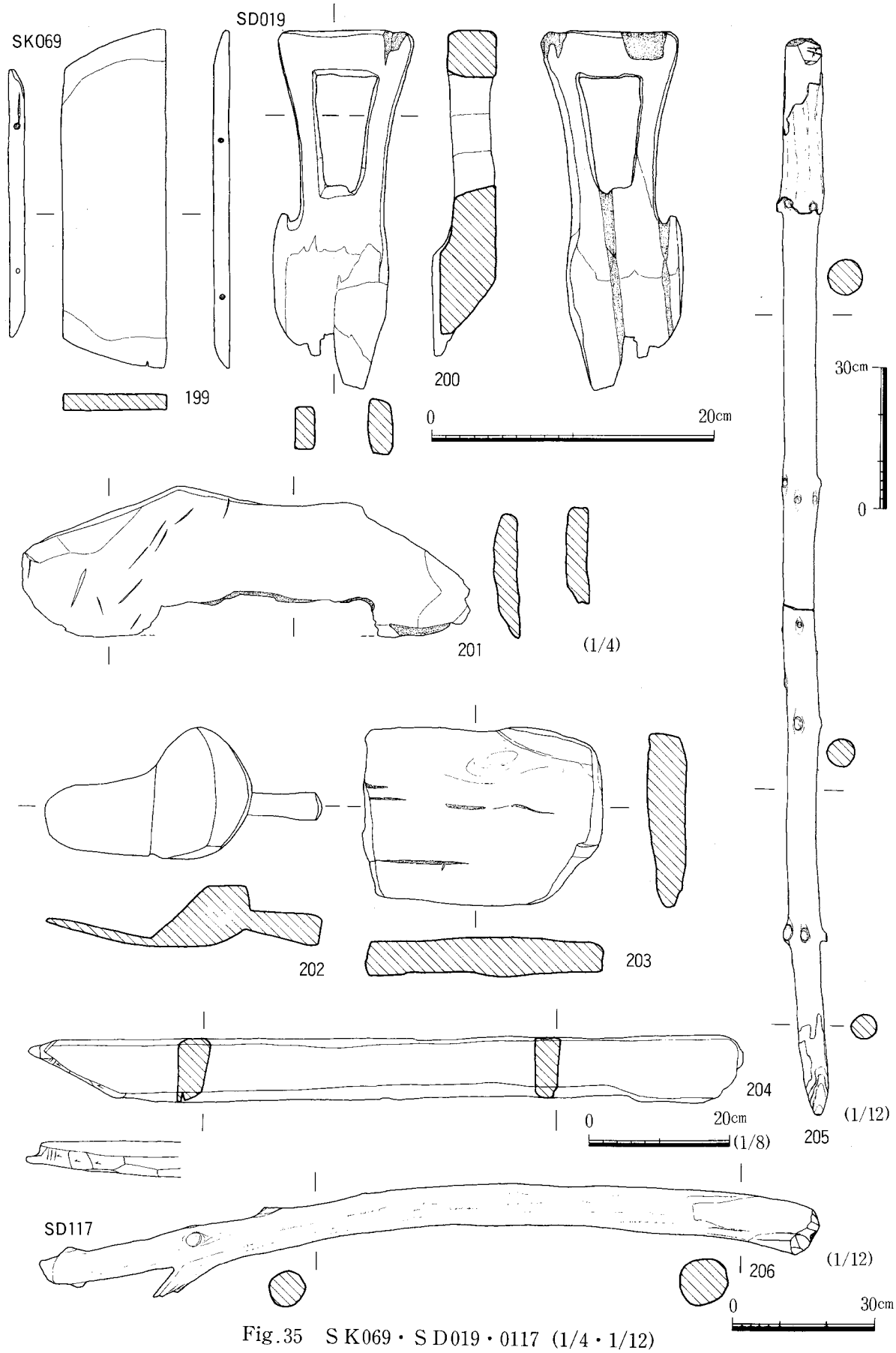


Fig.35　S K069・S D019・0117 (1/4・1/12)

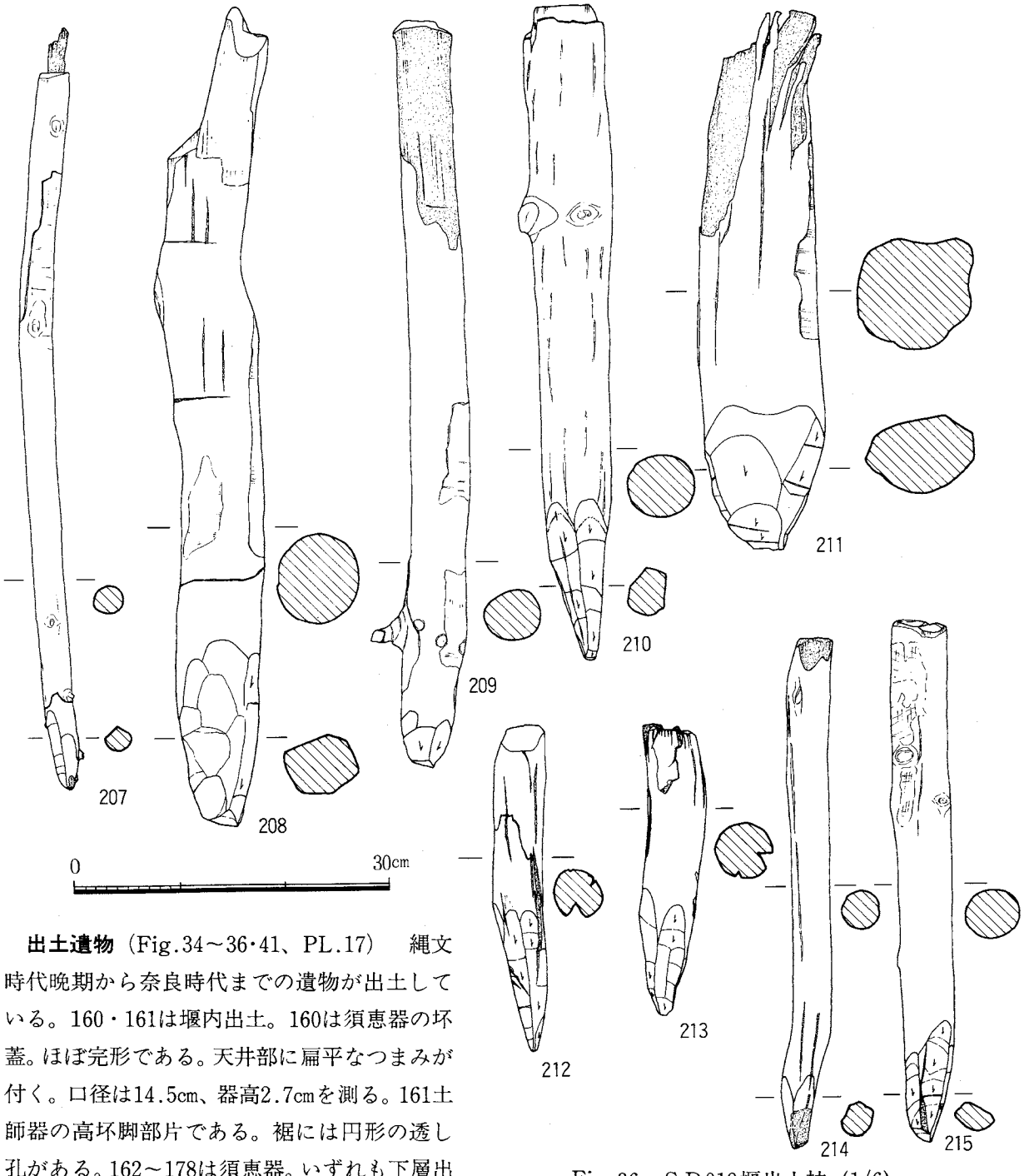


Fig.36　ＳＤ019堰出土杭（1/6）

出土遺物（Fig.34～36･41、PL.17）　縄文時代晩期から奈良時代までの遺物が出土している。160・161は堰内出土。160は須恵器の坏蓋。ほぼ完形である。天井部に扁平なつまみが付く。口径は14.5cm、器高2.7cmを測る。161土師器の高坏脚部片である。裾には円形の透し孔がある。162～178は須恵器。いずれも下層出土。162～165は立上りが直立する古式のもので、５世紀～６世紀初めのもの。162・163は1/6片で、復元口径は10.5cm、10cmを測る。調整はナデで、外底はヘラ削り。166～170は立上りが短く内傾する７世紀初め頃のもの。166～168はいずれも1/6片で、復元口径は10.8cm、10.5cm、12.5cmを測る。調整はナデで外底は回転ケズリ。171・172は坏身小片で、内外面ナデである。７世紀前半頃である。171は1/6片で、復元口径13cm、器高3.9cmを測る。173・174は蓋片。173はつまみである。174は1/8片で、扁平で口縁部が直に屈折する器形。復元口径15.8cmを測る。調整はナデ。175･176は脚部片で、175の外面はカキ目、内面にはシボリ痕が

残る。176の色調は灰白色で、焼きは甘い。177は壺の口頸部小片である。胴部外面に木目直交の叩き、内面に青海波の当て具痕が残る。178は壺の胴底部小片。破片から復元した。底部に低い高台がつく。胴部外面と内底部はヘラ削り、その他はナデである。179～184は土師器。179は壺口縁部1/6片。復元口径13.2cmを測る。器壁は磨滅するが、胴部内面はヘラ削りか。180は坏1/6片で、復元口径12.2cmを測る。内外面ヘラ研磨である。181は盤の口縁部小片か。調整はナデである。182は高坏の脚部片。復元脚端径11cmを測る。焼きはやや甘い。183・184は手捏ね土器で、183はほぼ完形、184は1/3片である。口径は4.4cm、復元4.2cm、器高3.3cm、2.4cmを測る。全面指押さえ痕が残る。185は土錘1/2片。残存長4.1cm、直径3.5cm、孔径1.2cmを測る。高坏の脚部を再利用したものか。186は耳状の把手の破片である。断面は長径２cmの楕円形で、調整はナデである。

200は鋤の柄の未製品である。全長25.5cmを測る。上半は丁寧に整形されている。201はえぶりであろうか。全長は31.5cm、最大幅10.6cm、厚さ1.8cmを測る。表面は黒く焼けているようである。202は杓子の未製品であろうか。全長は19.6cm、最大幅9.3cmを測る。203は方形の板材で、17×12.6cm、厚み2.9cmを測る。調整痕などは不明。204は扁平な細長い板材である。全長101.5cm、最大幅9.5cm、厚み4.5cmを測る。左端を削って斜めに尖らせていた。205は細長い小木の幹を用いた芯持ちの建築材か。全長230cm、最大径8.8cmを測る。上端と下端は削られているが、下端は削って尖らしている。207～215は堰の杭材である。主なものを図示した。

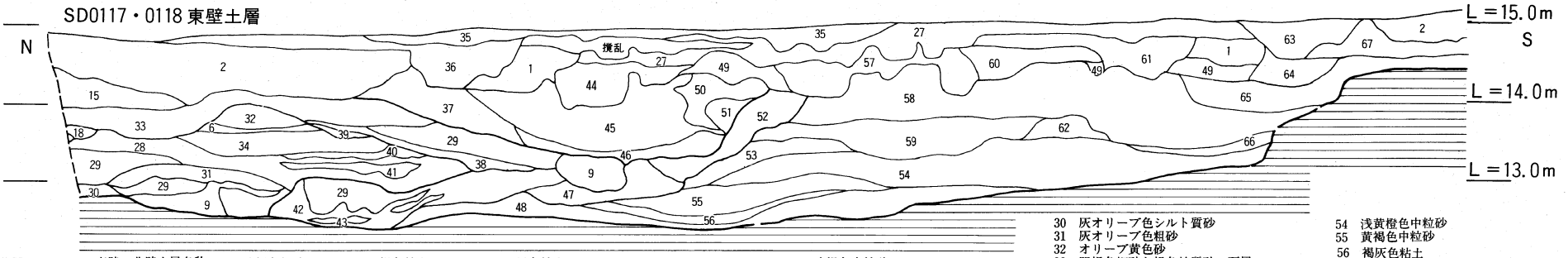
ＳＤ020（Fig.31、PL.4・12-(1)・(2)）　調査区中央北側を東西に蛇行して流れる自然流路である。幅は東側で5.2m、西側で10.9m、深さは1.7mを測る。流路はたびたび流れを変えており、西側の土層観察によれば、大きく３回の流路の変更が認められる。一回の幅は５m前後であり、東土層の幅とほぼ同じである。埋土は粗砂や細砂が互層状に堆積し、下の方は黒色粘土や粘質砂を挟んでいる。底の方には木の葉や実、木などが少量出土している。一番新しい時期の流れはＳＤ019を切っている。またＳＤ019西側のＳＸ0130はこの流路の一部である。

出土遺物（Fig.34、PL.17）　縄文晩期の土器片が少量出土している。187～189は粗製の深鉢口縁部小片。187の口縁部内面には一条の沈線が巡る。内外面粗い条痕を加えるが、188の内面はナデ。189は湾曲して立ち上がる口縁で、内外面はナデ。190は胴部の屈曲部で、内外面条痕である。191～194は底部片。復元底径は８cm、7.2cm、9.6cm、６cmを測る。いずれも調整はナデで、193の外面は条痕、194の外面は二次焼成を受けている。

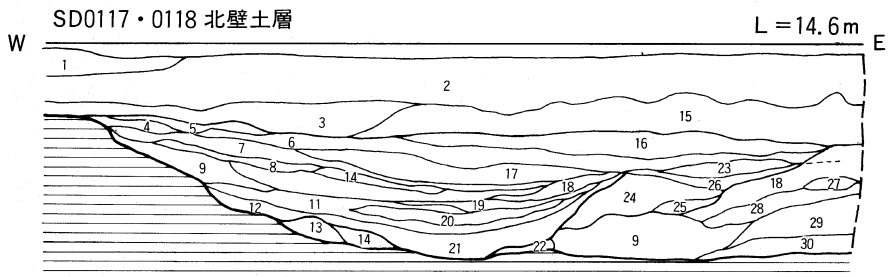
ＳＤ098　調査区南西部で南壁から西壁に湾曲して流れる自然流路である。古期と新期の時期に分かれる。幅は1.4～２m、深さ0.3m前後、古期の流路の深さまでは0.6m位、南壁では新期が0.5m、古期が0.7mまでの深さとなる。上層の新期の溝は西側に行くにつれて浅くなり、断続的になる。埋土は上層が黒褐色から暗褐色砂で、下層は黒色粘土となるが、北のほうは粗砂に変化していく。遺物は主に上層から古墳時代前期の土師器片が少量出土している。

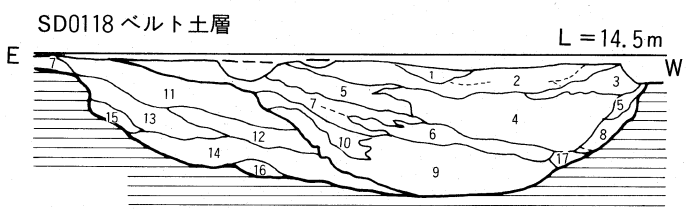
ＳＤ0111（Fig.39、PL.12-(3)）　ＳＤ019の西側で検出した南北に流れる溝。調査区境界ではＳＤ0135と分かれる。調査区中央で西に曲がって立ち上がる。幅は南側が広く3.1m、深さは0.7mを測る。埋土は黒色又は黒褐色粘土を主体として、下層は粗砂などが主体となる。恐らく下層はＳＤ0112につながる部分であろう。

出土遺物（Fig.34・41）　縄文時代から古墳時代前期までの土器片が出土している。195・196は土師器の高坏脚部片である。直接は接合しないが同一個体である。復元脚端径は15.4cmを測る。筒部外面はヘラ研磨、内面はヘラナデで、ヘラ痕が残る。裾部には円形の透し孔があり、内面は細かいハケで、裾外面にかけて黒く燻されている。

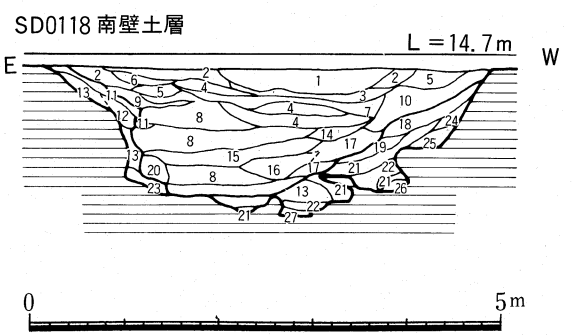


SD 0117・0118 東壁・北壁土層名称
1 明褐色粗砂混じり土
2 褐色粗砂混じり土
3 暗褐色粗砂
4 明褐色中粒砂
5 暗褐色シルト
6 黒褐色粘土
7 黒褐色粘質シルト
8 黄橙色細砂
9 黒色粘土
10 にぶい黄橙色・明褐色・褐灰色粘質砂の互層
11 黒色粘質砂
12 暗褐色中粒砂
13 暗赤褐色シルト質粘土
14 明褐色粗砂
15 灰黄褐色中粒砂
16 暗褐色中粒砂と灰黄色中粒砂の混合
17 12と15の混合
18 黒褐色シルト質粘土
19 黒色粘土と明黄褐色中粒砂の混合
20 にぶい黄橙色細砂と褐灰色細砂の混合
21 オリーブ黒色粘土と灰色細砂の縞状の互層
22 明褐色中粒砂・灰色細砂・明黄褐色粗砂の混合
23 14と3の混合
24 褐色粗砂礫
25 にぶい黄褐色細砂（黒色細砂・暗褐色粗砂を混入）
26 明褐色シルト質粘土
27 褐色粗砂
28 灰黄褐色粘質細砂
29 明黄褐色粗砂
30 灰オリーブ色シルト質砂
31 灰オリーブ色粗砂
32 オリーブ黄色砂
33 明褐色細砂と褐色粘質砂の互層
34 灰オリーブ色粗砂・黄褐色細砂・灰白色粗砂の混合
35 黄色混ざり土
36 オリーブ黄色混ざり土（撹乱）
37 黄褐色粘質細砂
38 灰黄褐色粗砂
39 黄褐色シルト
40 オリーブ褐色中粒砂
41 暗オリーブ褐色粗砂
42 褐灰色砂質粘土
43 褐灰色粗砂
44 近世以降の土坑
45 明黄褐色砂
46 にぶい褐色粗砂
47 黄褐色粗砂
48 褐灰色砂質粘土
49 褐色粗砂混ざり土
50 暗褐色粘質細砂
51 黒褐色粘質細砂
52 黒色砂質粘土
53 にぶい黄橙色粗砂
54 浅黄橙色中粒砂
55 黄褐色中粒砂
56 褐灰色粘土
57 にぶい黄橙色粗砂混じり土
58 にぶい黄色粗砂
59 オリーブ褐色粗砂
60 暗褐色粗砂混じり土
61 黒褐色粗砂混じり土
62 浅黄色中粒砂
63 黒褐色粗砂混じり土（土坑）
64 暗オリーブ褐色粘質砂
65 黄褐色粘質砂
66 灰黄色細砂
67 黒褐色混ざり土





SD 0118 ベルト土層名称
1 褐灰色粘質細砂（灰黄褐色砂ブロックを混入）
2 暗灰黄色砂（1を薄く挟む）
3 1（暗灰黄色粗砂を多く混入）
4 2（褐灰色粘質土を縞状に挟む）
5 褐灰色粘質細砂（灰白色細砂を薄く挟む）
6 灰白色粗砂と灰黄色砂の互層
7 褐灰色粘質細砂（灰白色細砂混入）
8 オリーブ黒粘質シルト砂
9 灰黄色粗砂（褐灰色粘質砂を薄く挟む）
10 灰色砂質粘土
11 黒色粘土（やや軟質）
12 11よりやや暗い
13 11（灰白色砂を薄く挟む）
14 12（灰白色砂をブロック状に含む）
15 灰黄色細砂（褐灰色粘土を互層状に挟む）
16 灰黄色粗砂（上部に12を混入）
17 8（8との間に16を挟む）



SD 0118 南壁土層名称
1 にぶい黄褐色粗砂
2 褐灰色シルト質細砂（1を混入）
3 にぶい黄橙色中粒砂
4 3（黒褐色砂を多く含む）
5 暗灰黄褐色粗砂
6 黒褐色粗砂（にぶい黄橙色砂を混入）
7 褐灰色シルト質細砂（灰黄色細砂・炭化物混入）
8 灰色～にぶい黄色砂
9 褐灰色粘質シルト
10 2（灰黄色細砂混入）
11 黒色砂質粘土
12 暗オリーブ褐色砂
13 黒色粘土
14 灰色粘質細砂（灰オリーブ細砂を下層に縞状に含む）
15 8より暗い（灰色粘土を含む）
16 15（灰色粘土を含まない）
17 暗灰色粘質細砂（灰色細砂を縞状に挟む）
18 黒色粘土（軟質）
19 暗灰色粘質シルト（18を含む）
20 灰黄色砂・黄褐色粗砂・褐灰色細砂の互層
21 13（植物含む）
22 灰黄色粗砂（21小ブロックを含む）
23 13（灰オリーブシルトブロックを混入）
24 灰黄褐色砂（縞状に入る）
25 灰白色細砂（黄灰色細砂を含む）
26 黄褐色～にぶい黄色粗砂
27 暗灰黄色細砂

Fig.37 SD 0117・0118土層図（1/80）

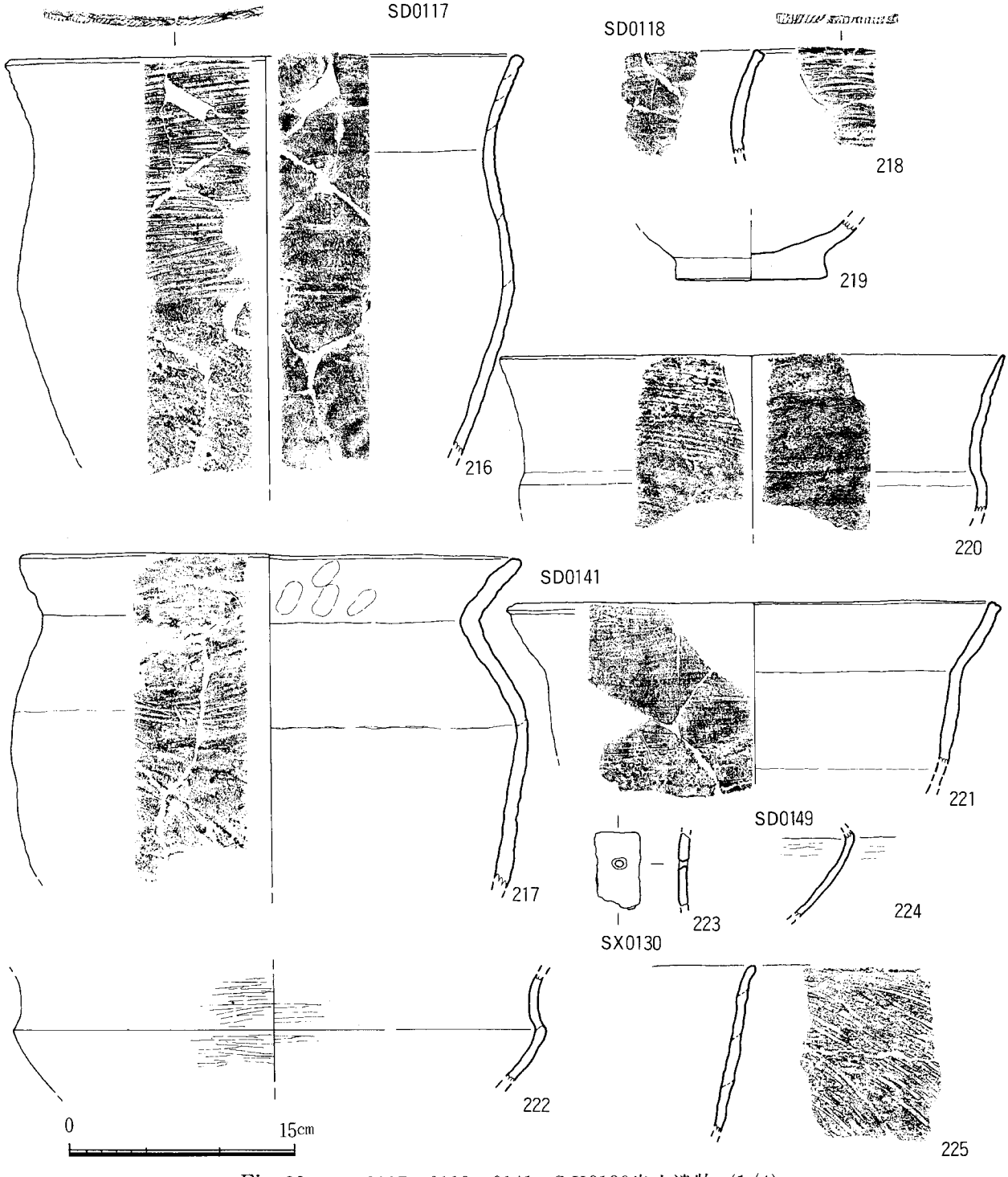


Fig.38　ＳＤ0117・0118・0141・ＳＸ0130出土遺物（1/4）

ＳＤ0112(Fig.39、PL.12-(4))　ＳＤ0111の北側から蛇行して北に流れる自然流路である。途中ＳＤ0137と交差するが、恐らくその北側のＳＤ0138につながるものと思われる。幅は1.8～３m、深0.3～0.9mを測る。溝底は流れによるものか、凹凸が激しい。埋土は上層が黒色粘土を主体とし、下層の方は粘質砂や粗砂礫が主体となる。**遺物**は弥生時代から古墳時代前期までの遺物が出土している。

ＳＤ0117・0118（Fig.37、PL.13-(1)～(3))　調査区東側、近世遺構の下から検出した自然流路である。ＳＤ0117はＳＤ0118に切られる古期の川で、調査区北東隅、壁沿いに北西方向に流れる。ＳＤ

0118は南壁から西に弧状に湾曲して東壁に流れる川である。川幅はＳＤ0118で4.7～７m、深さ1.5m前後を測る。ＳＤ0117の北壁で８m以上、深さは1.5mを測る。川幅が一定でないのは、時期によって河道が変わっていることによる。ＳＤ0118の土層断面観察によると、最低２回以上の流路の変遷が認められる。ＳＤ0118の埋土は新しい流路部分では、粗砂や細砂を互層状に堆積し、間層に粘土や粘質砂を薄く挟み、古期の流路では黒色粘土で下層の方ほど細砂や粗砂が多くなる。ＳＤ0117の埋土は北壁で、上層が褐色系の粗砂、中層が黒色または黒褐色の粘土、下層が粘土と粗砂の互層となる。ここでも最低４回程の流路が確認出来る。北側ＳＤ0117の川底と思われる部分に流木や木の実などが出土しており、それに混じって縄文土器片が出土した。

出土遺物（Fig.35･38･41、PL.18）　川底を中心に、縄文土器や若干の石器が出土した。他に上層から近世の陶器片などが少量出土しているが、これは近世遺構からの混入である。216・217は縄文晩期の粗製深鉢口縁から胴部片である。口径は復元34.5cm、33.1cmを測る。216は口端部に刻目を施し、口縁と胴部の境がややくびれる。217は胴部がく字形に屈折する。216の外面上半は粗い条痕で下半はナデ、内面は黒色研磨。217は外面上半は条痕で下半はナデ、内面はナデる。いずれも外面にススが付着している。218はＳＤ0118出土の深鉢口縁部小片、外面貝殻条痕、内面は工具によるナデで、口端部には貝殻腹縁の刻目がつく。219は浅鉢の底部片。底径10cmを測る。器面は雑なナデ。220は深鉢の口縁部1/4片。復元口径33.5cmを測る。外面貝殻条痕、内面はナデである。218以外はＳＤ0117出土である。206は流木と共に出土した建築材と思われるものである。小木の幹の芯持ち材である。長さ154.4cm、最大径10.5cmを測る。右端は削り痕が残る。

ＳＤ0119（Fig.43、PL.13-(4)）　ＳＤ0118の西側で検出した南北に延びる溝である。ＳＤ0118を切り、南側は途中で切れるが、ＳＤ0134につながるものと考えられる。規模は幅1.2～1.8m、深さ0.5m前後を測る。埋土は黒褐色系の砂質土又は粘土で、下層にかけて粗砂となる。**遺物**は弥生土器や中世の土師器、陶器の破片が少量出土している。

ＳＤ0121　調査区南西隅境界地で検出した南北に延びる溝であるが、境界にかかる為、規模は確認で全長18m、幅と深さは南壁土層で2.8m以上、深さ0.7mを測る。埋土は上層が黒褐色粗砂混じり土や黒色粘質粗砂、下層が黒色粘土で下の方は細砂又は粗砂を薄く縞状に含む。

出土遺物（Fig.34、PL.18）　中世の土師器･黒色土器、陶器などが少量出土している。197は土師器の坏1/5片で、復元口径16.5cm、器高2.7cmを測る。体部の調整はナデ、外底部は回転糸切りである。198は中国産陶器の壺の胴部片で、復元最大径16.6cmを測る。内面ナデ、外面はケズリで暗緑灰色の釉がかかる。溝近くから出土したが、時期的に近いのでここで報告する。

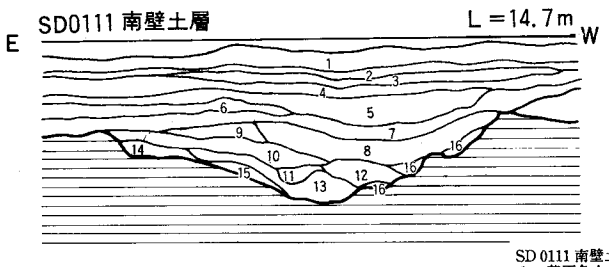
ＳＤ0126　調査区南西隅を西北西に流れる自然流路である。幅１～1.5m、深さ0.3m前後を測る。埋土は上層が黒褐色から暗褐色粗砂、下層が暗灰褐色粗砂である。**遺物**の出土はない。

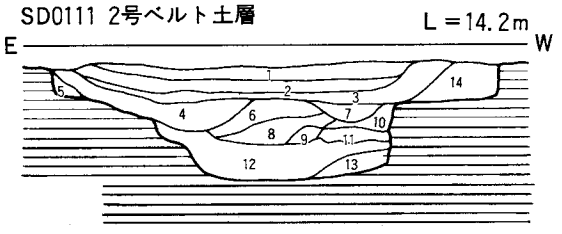
ＳＤ0128（Fig.39）　ＳＤ019の中央部から西湾して北に延びる小溝で、先端は浅くなる。溝幅は最大1.5m、深さ0.6mを測る。埋土は黒色粗砂と暗褐色砂の混合。**遺物**の出土はない。

ＳＤ0137（Fig.39、PL.14-(1)）　ＳＤ019北側から南西に延び、ＳＤ0150に蛇行して向かう自然流路である。幅は３～4.5m、深さ1.5m前後を測る。北壁はやや急である。、埋土は上層は粗砂が主体となるが、下層にかけて粘土が主体となる。**遺物**は縄文土器片が数点出土した。

ＳＤ0138（Fig.39）　ＳＤ0112の北側で検出した自然流路である。0112と一連の溝と考えるが、土層を見ると切り合いがあるので、時期差によるものか、別の溝かも知れない。規模は幅1.4～2.3m、深さ0.4～0.5mを測る。埋土は黒色の砂混じり粘土である。**遺物**は縄文土器片が数点出土した。

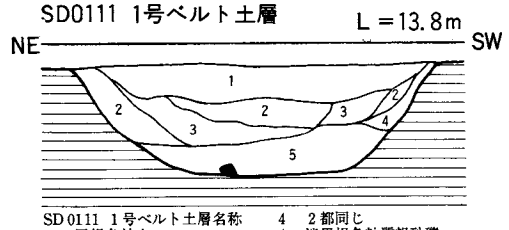
ＳＤ0141（Fig.39）　ＳＤ019の西側で検出した溝で、北に延びてＳＤ019に合流するが、ＳＤ019よ



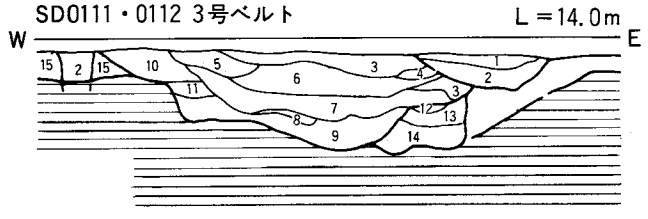


SD 0111 南壁土層名称
1　黄灰色土（水田耕作土）
2　黒褐色粘質砂（床土）
3　黒褐色粘質砂
4　黒色粘質土（遺物を多く含む）
5　黒褐色粗砂（黒褐色粘土を含む）
6　黒褐色粘土（粗砂混じり）
7　暗黄灰色粘質粗砂
　(灰オリーブシルトブロックを含む)
8　黒色粘土
9　黒褐色粘質砂
10　暗オリーブ褐色砂（黒褐色砂ブロック状に混入）
11　黄褐色砂
12　黒褐色粘質粗砂
13　8（11をブロック状に含む）
14　8（暗灰黄色粗砂を含む）
15　灰黄色細砂（8を薄く混入する）
16　8（暗灰色砂をブロック状に含む）

SD 0111　2号ベルト土層名称
1　褐灰色粗砂
2　黒褐色砂質粘土
3　黒色粘土
4　オリーブ灰褐色粗砂（黒色シルト少量混入）
5　褐灰色粘土
6　暗褐色粗砂
7　黒色砂質粘土
8　明褐色中粒砂
9　灰黒色粘土
10　灰オリーブシルト
11　灰褐色中粒砂
12　明灰黒褐色粘土
13　黒灰粘土
14　灰褐色粘土

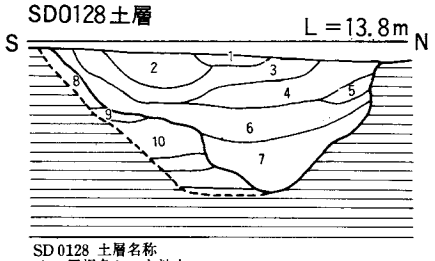


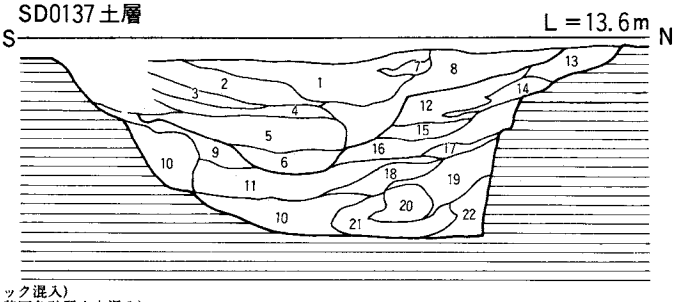
SD 0111　1号ベルト土層名称
1　黒褐色粘土
2　黒褐色粗砂混じり粘土
3　黒色粘土
4　2都同じ
4　淡黒褐色粘質粗砂礫
5　淡黄灰褐色粗砂礫



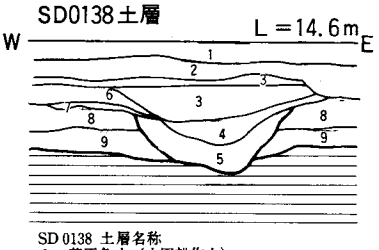
SD 0111・0112　土層名称
1　黒色粘土
2　暗灰黄褐色粗砂　(SD 0111)
3　黒色粗砂混じり粘土
4　2（黒色粘質粗砂混入）
5　4（1ブロック混入）
6　褐灰色粘質砂
　(1を多量混入)
7　褐灰色粘質砂
8　1（2をレンズ状に含む）
9　5と暗褐色粗砂礫の混合
10　黒褐色粗砂混じり粘質土
11　黒色粘質砂
12　2と灰白色細砂の互層
13　にぶい黄色細砂（2を薄く挟む）
14　黒褐色粗砂礫
15　11より粗砂の混入少ない

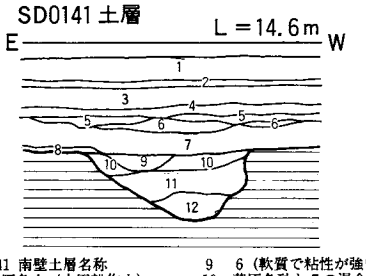
SD 0137　土層名称
1　黄橙色粗砂
2　褐色粗砂（黒褐色粘土を少量含む）
3　暗褐色粘質砂
4　明褐色粗砂
5　黄褐色粗砂
6　5と褐灰色粗砂の混合
7　黄灰色シルト
8　オリーブ黒色シルト質細砂
9　黒褐色粘土
10　褐灰色粗砂
11　明褐灰色中粒砂（10を含む）
12　暗灰色粘土
13　黒褐色砂質粘土
14　黒褐色粘質砂
15　黒色粘土
16　黒褐色粘土（灰白色中粒砂・植物を含む）
17　22と16の混合
18　褐灰色シルト
19　オリーブ黒色砂質粘土（灰色シルトブロック混入）
20　灰色砂質粘土
21　灰色粘土・15・灰白色粗砂の混合
22　灰色粘土

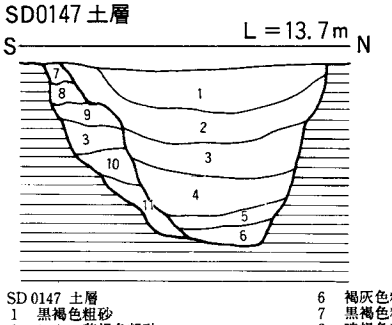




SD 0128　土層名称
1　黒褐色シルト粘土
2　暗褐色粗砂礫
3　黒色シルト粘土
4　黒色粗砂混じり粘土
5　4（黄灰色砂質土をブロック状に混入）
6　黒褐色粘質粗砂
7　6（黒色粘土ブロック混入）
8　黒褐色砂質土（暗黄灰色砂質土を混入）
9　黒色粘質砂質土（暗黄灰色砂質土を少量混入）
10　暗黄灰褐色砂質土







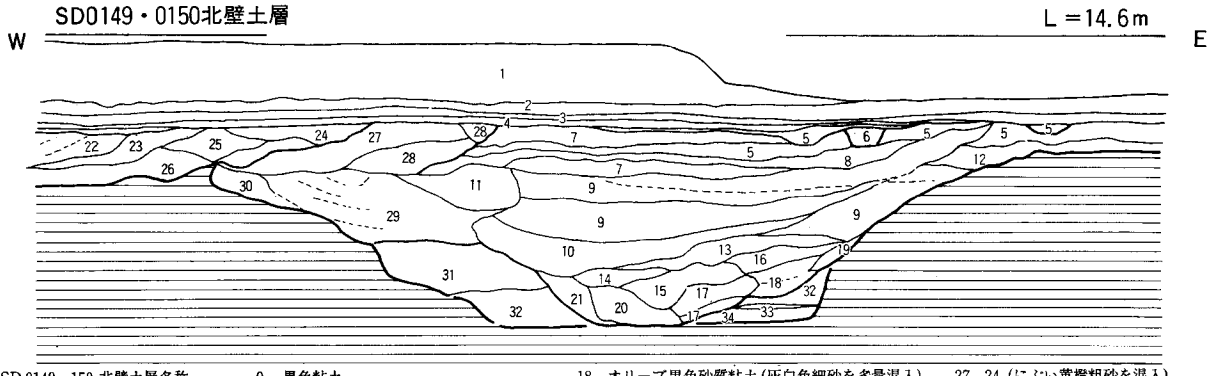
SD 0138　土層名称
1　黄灰色土（水田耕作土）
2　オリーブ褐色土（床土）
3　黒褐色粗砂
4　暗褐色砂
5　黒色粘土（粘性が強い）
6　黒色粘質土
　(遺物を多く含む)
7　暗灰黄色粘土
8　暗黄灰色粘質粗砂
　(灰オリーブシルトブロックを含む)
9　5より粘性が弱い

SD 0141　南壁土層名称
1　黄灰色土（水田耕作土）
2　オリーブ褐色土（床土）
3　黒色粘質土（遺物を含む）
4　黒褐色粗砂（黒褐色粘土混入）
5　黒褐色粘土（粗砂混じり）
6　黒色粘土
7　暗黄灰色粘質粗砂
　(灰オリーブシルトブロック少量混入)
8　黄灰色砂と褐灰色粘土の混合
9　6（軟質で粘性が強い）
10　黄灰色砂と7の混合
11　黄灰色シルトと灰黄褐色砂の互層
12　灰黄色砂

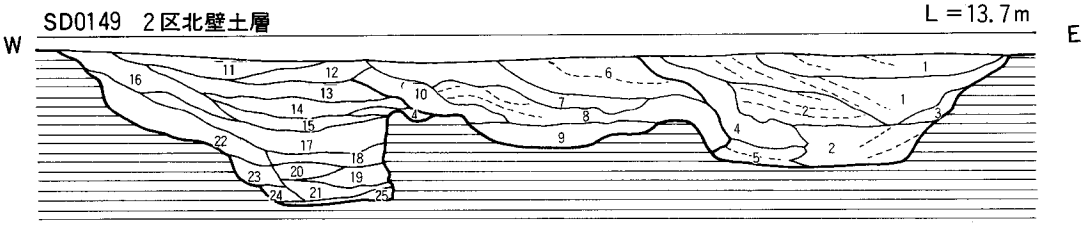
SD 0147　土層
1　黒褐色粗砂
2　にぶい黄褐色粗砂
3　にぶい黄橙色粗砂
4　灰黄褐色砂（下層に黄橙色粗砂を混入）
5　4（褐灰色粘質細砂をレンズ状に含む）
6　褐灰色粗砂礫
7　黒褐色粘質粗砂
8　暗褐色粘質砂
9　浅黄色砂と2の混合
10　灰黄色細砂
11　4（黄色粗砂礫を多く混入）

0　3m

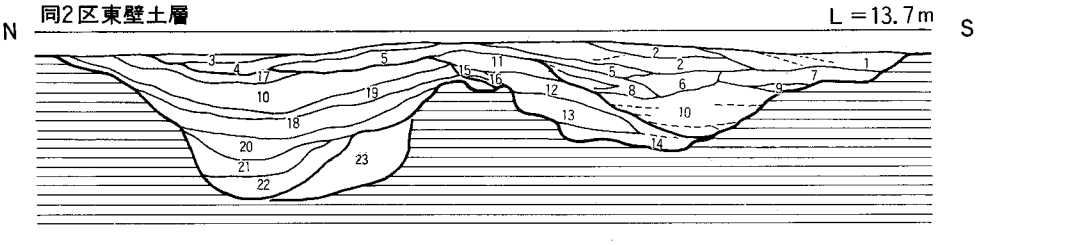
Fig.39　SD 0111・0112・0128・0137・0138・0141・0147土層図（1/60）



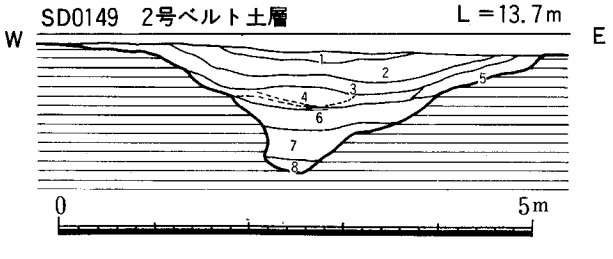
SD 0149・150 北壁土層名称
1 盛土
2 暗オリーブ褐色土（耕作土）
3 2（床土）
4 灰オリーブ粘質土
5 黒褐色粗砂混じり粘質土
6 5（粗砂の混入が多い）
7 黒褐色粘質土
8 黒褐色砂質粘土
9 黒色粘土
10 9（植物多く混入）
11 灰白色粗砂（暗褐色粗砂を混入）
12 黒褐色粘質土
13 オリーブ黒色粘質土（灰白色砂を混入）
14 明黄褐色粗砂とにぶい黄色粗砂の混合
15 浅黄色粗砂（灰色粘質砂を混入）
16 13（灰白色砂を多く含む）
17 オリーブ粘質砂と灰白色粗砂の互層
18 オリーブ黒色砂質粘土（灰白色細砂を多量混入）
19 黒褐色砂質粘土（植物を多く混入）
20 灰黄色粗砂礫（黒褐色粘土ブロック混入）
21 9（軟質）
22 にぶい黄褐色粗砂礫
23 黒褐色細砂（黄橙色中粒砂を混入）
24 黒褐色粘質粗砂礫
25 やや暗い黄灰色細砂
26 9と灰黄褐色粗砂の互層
27 24（にぶい黄橙粗砂を混入）
28 黒褐色粗砂
29 9と灰白色細砂の互層
30 黒色砂質粘土
31 浅黄色粗砂（9の大ブロックを混入）
32 灰白～灰オリーブ色中粒砂
33 灰色シルト質細砂
34 灰白色中粒砂



SD 0149 2区北壁土層名称
1 にぶい黄褐色粗砂（黄褐色粗砂混入）
2 にぶい黄橙色粗砂礫（黄褐色粗砂を混入）
3 黒褐色粘質細砂（灰色細砂ブロック混入）
4 黒色粗砂混じり粘土
5 にぶい黄褐色粗砂（黒色粘質砂を縞状に挟む）
6 にぶい黄褐色粗砂（黒色粘質砂を挟む）
7 3（にぶい黄橙色細砂を薄く挟む）
8 3（にぶい黄橙色細砂を縞状に挟む）
9 黄褐色粗砂礫（黒色粘土を混入）
10 黒色粘質細砂（灰白色細砂ブロックを混入）
11 灰黄褐色シルト質細砂
12 黒色粘質細砂
13 黒色砂質粘土
14 黒色粘土（粗砂礫を少量混入）
15 10より明るい
16 黒色粘質粗砂
17 黒色粘土（軟質で、植物を多く混入）
18 17（やや砂質、植物多く混入）
19 オリーブ黒色粘質細砂と灰白色細砂の互層
20 黒褐色粗砂礫
21 黄褐色粗砂礫
22 黒褐色粘質粗砂
23 黒褐色粗砂混じり粘土
24 黒褐色粗砂質粘質土（植物を混入）
25 灰白色粗砂と黒色粘土の混合



同2区東壁土層名称
1 明赤褐色粗砂（にぶい黄橙色粗砂を互層状に含む）
2 灰黄褐色シルト質細砂（にぶい黄橙色細砂を混入）
3 黒褐色粘質粗砂（灰黄色細砂ブロックを混入）
4 黒色粘質シルト
5 黒褐色粘質細砂（灰黄褐色細砂混入）
6 にぶい黄橙色中粒砂（明赤褐色粗砂を層状に混入黒褐色粘質細砂を挟む）
7 にぶい黄褐色粗砂（縞状を呈す）
8 にぶい黄橙色中粒砂（黒褐色粘質粘質細砂を挟む）
9 黒色砂質粘土
10 にぶい黄橙色粗砂の互層
11 黒褐色シルト質細砂
12 黒色砂質粘土（灰白色細砂混入）
13 にぶい黄橙色粗砂（1を混入）
14 黒色粘土（軟質で1を混入）
15 黒褐色細砂と黄橙色細砂の混合
16 にぶい黄橙色粗砂
17 5（中粒砂を多く含む）
18 黒色粘土
19 18（やや砂質）
20 19（植物を多く含む）
21 20（砂質が強くなり、植物を多く含む）
22 20（より明るい）
23 明黄褐色粗砂と灰黄色粗砂・黒色粘土の互層



SD 0149 2号ベルト土層名称
1 灰黄色シルト
2 黒色粘土
3 2（粗砂を薄く挟む）
4 2（灰白色粗砂をレンズ状に挟む）
5 黒色粘質粗砂
6 黒色粘土と灰白色粗砂の混合（植物を含む）
7 6より黒色粘土の量が多い（植物を含む）
8 灰白色粗砂（黒色粘土ブロックの混入、植物を含む）

Fig.40 SD0149・0150土層（1/80）

りは古い。確認規模は5m、幅は1.5m前後、深さは0.6mを測る。底面は凹凸がある。埋土は上層は黒褐色砂で、下層は灰黄色の砂又はシルトである。

出土遺物（Fig.38） 縄文土器や土師器が少量出土した。221は口縁部が外折する、粗製の深鉢の口

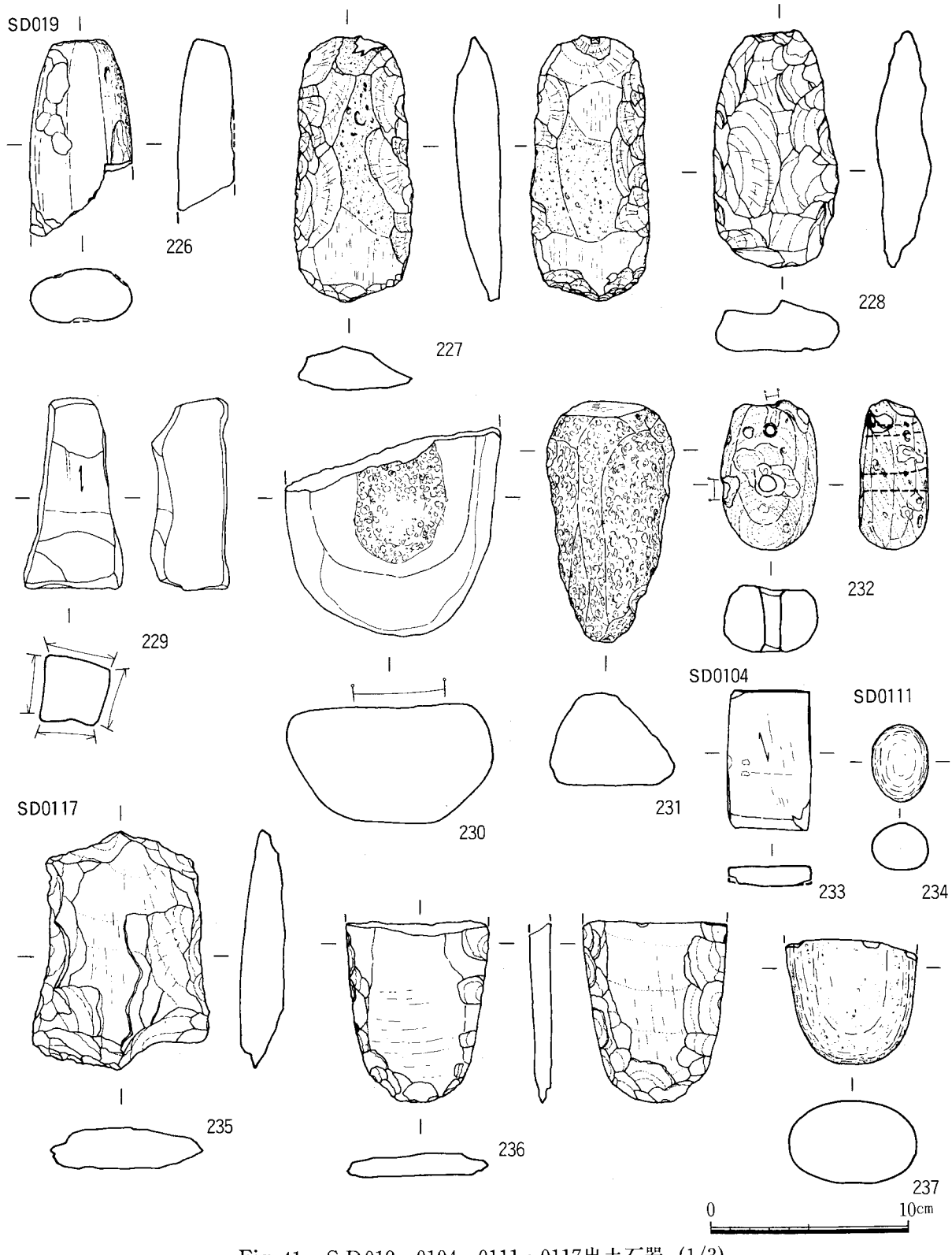


Fig.41　ＳＤ019・0104・0111・0117出土石器（1/3）

縁部1/6片である。復元口径は32.6cmを測る。外面は貝殻条痕、内面はヘラ研磨。外面には部分的にススが付着する。222は胴部が屈折する精製の黒色磨研の深鉢の胴部1/8片。223は円孔のある長方形の土器片の加工品。縦5.1cm、横３cm、厚さ0.6cm、孔径0.5cmを測る。222・223はＳＤ019との間からの出土で、厳密には溝からの出土ではない。

ＳＤ0149・0150（Fig.40、PL.14-(2)）　調査区西側で検出した南東から北西方向に蛇行して流れる自然流路である。調査したのは2/3ほどである。新期のＳＤ0150が古期のＳＤ0149を切る。他にもＳＤ0137なども合流するようで、度々の流路変更で、川底は凹凸が激しい。川幅は平均５m前後、深さは１～1.5m位であるが、流路が重なるため実際の川幅は広い所で、10m前後を測る。埋土は粗砂や細砂などの砂が主体で、間に粘土層などを含む。下層からは植物の種子や植物遺体などが出土している。

出土遺物（Fig.38）　主にＳＤ0149から縄文土器片や石器片などが出土している。224は精製の浅鉢の屈折する胴部の小片である。下層から出土した。

この他に225は粗製の深鉢口縁部小片で、外面はナナメの貝殻条痕である。ＳＸ0130から出土したもの。ＳＸ0130はＳＤ020の続きと考えられる。

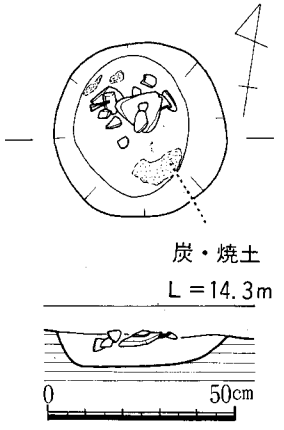


Fig.42　ＳＰ022（1/20）

ＳＰ022（Fig.42）　直径45cmを測る円形のピットである。深さは10cm位であるが、ピット内には炭や焼土が詰まっていた。**遺物**は弥生時代終末から古墳時代前期の土器片が少量出土している。

12・13区試掘トレンチ（Fig.43）　埋没した自然流路の砂が遺構面に見られた為、試掘トレンチを設定し遺構の確認を行った。その結果、幅６mの旧流路で、埋土は粗砂を主体としていたことが判明した。**遺物**はなく、時期は不明だが、他の自然流路と同じ縄文時代であろう。

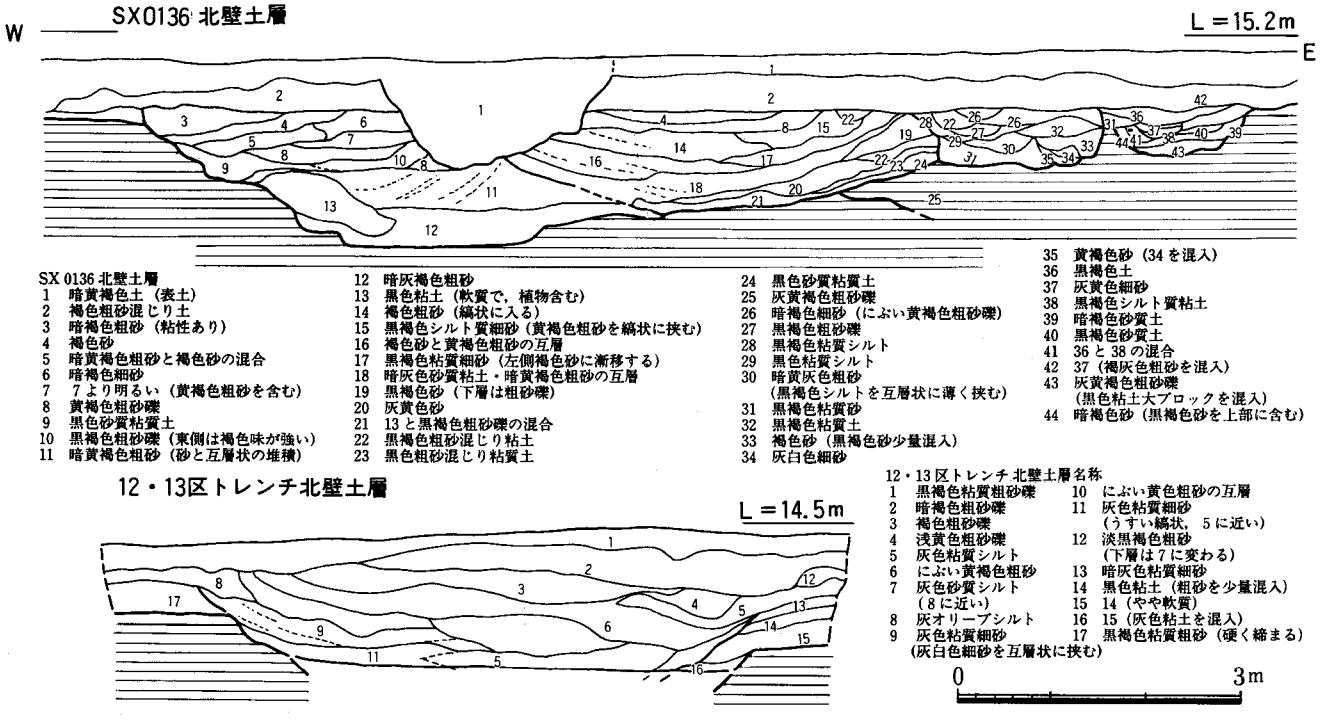


Fig.43　ＳＸ0136北壁土層・12・13区トレンチ北壁土層図（1/80）

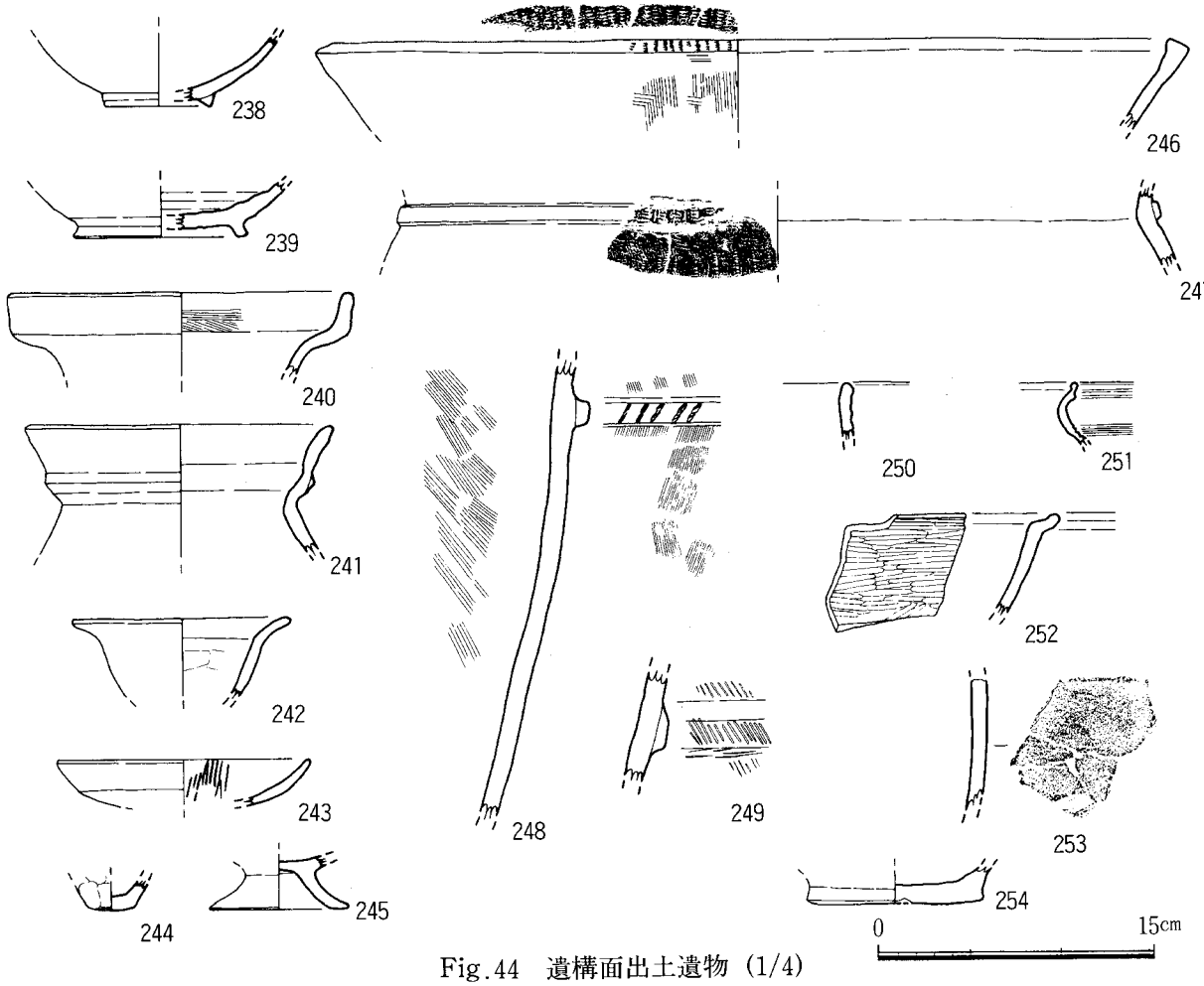


Fig.44　遺構面出土遺物（1/4）

各溝出土石器(Fig.41、PL.18)　226～232はＳＤ019出土。226～228は石斧。226は乳棒状の磨製石斧片。上端は叩石に利用したのか使用痕が残る。残存長9.7cmを測る。227は刃部を部分研磨したもので、全長13.4cm、幅６cm、厚さ2.4cmを測る。228は打製の石斧で、全長11.9cm、幅6.2cm、厚さ2.6cmを測る。石材は凝灰岩、安山岩、玄武岩である。229は砂岩製の砥石で、全長9.5cm、幅５cm、厚さ3.7cmある。４面とも砥面である。230･231は叩石である。230は上面にわずかに使用痕が残る。残存長10.6cm、幅10.8cm、厚さ5.8cmを測る。石材は花崗岩である。231は下端が尖るもの、表面は敲打痕跡が全面に残り、上端は擦られている。全長12.2cm、幅6.3cmを測る。232は軽石製の浮子である。長さ7.5cm、幅4.9cm、厚さ3.5cm、重さ86.5gを測る。２個所の円孔がある。233はＳＤ0104出土の小型の扁平な長方形の砥石。全長7.1cm、幅4.2cm、厚さ1.1cmを測る。扁平片刃石斧を再利用したものか。頁岩製である。234はＳＤ0111出土の楕円形の磨かれた石弾か。長径3.8cm、短径2.8cm、厚さ2.4cmを測る。石材は火成岩製か。235～237はＳＤ0117出土。235は打製石斧か。調整面は風化している。全長12.8cm、幅8.8cm、厚さ2.3cmを測る。236も打製石斧片で、残存長9.1cm、幅7.3cm、厚さ1.2cmを測る。237は丸くツルツルに磨かれた石片で、磨石であろうか。残存長6.2cm、幅6.6cm、厚さ4.2cmを測る。石材は235･236が玄武岩、237が花崗岩である。

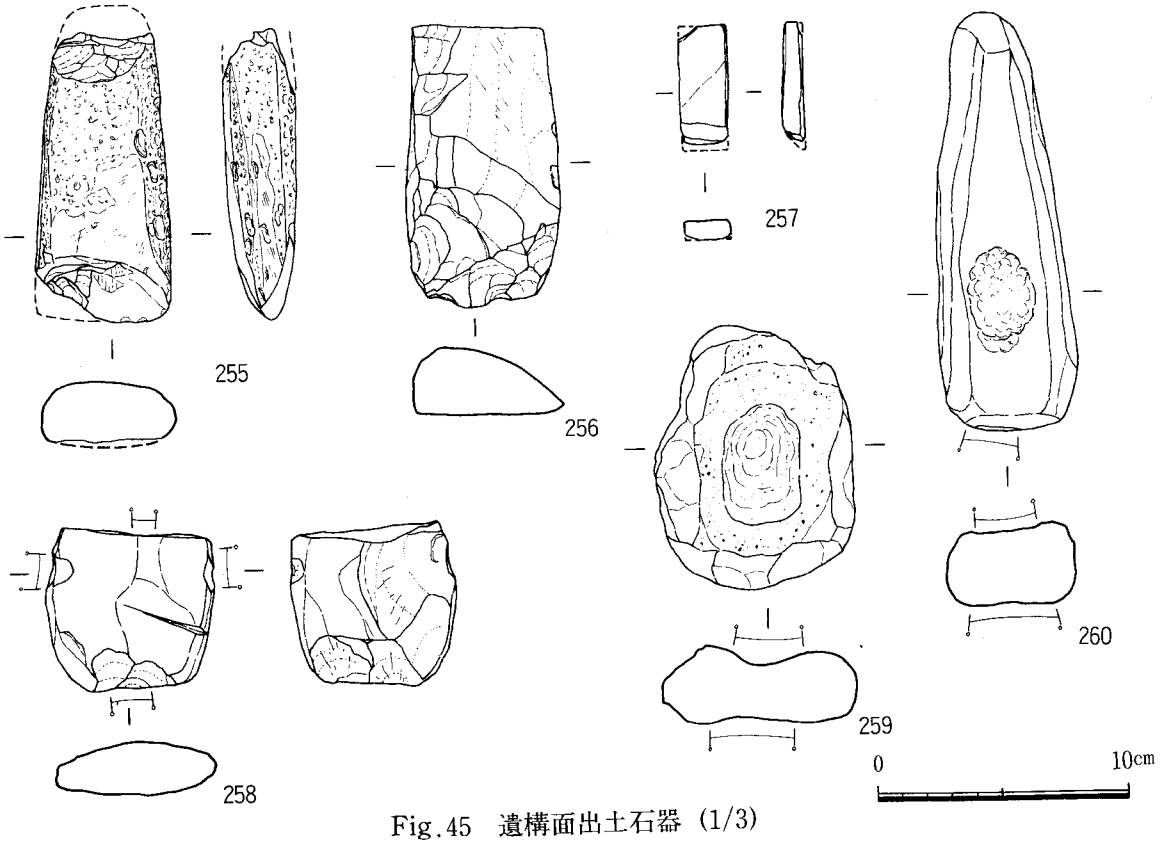


Fig.45　遺構面出土石器（1/3）

遺構面出土遺物(Fig.44･45、PL.18)　238は黒色土器Ｂの底部1/6片。内外面ミガキで瓦器に近い。239は須恵器の高台が付く長頸壺底部1/4片で、復元高台径9.2cmを測る。240・241は複合口縁壺。240は後期の弥生土器の口縁部1/6片で、復元口径18.5cmを測る。241は土師器の口縁部1/8片で、復元口径16.4cmを測る。242は土師器の鉢口縁部小片。243は土師器の皿1/6片で、復元口径13.4cmを測る。内面ヘラで暗文風の研磨で精良。244は土師器のミニチュア土器鉢底部1/2片。245は鉢の脚部1/2片で、復元脚端径7.5cmを測る。246～249は大型の甕の口縁部、頸部、胴部小片である。頸部と胴部に貼り付け突帯を巡らす。口縁と頸部突帯にはクシ状の刺突痕がある。250～254は縄文土器。250は外面に条痕のある口縁部細片。251は精製の鉢口縁部細片。252は精製の黒色磨研の鉢口縁部細片。253は胴部細片で、内外面はヘラ研磨。254は浅鉢の底部片で、底径9.4cmを測る。

255は磨製石斧で、全長11.6cm、幅5.2cm、厚さ2.9cmを測る。上・下端両端が使用により欠損する。石材は安山岩製か。256は石斧の未製品か。全長11.1cm、幅6.1cm、厚さ2.7cmを測る。石材は玄武岩である。257は扁平片刃石斧で表面は磨滅が著しい。全長4.8cm、幅1.9cm、厚さ0.9cmを測る。石材は泥岩である。258は扁平な円礫を利用した打ち欠き石錘である。全長6.5cm、幅6.6cm、厚さ2.1cm、重さ156.5mを測る。石材は玄武岩である。259は凹石。扁平な楕円形状で、全長10.6cm、幅7.9cm、厚さ3.1cmを測る。石材は泥岩である。260は細長い棒状の叩石。全長16.6cm、幅5.5cmを測る。表面は磨滅でザラザラするが、上下両面と下端に使用痕がある。石材は花崗岩である。

238は５Ｄ区、260は５Ｆ区、251・258は７Ｄ区、243・250は７Ｅ区、241は８Ｄ区、259は８Ｅ区、239･240･242･244～248･254は８Ｆ区、252は９Ｆ区、253は９Ｇ区、255はＳＸ0151、256はＳＸ0151・７Ｅ区、257は９Ｆ区出土である。

3．II区の調査

①　調査の概要

遺跡の西側、III区の南に隣接する調査区である。調査前の状況は宅地と一部水田であった。この調査区では主に古墳時代前期の遺構が検出された。遺構としては、土坑８基、溝・自然流路約10条などがある。溝・自然流路は、いずれも南北に流れ、北側III区とつながるものもある。

②　遺構と遺物

土坑

ＳＫ2001　図示していないが調査区南東隅で検出した長い瓢形を呈する土坑。規模は長軸450cm、短軸164cm、深さは50cmぐらいであり。底面には自然流路が入る。埋土は上層が白色粗砂、下層が灰白色粗砂に黒色粗砂混じり粘土ブロックを多量に含む。

出土遺物（Fig.49、PL.22-(2)）　古墳時代前期の土師器片が少量と石斧細片が１点出土している。１は土師器の高坏脚部片である。外面細かいハケ後、ヨコヘラ研磨調整である。３カ所の透し孔がある。

ＳＫ2007（Fig.47、PL.20-(2)）　調査区南壁近く、溝ＳＤ2006を切るような隅丸方形の土坑である。規模は長軸75cm、短軸60cmを測る。底面は中央がやや深くなるが、壁の立上りも急で、しっかりしている。埋土は黒褐色砂質土である。

出土遺物（Fig.49）　古墳時代前期の土師器が少量出土している。２は布留式の甕口縁部1/6片で、復元口径は15.2cmを測る。胴部内面はヘラケズリ。

ＳＫ2008（Fig.47、PL.20-(3)）　調査区南西隅で検出した楕円形状の土坑。二段掘りで、西側に舌状の張出しがつく。規模は上面で長軸198cm、短軸178cm、テラス面で長軸147cm、短軸101cm、深さは上面から最大で142cmを測る。埋土は上層が黒褐色粗砂混じり土から黒色粘土、中層で黒色粘土で灰白砂を混入する。下層では黒色粘土に灰褐色粗砂を縞状に挟み、鉄分を含む。**遺物**は弥生後期末から古墳時代前期の土器が少量出土している。

ＳＫ2012（Fig.47、PL.20-(4)）　調査区南壁にかかって検出された隅丸長方形状を呈する土坑であるが、南端は調査区外、中央は排水用トレンチに切られている。ＳＤ2016を切る土坑である。規模は長軸290cm以上、短軸135cm、深さは40cmを測る。埋土は上層は黒褐色粘質土、下層はにぶい黒褐色粘質砂とにぶい黄褐色砂の互層、黒褐色粘質砂土である。

出土遺物（Fig.49、PL.22-(2)）　古墳時代前期の土師器や砥石が出土している。３・４は土師器で、３は布留式の甕1/4片である。復元口径は17cmを測る。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリである。４は短くやや開きぎみに直立する口縁部を持つ小型壺の1/3片である。外面細かいハケのちヘラ研磨。５は暗褐色を呈する粘板岩製の砥石である。長方形で、断面は台形を呈する。上端は欠損するが、全長19.1cm、幅7.1cm、高さ4.8cmを測る。残りが悪く、取上げ時にバラバラなったが接合した。

ＳＫ2014（Fig.54）　ＳＤ2011に切られる不定形を呈する大型の土坑。規模は長軸で5.42m、短軸で4.2m、深さは最大で40cm余りを測る。床面は凹凸がある。埋土は黒色粘土で粗砂が混ざる。**遺物**は弥生時代終末から古墳時代前期の土器片の細片が出土している。

ＳＫ2024（Fig.48、PL.20-(5)）　調査区中央で、ＳＤ2006の下から検出した円形の土坑。規模は長軸110cm、短軸107cm、深さ47cmを測る。

出土遺物（Fig.49）　古墳時代の土師器片が出土している。６は器台の口縁部1/6片である。復元口

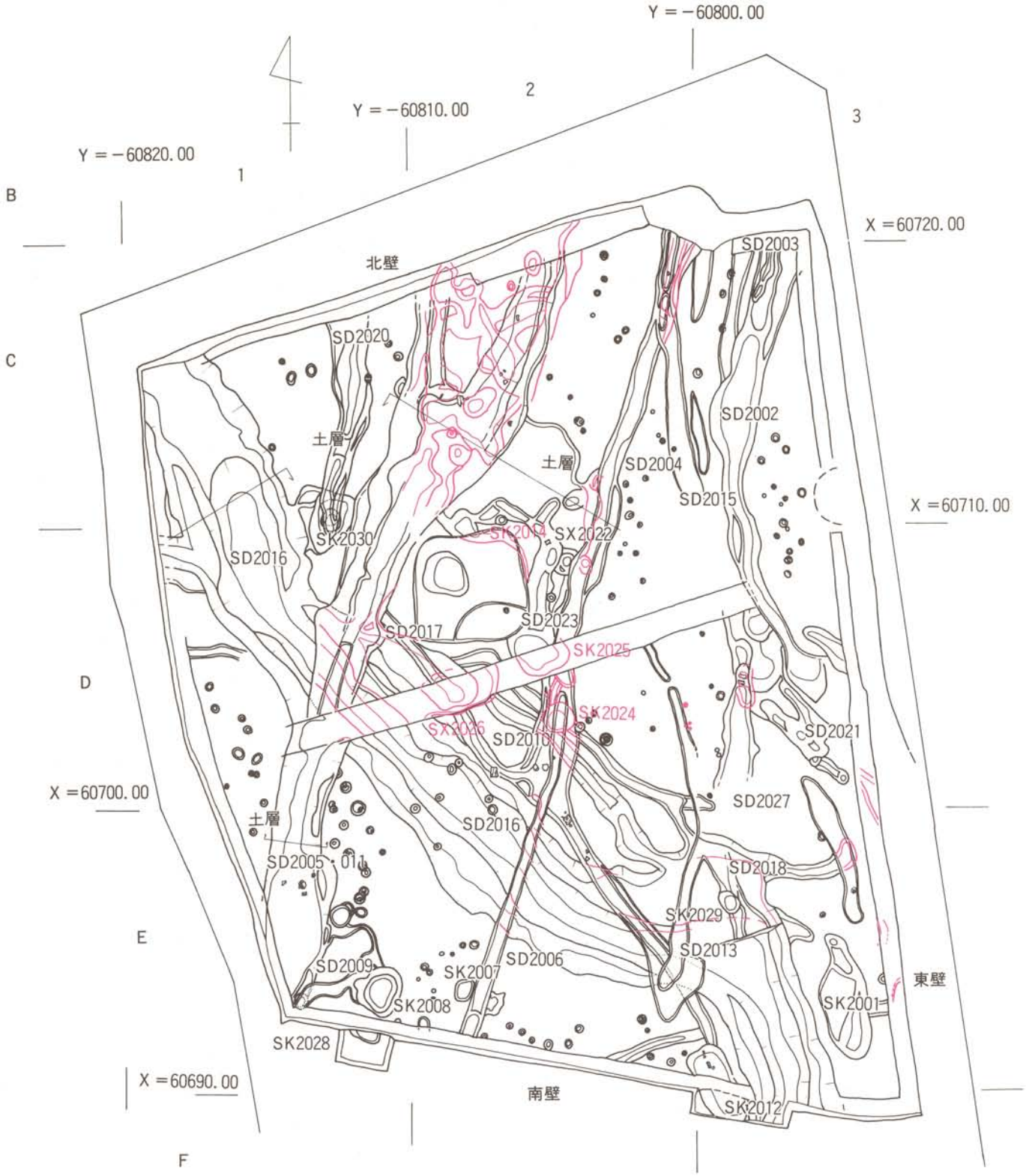


Fig.46　Ⅱ区遺構配置図（1/200）

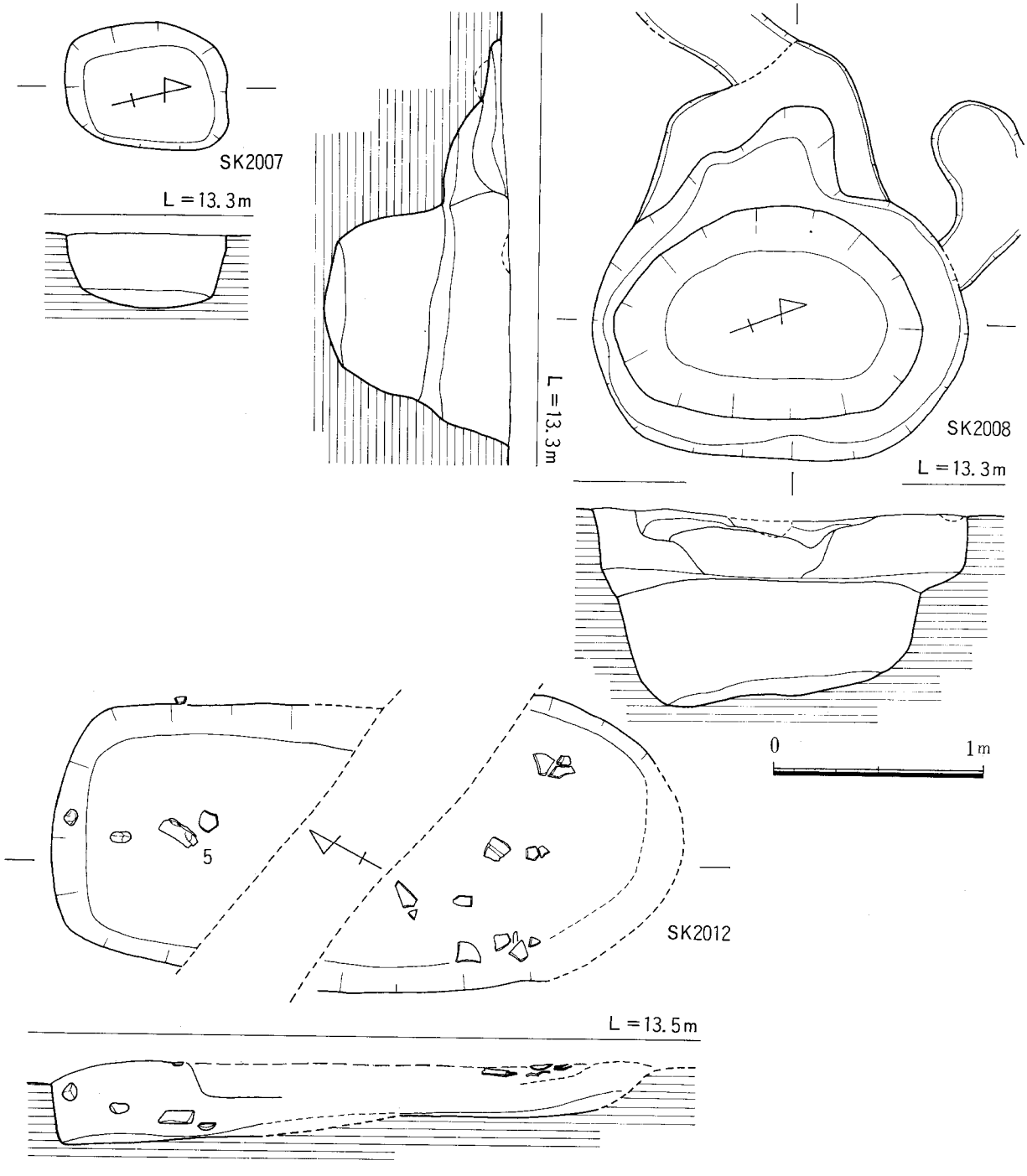


Fig.47　SK2007・008・012 (1/30)

径11.6cmを測る。外面粗いハケ、内面にしぼり痕が残る。

SK2025(Fig.48、PL.21-(1))　調査区中央で検出した不定形を呈する土坑。遺構面より一段下で確認したが、本来は遺構面から切り込むものと考えられる。規模は長軸218cm、短軸166cm、深さ47cm、遺構からは58cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は黒色粘土で、下の方は灰黄色粘土ブロックを混入、部分的に黒色粘質砂を混入する。**遺物**の出土はない。

SK2028(Fig.48、PL.21-(2))　調査区南壁にかかって検出した不定形状の土坑。確認規模は長軸

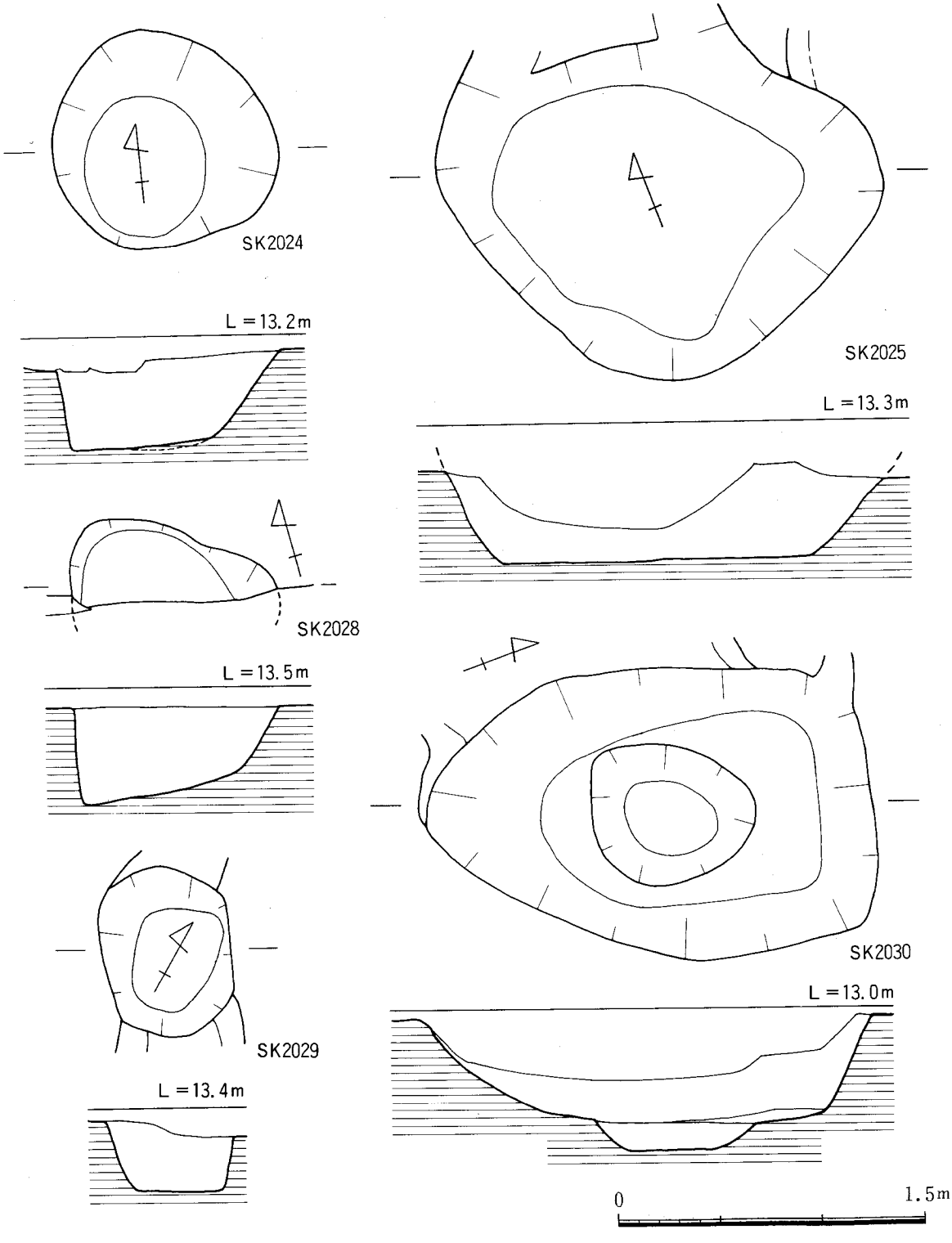


Fig.48　SK2024・025・028～030（1/30）

で102cm、深さ47cmを測る。底面は西に向かって深くなる。埋土は黒褐色粗砂混じり土である。**遺物**の出土はない。

SK2029（Fig.48）　調査区南東隅、SD2018の下で検出した六角形状を呈す土坑。規模は長軸84cm、短軸65cm、深さ38cmを測る。**遺物**は弥生時代終末から古墳時代前期の土器片少々と砥石片1点が

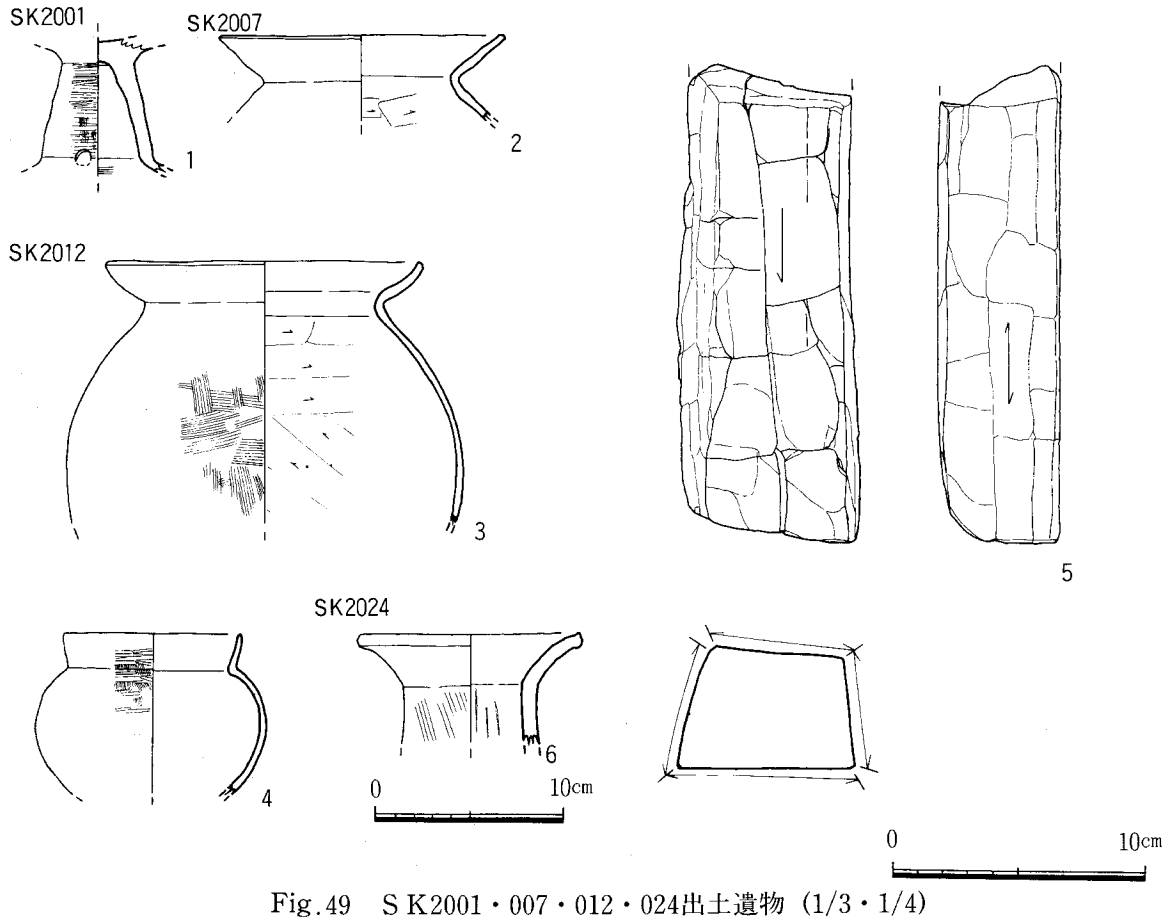


Fig.49　ＳＫ2001・007・012・024出土遺物（1/3・1/4）

出土している。

ＳＫ2030（Fig.48）　調査区北西側、ＳＤ2020の下から検出した五角形を呈する土坑。規模は長軸218cm、深さ142cm、深さ52cmを測るが、底面には82×62cm、深さ13cmを測る略円形のピットがあり、そこまでの深さは65cmとなる。埋土は黒色粘土である。**遺物**の出土はない。

溝・自然流路

ＳＤ2002・2003　調査区北東側で東壁から西に湾曲して北東隅に延びる小溝である。溝幅は約40～170cm、深さは約20～60cmと一定せず、北方向に深くなっていく。特に水の流れた部分は深くなっている。埋土は黒色粘質細砂と灰白色細砂の混合で灰白色細砂は硬く締まる。状況から自然流路で、確認した形状は流路を変えた結果であろう。従ってＳＤ2003はＳＤ2002の流路の一部である。

出土遺物（Fig.56）　弥生土器や土師器・須恵器、龍泉窯系青磁、陶器の細片が出土している。55は龍泉窯系青磁碗口縁部1/8片である。復元口径15.4cmを測る。内面は片彫りの蓮花文である。

ＳＤ2004　調査区中央を斜めに南北に流れる小溝である。北西方向に流れるＳＤ2010と一連のものと思われる。溝幅は62～170cm、深さは10～30cmを測る。埋土は上層は暗褐色粗砂または黒褐色粘質粗砂、下層は黒色粘土である。

出土遺物（Fig.56）　古墳時代前期の土師器片の他、須恵器・陶器片がごくわずか出土している。56は土師器の鼓形器台細片で、内外面ナデである。

ＳＤ2005・2011（Fig.50・53・54、PL.21-(5)・(6)）　調査区南西隅から北北東に流れる溝である。北側では流路が度々変わっており、溝底は凹凸が著しい。古期の溝をＳＤ2005、新期の溝をＳＤ2011とする。全体の溝幅は南で1.8m余り、北側で総幅4.7m余りとなるが、新期の溝は北側で最大幅で2.2m

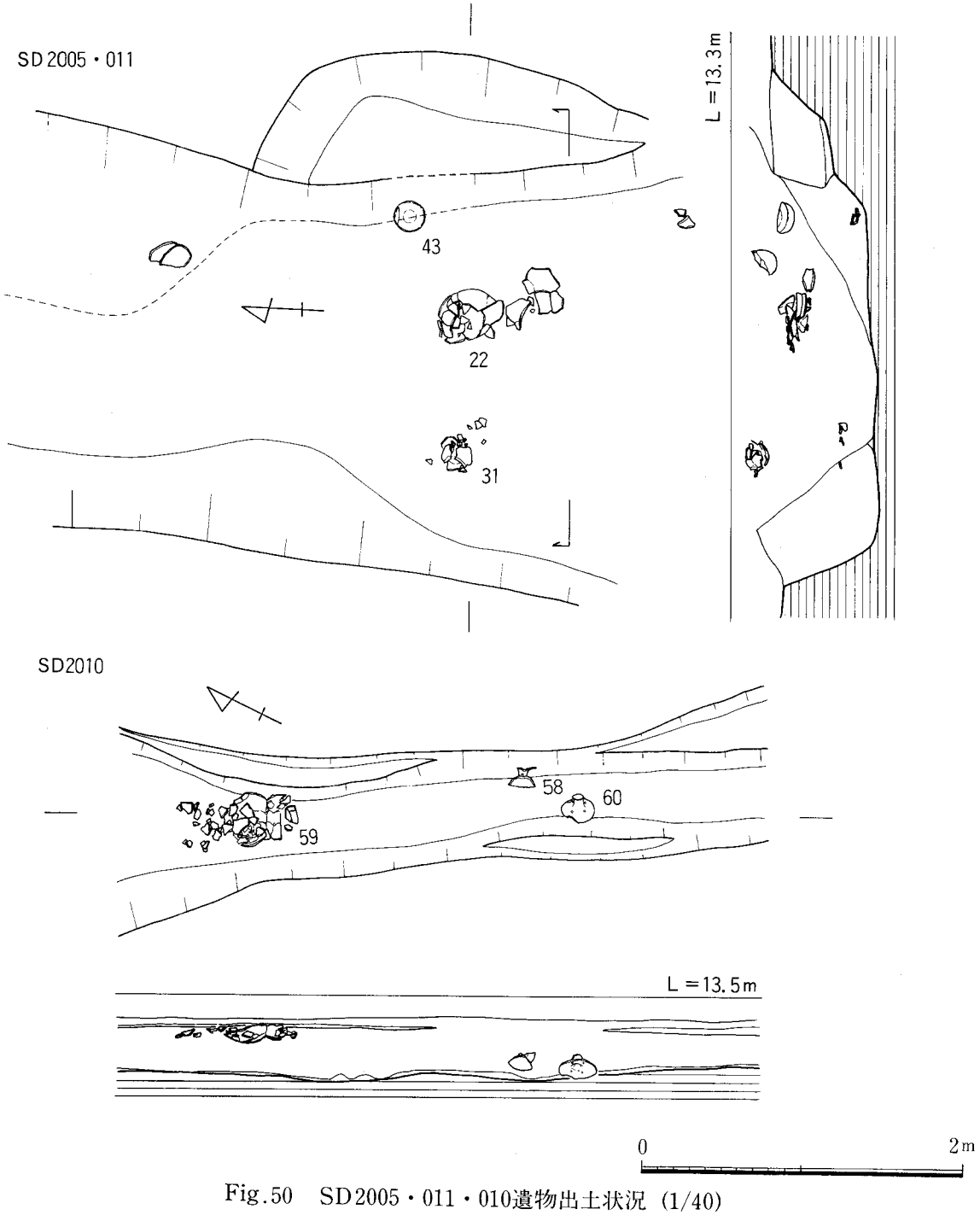


Fig.50　SD2005・011・010遺物出土状況（1/40）

余り、深さは50～60cmを測る。またその溝底には杭列があった。新期の溝埋土は上層が黒色粘土を主体とし、下層は黒褐色粘質砂から黒色砂混じり粘土となる。古期の溝埋土は上層が黒褐色粘質砂または砂混じり粘土、下層は黄褐色粗砂礫を主体とする。

出土遺物(Fig.57～59、PL.22-(2))　弥生後期末から古墳時代前期後半にかけての土師器が多量に出土しているが、これは溝の時期差を表すのであろう。他に縄文土器、須恵器片が数点出土している。ＳＤ2005・011を一括して報告する。７は小形の甕胴部1/2片で、底部はわずかに平底を呈す。胴外面

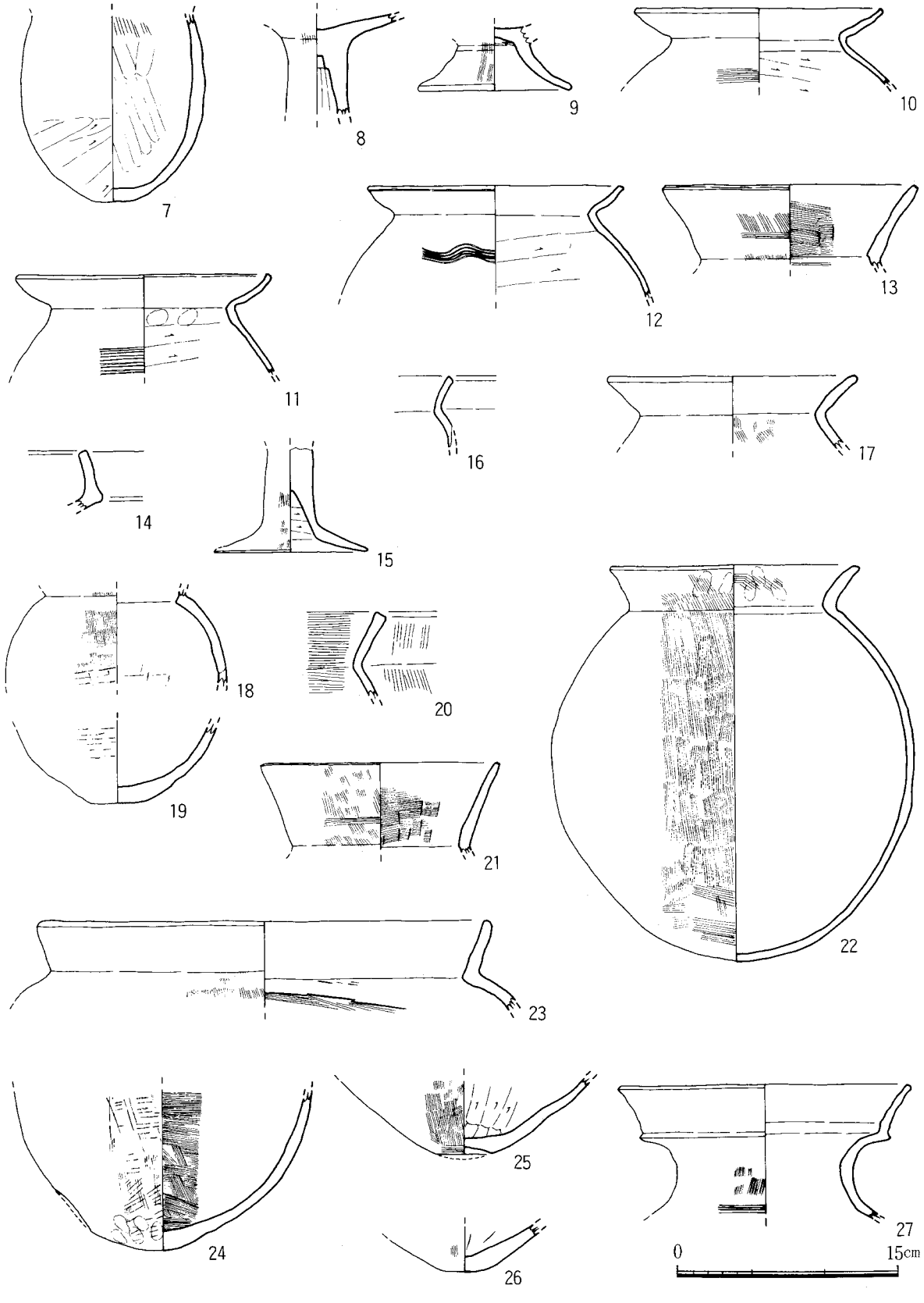


Fig.51　ＳＤ2005・011出土遺物　1　(1/4)

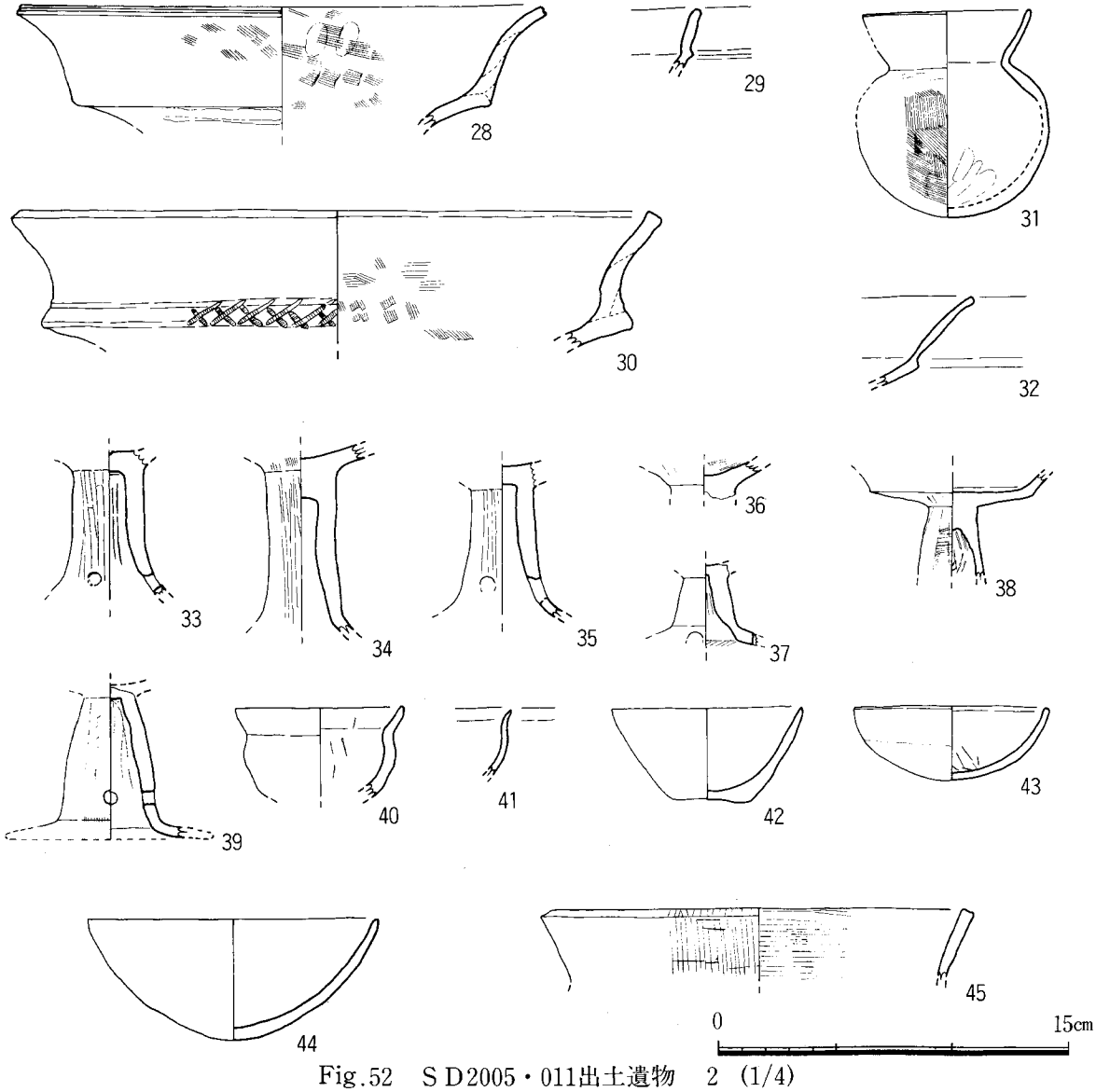


Fig.52　ＳＤ2005・011出土遺物　2　(1/4)

下半はヘラケズリ、上半はナデ。内面はユビナデ。８は弥生土器の高坏脚部片、９は脚台付鉢の脚部片。脚端径は10.4cmを測る。10～12は布留式甕の口縁から胴部小片。復元口径は約17cm、16.5cm、17.5cmを測る。10と12の口縁部にはススが付着する。13は甕の口縁部1/8片。復元口径は17cmを測る。内外面の調整はナデ。14は複合口縁の細片。15は高坏の脚部3/4片、脚端径は10.6cmを測る。内面ヘラ削り。16は鉢か甕の口縁部細片か。17は甕の口縁部1/4片、復元口径17cmを測る。18･19は同一個体と思われる小型の弥生後期の甕の胴・底部片。底部は不安定な平底を呈する。胴外面下半はタタキ、上半はタテハケ、内面はヘラナデで工具痕が残る。20は甕の口縁部細片、内外面ハケ。21は壺の口縁部1/6片か。復元口径は16.4cmを測る。口縁部内外面はハケ。22はほぼ完形の壺で、口径17cm、器高26.9cmを測る。胴部外面はタテハケ、内面は丁寧なナデである。23は広口の壺口縁部1/8片、復元口径約31cmを測る。内面工具痕が残る。24・25は胴底部片。24の外面はタタキのちナデとハケ、内面は細かいハケ。25は外面はハケ、内面はケズリ。26は不安定な平底を残す。27～30は複合口縁の壺。1/2片、1/4片、1/8片、細片で復元口径は19.8cm、29.5cm、36.5cmを測る。30は大型で、屈折部に１条の突帯が巡り、櫛状工

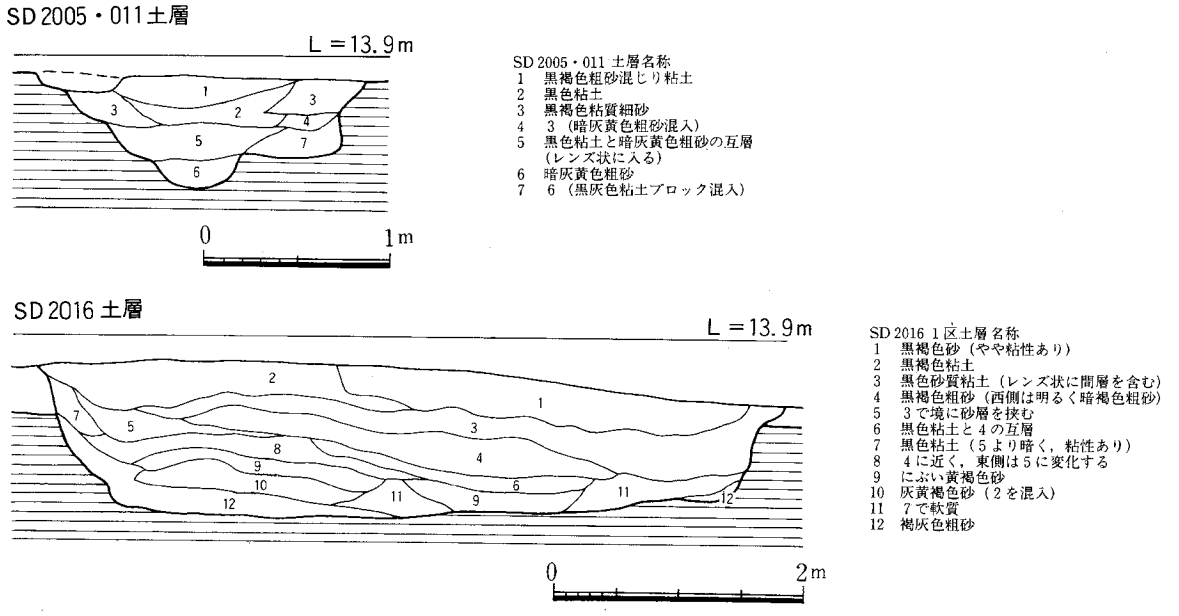


Fig.53　ＳＤ2005・011・016土層図（1/40・1/60）

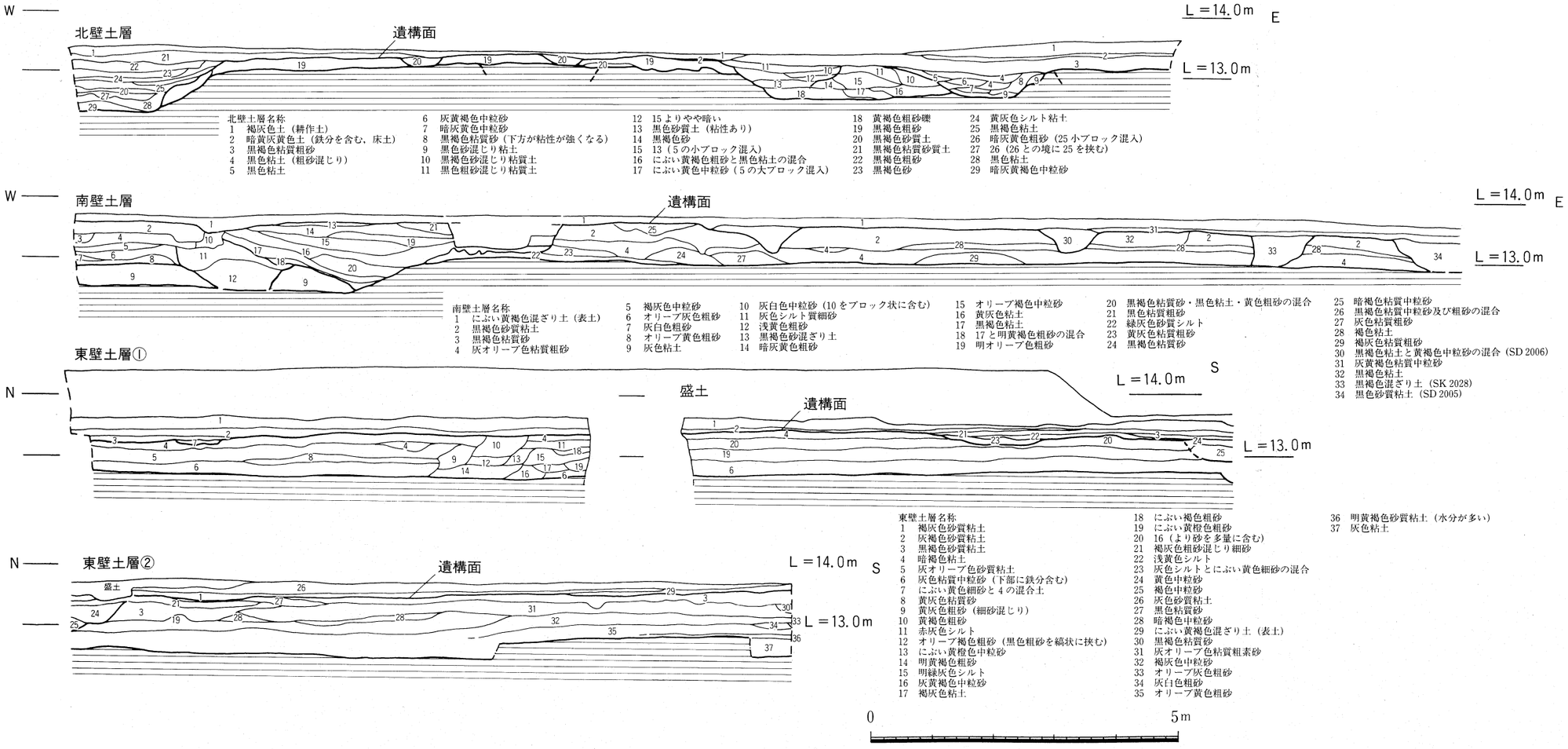
具で「X」状の刻目が付く。31は小型丸底壺でほぼ完形である。口径9.8cm、器高12cmを測る。胴部は細かいハケ、内面はナデで底部に指調整痕が残る。胴部外面にはススが付着する。32～39は高坏片。32は口縁部細片。33～35は大きく口縁が広がる高坏の脚筒部片。外面はタテヘラ研磨で、33・35には円形の透し孔がある。36は坏部底部片。37は短脚のもので、円形の透し孔がある。38は筒部がエンタシス状に膨らむもの、坏部内面はヘラ研磨、筒部外面はタテヘラ削りのちヨコヘラ研磨。39はほかの高坏より新しい31と同時期である。外面ハケのちナデ、内面にシボリ痕が残る４ケ所の円形透し孔がある。40～44は鉢。40･41は「く」字状に短く外折するもので、40は1/8片で、復元口径9.6cmを測る。42は平底で口縁部を一部欠失する。やや口縁がひずむが、口径10.9cm、底径4.5cm、器高5.4cmを測る。ヘラ状工具のナデで、外底に木の葉痕跡がある。43はほぼ完形で底部は丸底である。口径11cm、器高4.2cmを測る。外面はヘラナデで、内底には工具痕が残る。44は1/5片で、復元口径16.5cm、器高6.9cmを測る。尖り気味の底を持ち、内底には指押さえ痕が残る。45は甕口縁部1/3片で、復元口径23.4cmを測る。口縁内外面ハケで、口端部にもハケを加える。外面ススが付着する。46～54は杭である。深いものは遺構面から60cmほど深さまで打ち込んでいる。法量などはTab.1を参照のこと。

ＳＤ2006　ＳＤ2004の南側における延長線上にある小溝で、ＳＤ2010・2016を切っている。溝幅は38～95cm、深さ７～10cmを測るが、南壁では幅約１m、深さ40cmである。埋土は黒褐色粘土から細砂である。**遺物**は古墳時代の土師器の細片が少量出土している。

ＳＤ2009　調査区南西隅で検出したＳＤ2011・ＳＫ2008と繋がる、不規則な流路の小溝である。幅も狭く、深さも浅い。ＳＤ2005と接合した古墳時代前期の土師器甕片44など出土している。

ＳＤ2010(Fig.50、PL.22-(1))　調査区南東隅から北西方向に延びる小溝。ＳＤ2006に切られ、ＳＤ2016を切り、かつＳＤ2004に繋がるものであろう。溝幅は40～80cm、深さ20cm前後で、埋土は上層が黒色粘質砂、下層が粗砂となる。

出土遺物(Fig.56、PL.22-(2))　古墳時代前期の土師器と石錘が１点出土している。57は布留式甕の口縁部細片。58は複合口縁の壺口縁から胴部1/2片。復元口径26.5cmを測る。口縁部はハケ状工具でのヨコナデ、外面上半はヨコハケ、下半はタテハケ、胴部内面はヘラケズリである。59～62は高坏。



北壁土層名称
1　褐灰色土（耕作土）
2　暗黄灰黄色土（鉄分を含む，床土）
3　黒褐色粘質粗砂
4　黒色粘土（粗砂混じり）
5　黒色粘土
6　灰黄褐色中粒砂
7　暗灰黄色中粒砂
8　黒褐色粘質砂（下方が粘性が強くなる）
9　黒色砂混じり粘土
10　黒褐色砂混じり粘質土
11　黒色粗砂混じり粘質土
12　15よりやや暗い
13　黒色砂質土（粘性あり）
14　黒褐色砂
15　13（5の小ブロック混入）
16　にぶい黄褐色粗砂と黒色粘土の混合
17　にぶい黄色中粒砂（5の大ブロック混入）
18　黄褐色粗砂礫
19　黒褐色粗砂
20　黒褐色砂質土
21　黒褐色粘質砂質土
22　黒褐色粗砂
23　黒褐色砂
24　黄灰色シルト粘土
25　黒褐色粘土
26　暗灰黄色粗砂（25小ブロック混入）
27　26（26との境に25を挟む）
28　黒色粘土
29　暗灰黄褐色中粒砂

南壁土層名称
1　にぶい黄褐色混ざり土（表土）
2　黒褐色砂質粘土
3　黒褐色粘質砂
4　灰オリーブ色粘質粗砂
5　褐灰色中粒砂
6　オリーブ灰色粗砂
7　灰白色粗砂
8　オリーブ黄色粗砂
9　灰色粘土
10　灰白色中粒砂（10をブロック状に含む）
11　灰色シルト質細砂
12　浅黄色粗砂
13　黒褐色砂混ざり土
14　暗灰黄色粗砂
15　オリーブ褐色中粒砂
16　黄灰色粘土
17　黒褐色粘土
18　17と明黄褐色粗砂の混合
19　明オリーブ色粗砂
20　黒褐色粘質砂・黒色粘土・黄色粗砂の混合
21　黒色粘質粗砂
22　緑灰色砂質シルト
23　黄灰色粘質粗砂
24　黒褐色粘質砂
25　暗褐色粘質中粒砂
26　黒褐色粘質中粒砂及び粗砂の混合
27　灰色粘質粗砂
28　褐色粘土
29　褐灰色粘質粗砂
30　黒褐色粘土と黄褐色中粒砂の混合（SD 2006）
31　灰黄褐色粘質中粒砂
32　黒褐色粘土
33　黒褐色混ざり土（SK 2028）
34　黒色砂質粘土（SD 2005）

東壁土層名称
1　褐灰色砂質粘土
2　灰褐色砂質粘土
3　黒褐色砂質粘土
4　暗褐色粘土
5　灰オリーブ色砂質粘土
6　灰色粘質中粒砂（下部に鉄分含む）
7　にぶい黄色細砂と4の混合土
8　黄灰色粘質砂
9　黄灰色粗砂（細砂混じり）
10　黄褐色粗砂
11　赤灰色シルト
12　オリーブ褐色粗砂（黒色粗砂を縞状に挟む）
13　にぶい黄橙色中粒砂
14　明黄褐色粗砂
15　明緑灰色シルト
16　灰黄褐色中粒砂
17　褐灰色粘土
18　にぶい褐色粗砂
19　にぶい黄橙色粗砂
20　16（より砂を多量に含む）
21　褐灰色粗砂混じり細砂
22　浅黄色シルト
23　灰色シルトとにぶい黄色細砂の混合
24　黄色中粒砂
25　褐色中粒砂
26　灰色砂質粘土
27　黒色粘質砂
28　暗褐色中粒砂
29　にぶい黄褐色混ざり土（表土）
30　黒褐色粘質砂
31　灰オリーブ色粘質粗素砂
32　褐灰色中粒砂
33　オリーブ灰色粗砂
34　灰白色粗砂
35　オリーブ黄色粗砂
36　明黄褐色砂質粘土（水分が多い）
37　灰色粘土

SK 2014・SD 2005・011 土層名称
1　黒褐色粗砂混じり土（粘性が強い）
2　灰黄色粗砂と3の混合
3　黒色粘土
4　黒色粗砂混じり土
5　明褐色粗砂（1を混入）
6　2でやや暗い
7　黒色粘質粗砂（暗灰褐色粗砂混入）
8　3よりやや明るく，粗砂を含む
9　黒色粗砂混じり粘質土（粗砂多量混入）
10　3と暗灰黄色粗砂の混合
11　灰白色粗砂と黒褐色粗砂の混合
12　暗灰色粘土（灰白色粗砂混入）
13　灰色シルト質細砂（灰白色細砂をブロック状に混入）
14　灰白色粗砂（灰色粘土を薄く挟む）
15　黒褐ー淡黒色粗砂混じり粘土
16　黒褐色粗砂混じり粘土
17　灰褐色粗砂
18　3（黒褐色粘土・17を混入）

Fig.54　II区北壁・南壁・東壁・ＳＫ2014・ＳＤ2005・011土層図（1/60・1/80）

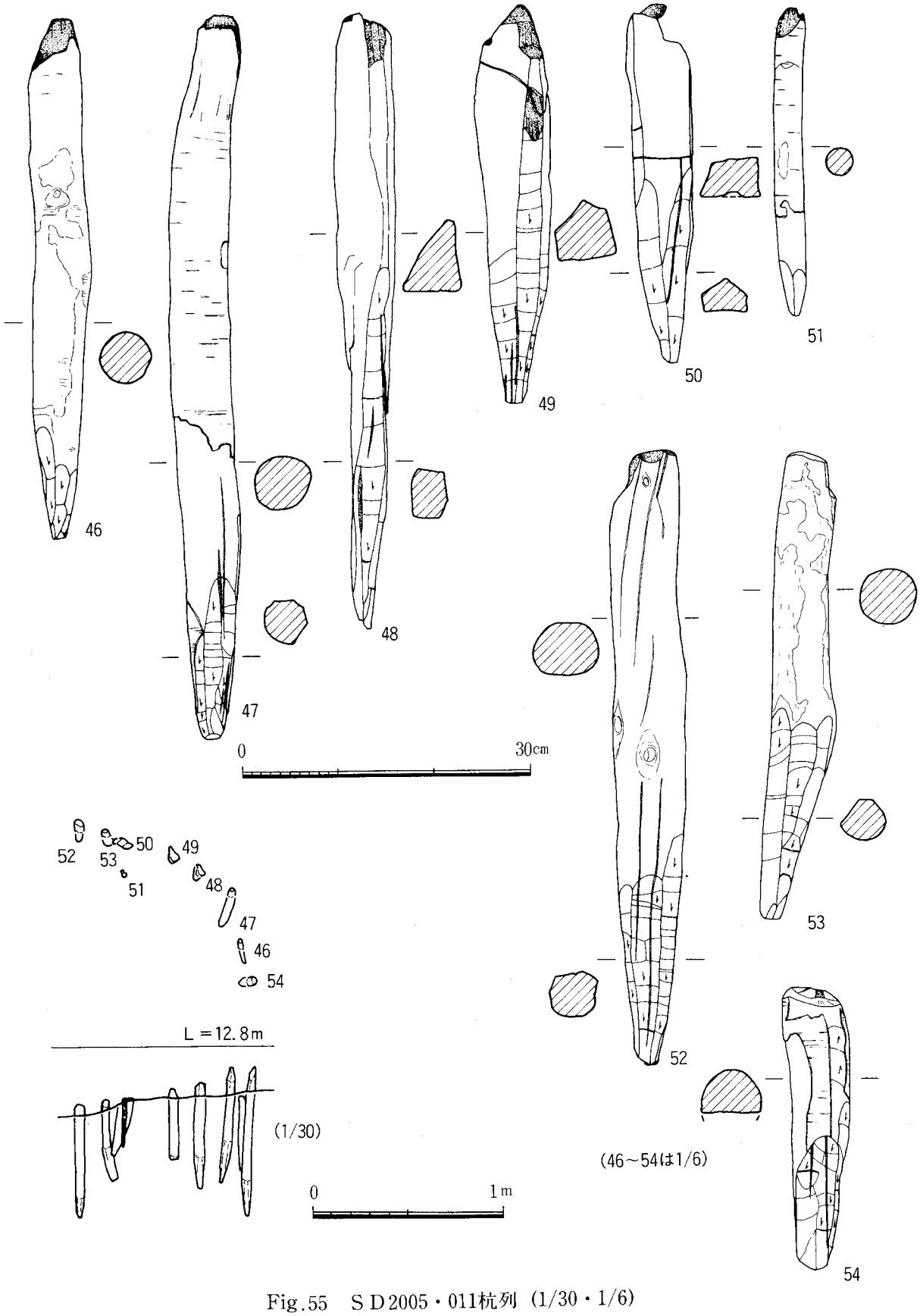


Fig.55　ＳＤ2005・011杭列（1/30・1/6）

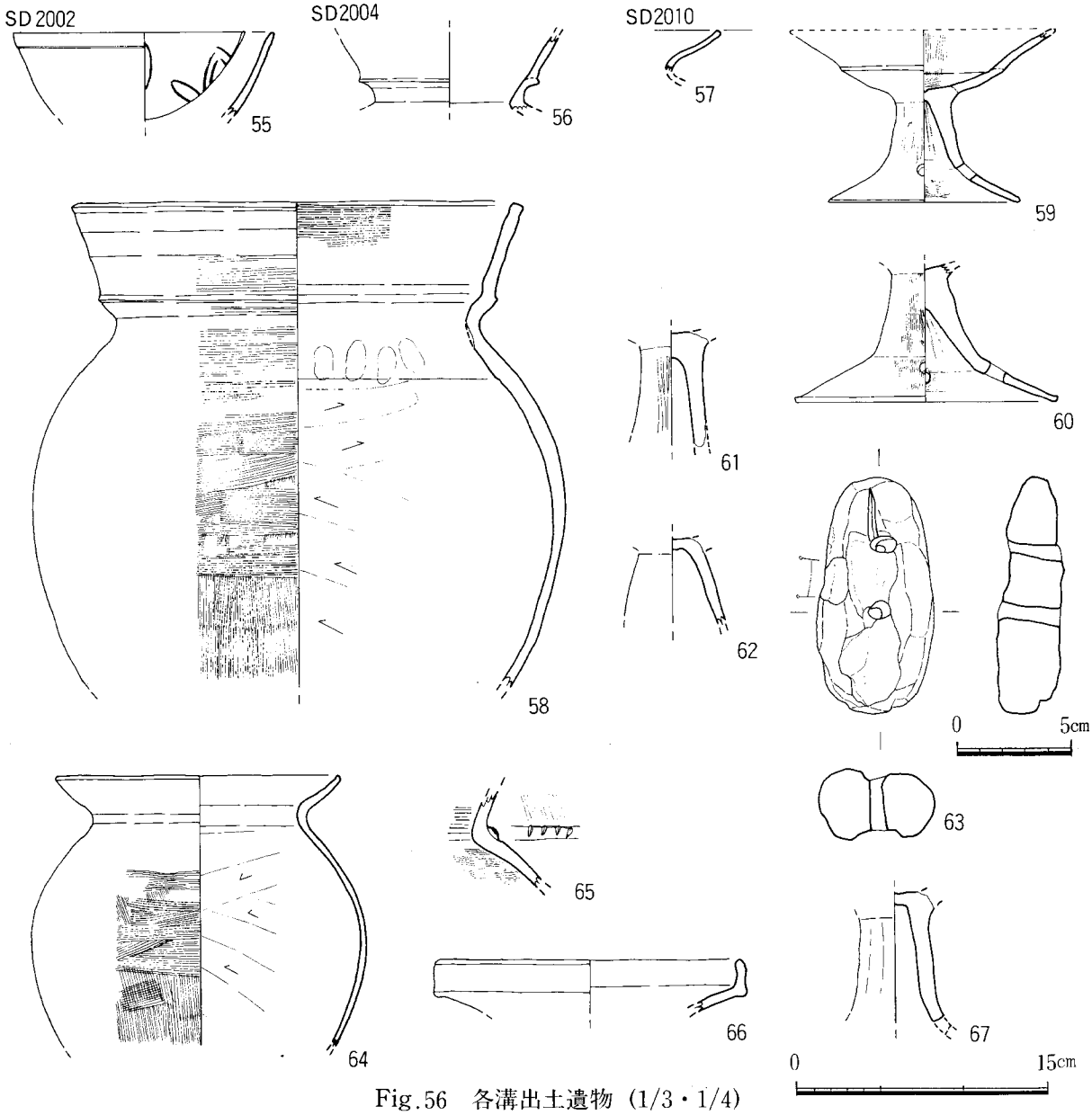


Fig.56 各溝出土遺物（1/3・1/4）

59・60はほぼ同一形態のもの。59は1/3片で復元口径15.6cm、器高10.2cm、復元脚端径11.2cmを測る。坏部内面はハケのちヘラ研磨、脚部外面はヘラ研磨、内面はハケのちナデ。60は脚部片で、脚端径15.5cmを測る。外面細かいハケ、裾端部は黒斑がある。61・62は脚筒部片である。61の外面はヘラ研磨、62の外面は磨滅する。63は滑石片岩製の沈子である。全長10.5cm、最大幅5.2cm、重さ216.5gを測る。２ケ所の紐通しの円孔と上方の孔には紐かけの溝がある。表面は欠損部もあるが、調整は削りのち雑な研磨仕上げ。

ＳＤ2013 調査区南側ＳＤ2016上面で検出した浅い小溝。幅は70cm、深さ５～24cmと浅い。埋土は褐色中粒砂である。ＳＤ2002・2003と同様の自然流路であろう。**遺物**は土師器の細片が少量出土している。

ＳＤ2015 調査区北東側で検出したＳＤ2004を切る浅い小さな流路である。途中消滅する。**遺物**は古墳時代土師器の細片が少量出土している。

ＳＤ2016（Fig.53、PL.20-(1)・21-(3)・(4)）　調査区南東から北西方向に、南に湾曲して流れる自然流路である。幅は４m前後、深さ80cmを、南壁土層で１mを測る。この溝は北側III区のＳＤ3005に続く。埋土は上層が黒褐色砂や粘土・粗砂と黒色砂質粘土、下層は黒色粘土・粗砂、にぶい黄褐色砂、褐灰色粗砂などで、下層では粗砂が多くなる。

出土遺物（Fig.56、PL.22-(2)）　弥生から古墳時代の土器片が出土している。ＳＤ2005・011など他の遺構に切られているので、遺物が混在している可能性がある。64は布留式土器の甕1/4片。復元口径16.6cm、胴部最大径19.6cmを測る。胴部外面ハケ、内面はヘラ削りである。外面下半にススが付着する。南壁土層の出土で、ＳＫ2012のものの可能性がある。65は壺頸部細片。外面刻目のつく三角突帯を巡らす。内面は細かいヨコハケである。66は複合口縁の壺の口縁部1/8片で、復元口径は18.2cmを測る。器壁は磨滅がひどい。67は高坏脚筒部片。外面は磨滅するがヘラ研磨か。

ＳＤ2019　調査区東側で検出した小さな流路。ＳＤ2015と繋がるものかもしれない。**遺物**は古墳時代の須恵器・土師器の細片が出土している。

ＳＤ2020　調査区北西側で検出した小溝。北北東方向に流れる。幅は70cm余り、深さは最大20cm位を測る。埋土は黒褐色粗砂混じり粘質土である。**遺物**の出土はない。

遺物番号	種　類	法　量(cm)		備　　考
		現存長	最大径	
46	杭	45.5	4.4	杭先端は全周削り。芯持ち材
47	杭	64.2	4.7×5.3	杭先端は半面削り。樹皮が残る。芯持ち材
48	杭	53.5	5.3×6.2	杭先端は全周削り。割材
49	杭	34.7	6.6×5.3	杭先端は４面削り。割材
50	杭	31.5	5.5×４	杭先端は削り。割材
51	杭	27	2.5	杭先端は全周削り。樹皮が残る。芯持ち材
52	杭	54	4.5×5.8	杭先端は半面削り。芯持ち材
53	杭	40.8	4.8	杭先端は半面削り。樹皮が残る。芯持ち材
54	杭	24.8	6.7×3.8	杭先端は削り。一部樹皮が残る。割材

Tab.1　ＳＤ2005・011出土杭一覧表

4．III区の調査

①　調査の概要

西端の調査区で道路を挟んで、南にII区、東にV区が接する。調査前は宅地であり、厚く盛土がなされていた。盛土の下は水田耕作土となる。本来の遺構面は黒褐色粘質粗砂であるが、調査ではその下のオリーブ灰色粗砂またははシルトまで掘り下げて遺構確認したため、一部確認出来なかった遺構がある。検出した主な遺構は土坑6基、構6条である。

②　遺構と遺物

土坑

ＳＫ3006（Fig.58）　調査区南壁にかかる楕円形状の土坑。規模は長軸90cm以上、短軸86cm、深さ25cmを測る。埋土は黒色砂質粘土で、下層は粗砂となる。**遺物**の出土はない。

ＳＫ3007（Fig.58）　溝ＳＤ3001に切られる不定形状の土坑。規模は長軸209cm、短軸150cm、深さ75cmを測る。底面は中心がだらだらと深くなる。埋土は上層が黒色砂質粘土、下層は灰色または暗オリーブ粗砂である。**遺物**の出土はない。

ＳＫ3008（Fig.58）　調査区北側で検出した不整方形状の土坑。規模は長軸132cm、短軸110cm、深

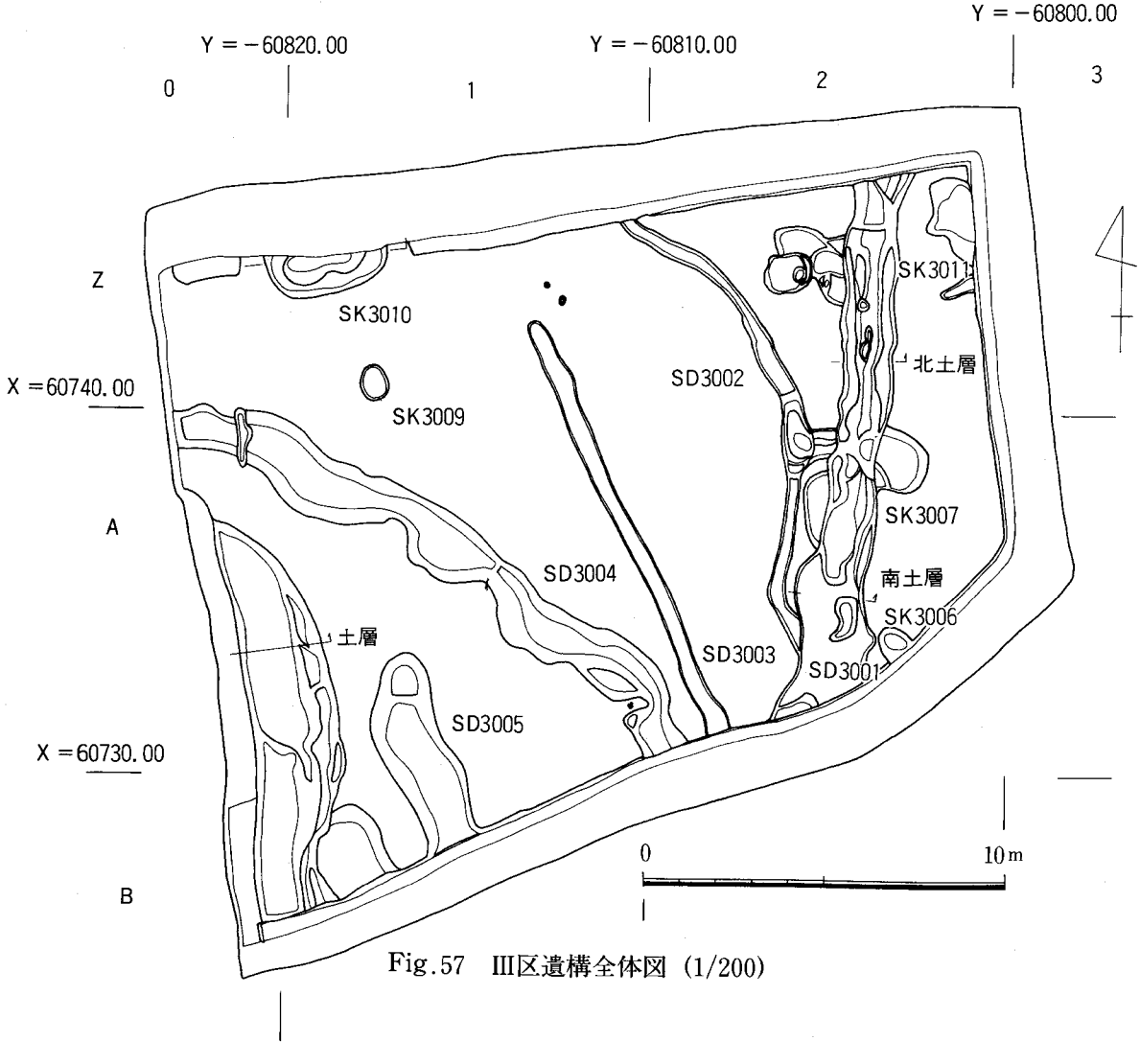


Fig.57　III区遺構全体図（1/200）

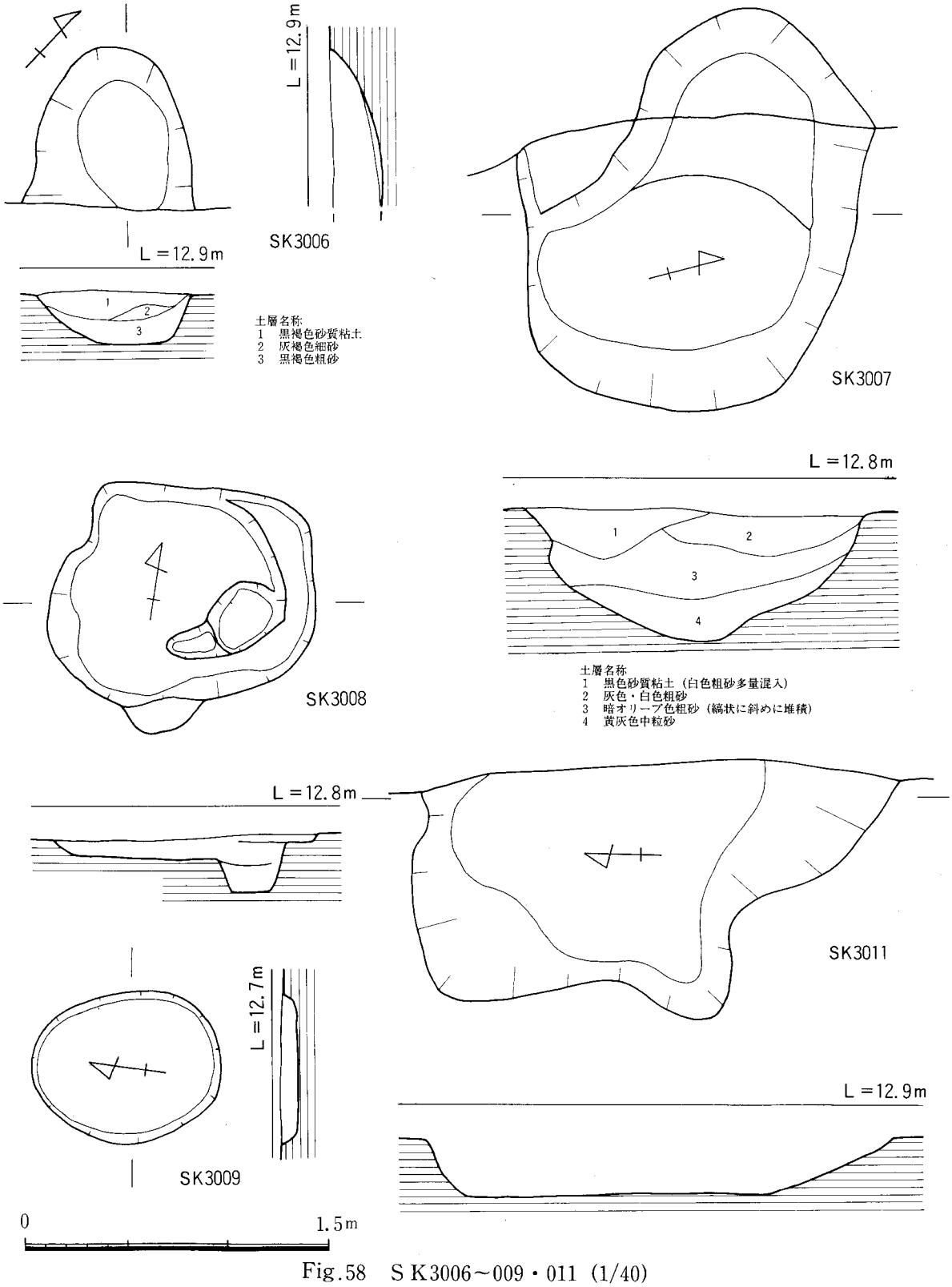


Fig.58　ＳＫ3006～009・011（1/40）

さ16cmを測る。底面には楕円形状のピットがある。埋土は黒褐色砂質粘土で粗砂を混入。**遺物**は古墳時代の土師器小片が１点出土している。

ＳＫ3009(Fig.58、PL.23-(3))　調査区北西端で検出した楕円形を呈する土坑。規模は、長軸94cm、短軸86cmを測る。深さ13cmを測る。埋土は黒褐色粘質粗砂である。**遺物**の出土はない。

ＳＫ3010(Fig.59、PL.23-(4))　調査区北壁にかかる半円形の土坑。溝の可能性もある。規模は幅320cm、深さ134cmを測る。埋土は褐色から暗褐色シルト、黒色砂質粘土が主体となり、最下層はオリーブ褐色細砂となる。**遺物**の出土はない。

ＳＫ3011 (Fig.58)　調査区東壁北側にかかる不定形の土坑。規模は幅240cm、深さ28cmを測る。埋土は淡黒褐色粗砂である。**遺物**は古墳時代の土師器の小片が２点出土している。

溝・自然流路

ＳＤ3001 (Fig.57・60、PL.23-(2))　調査区東側で検出したII区のＳＤ2005・011から続く溝である。溝幅は120～190cm、深さは20cm前後を測る。底は浅く、土層断面で見る限り新旧２条の溝があるようだ。埋土は黒褐色から黒色の砂質粘土で、粗砂を含む。

出土遺物 (Fig. 61、PL.24-(5))　弥生時代後期から古墳時代初めの土師器がややまとまって出土している。小片が多いが、図示出来たものを示す。１は弥生後期の口縁部が複合口縁を呈する壺1/2片である。復元口径16.2cm、器高27cm以上を測る。内外面ハケを加えるが、外面下半はナデる。２は壺の口径部小片。頸部に１条の三角突帯を巡らす。３は袋状口縁壺の口縁部細片。４～７は土師器の甕である。４～６は口縁部小片で、復元口径はそれぞれ14cm、17.6cm、17.4cmを測る。７は胴部最大径が上半にある、長胴を呈する1/3片である。復元胴部最大径は26.5cmを測る。外面上半はタテハケで叩きの痕跡を残す。下半はハケナデで、煤が付着している。内面は雑なハケ後、下半は指ナデ。８は器台の頸部小片。内外面細かいハケを加える。９は手捏ね土器1/3片で、復元口径５cmを測る。内外面ナデで、内面に工具痕が残る。10～14は高坏である。10は坏部の口縁部小片で、復元口径は約30cmを測

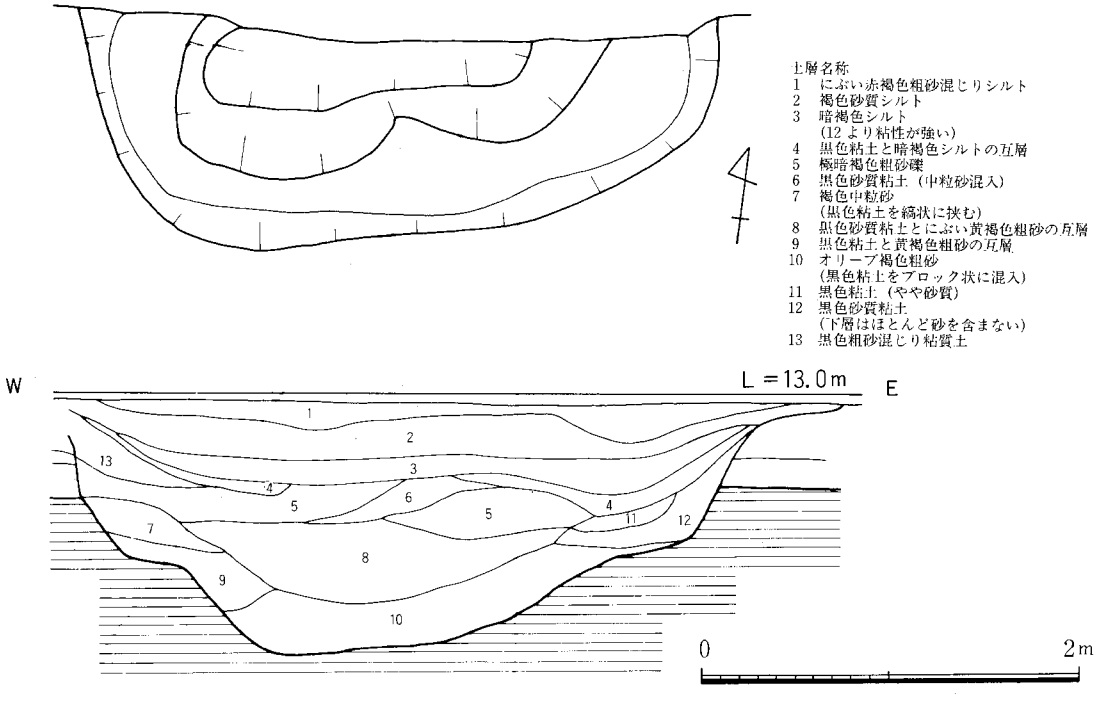
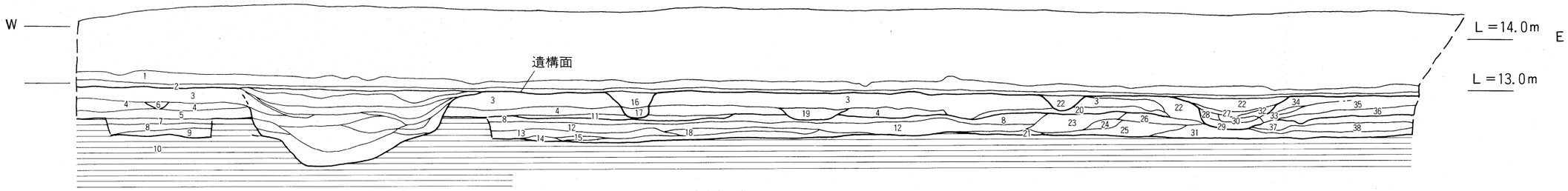


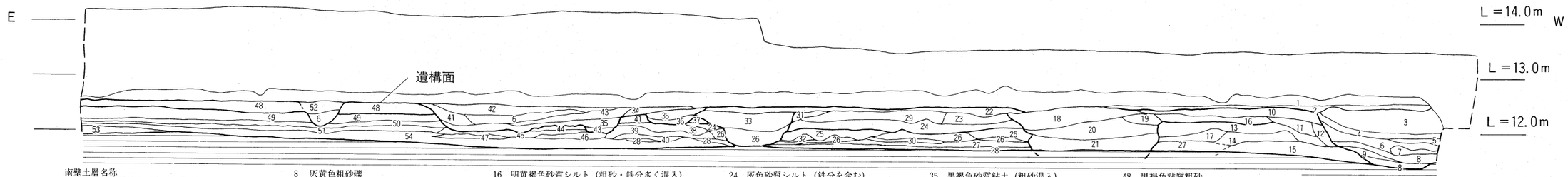
Fig.59　ＳＫ3010 (1/40)

北壁土層



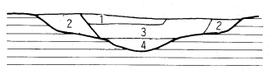
北壁土層名称
1　黒褐色砂質土（水田耕作土）
2　明褐色砂質土（床土）
3　黒色粗砂混じり粘質土
4　黒褐色粗砂混粘質土
5　褐色粗砂混じり粘質土（粗砂多量混入）
6　黒褐色砂質粘土
7　灰色砂質シルト（粗砂多量混入）
8　オリーブ灰色砂質シルト（鉄分を含む）
9　灰色粗砂（下部に明黄褐色粘土を薄く挟む）
10　黄灰色粘土
11　オリーブ黒色粗砂
12　暗赤灰色シルト質粗砂（８よりやや暗い、鉄分を含む）
13　灰色砂質シルト（粗砂を少量混入）
14　褐灰色砂質粘土（粗砂を多く混入）
15　灰黄褐色砂質シルト（にぶい黄褐色の粗砂をブロック状に混入）
16　黒褐色砂質シルト
17　黒色粘質砂質土
18　明黄褐色シルト質粗砂
19　暗褐色粘質粗砂（中央にレンズ状に褐色粗砂を混入）
20　暗灰黄色砂質粘土
21　黄灰色シルト（鉄分を含む）
22　黒褐色砂質粘土
23　黒褐色粘質粗砂
24　褐色粗砂
25　褐灰色粗砂
26　にぶい褐色砂質シルト
27　黒色粘土
28　黒色砂質粘土（細砂、中粒砂）
29　黒褐色中粒砂
30　黒褐色粘土（暗灰黄色の中粒砂をブロック状に含む）
31　灰黄褐色砂質シルト（鉄分を含む）
32　オリーブ黒色粘質粗砂
33　暗オリーブ褐色砂質粘土
34　黒褐色砂質シルト
35　34でやや軟質（砂の多量混入）
36　灰色砂質粘土（粗砂混入）
37　オリーブ灰色砂質シルト（黒褐色粘土が西側に少量混入）
38　灰褐色砂質シルト（やや褐色味が強い）

南壁土層



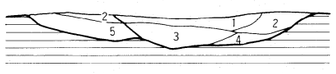
南壁土層名称
1　褐灰色砂質粘土（水田耕作土）
2　暗褐灰色砂質粘土（床土）
3　暗褐色粗砂（砂は西下がり、下方ほど目は細かい）
4　にぶい黄褐色シルト質粘土
5　黒褐色粘土
6　黒色粘土（粗砂を一部ブロック状に含む）
7　オリーブ黒色粘土
8　灰黄色粗砂礫
9　黄灰粘土
10　暗灰黄色粗砂混じりシルト
11　黄灰シルト（上面粗砂混じり）
12　黄褐色中粒砂（部分的に黒色中粒砂混入）
13　オリーブ褐色砂質シルト
14　灰白色粗砂
15　暗灰色粗砂混じりシルト
16　明黄褐色砂質シルト（粗砂・鉄分多く混入）
17　灰色砂質シルト（粗砂を含み、鉄分が上面より沈着）
18　オリーブ褐色粗砂砂礫
19　暗灰黄色粗砂礫
20　明黄褐色粗砂
21　淡黄色粗砂礫
22　黒褐色粘質砂
23　浅黄色砂質粘土（やや灰味をおびる）
24　灰色砂質シルト（鉄分を含む）
25　灰オリーブ砂質粘土（鉄分を含む）
26　灰白色粗砂礫
27　オリーブ黒色砂質粘土
28　オリーブ褐色中粒砂
29　暗灰オリーブ色粘質砂（中粒砂を多混入）
30　にぶい黄褐色砂質粘土
31　灰色シルト又は細砂
32　灰白色粗砂
33　明褐色粗砂礫
34　暗褐色粘質砂（黒褐色に近い）
35　黒褐色砂質粘土（粗砂混入）
36　黒色粘質砂（暗灰色砂・粗砂を混入）
37　にぶい黄褐色シルト
38　灰色粗砂混じりシルト
39　灰色砂質シルト（鉄分を含む）
40　灰色粗砂礫
41　にぶい黄橙色粗砂
42　暗褐色砂質粘土
43　黒色砂質粘土
44　暗オリーブ灰色砂質粘土（鉄分を含む）
45　オリーブ灰色砂質粘土
46　オリーブ灰色粗砂混じりシルト（下方部に黄橙色粘土混入）
47　暗灰褐色粗砂（下方部に黄橙色粘土が混入）
48　黒褐色粘質粗砂
49　オリーブ褐色粗砂（やや粘性あり）
50　緑灰色粘質シルトと灰色粗砂の混合
51　暗紫灰色シルト質粘土（鉄分沈着する）
52　オリーブ黒色砂質粘土
53　黄灰色砂質粘土
54　暗青灰色粘土

SD3001北ベルト　L＝12.8m



北ベルト土層名称
1　黒色砂質粘土（黒灰色粗砂をブロック状に含む）
2　黒褐色粗砂（暗褐色粗砂を少量含む）
3　褐色粗砂
4　黒色砂質粘土（黄褐色粗砂を含む）

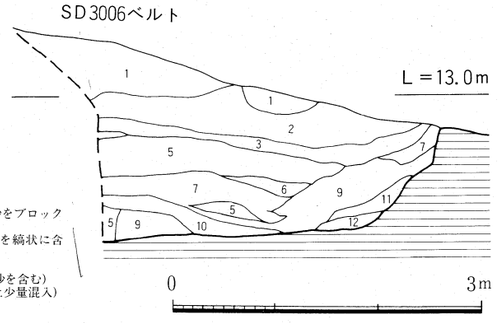
SD3001南ベルト　L＝12.8m



南ベルト土層名称
1　黒色砂質粘土（黒灰色粗砂をブロック状に含む）
2　淡黒色粗砂（暗灰色粗砂を縞状に含む）
3　暗黄褐色粗砂
4　黒色砂質粘土（黄褐色粗砂を含む）
5　暗褐色粗砂（黒色砂質粘土少量混入）

0　1.5m

SD3006ベルト



SD3006 ベルト土層名称
1　盛土
2　暗灰黄色粗砂（鉄分を多く含む）
3　暗オリーブ褐色粘土（鉄分及び黒色粘土ブロック混入）
4　黒褐色砂質粘土
5　灰色粗砂（黒色粘土を互層状に挟む）
6　灰オリーブ粗砂
7　5（オリーブ黒粘土を互層状に挟む）
8　3（9を少量ブロック状に含む）
9　黒色粘土（3を小ブロック状に少量混入、やや砂質で軟質が強い）
10　灰黄色粗砂（縞状に堆積）
11　黒褐色粘土（軟質で8を多く混入）
12　11（灰色粗砂を多く混入）

Fig.60　Ⅲ区北壁・南壁・ＳＤ3001・006土層図（1/40・1/60・1/80）

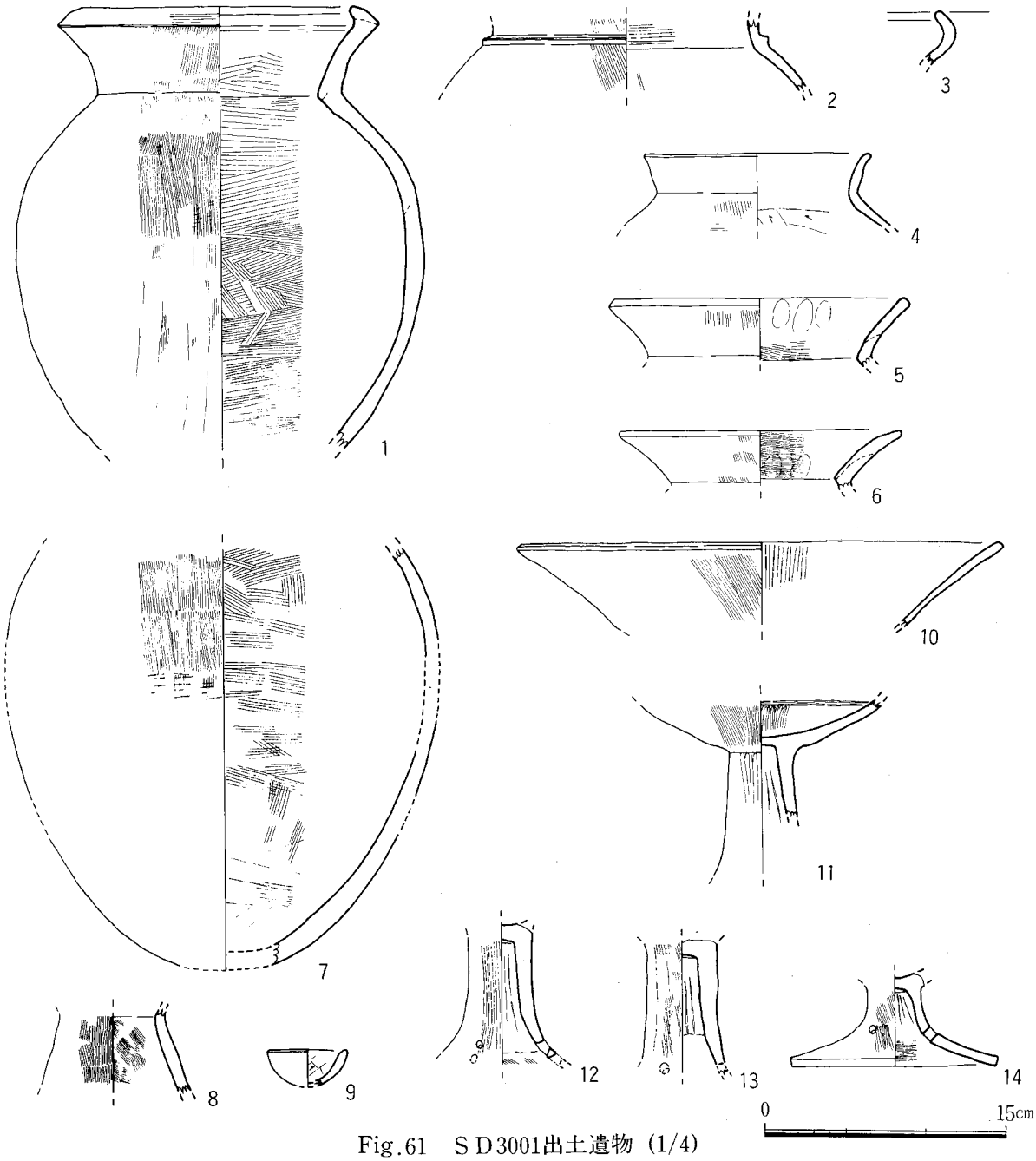


Fig.61　ＳＤ3001出土遺物（1/4）

る。外面はハケ、内面に暗文が入る。11は坏部から脚部1/2片。坏部外面はハケ、内面に細かい放射線状のヘラ研磨を加え、脚部外面はタテのヘラ研磨を加える。12～14は脚部片である。それぞれ円形の透し孔があるが、12は２段ある。13は３ケ所の透し孔がある。14は裾が大きく開く低い脚部1/3片で、復元脚端径は12.6cmを測る。外面細かいハケで下半はヘラ研磨、内面はナデと細かいヨコハケである。透し孔は３ケ所ある。

ＳＤ3002（Fig.57）　ＳＤ3001に切られ、東に湾曲して北に延びる小溝である。幅は25～60cm、検出面での深さは最大で18cmを測るが、北側土層面では28cmほどを測る。埋土は黒褐色粗砂礫である。**遺物**の出土はない。

ＳＤ3003（Fig.57、PL.24-(1)）　調査区中央、北方向に斜めに真っ直延びる小溝である。12.5mほ

ど延びて消えが、北壁の土層には溝の断面が認められるので、真っ直に北壁まで延びていく。幅は40～68cm、深さは最大で7cm余りで極めて浅い。埋土は黒色粘質砂で黒褐色粗砂礫を含む。**遺物**の出土はない。

ＳＤ3004（Fig.57）　調査区西側で、南壁から西壁に斜めに蛇行して延びる溝である。幅は74～170cm、深さは約30cmを測るが、南壁の土層観察では60cm余りであり。埋土は暗褐色から褐色粗砂である。自然流路であろう。**遺物**の出土はない。

ＳＤ3005（Fig.57、PL.24-(2)・(3)）　調査区西壁にかかって検出された溝で、II区のＳＤ2016から蛇行して続く自然流路である。深さは1m前後を測る。埋土は上層が暗褐色粗砂で、下層は黒褐色からオリーブ黒色粘土となり、最下層は灰黄褐色粗砂となる。**遺物**の出土はない。

5．IV区の調査

① 調査の概要

Ⅰ区の東側に位置する、用水路までの間の調査区である。調査地内の家屋の解体が遅れた為、調査は12月頃から年度変わりで一時中止した期間を挟んで、翌年６月まで行った。

検出した遺構の時期は縄文時代から近代までである。主な遺構としては縄文時代から古墳時代の溝・自然流路、近世の溝２条、畑に伴う溝、古代の埋甕１基、家畜骨の土坑２基、土坑などが検出された。また小規模のピットが多数検出されたが、建物としてはまとまらず、遺物が出土したものはほとんどなかった。自然流路については遺構面を一段下げた面で調査を行った。

② 遺構と遺物

土坑

ＳＫ4026（Fig.62） 21Ｇ区で検出した楕円形状の土坑。規模は長軸161cm、短軸81cm、深さ23cmを測る。底面には直径20cmほど、深さ５～20cmを測るピットが３個ある。埋土は黒褐色土である。**遺物**の出土はない。

ＳＫ4036（Fig.62、PL.28-(5)） 18Ｅ区で検出した不定形の大型土坑で、北側はＳＫ4031に切られている。北壁は少し掘り過ぎているが、規模は長軸170cm、短軸88cm、深さ50cmを測る。埋土は灰黄色シルト粘土で南半分は黒褐色粗砂ブロックを混入する。**遺物**は古墳時代から中世にかけての土師器、白磁の細片が出土している。

ＳＫ4048（Fig.62、PL.29-(1)） 17Ｇ区で検出した不定形の土坑。規模は長軸184cm、短軸125cm、深さ76cmを測る。底面は不安定でテラス状に深くなる。埋土は黄白色粘土と黒色粘土の混合土である。

出土遺物（Fig.64） 中世以降の土師器や白磁の小片が少量出土している。３は白磁皿の細片。外底部は露胎。４は土師器の小皿の細片である。底部は糸切りである。

ＳＫ4056出土遺物（Fig.64、PL.32-(1)） 18Ｇ区で検出した近代の撹乱土坑出土のものである。近世以降の土師器、陶器、瓦片が出土した。５～９は屋瓦である。５は丸瓦小片。６は軒丸瓦の瓦頭片。瓦頭面径は14cmを測る。巴文で、珠文の数は12である。７・８は軒平瓦の瓦頭片。中心飾りは三葉で、左右蔓草がある。７の瓦頭面長は24.6cm、幅４～６cmを測る。８の復元瓦頭長は29cm位か。７・８の形が異なるのは、使用される場所が違うからであろうか。同様の瓦はⅠ区でも出土している。９は袖瓦の一部か。

埋甕

ＳＸ4001（Fig.63、PL.28-(3)） ＳＤ4002上面で検出した須恵器の甕胴底部片である。掘方は甕ぎりぎりの大きさである。恐らく埋葬施設と思われるが、甕内部の黒褐色土の中に炭化物や骨片が含まれておらず、断定はできない。

出土遺物（Fig.63、PL.32-(1)） １は須恵器の甕の胴底部下半片。底部は不安定な丸底で、外面は平行叩き後ナデ、内面は同心円状の当て具痕が残る。

ＳＸ4031（FIg.63、PL.28-(4)） 18Ｅ区で検出した近代頃にかけてと思われる甕の底部片である。甕は円形の土坑の中にあり、畑に伴うものであろうか。

出土遺物（Fig.64、PL.32-(1)） ２は素焼きの甕の底部片で、底径15.2cmを測る。底部周辺は削り、その他はナデ。

家畜骨出土土坑

ＳＫ4022（Fig.62、PL.29-(2)）　20Ｅ区で検出した不整楕円形状の土坑。規模は長軸133cm、短軸97cm、深さ74cmを測る。土坑は段をもってピット状を呈して深くなる。この土坑のピット部分の上面で動物骨が出土した。埋土は暗褐色土である。**遺物**は骨以外の出土はない。

ＳＫ4063（Fig.62、PL.29-(3)）　18Ｄ区北西側で検出した。セメントで作ったような長方形の便槽の底部分の中から、家畜骨と便槽の破片が混ざって出土した。**遺物**は土師器や陶器の小片が数点出土した。近代の時期であろう。

溝・自然流路

何条もの埋没した自然流路が調査区内を縦横に流れるが、時間の関係上完全には調査出来なかった。主なものを報告する。

ＳＤ4002（Fig.66、PL.30-(1)・(2)）　調査区東側を南北方向に蛇行して流れる自然流路である。

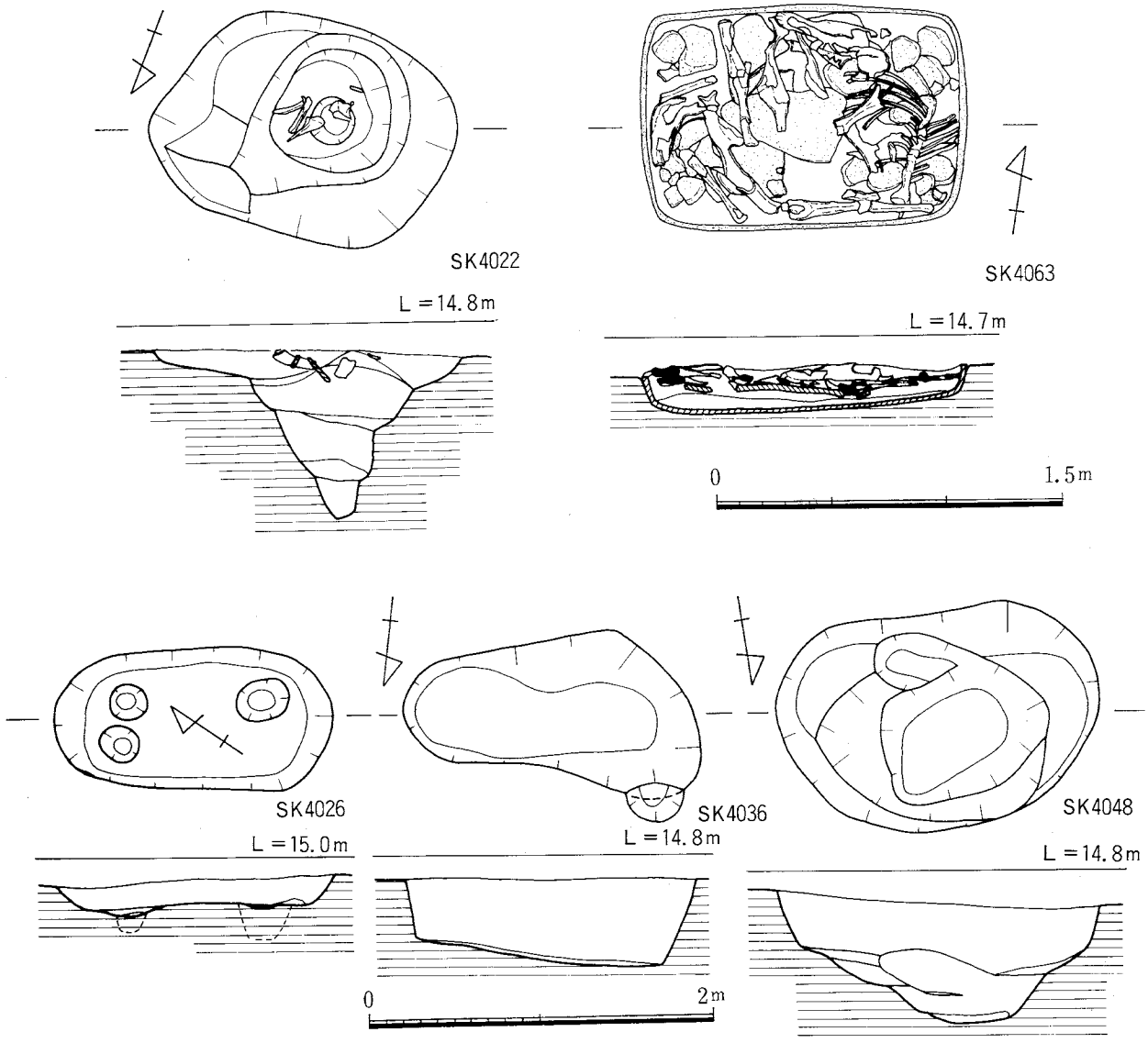


Fig.62　ＳＫ4022・026・036・048・063（1/30・1/40）

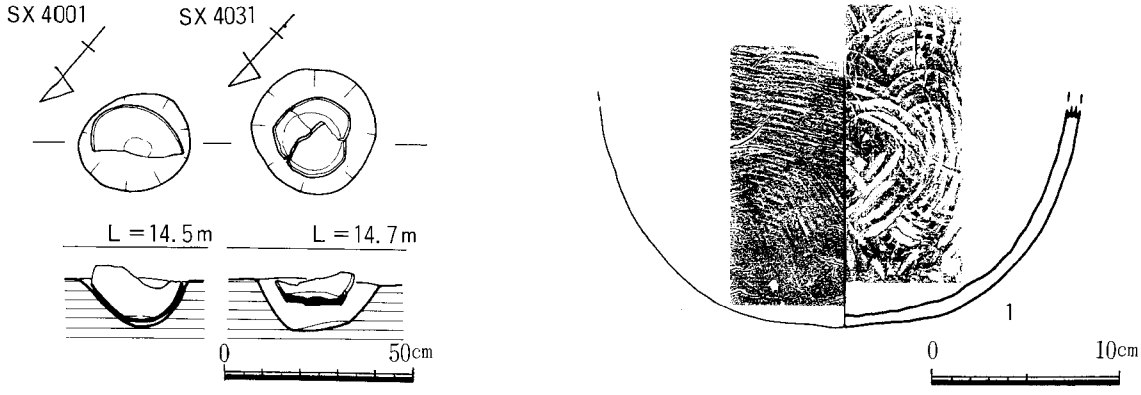


Fig.63　ＳＸ4001・030と出土遺物（1/20・1/4）

上面にはＳＸ4001が切っていた。調査区北壁の土層を見ると、幾筋もの流路の変遷が見てとれる。土層ベルトの部分では幅が5.4m、深さ1.65mを測る。埋土は上層が黒褐色砂混じり粘質土又は粘土で、中層は細砂や粗砂、下層は粗砂に粘土ブロックを多く含む。底の方には流木などがあった。

出土遺物(Fig.67、PL.30-(1))　縄文時代晩期の土器片、弥生土器や古墳時代の中期から奈良時代にかけての土師器・須恵器の細片が少量出土している。10は須恵器坏蓋1/6片で、復元口径11.4cmを測る。11は土師器の坏でほぼ完形。口径14cm、器高3.4cm、底形9.2cmを測る。底部ヘラ切りで板状の圧痕が残る。黒斑が一部ある。12は土師器の高台部1/2片。復元高台径9.7cmを測る。13は古墳時代後期の土師器甕口縁部片で、復元口径10.4cmを測る。器表は磨滅がひどい。14～18は須恵器である。14・15は坏身口縁部片で、14は1/6片で、復元口径10cmを測る。６世紀前半代のもの。15は細片。７世紀初めのもの。16は坏口縁部片で、復元口径17.5cmを測る。全面ナデである。17は高台部片で、復元高台径10.8cmを測る。内外面はナデ。18は貼り付けの耳の部分である。直径６㎜の円孔があく。19・20は土師器の把手。いずれもは差し込み式であるが、20の器壁は薄く、外面ハケを加える。21は須恵器坏身細片。７世紀初めのもの。22・23は縄文時代晩期の浅鉢口縁部細片。いずれも磨滅がひどい。

10は上層、13～20は下層、21～23は底からの出土である。流路自体は古墳時代後期から、奈良時代位にかけて流れ、平安時代には埋没していたのであろう。

ＳＤ4004　ＳＤ4001の東側で検出した小溝である。**遺物**は中世頃の土師器片が少量出土している。

ＳＤ4006　調査区北東隅で検出した小溝で、ＳＤ4003に平行する。南側は地下げで消滅する。確認長８m、幅60cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粗砂混じり土である。**遺物**の出土はない。

ＳＤ4008(PL.29-(4))　調査区北東隅で検出した小溝。撹乱などで残りは悪い。確認長６m、幅1.3m、深さ60cmを測る。埋土は黒褐色土が主体である。**遺物**は弥生土器や土師器の細片、黒曜石剥片が少量出土している。

ＳＤ4012(Fig.66、PL.29-(5)・30-(3))　調査区南壁際を東西に延びる溝である。ＳＤ4013を切る。溝幅は約1.6～1.8m、深さ0.7～1mを測る。埋土は上層が黒褐色から暗オリーブ褐色土、下層は砂や地山粘土を含む。

出土遺物（Fig.67）　近世の土師器・陶磁器・土師質土器や瓦、黒曜石の剥片などが少量出土している。24・25は陶器である。24は碗底部片で、高台径4.7cmを測る。25は唐津の皿口縁部小片。17世紀前半のもの。26は肥前磁器の染付皿1/4片。復元高台径6.6cmを測る。

ＳＤ4013（Fig.66、PL.29-(5)）　ＳＤ4012の南側で検出した溝で、ＳＤ4012に比べ規模は小さい。幅は60cm前後、深さは30～35cmを測る。埋土は暗褐色土で下の方は黒褐色土を含む。

出土遺物（Fig.67、PL.32-(2)）　土師器や須恵器、近世の陶器・磁器などが少量出土している。27は陶器の皿底部1/2片で、復元高台径4.8cmを測る。見込に２カ所の砂目痕が残る。外底部は露胎でケズリである。17世紀前半の唐津である。28は白磁碗底部1/4片で、復元底径6.8cmを測る。外底部は露胎でケズリ、畳付は擦っている。

ＳＤ4017　調査区中央を南北に蛇行して流れる小溝である。北端はＳＤ4002に重なる。幅は0.6～0.9m、深さは20cm前後を測る。埋土は黒褐色から灰黄褐色粗砂である。**遺物**は弥生土器から土師器の細片が出土している。

ＳＤ4021　調査区東側で検出した南東から北西に蛇行して流れる自然流路。幅は1.3～1.9m、深さ5～20cmを測る。埋土は褐色粗砂である。**遺物**は弥生土器から土師器の磨滅した細片が少量出土している。

ＳＤ4025（PL.29-(5)）　ＳＤ4002に平行する小溝である。幅は50cm、深さ５cmを測る。埋土は黒褐色粗砂である。**遺物**は須恵器の細片が１点出土している。

ＳＤ4018・19・30・31・35・39は南北方向の小溝で、埋土は暗オリーブ褐色土である。畑に関係する溝か。**遺物**はＳＤ4018から土器の細片が少量出土している。

ＳＤ4029出土遺物（Fig.67）　南東側のＳＤ4002に繋がると思われる半円形状の自然流路から出土

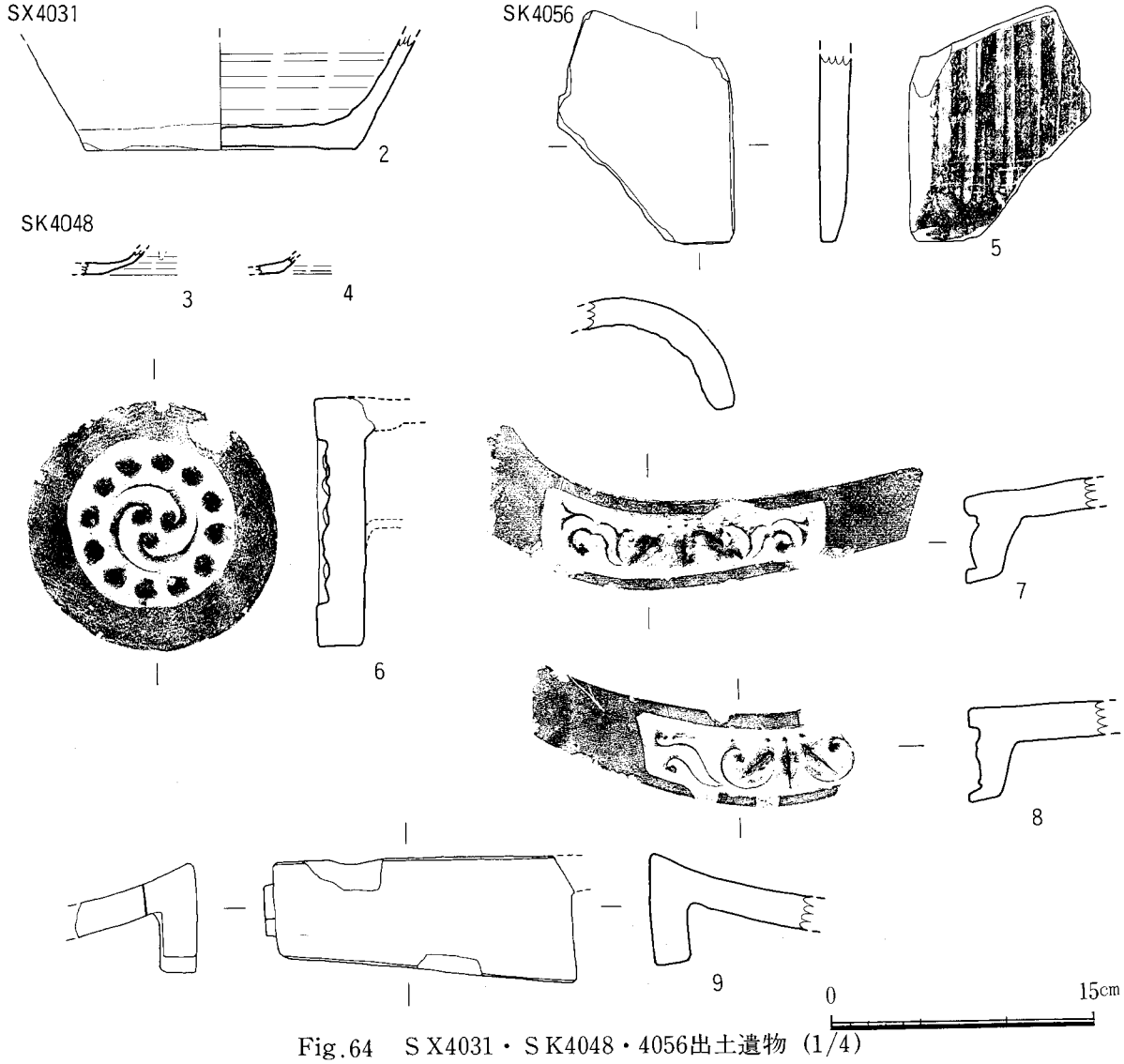
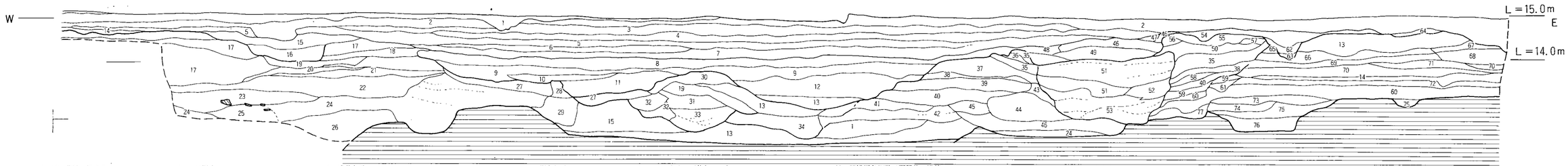


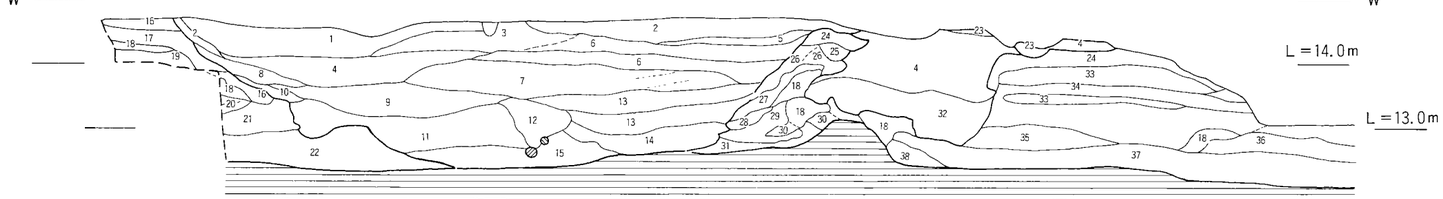
Fig.64　ＳＸ4031・ＳＫ4048・4056出土遺物（1/4）

SD4002北壁土層



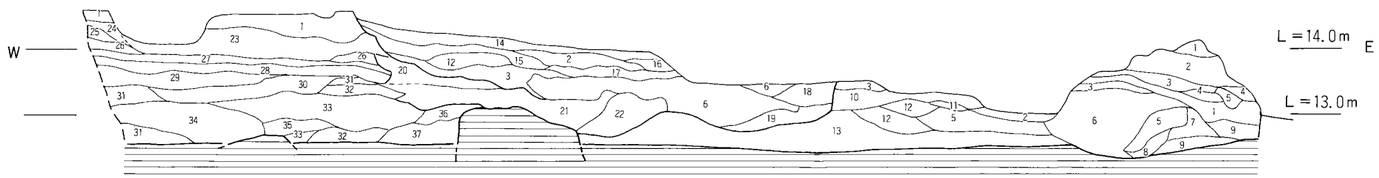
SD4002北壁土層名称
1　盛土
2　黒褐色土（表土）
3　暗灰黄色土
4　黒褐色土（3を多く混入）
5　2と14の混合
6　黒色粘土
7　黒褐色粗砂混じり粘質土
8　黒褐色粗砂（下層にオリーブ黒色粘土混入）
9　褐灰色粘質砂（浅黄色砂を混入する）
10　浅黄色砂
11　黄灰色シルト細砂と灰白色シルト質細砂の縞状の互層
12　灰白色粗砂とにぶい黄橙色粗砂の互層
13　にぶい黄橙色粗砂礫
14　黒色砂混じり粘土
15　褐色粗砂
16　にぶい黄褐色砂
17　暗黄褐色粘質細砂（粗砂を混入）
18　17（19をレンズ状に含む）
19　にぶい黄褐色粗砂礫
20　オリーブ黄色シルト
21　灰オリーブ粘質シルト
22　オリーブ黒色粘質細砂
23　灰黄色中粒砂
24　灰白色粗砂礫（灰黄褐色粘質細砂を間層で挟む）
25　明緑灰色細砂で互層状に堆積
26　緑黒色粘土（砂質である）
27　黄灰色細砂（浅黄色粗砂を縞状に挟む）
28　黒褐色粘質砂質土
29　15（塊に黒褐色粘質砂を挟む）
30　褐灰色粘質細砂（灰白色粗砂を混合）
31　灰黄色細砂（間に粗砂礫を挟む）
32　黒色粘土大ブロックと15の混合
33　灰白色中粒砂（左下がり）
34　灰オリーブ粘質中粒砂との混合
35　灰オリーブシルト質細砂
36　にぶい黄色砂
37　灰黄色粗砂礫（36を薄く挟む）
38　灰白色細砂
39　灰オリーブ細砂（粗砂礫を間に挟む）
40　灰色粘質細砂（植物を含む）
41　灰黄色細砂（灰色粘質細砂を挟む）
42　灰黄色粗砂礫（下層に黒色粘土大ブロックを混入）
43　35（灰白色細砂を互層状に挟む）
44　13（鉄分を多く含む）
45　45（黒色粘土ブロックを含む）
46　黒褐色中粒砂と灰白色粗砂の混合
47　黒褐色粗砂混じり土
48　黒褐色粗砂（黒色粘質土大ブロック混入）
49　褐色中粒砂
50　にぶい黄色細砂
51　オリーブ褐色粗砂（35を互層状に挟む）
52　灰オリーブシルト質細砂（灰白色細砂を互層状に挟む）
53　13（52を互層状に挟む）
54　黒褐色土（暗オリーブ褐色土少量混入）
55　褐灰色粗砂礫
56　にぶい黄色粗砂混じり細砂
57　浅黄色シルト粘土
58　灰黄色粗砂礫
59　黒色粘土（軟質で粗砂混じり）
60　オリーブ黒色粘土（やや軟質で粘性が強い）
61　40（6ブロックを少量混入）
62　黒褐色土（13ブロックを混入）
63　13と62の混合
64　黒褐色粗砂混じり砂
65　暗灰黄褐色粗砂混じり砂（表土混入）
66　黄灰色砂混じり粘土
67　オリーブ黒色砂質土
68　暗オリーブ褐色中粒砂
69　黄褐色中粒砂
70　暗灰黄色粘質シルト
71　黒褐色粗砂混じり粘土
72　灰色粘土
73　灰オリーブ粘質シルト
74　灰黄褐色粗砂（73を混入）
75　74（73の混入が多い）
76　灰黄褐色粗砂礫（鉄分を多く含む）
77　黒褐色粘土と明黄褐色粗砂の互層

3号トレンチ北壁土層



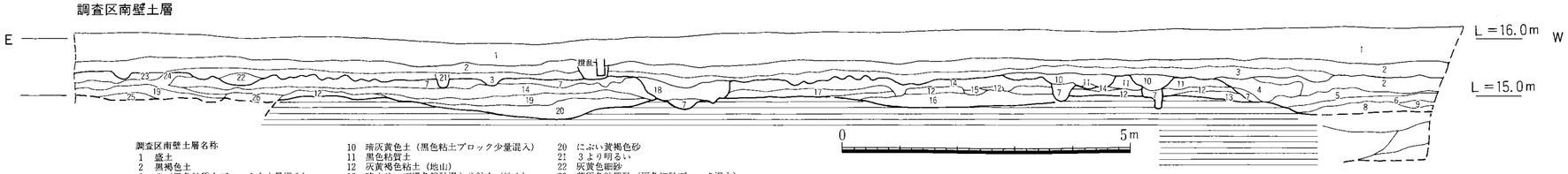
3号トレンチ北壁土層名称
1　暗褐色粗砂礫
2　灰オリーブ粘質シルト細砂
3　灰黄褐色中粒～粗砂
4　にぶい黄橙色粗砂
5　灰オリーブ細砂
6　灰黄褐色細砂
7　暗灰黄色粗砂
8　オリーブ黄色粘質細砂（下層に灰白色細砂を挟む）
9　灰白色粗砂（7を縞状に挟む）
10　8（黒褐色粘質細砂と灰白色粗砂礫を挟む）
11　7（灰オリーブ粗砂礫を混入）
12　青黒色粘土
13　5と灰白色粗砂礫の互層（黒色粘土ブロックを混入）
14　灰白色粗砂礫（黒灰色粘土大ブロックを混入）
15　12と21の混合
16　黒褐色粘質粗砂
17　灰オリーブ粗砂混じり細砂
18　黒色粘土（軟質である）
19　灰オリーブ細砂混じり砂
20　暗灰黄色細砂と黄灰色粗砂の互層
21　暗オリーブ灰色灰色砂質粘土
22　21と暗灰黄色粗砂の互層
23　灰オリーブシルト粘土
24　浅黄色細砂
25　灰白色粗砂礫と24の混合
26　6（粗砂礫多く混入）
27　褐灰色粘土
28　黒褐色粘土（暗緑灰色粘土を混入）
29　28（暗緑灰色細砂を互層状に含む）
30　緑灰色粘土
31　灰オリーブ粗砂礫
32　灰白色粗砂礫
33　灰オリーブシルト質細砂
34　32（33を混入）
35　灰オリーブ細砂と灰白色細砂の互層
36　オリーブ黄色中粒砂
37　36（明黄褐色粗砂を間層に挟む）
38　黄白色粘土ブロック（明黄褐色粗砂を挟む）

5号トレンチ北壁土層



5号トレンチ土層名称
1　にぶい黄褐色粗砂礫（浅黄色細砂を間層で挟む）
2　浅黄色シルト質細砂（にぶい黄褐色粗砂礫をレンズ状に挟む）
3　オリーブ黄色粘質砂と黒褐色シルト質細砂の互層
4　黄褐色細砂
5　黒色砂質粘土
6　灰黄褐色粗砂礫（黄褐色粘土ブロック少量混入）
7　5と灰白色・橙色粗砂の混合
8　5と緑灰入細砂の混合
9　オリーブ黒色粘土と1の混合
10　黒褐色粘質砂
11　明黄褐色粗砂
12　灰白色粗砂礫（11をレンズ状に挟む）
13　灰白色粗砂（鉄分を含む）
14　2（灰黄褐色細砂を薄く挟む）
15　14（灰白色中粒砂を挟む）
16　3（黄橙色粗砂礫をレンズ状に挟む）
17　14と16の互層
18　2（黒褐色粘質細砂混入）
19　6（オリーブ黒色粘土大ブロック混入）
20　3（にぶい黄褐色粗砂礫をレンズ状に挟む）
21　灰黄色中粒砂（黄灰色粘土少量混入）
22　黒褐色砂質粘土（2を混入）
23　にぶい黄橙色粗砂
24　浅黄色粘質シルト砂
25　暗灰黄色砂質粘土
26　にぶい黄色中粒砂
27　オリーブ黄色シルト粘土
28　灰色シルト粘土
29　28よりやや暗い
30　オリーブ黒色粘質細砂（灰黄色砂を互層状に挟む）
31　灰白色中粒砂
32　浅黄色粗砂礫
33　にぶい黄橙色粗砂礫
34　33に31が間層で入る
35　22（31をブロック状に挟む）
36　6（オリーブ黒色粘土大ブロックを混入）
37　灰色粘質細砂

調査区南壁土層



調査区南壁土層名称
1　盛土
2　黒褐色土
3　2（黒色粘質土ブロックを少量混入）
4　2（黒褐色粘質土を多く混入）
5　6（黒色粘質土ブロック混入）
6　暗灰黄褐色土（黒色粘質土ブロック混入）
7　黒褐色粘質土
8　黒褐色土
9　8（黒色粘質土混入）
10　暗灰黄色土（黒色粘土ブロック少量混入）
11　黒色粘質土
12　灰黄褐色粘土（地山）
13　暗オリーブ褐色粗砂混じり粘土（地山）
14　黒褐色粘土
15　黒褐色粘質砂混じり土
16　暗灰黄褐色粘質粗砂
17　黒色粘土
18　3（17と灰オリーブ粘質シルト混入）
19　黒色粘質粗砂
20　にぶい黄褐色砂
21　3より明るい
22　灰黄色細砂
23　黄灰色粘質砂（灰色細砂ブロック混入）
24　オリーブ黒色粘質砂
25　黒褐色粘質細砂
26　粗砂

Fig.65　IV区北壁・南壁・3号・5号トレンチ土層図（1/80）

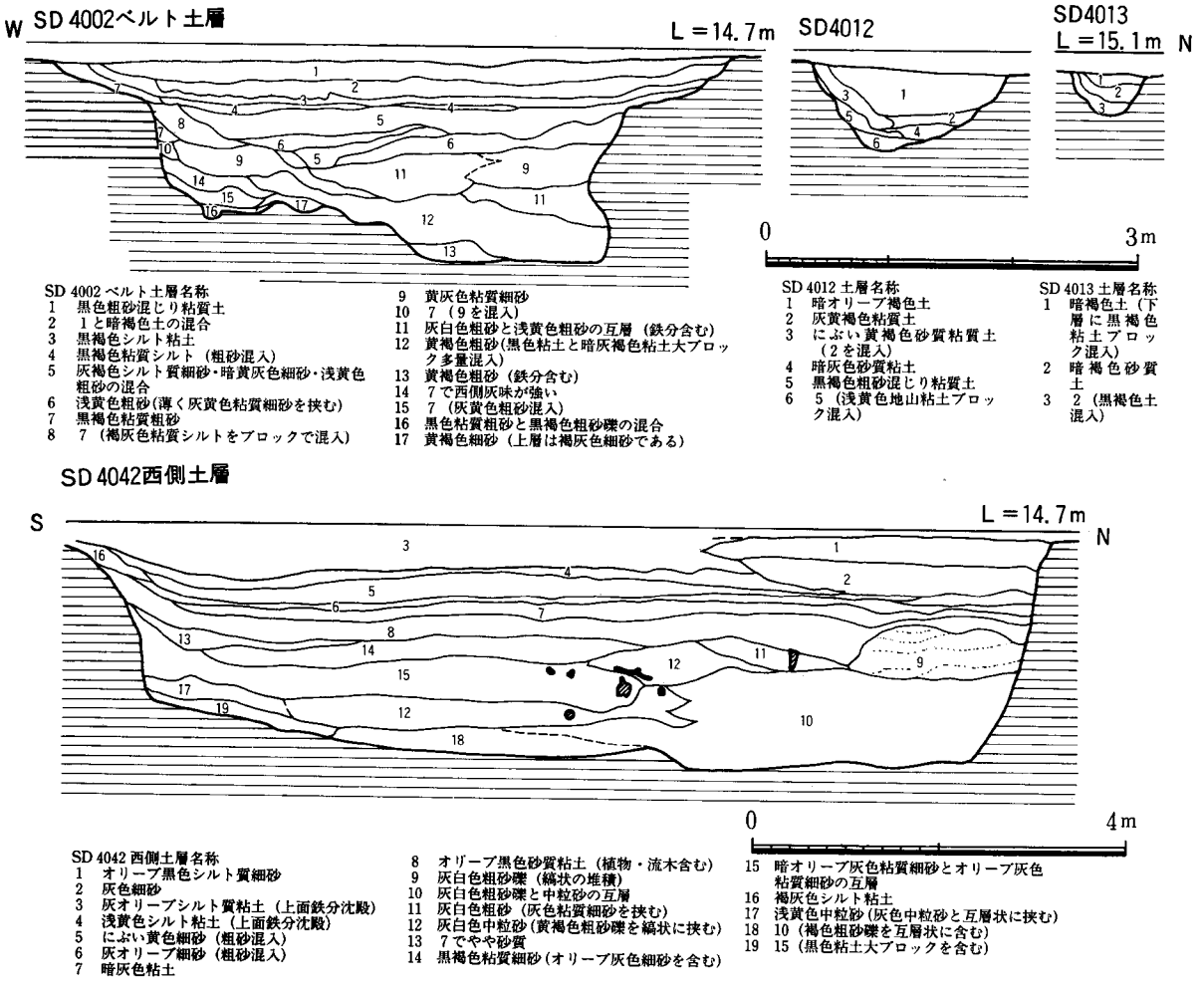


Fig.66　ＳＤ4002・012・013・042土層図（1/60・1/80）

した遺物。須恵器・土師器、黒曜石の剥片が出土している。29は土師器の高坏坏部1/8片。復元口径16cmを測る。内外面ナデ、焼成はやや甘い。

ＳＤ4040（Fig.65）　調査区東側、ＳＤ4002の下層で検出した古期の流れである。埋土は粗砂で、底には粘土ブロックを含む。**遺物**の出土はない。

ＳＤ4041（Fig.68、PL.31-(2)）　下面で検出した調査区東側を南北に蛇行して流れる自然流路である。北側はＳＤ4002、中央部で、ＳＤ4042・043と重なる。幅は確認出来るところで6m、深さ2mを測る。埋土は粗砂と細砂の互層である。砂層に流木を含む。**遺物**は縄文土器・弥生土器・土師器と思われる細片や、黒曜石の剥片などが出土している。量は少なく、磨滅している。

ＳＤ4042（Fig.66・68、PL.31-(1)）　下面で検出した調査区中央を東西に流れる自然流路である。ＳＤ4043に切られる。幅は10m以上、深さは2.5mを測る。埋土は上層が粘土、細砂、粗砂礫などの水平堆積、中層から下層にかけて流木が多量に堆積し、粗砂礫が主体となる。川底には流木が溜っていた。その中には人為的な痕跡のあるものもあった。

出土遺物（Fig.67）　上面で土師器らしき土器片、下層で縄文土器らしき土器片や黒曜石の剥片、種実などが少量出土している。30は縄文土器の口縁部片。口縁外面は太い沈線で、口端部には貝殻腹縁の刻目がある。前期の轟式か。

ＳＤ4043（Fig.68、PL.30-(4)・31-(1)）　下面で検出した調査区東側を南東隅から北に蛇行して流れる自然流路である。ＳＤ4041・042を切り、北側ではＳＤ4002に切られる。川幅は６～10m、深さ1.9～2.2mを測る。埋土は粗砂礫と細砂の互層で、下層には流木を含む。**遺物**は縄文土器片や黒曜石の剥片などが少量出土している。

ＳＤ4050　調査区南側中央部で検出した弧を描いて流れる自然流路。東側では未掘である。新期の流れと古期の流れ（旧ＳＤ4059）がある。幅は２～３m、深さは0.9m程を測るが一定していない。埋土は暗褐色粗砂礫及び暗オリーブシルト質細砂である。**遺物**は上層では磨滅した土器の細片、下層では縄文土器の細片と黒曜石の剥片などが少量出土している。

ＳＤ4058　調査区南西隅で検出した自然流路である。幅は1.5～2.5m、深さは20cm前後である。埋土はにぶい黄橙色粗砂である。**遺物**の出土はない。

ＳＤ4060（Fig.69、PL.31-(3)）　下面で検出した調査区南西側を東西に流れる自然流路である。幅７～８m、深さ1.6mを測る。埋土は粗砂や細砂が主体である。大きく２回ほどの時期の流路が確認出来る。川底には流木や大木の根などがあった。

出土遺物（Fig.67）　縄文土器片や石器剥片が少量出土している。31は縄文土器の胴部小片。器表の磨滅がひどいが、楕円押型文土器の小片か。

ＳＤ4062出土遺物（Fig.67）　調査区北西壁際の近代の溝から出土したもの。32は内反りの方形を呈する土師質の土製品。縦6.2cm、横5.7cm、厚さ１cmを測る。左中央に径２×2.2cmの円形の凹みがあ

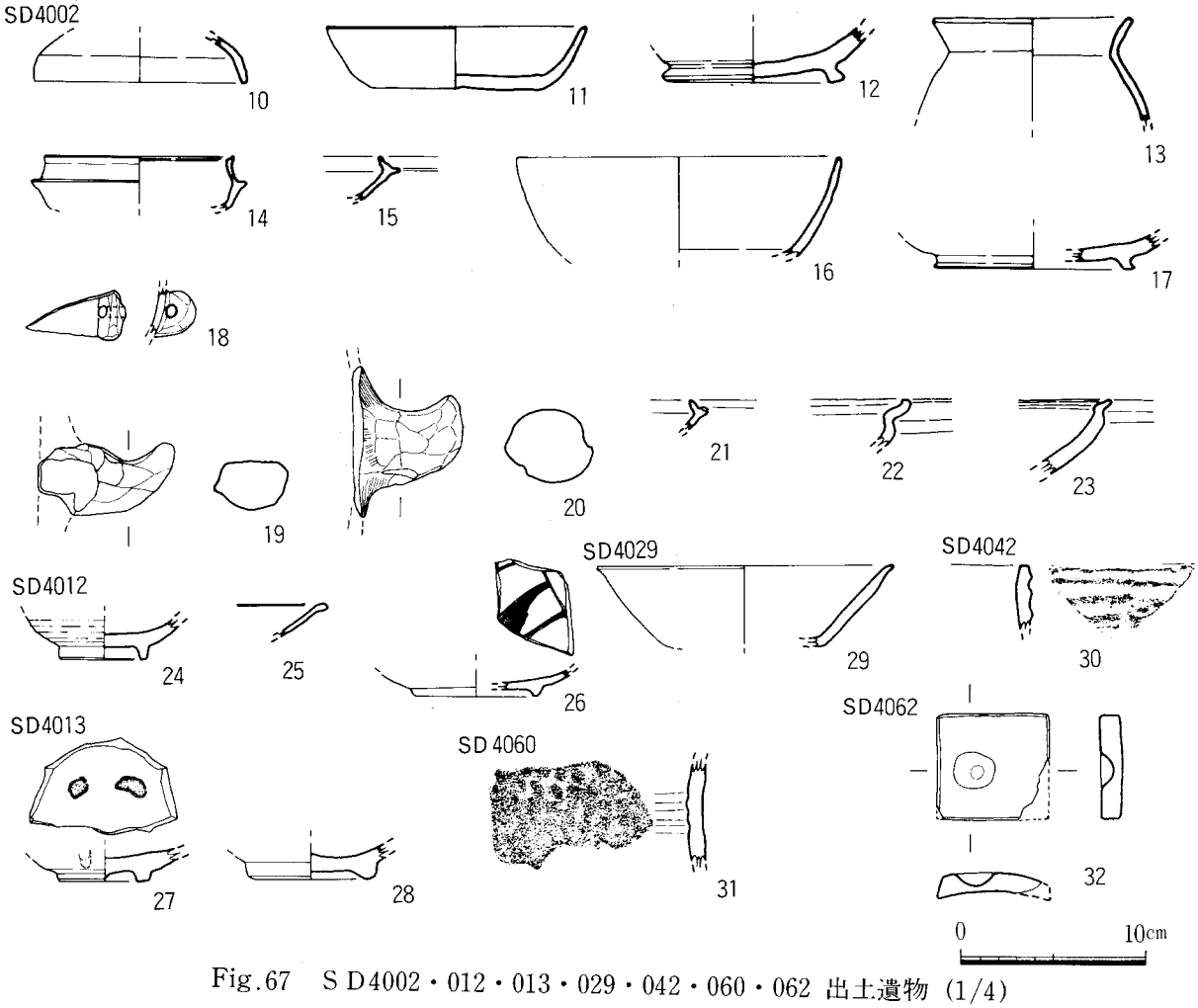
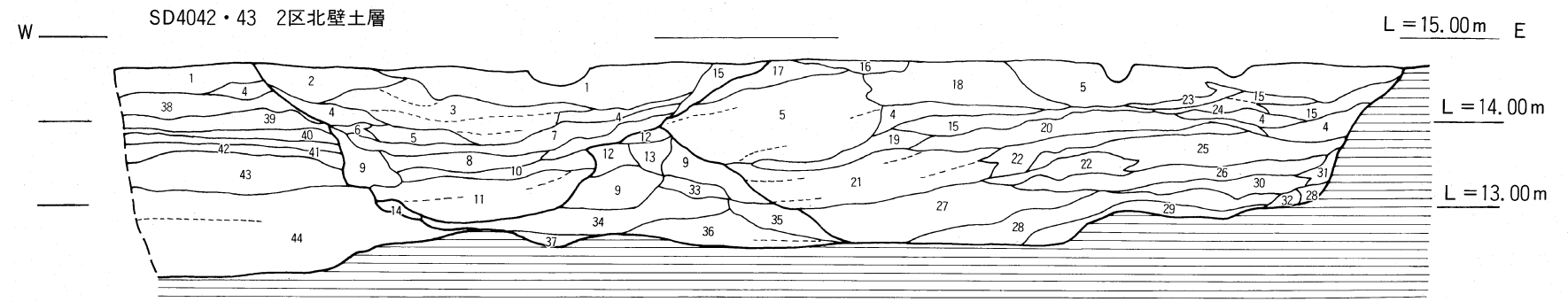
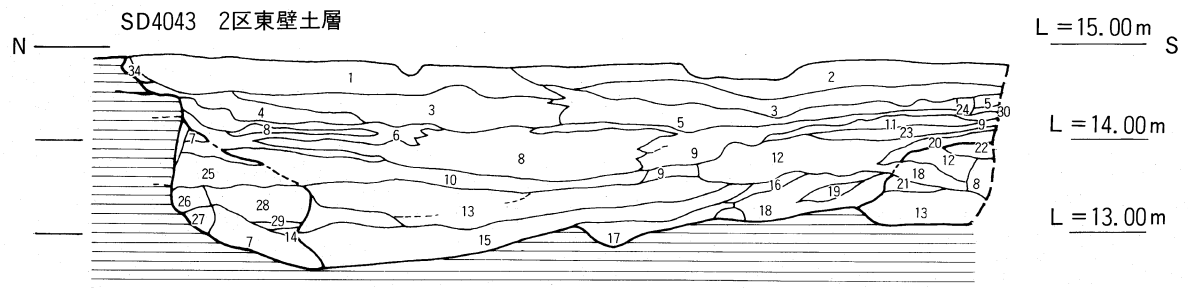
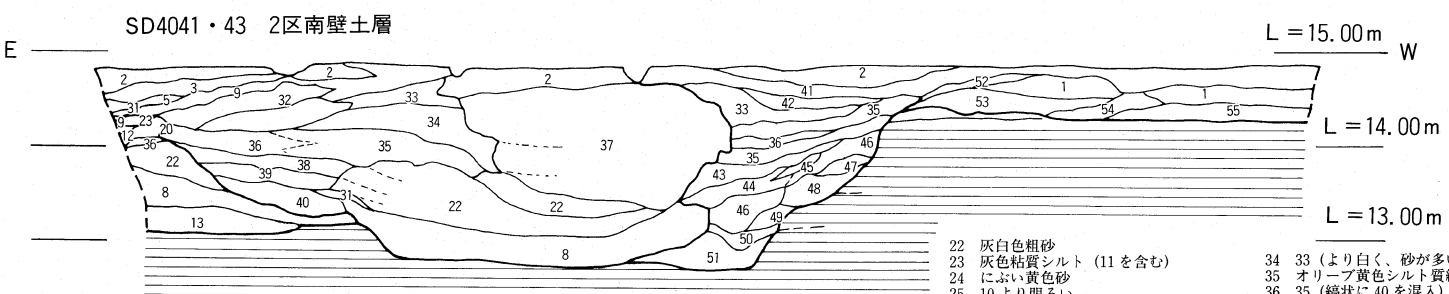


Fig.67　ＳＤ4002・012・013・029・042・060・062 出土遺物（1/4）



SD 4042・43 2区北壁・東壁土層名称
1　暗褐色粗砂
2　にぶい黄褐色中粒砂
3　にぶい黄橙色粗砂
4　灰オリーブシルト質細砂（薄く黒褐色細砂を挟む）
5　黄褐色粗砂
6　4（3を多量混入）
7　5で東側は4に変わる
8　暗灰色粘土（8を互層状に薄く挟む）
9　暗灰色粘土
10　7（下層に9を薄く挟む）
11　灰オリーブ粗砂
12　黒褐色粗砂混じり粘土
13　4と灰白色粗砂の混合
14　褐灰色粘土
15　にぶい黄色シルト質細砂
16　浅黄色シルト質細砂
17　黒褐色粗砂
18　にぶい黄色細砂
19　灰オリーブシルト質細砂（西側灰白色粗砂に変わる）
20　15（灰黄色中粒砂を挟む）
21　灰黄色粗砂礫
22　15（西側暗灰黄色粘質砂を多く挟む）
23　灰オリーブ細砂と5の混合
24　5と15の混合
25　15（灰白色粗砂を多量混入）
26　21と灰白色粗砂の互層
27　灰白色中粒砂（東側褐灰色粘質細砂に変化）
28　灰黄色粗砂礫（鉄分を含む）
29　28（黒色粘土ブロックを少量混入）
30　28（暗オリーブ褐色粗砂を帯状に含む）
31　黒色粘土
32　黄灰色シルト粘土（鉄分を含む）
33　21（褐灰色粘質細砂を混入）
34　黄褐色粗砂礫（黒色粘土少量混入）
35　黒色砂質粘土（21をブロック状に含む）
36　明黄褐色粗砂（鉄分含む）
37　明黄色粗砂礫
38　灰黄色中粒砂
39　浅黄色シルト粘土
40　にぶい黄色粘質細砂
41　灰色砂質粘土
42　オリーブ黒色粘質細砂（灰白色細砂を縞状に挟む）
43　灰白色粗砂礫の互層
44　43より粒子が粗い



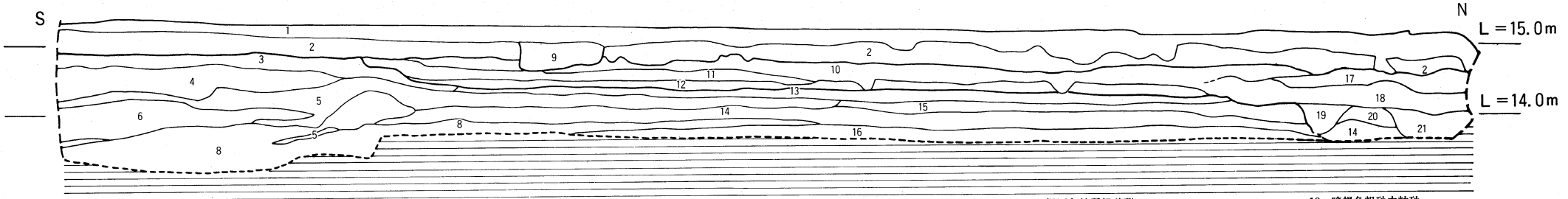


SD 4041・43　2区南壁土層名称
1　にぶい黄褐色粗砂
2　暗褐色粗砂
3　黄褐色砂
4　にぶい黄橙色粗砂
5　灰オリーブシルト質細砂（灰白色中粒砂を互層状に挟む）
6　灰オリーブシルト質細砂
7　黒色粘土
8　灰色細砂と粗砂の互層
9　灰オリーブシルト質細砂（灰白色細砂を薄く挟む）
10　灰色粗砂（灰色粘土ブロック混入）
11　灰白色細砂
12　灰色シルト質粘質細砂（灰白色・明黄褐色細砂を縞状に挟む）
13　灰オリーブ粗砂礫（7ブロックを少量含む）
14　黄灰色粘土（7を薄く挟む）
15　13（14ブロックを少量混入）
16　オリーブ黒色粘土
17　にぶい黄色粗砂（褐灰色粘土ブロック混入）
18　灰白色中粒砂（互層状に堆積）
19　灰色細砂とにぶい黄色細砂の互層
20　にぶい黄色中粒砂
21　黄灰色粘質細砂
22　灰白色粗砂
23　灰色粘質シルト（11を含む）
24　にぶい黄色砂
25　10より明るい
26　黒褐色粘質砂（黄灰色粘土大ブロック混入）
27　灰黄色中粒砂（7を少量混入）
28　7（植物を含む）
29　7（灰色粘質細砂少量混入）
30　黒褐色粘質粗砂
31　にぶい黄橙色細砂
32　黄褐色中粒砂
33　灰黄色シルト質細砂（にぶい黄褐色粗砂混入）
34　33（より白く、砂が多い）
35　オリーブ黄色シルト質細砂
36　35（縞状に40を混入）
37　1で縞状に堆積する
38　褐灰色砂質粘土（灰白色細砂を薄く挟む）
39　オリーブ黒色細砂質粘土
40　36で流木を含む
41　にぶい黄色シルト粘土（縞状に堆積）
42　9（粗砂を混入）
43　34とオリーブ黒色粘質砂の混合
44　灰色粘質砂
45　オリーブ黒色粘質粗砂
46　45と46の混合
47　褐色粗砂（48ブロック混入）
48　暗灰色粘土
49　暗緑灰色砂質粘土
50　暗オリーブ灰色砂質粘土
51　黄橙色粗砂礫
52　41と1の混合
53　暗灰黄色中粒砂
54　にぶい黄色シルト質細砂
55　暗灰黄色粗砂

0　5m

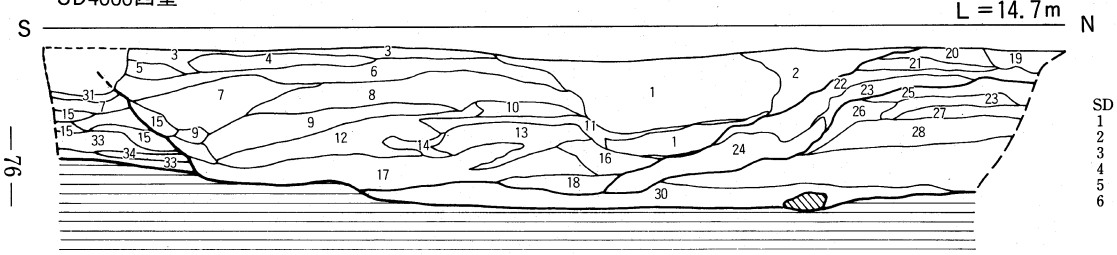
Fig.68　ＳＤ4041～043土層図（1/80）

調査区西壁



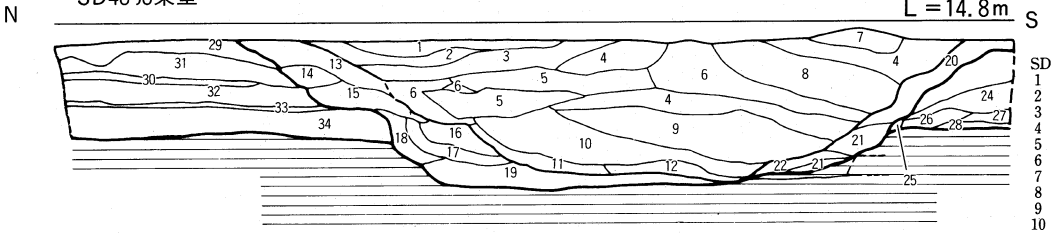
西壁土層名称
1　盛土
2　黒褐色土（表土）
3　灰黄褐色土
4　にぶい黄褐色細砂
5　灰オリーブ細砂（やや粘性を持つ）
6　黄褐色粗砂礫（互層状を呈す）
7　5と6の互層
8　暗オリーブ褐色粗砂礫（6との間に黒褐色細砂層を薄く挟む）
9　暗褐色土と黒色粗砂混じり土ブロックの混合（攪乱）
10　黒色粗砂混じり土
11　灰黄色細砂
12　褐灰色粘質粗砂礫
13　黄褐色粘質シルト（粗砂、鉄分を含む）
14　灰オリーブシルト（鉄分を含む）
15　14（粗砂礫を混入）
16　灰オリーブ細砂
17　黒褐色粗砂（下方は褐色味を帯び、粘性が強い）
18　暗褐色粗砂中粒砂
19　灰粗砂混じり細砂
20　灰シルト質細砂
21　オリーブ褐色粗砂

SD4060西壁



SD 4060 西壁土層名称
1　にぶい黄褐色粗砂
2　灰黄色粗砂
3　灰黄褐色シルト粘土
4　灰黄褐色中粒砂
5　オリーブ黄色シルト粘土
6　浅黄色粘質シルト
7　暗オリーブ褐色中粒～粗砂
8　7でやや明るい
9　オリーブ褐色粗砂礫（灰黄色粘土少ブロック少量混入）
10　灰白色細砂
11　浅黄～灰白色粘質細砂
12　にぶい黄橙色粗砂礫
13　黒褐色粘質細砂（灰白色ブロックを多く混入）
14　灰白色粗砂
15　暗オリーブ褐色粗砂礫
16　灰白色中粒砂の互層
17　にぶい黄色中粒～粗砂（14を挟む）
18　黄褐色粗砂礫
19　暗褐色粗砂
20　暗灰黄色粘質細砂（下方は粘性が強い）
21　黄褐色砂（粗砂礫を含む、粘性が強い）
22　浅黄色シルト粘土（粗砂礫を混入）
23　浅黄色砂質シルト（10を混入）
24　黒褐色粘質砂（植物を多量混入）
25　浅黄色砂質シルト
26　浅黄色砂質シルト～灰黄色粗砂礫（灰白色砂をレンズ状に挟む）
27　26（灰白色細砂を薄く挟む）
28　1で縞状の水平堆積
29　灰黄色粗砂礫
30　明黄褐色粗砂礫と灰白色粗砂礫
31　暗灰黄色細砂
32　暗灰黄色粗砂礫
33　灰黄色粗砂
34　灰オリーブ細砂

SD4060東壁



SD 4060 東壁土層名称
1　黒褐色砂
2　灰オリーブ粘質細砂
3　にぶい黄色砂
4　褐色中～粗砂
5　3（粒子が粗くなる）
6　浅黄色シルト質細砂
7　暗褐色粗砂
8　4で右下がりの縞状の堆積
9　4で右下がりの縞状の堆積
10　5で右下がりの縞状の堆積
11　暗灰黄色粗砂礫
12　灰色粘質細砂（灰白色粗砂を混入）
13　灰黄褐色粘質細砂
14　灰オリーブ砂
15　暗灰黄色シルト質粘質砂
16　オリーブ褐色粗砂礫
17　灰色シルト質粘土
18　黒褐色シルト質細砂（植物を含む）
19　灰黄色粗砂礫（暗灰黄色粘土を挟む）
20　黄灰色粗砂混じり粘質砂
21　暗灰色粘質細砂
22　黒褐色粘質細砂（植物を含み、鉄分が沈殿する）
23　オリーブ褐色粗砂礫
24　灰オリーブ粗砂混じり粘質細砂
25　24で粘性が強い
26　24（やや明るく粗砂を含む）
27　暗オリーブ粗砂
28　灰色粘質シルト（粗砂混じり）
29　灰黄褐色粘質細砂
30　暗褐色粗砂礫
31　灰オリーブ粘質細砂
32　31と11の互層
33　オリーブ黄色粘質シルト
34　34　灰色シルト粘質土

0　5m

Fig.69　Ⅳ区西壁・ＳＤ4060土層図（1/80）

る。七輪の風口であろうか。

ＳＤ4064　調査区区南西側下面で検出した自然流路。ＳＤ4042の流れに繋がる可能性がある。規模はトレンチ調査の為はっきりしない。埋土は暗緑灰色粘質細砂または砂質粘土である。川底からは流木や種実などが出土している。遺物は縄文土器片や石器剥片が少量出土した。

各遺構出土遺物（Fig.70）　33は長方形状の小型の砥石。断面は方形を呈する。全長9.2cm、最大幅3.7cm、厚さ2.9cmを測る。砥面として全面使用している。全面磨滅するが、仕上げ砥石か。石材は青銅器の鋳型の石材に近い。34も小型の砥石か。全長5.9cm、幅1.7cm、厚さ1.4cmを測る。上面が砥面で、其の他の面は研磨されている。石材は砂岩である。35は素焼きの泥面子である。直径2.2cm、厚さ0.4cmを測る。36は斜めに削った加工痕がある木片である。全長14.5cm、径4.5×６cmを測る。芯持ち材である。33・34はＳＤ4002、35はＳＸ4045、36はＳＤ4060出土である。

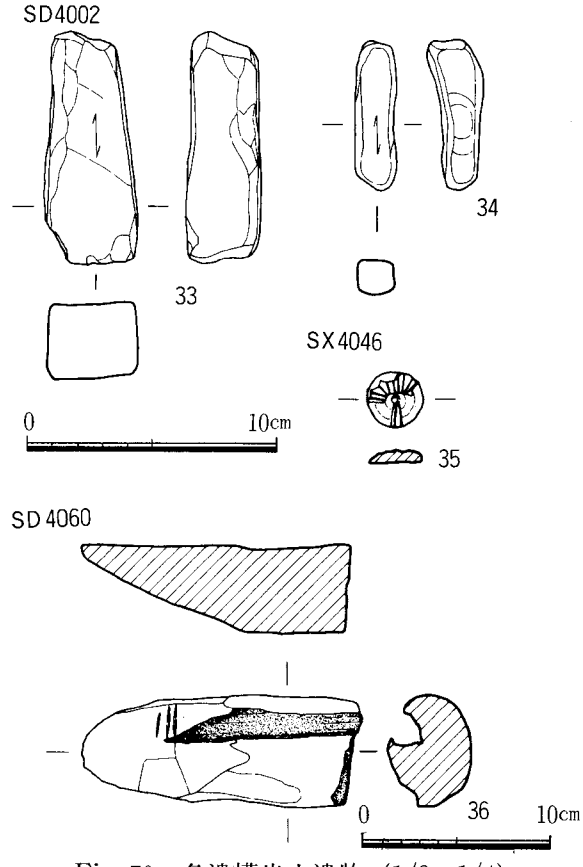


Fig.70　各遺構出土遺物（1/3・1/4）

6．V区の調査

①．調査の概要

I区調査区北西側、道路を挟んで位置する三角形の調査区である。調査区の半分以上が構造物のコンクリートの撹乱であり、自然面が残る部分では、自然流路の肩の部分を確認した。流路の深さは地山の最上面から1.4mを測る。

②．遺構と遺物

自然流路

SX5001（fig.71、PL.14-(3)）　I区のSD0149･0150に繋がると思われる自然流路の一部である。深さは1.4mを測る。埋土は黒色から褐色の粘土と青灰色のシルトなどで、下層の方には植物遺体をを含む。その中には縄文土器片も含まれていた。

出土遺物（Fig.71、PL.32-(2)）　縄文土器片や、陶器、瓦器の破片が出土したが、陶器片などは後世の混ざり込みであろう。縄文土器は晩期前半頃で、黒土粘土中から出土している。1～3は縄文土器の粗製の深鉢の口縁部片。いずれも口縁が頸部から段を持って外に開く器形。1は口縁から胴部1/4片で、復元口径34cmを測る。内外面ナデで、胴部下半は削りである。外面には部分的にススが付着する。2・3は小片。2の外面は条痕のナデ。3は口端部に浅い沈線が入る。

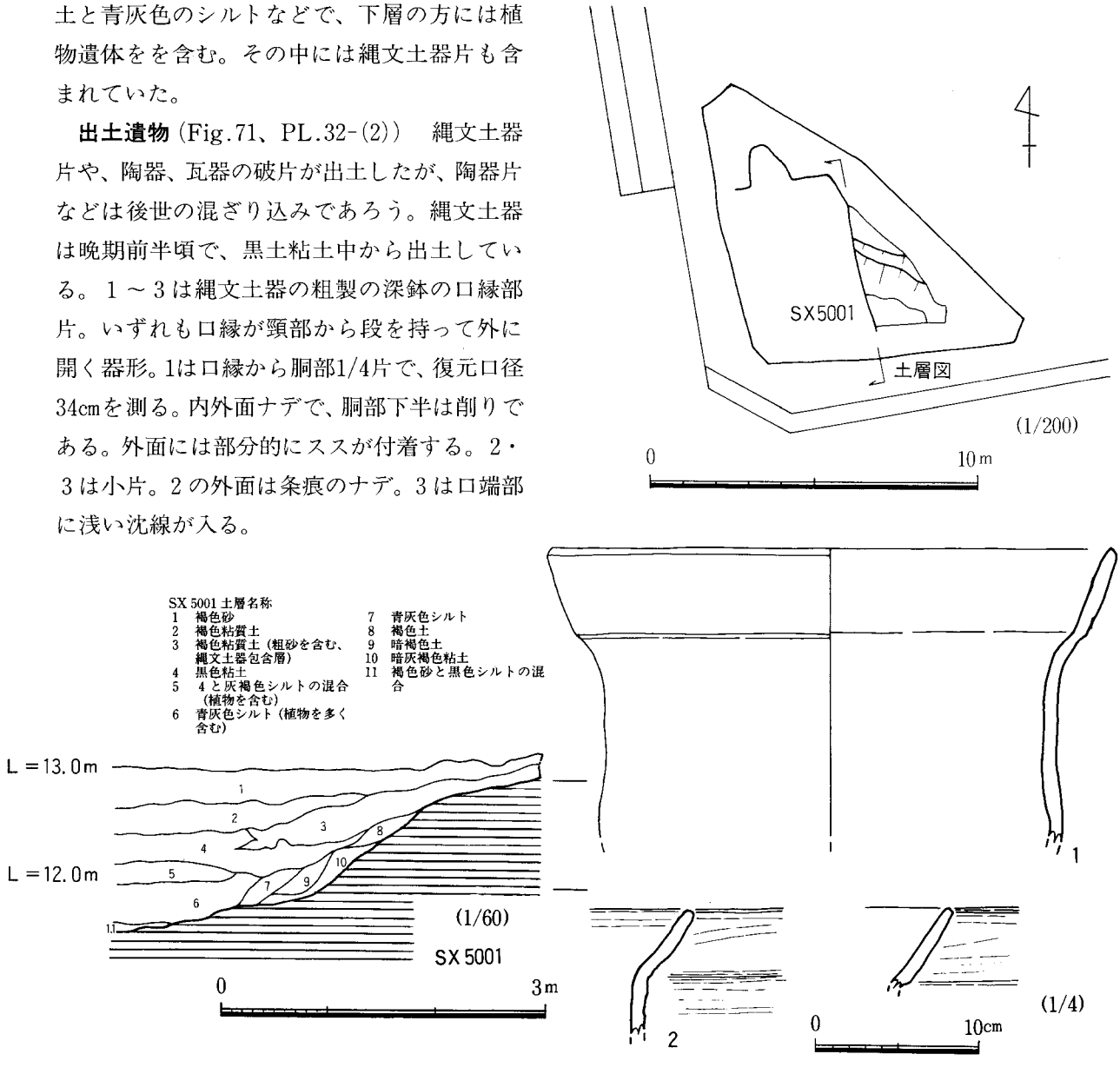


Fig.71　V区遺構全体図・土層図・出土遺物（1/4・1/60・1/200）

③　各調査区出土の石器

1～9は打製石鏃である。1～6、9は凹基式、7、8は平基式である。9は狭義の剝片鏃で、側縁から先端に素材となった剝片のエッジを残している。石材は3～5が安山岩系の石を用い、他は黒曜石を用いている。8の基部の片面に縦方向の擦過痕が見られるが、矢柄に着柄した痕跡を示すものであろうか。10は使用痕のある剝片で、縦長の黒曜石剝片を用い、片側縁に微細な刃こぼれがある。また主要剝離面の中央部には擦過痕がある。11、12は一側縁に刃部を作り出した削器である。ともに安山岩製で、11は縦長の、12は横長の剝片を用いている。

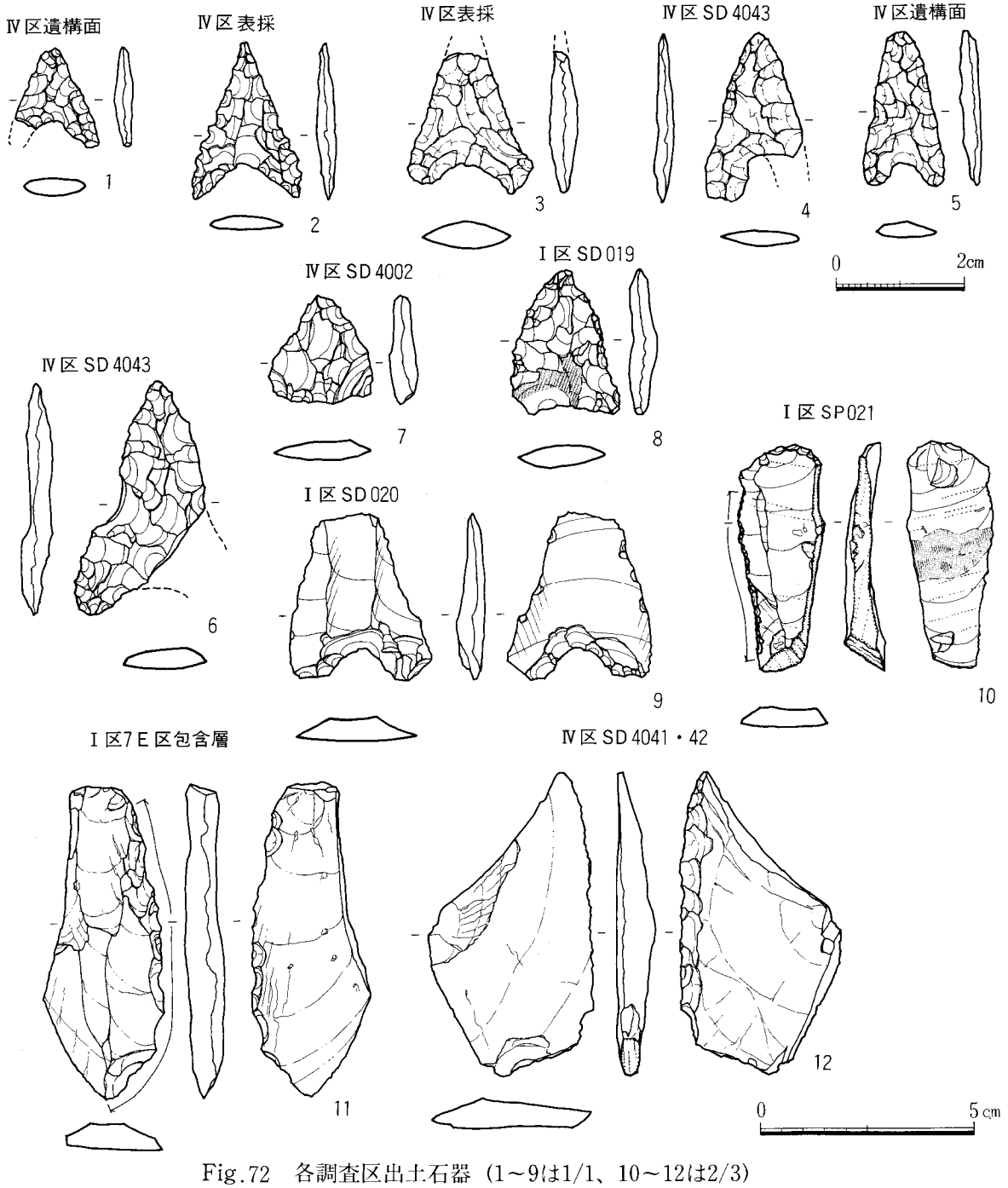


Fig.72　各調査区出土石器（1～9は1/1、10～12は2/3）

7．小結

以上、調査の概要について述べてきたが、ここではそれらを整理して若干のまとめを行う。今回の調査は野芥大薮遺跡での初めての調査であったが、遺跡のおおよその継続時期や性格、旧地形のあり方などを把握することが出来た。

調査で検出された遺構の時期は、縄文時代から近代までの長時間に亘るが、遺構の時期は主に縄文時代、古墳時代、古墳時代後期から古代、中世、近世から近代の時期に大別することが出来る。

縄文時代はⅠ区とⅣ区で検出した自然流路（旧河川）などである。Ⅰ区ではＳＤ020・0117・0118・0149など、Ⅳ区ではＳＤ4042・4060・4064など、Ⅴ区ではＳＸ5001などである。遺物としてはＳＤ4041・042・060から小片ではあるが縄文時代早期から前期の土器が出土しているが、ＳＤ0117・118、ＳＸ5001などから縄文時代晩期前半代の土器の良好な資料が出土している。調査区内ではこの時期の集落遺構は確認出来なかったが、かつて調査区内に、または周辺に集落が存在していた可能性がある。自然流路は何度も流路を変えており、度々洪水が起こっていたのであろう。安田喜憲氏によれば、縄文時代晩期は前時代に比べ気候が冷涼湿潤化し、沖積地化が進むという[註1]。この時期の自然流路が多いのはそれを裏付けるものかもしれない。ただ炭素14年代の分析データーは、土器の時期と大幅に時期がずれており、それをどう考えるのかは、今後の課題である。

古墳時代の遺構はⅠ区の西半分とⅡ区・Ⅲ区で検出した土坑や溝などである。時期的には弥生時代後期末から古墳時代前期にかけてである。住居址などは検出出来なかったが、これは後世に削平を受けた結果であろうと考える。遺構は一般的に残りは悪く、かなりの地形改変を受けている。元々洪水の影響を受けやすい微高地であり、居住期間も短く、後世の水田開発によって消滅してしまったのかもしれない。遺構は標高の高い東側Ⅳ区には確認出来ていない。これは東側に、自然流路がより多く検出されており、洪水を受けやすい不安定な地域であったため、若干安定性のある西側に集落が営まれていたのかもしれない。また集落の主体は当調査区の南側に広がる可能性もある。早良平野のこの時期の遺跡のあり方を見ると、弥生時代後期、遺跡は一時減少するが、後期終末ごろから再び遺跡は増加を始め、古墳時代になると、集落は沖積微高地上にも進出し始める。これは沖積地にまで、水田開発が進んだ結果であろうと思われる。気候的に安定した時期なのかもしてない。

古墳時代から古代にかけては、Ⅰ区のＳＤ019を代表とすることが出来る。ＳＤ019は南北方向に流れる溝であり、北側に水利施設の堰が作られている。溝の主軸は早良郡の条里地割の南北基準にほぼ合致している。この溝の西側には粗砂と奈良時代までの遺物を含む包含層があり、洪水を受けた状況を示している。堰があることから、奈良時代には当地が居住地ではなく、水田地になっていたことが判る。遺物は縄文時代晩期以降のものが出土しているが、古墳時代の５世紀後半からのものが多く出土しており、調査区南側に５世紀後半以降の集落が存在していた可能性がある。溝の堀削と水田の開発は一体化しており、古墳時代前期の住居址などの遺構は水田の開発で消滅したものと考えたい。この溝と同時期のものは他には確認出来なかった。

中世はⅠ区とⅡ区の溝で、ＳＤ0121やＳＤ2002・2003などで数は少ない。いずれも溝であり、埋土が砂であることから、水が流れた状況を示している。生活遺構は確認出来ず、耕地として利用されていたのであろう。ＳＤ0121は条里地割の方向を取る。時期的には中世前半期の時期である。

近世はⅠ区東側とⅣ区に遺構が分布する。Ⅰ区ではＳＢ085を中心に、溝と土坑、井戸などがある。近世後半から近代にかけての農家と思われる屋敷地の遺構である。家の裏側には畑があり、肥甕または便所などもある。屋敷は遺物から見て、19世紀以降に建てられたようである。屋敷の敷地規模は取

り囲む溝から測れば、南北約32m、東西約27m、総面積は864㎡（約262坪）を測る。ただ中心になる建物は２×３間の規模であり、規模的には小さく、屋敷の母屋とするには疑問が残る。また今回特筆すべきは、この地区で牛・馬などの家畜骨が多量に廃棄された土坑を検出した事である。これは皮革生産に伴うものと考えられる。土坑はⅠ区で９基、Ⅳ区で２基、全部で11基検出した。中から出土した家畜骨についての詳細な分析は鹿児島大学農学部の西中川駿教授の付論２に拠るとして、分析結果に拠れば、牛・馬の骨が大半という事である。特にＳＫ065などは牛・馬の足先の骨が多量に出土しており、屠殺・解体し、余分な骨を廃棄した状況を明瞭に示している。遺構の時期は共伴する遺物がないため、時期的には確定出来ないが、遺構が屋敷に伴う溝などに切られていることから、屋敷地以前の時期と考えられる。屋敷地は遺物などから19世紀以降のものであり、それ以前のものとしても、それほど時期的には差はないと思われる。ただ、Ⅳ区のＳＤ4063のように、近代に入るような土坑もあることから、近代にかけて継続的に皮革生産が行われていたと考えられる。他の土坑でも、わずかに動物骨が出土するものもあることから、本来はもっと多くの家畜骨処理の土坑があったのであろう。また、地元の聞き取りでは、当地に馬頭観音が祀られていたという。これらの家畜骨処理遺構と関係があるのかもしれない。

江戸時代、早良郡では内陸部の内野を中心に、福岡藩によって武具などを製作するため、皮革生産の職人集団が配置され、野芥村にも置かれていたという記録がある。[註2] 皮革産業は近代の初めまで、内野を中心とする早良内陸部の重要産業であったという。今回の調査はこの記録を裏づけるものである。皮なめしには水が必要であり、川のそばで行われていたという。[註3] 今回の調査区でも、Ⅳ区の東側に小川が流れており、ちょうど遺構群もその辺りに集中することから、その一帯で解体・皮なめしなどの作業が行われていたものと考えられる。大阪府の貝塚市の東遺跡では、15世紀の獣骨処理土坑が検出されている。皮革生産と牛馬の処理の歴史が考古学的に具体的に確認された最古の例として注目されている。[註4] 当遺跡で確認されたこれらの遺構も、牛馬の形態的変遷を研究する上でも、また江戸時代の福岡における、皮革産業の歴史を研究する上でも貴重な資料といえるものである。

報告してきたように、今回の調査で得られた成果は大きい。しかし紙面の都合上、時間の制約、本人の力量不足から、十分な報告・検討を加える事が出来なかった。これらの成果の詳しい検討については、今後の検討課題としたい。

註

1．安田喜憲『気候と文明の盛衰』朝倉書店 1990
2．松下志朗「福岡藩の被差別部落」福岡部落史研究会編『福岡の部落解放史 上』 福岡部落史研究会 1989
3．吉川峰太郎「白皮なめしの由来」『部落解放史ふくおか第60号』 福岡部落史研究会 1990
4．井上秀和「斃牛馬処理の歴史と暮らし明かす史料」解放新聞 1997年６月２日

Ⅳ　付論１　野芥大薮遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野芥大薮遺跡は、室見川の支流である金屑川右岸(東岸)の微高地上に位置する。微高地は、亀山・下山(1992)や唐木田ほか(1994)等から、低位段丘面(大坪面)に相当すると考えられる。本遺跡では、発掘調査により、縄文時代晩期から江戸時代までの遺構・遺物が検出されている。本報告では、Ⅰ区の縄文時代および古墳時代の旧河道、Ⅳ区の縄文時代～古墳時代の旧河道を分析の対象とする。各旧河道では、杭・井堰の構築材・自然木などの木材や、種実遺体などが出土している。本報告では、これらの植物遺体の種類を明らかにし、古植生および植物利用に関する資料を得る。また、木材を利用して放射性炭素年代測定を行い、各河道の時期に関する情報を得る。

Ⅰ．放射性炭素年代測定

１．試料

試料は、Ⅰ区およびⅣ区の旧河道(SD0117, SD4042)から出土した自然材４点である。各試料の詳細は、測定結果と共に表１に記した。

２．方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

３．結果

測定結果を表１に示す。

表１　年代測定結果

地区	遺構	番号	試料の質	年代(1950年よりの年数)	Code No.
Ⅰ区	SD0117	W8	自然木(カエデ属)	6160±120 4210 B.C.	GaK- 19241
Ⅰ区	SD0117	W25	自然木(アカガシ亜属)	6110±130 4160 B.C.	GaK- 19242
Ⅳ区	SD4042	W52	自然木(ノグルミ)	6800±140 4850 B.C.	GaK- 19243
Ⅳ区	SD4042	W87	自然木(アカガシ亜属)	6220±110 4270 B.C.	GaK- 19244

・年代値の算出には、放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5570年を使用した。

４．考察

Ⅰ区のSD0117から出土した自然木の年代測定結果は、6160±120y.B.P.と6110±130y.B.P.であり、誤差範囲で一致している。旧河道は縄文時代晩期と考えられているが、九州地方における縄文時代晩期の年代は2700～2550y.B.P.と考えられており(キーリ・武藤, 1984)、今回の測定値はそれよりも古い値である。

樹木を利用した年代測定で、推定値よりも古い年代値が得られた場合、樹齢や古材の再利用などの可能性が考えられる(東村, 1990)。樹木は、生きている間でも中心に近い部分では活動を停止している。そのため、木の中心に近い部分で年代測定を行うと、活動を停止した時期と実際の伐採年代の分だけ誤差が生じることになる。これは、1000年以上も生きるスギなどでは大きな問題となり、しばしば実際の使用年代よりも古い年代値が得られることがある。今回の場合、試料が河道内から出土した自然木であることから、古い地層から洗い出され、再堆積した可能性が充分考えられるものである。そのため、年代値が古い値となった可能性があり、年代値以降に堆積したと考えるのが妥当であろう。

一方、Ⅳ区のSD4042は、縄文時代～古墳時代と考えられている。年代測定値はⅠ区SD0117と同様に縄文時代前期の年代に相当する。この結果から、少なくとも２本の自然木は縄文時代前期に相当する可能性があることになるが、SD0117の結果と同様に再堆積した可能性もある。したがって、堆積年代は得られた年代値以降と考えるのが妥当である。

本遺跡周辺では、中央区大手門付近の沖積層から出土した木片の年代測定が行われているが(福岡第四研究グループ, 1978)、縄文時代を対象とした年代測定の類例が少ない。九州地方全体を通してみても類例が少なく、現時点では測定

値の傾向などは不明である。今後類例を蓄積するとともに、本地域の地形発達史等も含めた検討が必要である。

II. 遺跡周辺の古植生および植物利用

1．樹種同定

(1)試料

試料は、溝の堰を構築していた杭材など43点と、種実遺体同定用の試料中から検出された木材14点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表２に記した。

(2)方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3)結果

樹種同定結果を表２に示す。保存状態が悪い等の理由で同定できなかった試料については、観察できた範囲での木材組織の形態などを記した。また、種実遺体とともに検出された木片試料中には、樹皮が認められた。その他の試料は、針葉樹４種類(マツ属複維管束亜属・モミ属・ヒノキ・マキ属)と、広葉樹16種類(ノグルミ・ヤナギ属・クマシデ属イヌシデ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・スダジイ・ムクノキ・クスノキ科・ウツギ属・ユズリハ属・カエデ属・ムクロジ・モチノキ属・クマノミズキまたはヤマボウシ・センダン・エゴノキ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。また、保存状態は比較的良かったが同定できなかったSD019No.111とSD117W-4についても木材組織の特徴などを記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylon*)　**マツ科**

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、分野壁孔は窓状、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・モミ属(*Abies*)　**マツ科**

仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄い。障害樹脂道が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で１～４個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.)Endlcher)　**ヒノキ科ヒノキ属**

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で１～３個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・マキ属(*Podocarpus* sp.)　**マキ科**

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は早・晩材部の別なく散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔壁細胞は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で１～２個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ノグルミ(*Ptatycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.)　**クルミ科ノグルミ属**

環孔材で孔圏部は２～３列、孔圏外で急激に管径を減じ、塊状に複合し斜方向～火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、１～４細胞幅、１～30細胞高。

・ヤナギ属(*Salix*)　**ヤナギ科**

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが、年輪界付近でやや管径を減少させる。管壁厚は中庸で、横断面では楕円形～やや角張った楕円形、単独および２～３個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・クマシデ属イヌシデ節(*Carpinus* subgen. *Euarpinus*)　**カバノキ科**

散孔材で、管孔は放射方向に２～４個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、１～３細胞幅、１～40細胞高。柔組織は短接線状およびターミナル状。

日本に自生するイヌシデ節には、イワシデ(*Carapinus turzaninovii* Hance)、イヌシデ(*C. tschonoskii* Maxim.)、アカシデ(*C. laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume)の３種類がある。

表２　樹種同定結果(1)

地区	遺構名	時代・時期	番号	試料の性格	樹　種
Ⅰ区	SD019 井堰	古墳時代～奈良時代	101	杭(井堰の構築材)	クリ
			103	杭(井堰の構築材)	クリ
			104	杭(井堰の構築材)	コナラ属アカガシ亜属
			105	杭(井堰の構築材)	ユズリハ属
			106	杭(井堰の構築材)	スダジイ
			107	杭(井堰の構築材)	ヤナギ属
			108	杭(井堰の構築材)	マツ属複維管束亜属
			109	杭(井堰の構築材)	ウツギ属
			110	杭(井堰の構築材)	モチノキ属
			111	杭(井堰の構築材)	つる性木本
			112	杭(井堰の構築材)	針葉樹
			114	杭(井堰の構築材)	モチノキ属
			115	杭(井堰の構築材)	モチノキ属
			117	杭(井堰の構築材)	コナラ属アカガシ亜属
			119	杭(井堰の構築材)	クマノミズキまたはヤマボウシ
	SD0117	縄文時代	W３	自然木	ヒノキ
			W４	自然木	広葉樹(環孔材)
			W５	自然木	マキ属
			W７	自然木	カエデ属
			W８	自然木	カエデ属
			W18	自然木	カエデ属
			W19	自然木	マキ属
			W23	自然木	カエデ属
			W24	自然木	カエデ属
			W25	自然木	コナラ属アカガシ亜属
			W26	自然木	カエデ属
			W28	自然木	クスノキ科
			W31	自然木	広葉樹(環孔材)
			W32	自然木	マキ属
Ⅳ区	SD4042	縄文時代	W７	自然木	マキ属
			W９	自然木	針葉樹
			W41	自然木	クマシデ属イヌシデ節
			W45	自然木	コナラ属アカガシ亜属
			W50	自然木	クスノキ科
			W52	自然木	ノグルミ
			W57	自然木	コナラ属アカガシ亜属
			W68	自然木	マキ属
			W72	自然木	ムクロジ
			W75	自然木	エゴノキ科
			W79	自然木	クマシデ属イヌシデ科
			W80	自然木	ノグルミ
			W87	自然木	コナラ属アカガシ亜属
			W96	自然木	カエデ属
	SD4064	縄文時代	シルト	自然木	ムクノキ
					樹皮
					樹皮
					コナラ属アカガシ亜属
					広葉樹(散孔材)
					コナラ属アカガシ亜属
					ムクノキ
					樹皮
					コナラ属アカガシ亜属
					センダン
					広葉樹(散孔材)
			砂礫	自然木	モミ属
					広葉樹(散孔材)
					針葉樹

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)　**ブナ科**

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)　**ブナ科クリ属**

環孔材で孔圏部は１～５列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・スダジイ(*Castanopsis cuspidata* var. sieboldii (Makino) Nakai)　**ブナ科シイノキ属**

環孔材～放射孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高。柔組織は周囲状、散在状および短接線状。

・ムクノキ(*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon)　**ニレ科ムクノキ属**

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または２～３個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～４細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・クスノキ科(Lauraceae)

散孔材で、道管は単独または２～３個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

以上の特徴から、少なくともクスノキ(*Cinnamomum camphora* (L.) Presl)とタブノキ属(*Persea*)は除外される。

・ウツギ属(*Deutzia*)　**ユキノシタ科**

散孔材で道管径は小さい。道管壁は薄く、横断面では多角形で、ほぼ単独であるがまれに複合して年輪界一様に分布し、分布密度は比較高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は大型の異性で、１～３細胞幅、鞘状の細胞が認められる。

・ユズリハ属(*Daphniphyllum*)　**トウダイグサ科**

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独および２～３個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２(３)細胞幅、１～20細胞高で、時に上下に連結する。

・カエデ属(*Acer* sp.)　**カエデ科**

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および２～３個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～40細胞高。細胞壁の厚さが異なる２種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・ムクロジ(*Sapindus mukorossi* Gaertn.)　**ムクロジ科ムクロジ属**

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。

・モチノキ属(*Ilex*)　**モチノキ科**

散孔材で管壁は薄く、横断面は多角形、単独または２～８個が複合する。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、１～４細胞幅、１～100細胞高。

・クマノミズキまたはヤマボウシ(*Cornus macrophylla* Wallich/*C. kousa* Buerger ex Hance)

ミズキ科ミズキ属

散孔材で、道管は年輪界一様に分布するが、年輪界付近でやや管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～５細胞幅、１～40細胞高。

・センダン(*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel)　**センダン科センダン属**

環孔材で孔圏部は１～５列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～４細胞幅、１～30細胞高。

・エゴノキ属(*Styrax*)　**エゴノキ科**

散孔材で、横断面では楕円形、単独または２～４個が複合し、年輪界付近で道管の分布密度が低くなる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。柔組織は短接線状および散在状。

・**つる性木本**(SD019 No.111)

大型の道管と小型の道管が混在して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、3～4細胞幅、1～100細胞高を超えるものまである。柔組織は周囲状。

・**環孔材**(SD0117 W-4)

孔圏部は1～6列、年輪付近で急激に径を減じた後、塊状に複合しながら斜方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

2．種実遺体同定

(1)試料

試料は、縄文時代晩期の旧河道(SD4060とSD4064)から採取された19点である。試料中には同一層準から採取されたものが存在したが、これらは一括して整理する。

(2)方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。これらは種類毎にビンに入れ、ホウ酸・ホウ砂を混合した水溶液中に保存する。

(3)結果

結果を表3に示す。以下に検出された種類の形態的特徴について示す。

・**カヤ**(*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)　**イチイ科カヤ属**

種子が検出された。大きさは1.5cm程度。紡錘形で、先端部はやや尖る。種皮は褐色で堅く、表面には筋状の模様がある。

・**イヌガヤ**(*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch)　**イヌガヤ科イヌガヤ属**

種子が検出された。黒褐色で側面観は長卵形、上面観は凸レンズ型。大きさは1.5cm程度。種皮は黒色で堅く、表面に顆粒状の隆起がある。

・**イチイガシ**(*Quercus gilva* Blume)　**ブナ科コナラ属アカガシ亜属**

葉の破片が検出された。大きさは2cm程度。革質で、鋸歯がある。側脈から出る支脈は裏面に突出して目立ち、支脈間を平行につなぐ。

・**コナラ属アカガシ亜属**(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)　**ブナ科**

果実が検出された。褐色で大きさは2cm程度。ほぼ球形で、果皮は薄くて堅く、表面は光沢がある。花柱の基部には、輪状紋が存在する。殻斗は椀状で、総苞は癒着し、輪状になる。

・**ムクノキ**(*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon)　**ニレ科ムクノキ属**

種子が検出された。黒色で大きさは8mm程度。いびつな楕円形で、明瞭な「へそ」が存在する。

・**バリバリノキ**(*Litsea acuminata* (Bl.) Kurata)　**クスノキ科ハマビワ属**

葉の破片が検出された。基部はくさび型。全縁で、革質。裏面は白っぽい。

・**クスノキ科**(Lauraceae)

種子が検出された。卵形で4mm程度。種皮は茶色で薄く堅い。

・**アカメガシワ**(*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.)　**トウダイグサ科アカメガシワ属**

種子が検出された。大きさは4mm程度。黒色でY字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・**センダン**(*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel)　**センダン科センダン属**

核が検出された。褐色で堅い。側面観は楕円形で、上面観は星型。大きさは1.2cm程度。縦方向に数本の陵が見られる。

・**シキミ**(*Illicium anisatum* L.)　**シキミ科シキミ属**

種子が検出された。褐色、楕円形で、大きさは8mm程度。表面は平滑で光沢があり、堅い。側面におおきな「へそ」があり、楕円の一部が欠損しているようにみえる。

・**ムクロジ**(*Sapindus mukorossi* Gaerth)　**ムクロジ科ムクロジ属**

種子が検出された。黒色でほぼ球形、大きさは1.5cm程度。種皮は堅くて厚く、光沢がある。一端に一文字状の「へそ」が存在する。

・**ツバキ**(Cammelia japonica L.)　**ツバキ科ツバキ属**

表３　種実遺体同定結果

	SD4060		SD4060-１区		SD4064			
	下層流木中	シルト	底シルト層-東壁近く	底シルト層下	シルト	下層	下層シルト	砂礫
カヤ	1	1	—	1	—	—	—	1
イヌガヤ	—	1	1	—	2	—	17	—
イチイガシ	—	—	—	—	2	2	—	—
アカガシ亜属	—	—	12	2	5	5	109	12
ムクノキ	—	—	—	—	—	—	1	—
バリバリノキ	—	—	—	—	1	—	—	—
クスノキ科	—	—	2	—	—	—	9	—
センダン	1	1	106	1	—	—	67	1
シキミ	—	—	—	—	—	—	1	—
アカメガシワ	—	—	—	—	—	—	1	1
ムクロジ	—	—	—	—	—	1	2	—
ツバキ	—	—	—	—	—	—	1	—
アオツヅラフジ	—	—	—	—	—	—	1	—
エゴノキ属	1	—	1	—	—	—	28	2
不明A	—	—	—	—	—	—	12	—
不明C	—	—	—	—	1	1	13	—
不明D	—	—	—	—	—	1	—	—
合計	3	3	122	4	11	10	262	17

種子の破片が検出された。黒色で大きさは1.5cm程度。種皮は厚くてやや弾力がある。

・**エゴノキ属**(*Styrax*)　**エゴノキ科**

核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ１cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に３本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・**アオツズラフジ**(*Cocculus orbiculatus* (L.) DC.)　**ツズラフジ科アオツズラフジ属**

核が検出された。褐色で、大きさは２mm程度。円形で扁平。背面は比厚し、放射状に細かい隆起がある。表面は堅くて厚く、ざらつく。

・**不明A** (Unknown A)

黒色、楕円形で大きさ８mm程度。先端部はやや尖り、基部はやや平らである。表面は厚くてやや堅く、ざらつく。

・**不明B** (Unknown B)

黒色、楕円形で大きさ１cm程度。先端部は曲がり、突起物がある。表面は厚くて堅く、光沢があり平滑。

・**不明C** (Unknown C)

黒色、紡錘形で、大きさ１cm程度。一端にまるい「へそ」がある。表面は、厚くて堅く、光沢がある。

３．考察

杭材は、これまで各地で行われてきた調査で多くの種類が確認されている(島地・伊東，1988；伊東，1990)。このことから、杭材は周辺に生育していた種類や、木製品を製作する際の余材等が利用され、基本的には周辺植生を反映していると考えられる。また種実遺体や自然木は、周辺に生育していたもののほか、年代測定値からみて古い地層から洗い出されたものが旧河川に堆積したものと考えられる。

調査の結果、木材では20種類、種実遺体では14種類が確認された。出土した種類は、いずれの旧河道でも暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)やその林縁部等に生育する種類が多い。本地域では、これまでにも各時代の杭や井堰構築材などの樹種同定が行われている(林・松本，1980；嶋倉，1976a，1977，1978，1981a，1981b，1984a，1984b；伊東，1989)。その結果を見ると、各時代を通じて基本的には照葉樹林の構成種が多くを占めており、今回の結果とも一致する。これらの種類は、中央区で行われた完新世堆積物の花粉分析結果(黒田・太田，1978；Kuroda・Hatanaka，1979)とも調和的である。これらの結果から、本遺跡周辺においても、アカガシ亜属などの常緑広葉樹を主とした植生が見られたと考えられる。また、旧河道による種類構成の違いが顕著ではないことから、少なくとも縄文時代から古墳時代に

かけてほぼ同様の植生が見られたと考えられる。

また、杭に確認されたヤナギ属は、板付遺跡の自然木の調査で多数出土しており、河道沿いなどに生育していたことが指摘されている(嶋倉，1976b)。本遺跡においても、旧河道の周囲にヤナギ属が生育していたことが推定される。

〈引用文献〉

福岡第四紀研究グループ(1978)福岡市の沖積層(那の津層)木片の^{14}C年代 －日本の第四紀層の^{14}C年代(125)－ 地球科学 32 p218-220

林　弘也・松本　勗(1980)瑞穂遺跡から出土した木製遺物の樹種同定「瑞穂 福岡市比恵台地遺跡」p209-216 日本住宅公団

東村武信(1990)改訂 考古学と物理化学 212p 学生社

伊東隆夫(1989)四箇遺跡群23次調査河川出土木材の樹種「四箇遺跡群 －第23次調査報告書－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集」p35-38 福岡市教育委員会

伊東隆夫(1990)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II 木材研究・資料 26 p91-189

亀山徳彦・下山正一(1992)玄海灘沿岸 日本の地質『九州地方』編集委員会編「日本の地質 9 九州地方」p152 共立出版株式会社

唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊(1994)地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 福岡地域の地質 192p 地質調査所

キーリ C. T.・武藤康弘(1984)縄文時代の年代 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」p246-275 雄山閣

Tomio Kuroda and Ken-ichi Hatanaka (1979) Palynological Study of the Late Quaternary in the Coastal Plain along Hakata Bay, in Fukuoka City, Northern Kyusyu, Japan. The Quaternary Research 18 p53-68

黒田登美雄・太田辰夫(1978)福岡市天神地域の後期更新世－完新世堆積物の花粉分析学的研究 その1 第四紀研究 17 p1-14

島地　謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧 296p 雄山閣

嶋倉巳三郎(1976a)福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告「福岡市西区大字免 鶴町遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集(本文冊)」p63-68 福岡市教育委員会

嶋倉巳三郎(1976b)木材の材質「板付 市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971～1974 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 下巻 本編図版・付編」p67-75 福岡市教育委員会

嶋倉巳三郎(1977)福岡市板付遺跡H-5地点から出土した木質品の樹種について「板付周辺遺跡調査報告書(4) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集」p111-114 福岡市教育委員会

嶋倉巳三郎(1978)福岡市四箇J-10地区出土杭材の樹種について「福岡市西区 四箇周辺遺跡調査報告書(2) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集(別冊)」p1-24 福岡市教育委員会

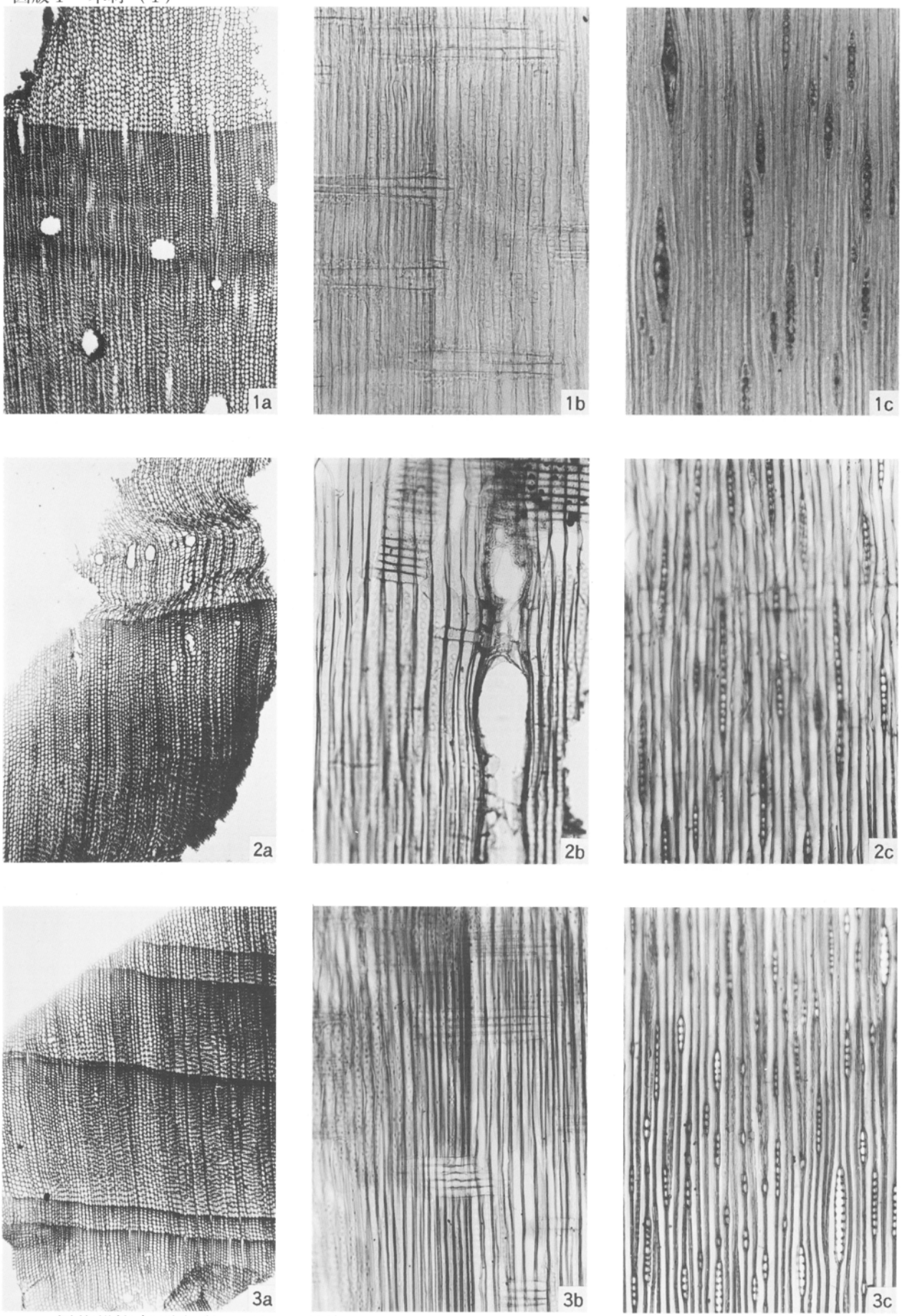
嶋倉巳三郎(1981a)福岡市板付E-5･6地区出土の木質遺物の樹種「板付 ～板付会館建設に伴う発掘調査報告書～ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集」p76-77 福岡市教育委員会

嶋倉巳三郎(1981b)樹種の鑑定「福岡市博多区 那珂探ヲサ遺跡Ⅰ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集」p67-70 福岡市教育委員会

嶋倉巳三郎(1984a)田村遺跡第1地点から出土した木質遺物の樹種「福岡市早良区 田村遺跡－II－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集」p15-16 福岡市教育委員会

嶋倉巳三郎(1984b)田村遺跡第2地点から出土した木質遺物の樹種「福岡市早良区 田村遺跡－II－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集」p68-69 福岡市教育委員会

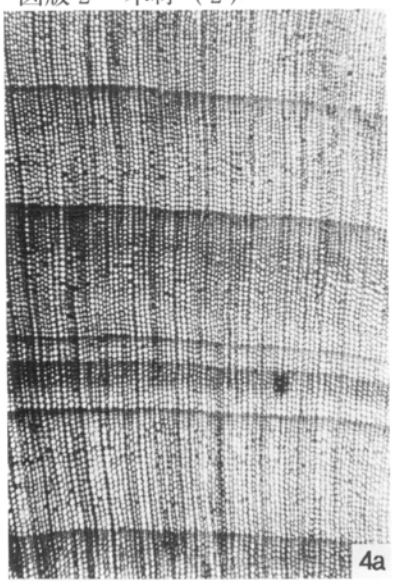
図版１　木材（１）

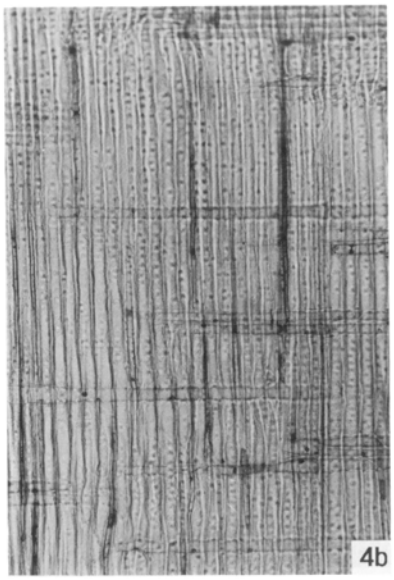


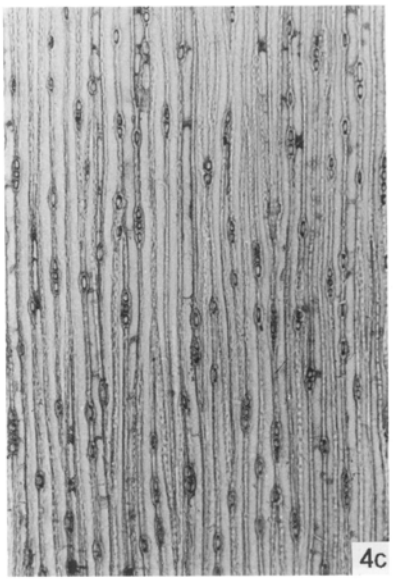
1.マツ属複維管束亜属（SD 019 No. 108）
2.モミ属（SD 4064 砂礫））
3.ヒノキ（SD 0117 W-3）
　a：木口，b：柾目，c：板目

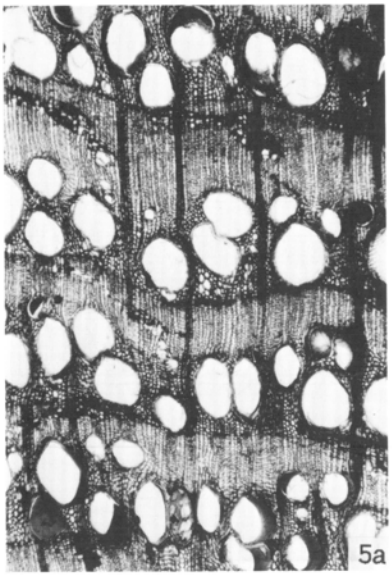
200 μm：a
200 μm：b,c

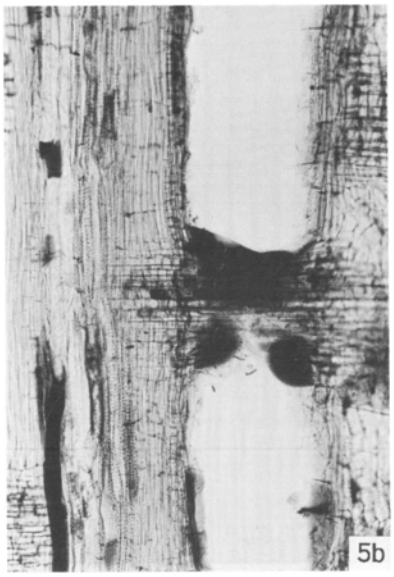
図版２　木材（２）

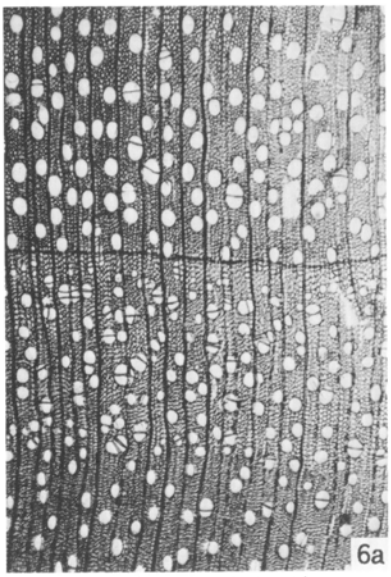


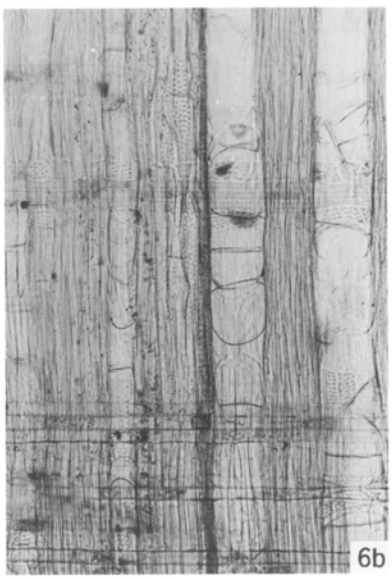








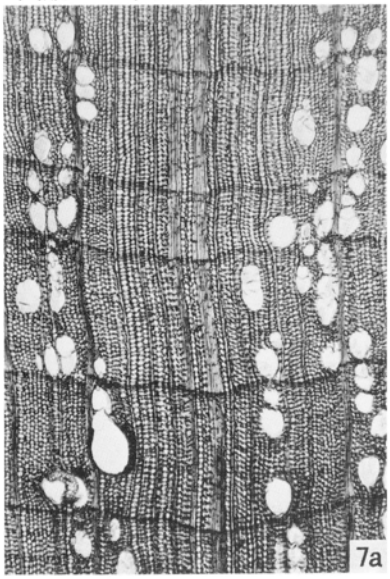


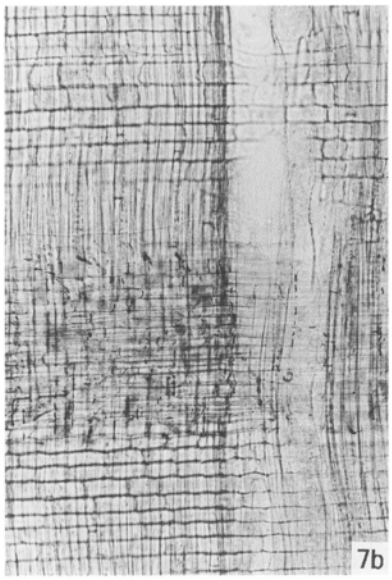


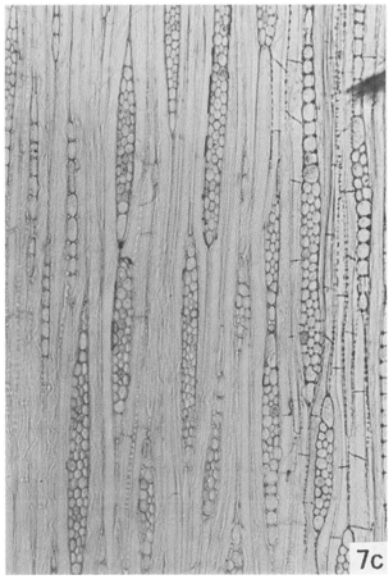
4.マキ属（SD 0117 W-5）
5.ノグルミ（SD 4042 W-52）
6.ヤナギ属（SD 019 No. 107）
　a：木口，b：柾目，c：板目

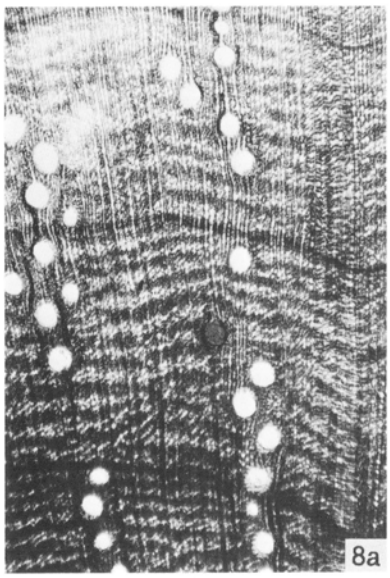
200 μm：a
200 μm：b,c

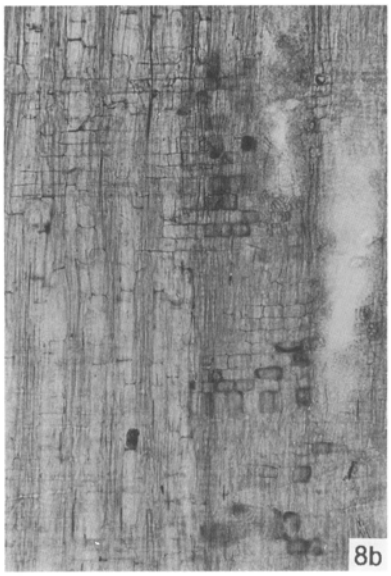
図版３　木材（３）

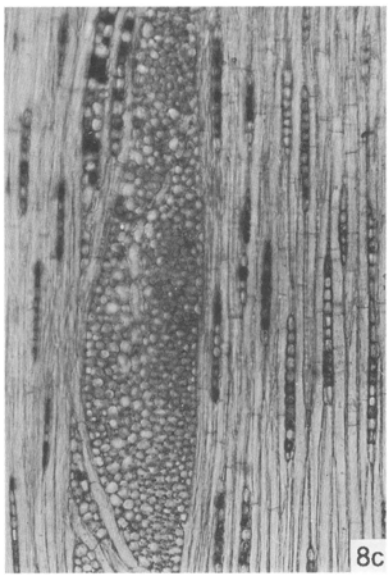


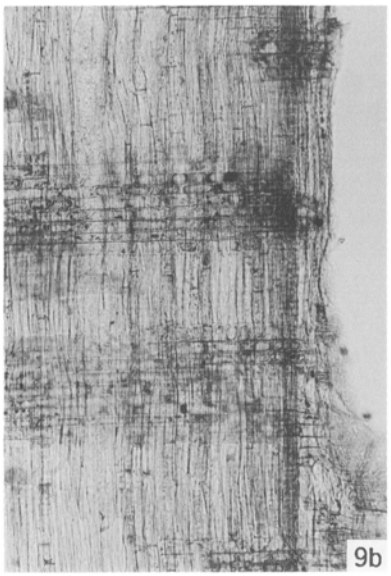


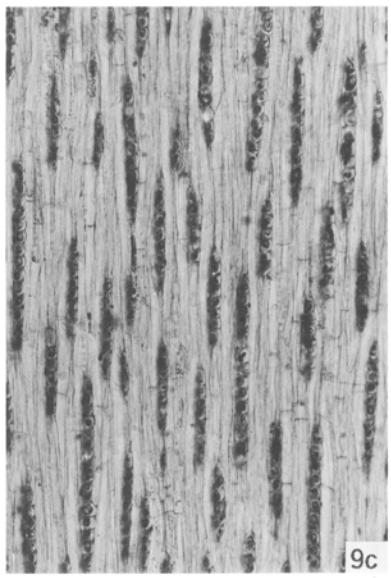








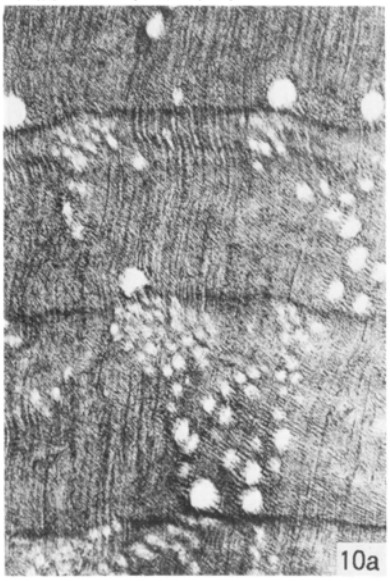


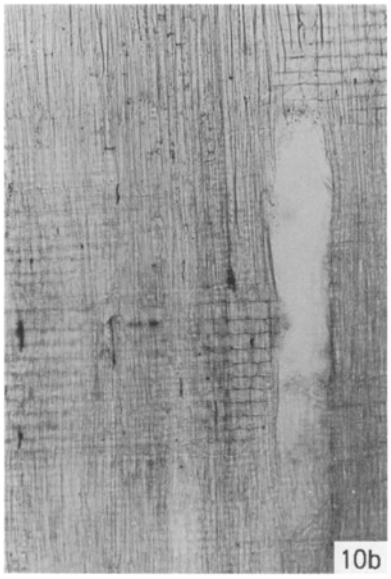


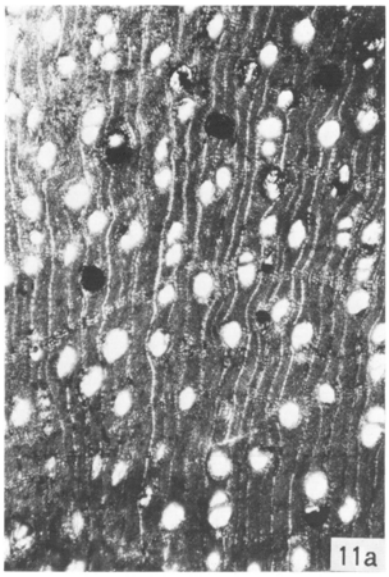
7.クマシデ属イヌシデ節（SD 4042　W-41）
8.コナラ属アカガシ亜属（SD 019 No. 104）
9.クリ（SD 019 No. 103）
　a：木口，b：柾目，c：板目

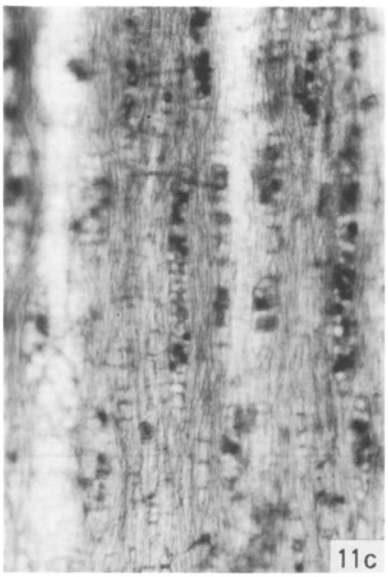
200 μm：a
200 μm：b,c

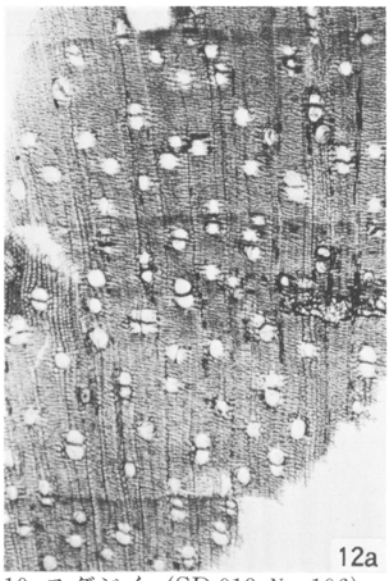
図版４　木材（４）

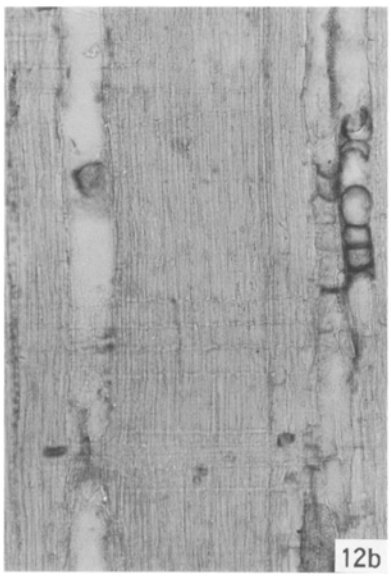


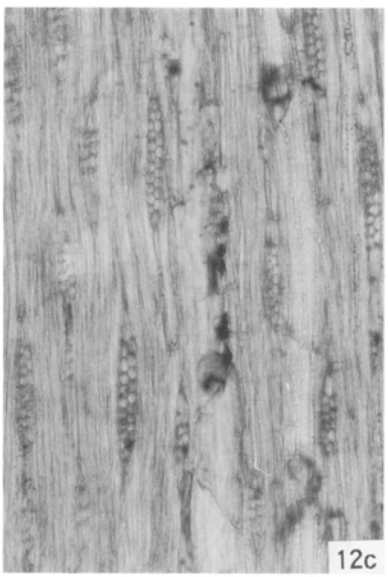








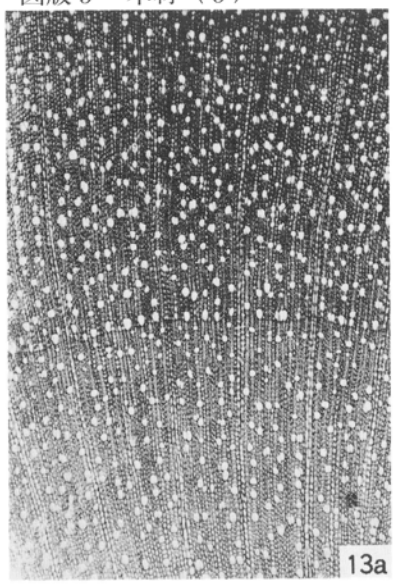


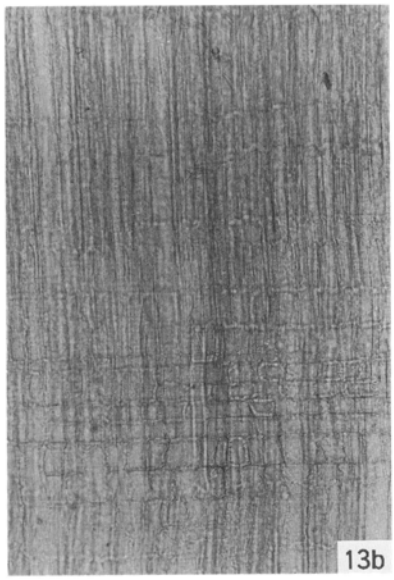


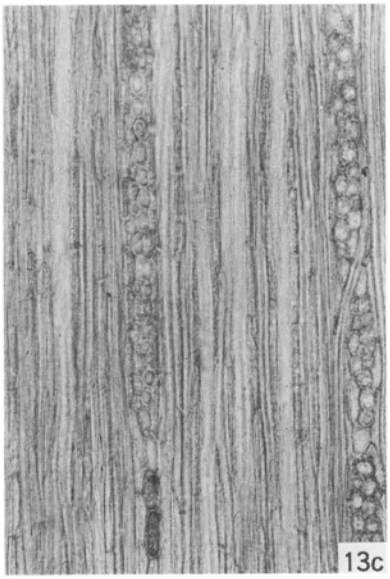
10.スダジイ（SD 019 No. 106）
11.ムクノキ（SD 4064 シルト）
12.クスノキ科（SD 0117 W-28）
a：木口，b：柾目，c：板目

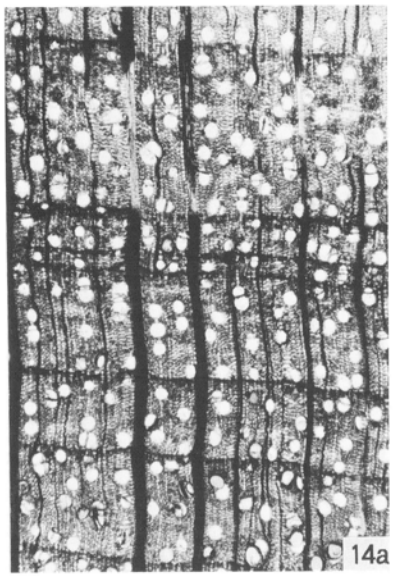
200 μm：a
200 μm：b,c

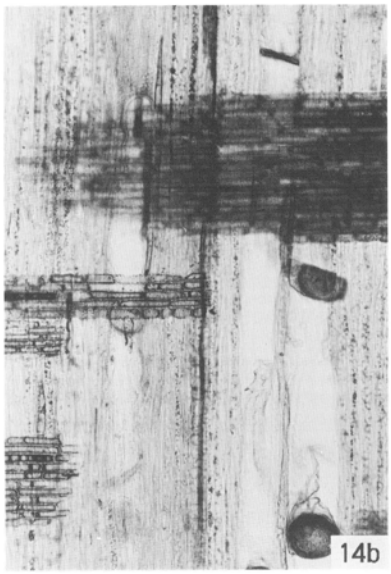
図版５　木材（５）

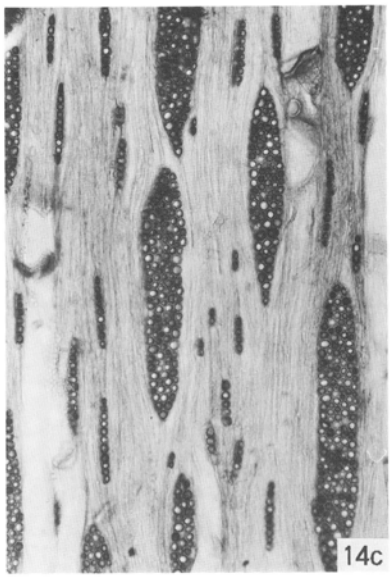


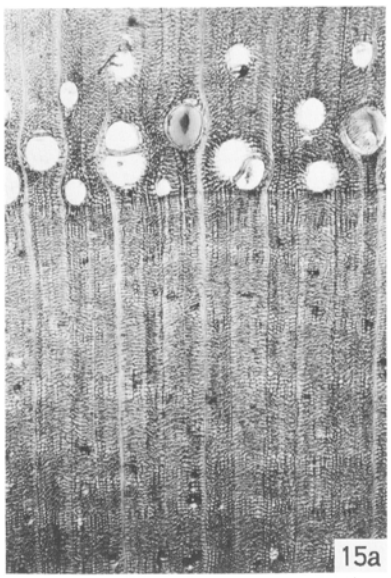


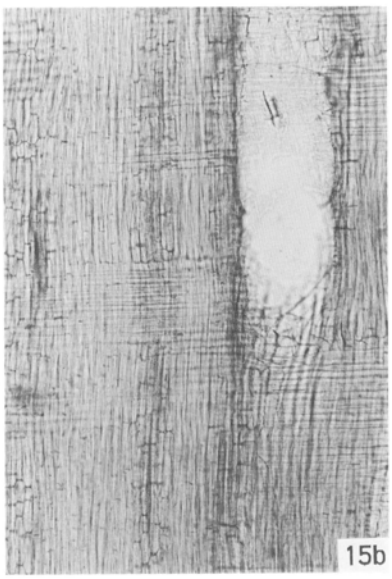


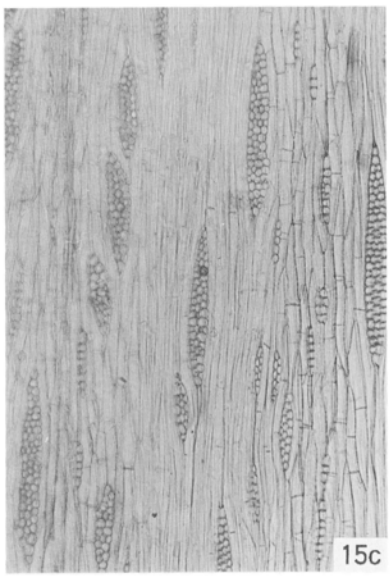








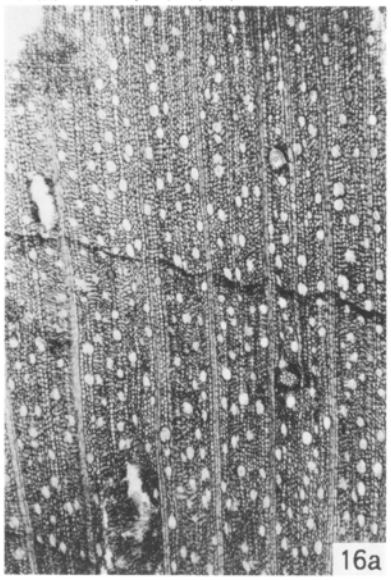


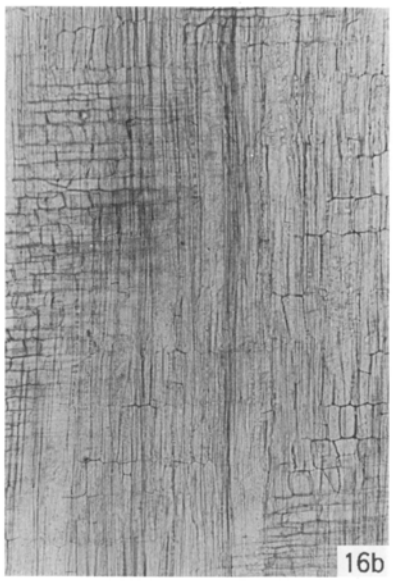


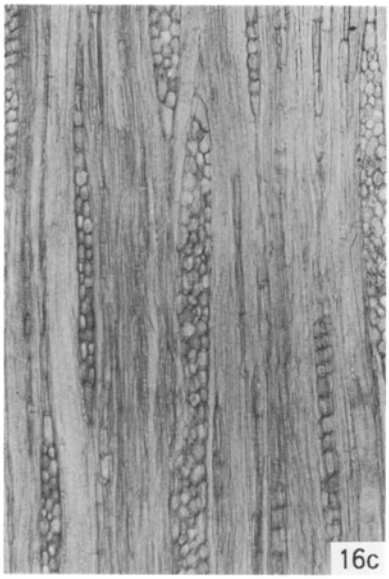
13.ウツギ属（SD 019 No. 109）
14.カエデ属（SD 4042 W-41）
15.ムクロジ（SD 4042 W-15）
a：木口，b：柾目，c：板目

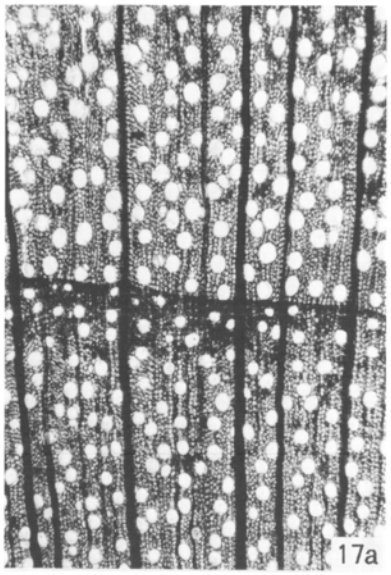
200 μm：a
200 μm：b,c

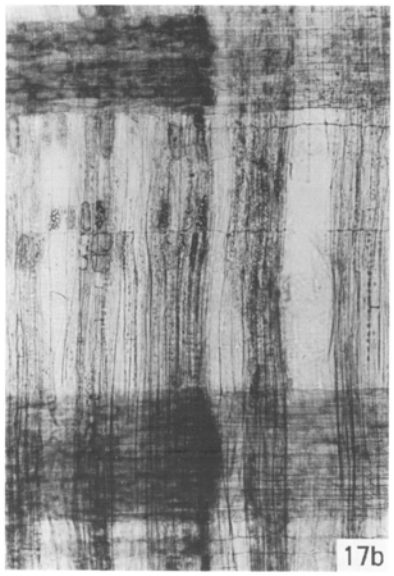
図版６　木材（６）

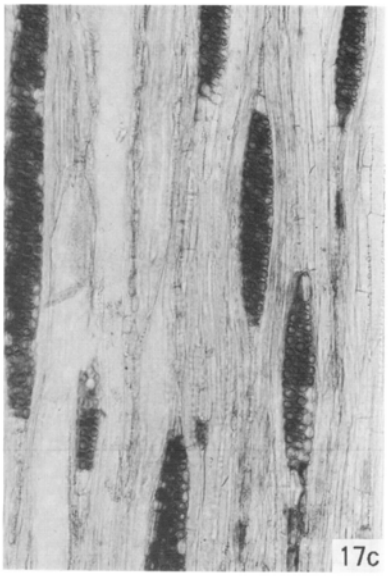


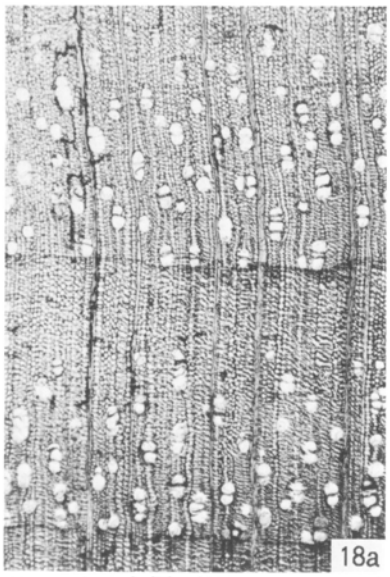


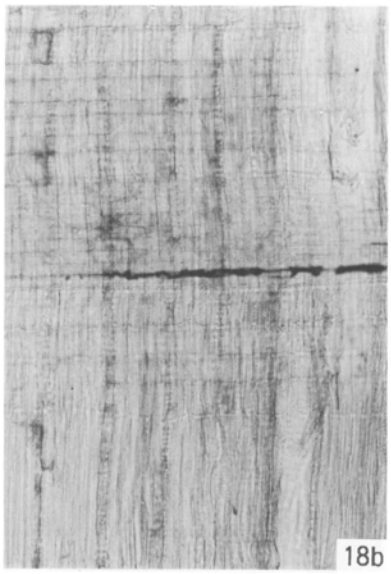


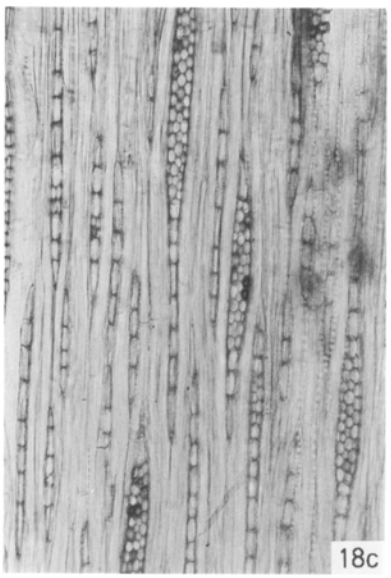








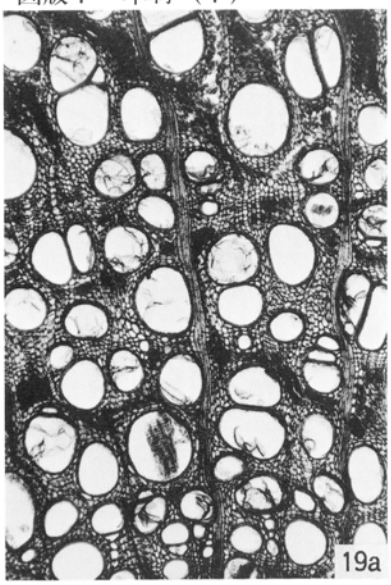


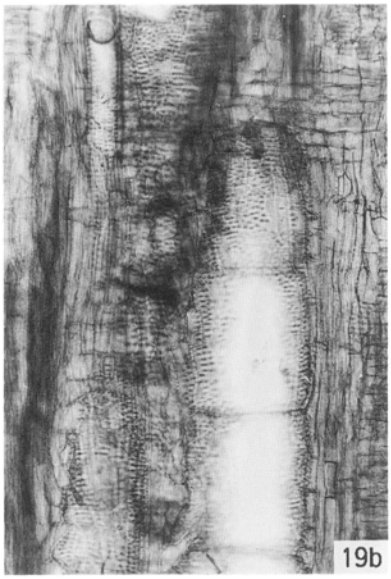


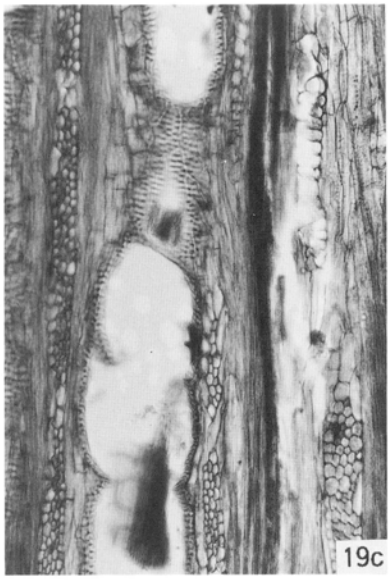
16. モチノキ属（SD 019 No. 110）
17. クマノミズキまたはヤマボウシ（SD 019 No. 119）
18. エゴノキ属（SD 4042 W-75）
a：木口，b：柾目，c：板目

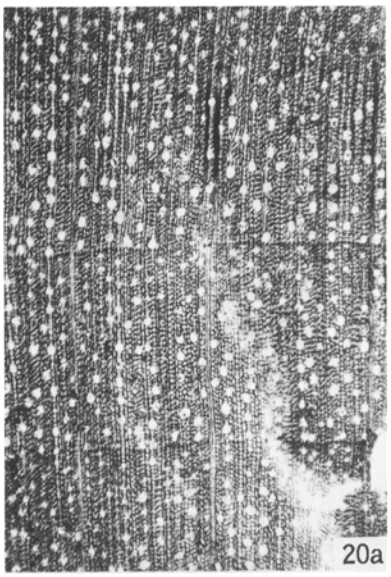
200 μm：a
200 μm：b,c

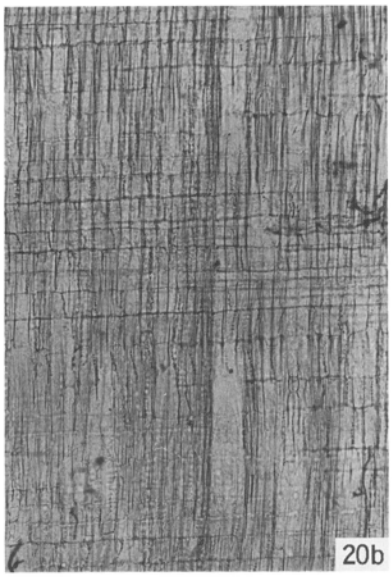
図版７　木材（７）

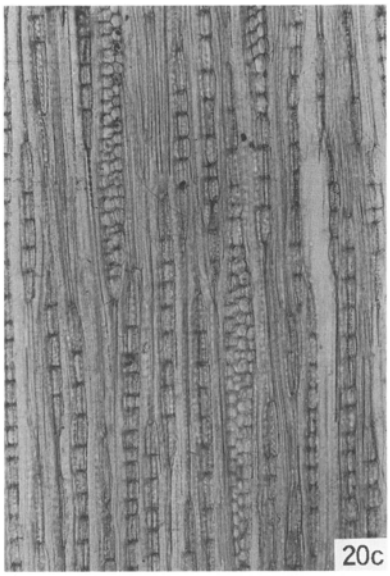


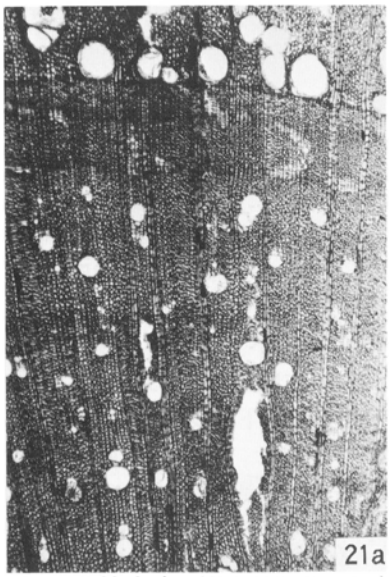


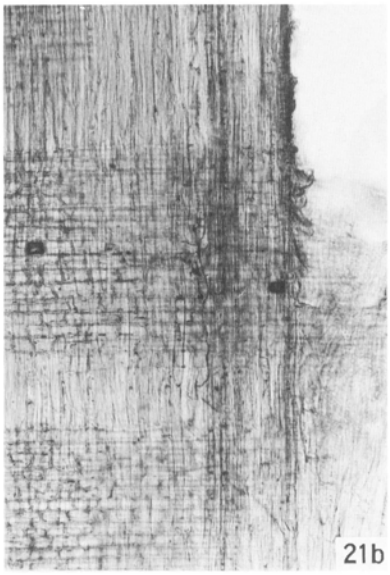


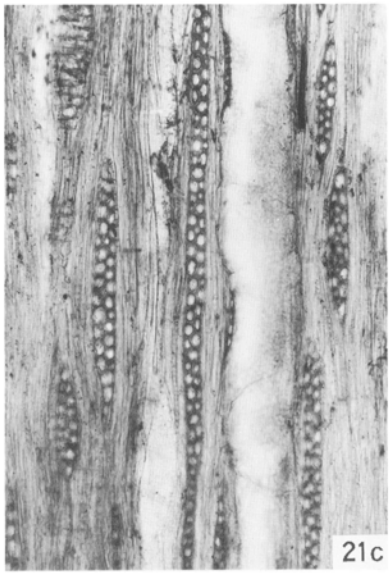








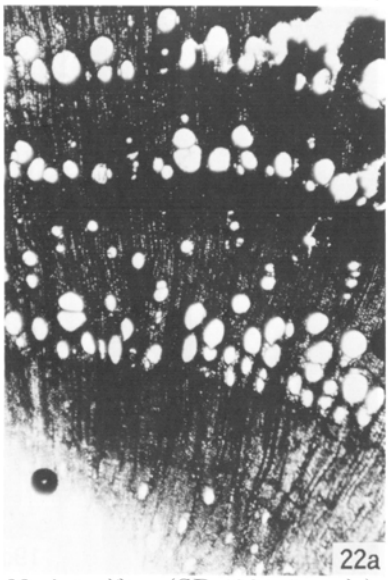


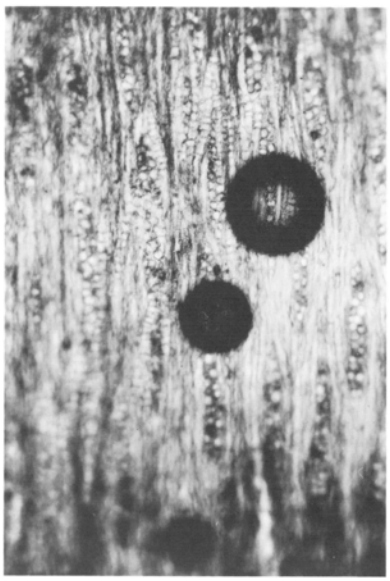


19.つる性木本（SD 019 No. 111）
20.ユズリハ属（SD 019 No. 105）
21.環孔材（SD 0117 W-4）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b,c

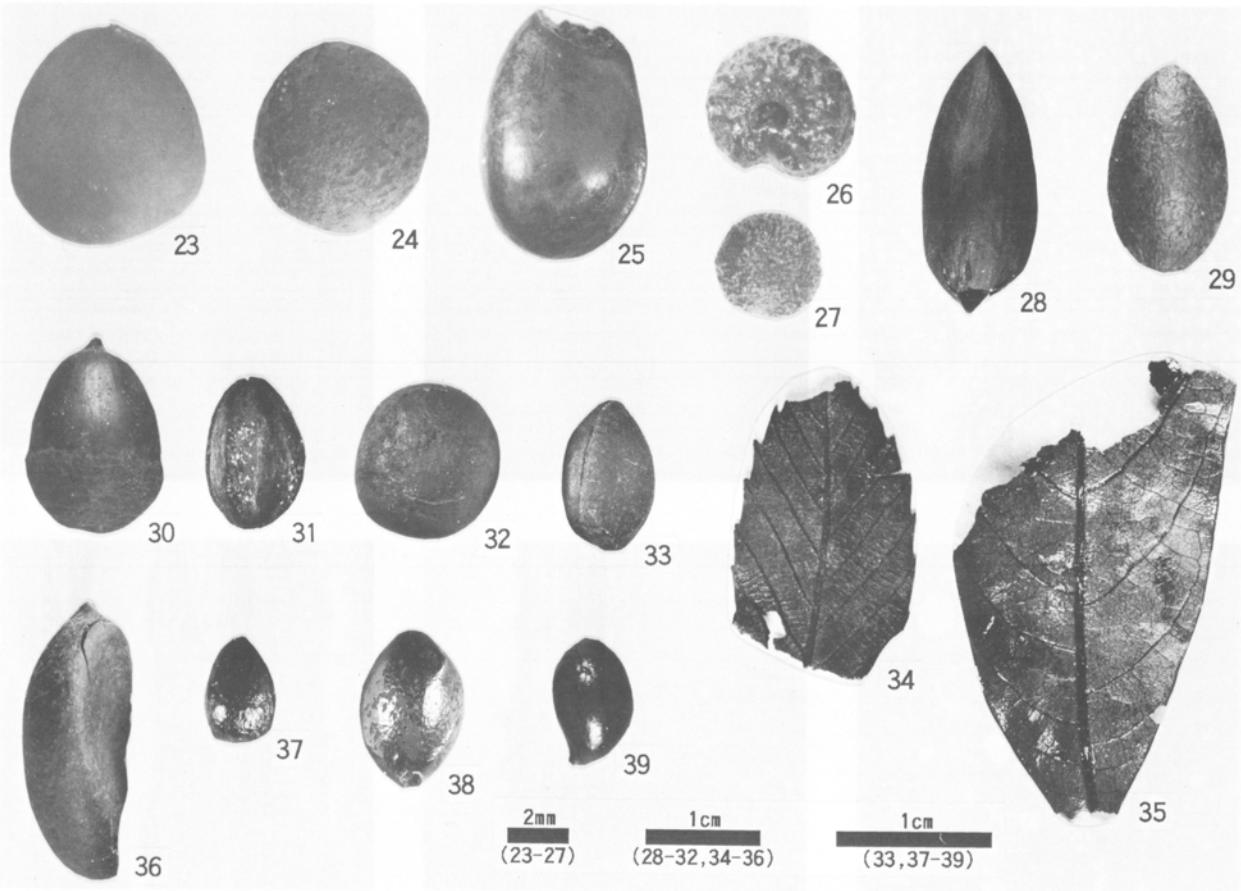
図版８　木材（８）・種実遺体





22.センダン（SD 4064 シルト）　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b,c



23.ムクノキ（SD 4064 ;下層シルト）
24.クスノキ科（SD 4064 ;下層シルト）
25.シキミ（SD 4064 ;下層シルト）
26.アオツズラフジ（SD 4064 ;下層シルト）
27.アカメガシワ（SD 4064 ;砂礫）
28.カヤ（SD 4064 ;砂礫）
29.イヌガヤ（SD 4064 ;下層シルト）
30.アカガシ亜属（SD 4064 ;下層）
31.センダン（SD 4064 ;下層シルト）
32.ムクロジ（SD 4064 ;下層シルト）
33.エゴノキ属（SD 4064 ;下層シルト）
34.イチイガシ（SD 4064 ;シルト）
35.バリバリノキ（SD 4064 ;下層シルト）
36.ツバキ（SD 4064 ;下層シルト）
37.不明Ａ（SD 4064 ;下層シルト）
38.不明Ｄ（SD 4064 ;下層）
39.不明Ｃ（SD 4064 ;下層）

付論２　野芥大薮遺跡第１次調査のウマ、ウシの遺体

鹿児島大学獣医学科解剖学教室
西中川　駿・塗木千穂子

１．はじめに

わが国の遺跡から出土するウシ、ウマは、筆者らの調査ではそれぞれ213、475ヶ所から検出されているが、時期的には中世が最も多く、平安、古墳時代の順であり、九州においても同じ様な傾向にある。しかし、近世になると極端に少なく、九州でもウシ６、ウマ４遺跡をみるに過ぎない。

ウマやウシがいつ頃、どこから渡来したかは十分に論議されていないが、現在までに発掘された遺物からは、ウマ、ウシ共に弥生中期以降に、九州北部周辺に民族の移動と共に移入されたとされ、その末裔と思われる日本在来馬および在来牛として、御崎馬やトカラ馬など８集団と見島牛や口之島野生化牛の２集団が現在も系統保存されている。

野芥大薮遺跡は福岡市早良区賀茂二丁目134他にあり、道路建設のため福岡市埋蔵文化財課が1993年５月～1994年６月まで発掘調査を行ったものである。時期は江戸～明治時代のものと推定されている。今回調査を依頼された動物遺体はウマ、ウシ、イヌのものであり、土坑別出土状況を確認した後、当教室に搬入されたもので、まず、動物種および骨や歯の種類を同定し秤量後、計測可能な資料については測定を行い、年齢や体高の推定を試みたので、その概要を土坑ごとに報告する。

２．出土状況

ウマは10、ウシは９ヶ所の土坑から歯や骨が出土している（表１、２、図版Ｉ参照）。

SK065は円形の土坑で、四肢の末端を投棄しような状態であり、ウマが168.7g、ウシが1353.2gである。SK066土坑は横に長い楕円形で、骨の残り悪く、ウマ37.0g、ウシ24.2gと少ない。SK067土坑は発掘時の写真がないために土坑の形はわからないが、ウマが126.0g出土している。SK079は横に長い楕円形で（図版Ｉの２）、写真上では左端に集中してみられる。ウマは488.0g、ウシは40.4gの出土量である。SK086は長方形の土坑で、遺物は周辺部に散在し、ウマ185.9gのみの出土である。SK087は円形の土坑で、周辺部に遺物が散在してみられ、ウシのみ95.8gである。SK088は楕円形の土坑で、四肢骨がつながった状態で重なり合って出土しており、ウマ193.0g、ウシ784.6gの出土量である（図版Ｉの３）。SK089土坑は写真がなく出土状況はわからないが35.7gウシのみの出土である。SK090は楕円形の土坑で、骨はバラバラに投棄されており、ウマ285.8g、ウシ129.7gである。SK0110は楕円形の土坑で中心部に集中的に出土し、その量はウマ259.9gである。SK4022はほぼ円形の土坑で、ウマ161.3g、ウシ133.7gである。SK4063は長方形の土坑で、骨は土坑にぎっしりつまった形で出土しており、ウマのもののみ3015.6gである。

以上各土坑の出土状況を述べたが、野芥遺跡のウマの出土量は4921.2g、ウシは2597.3gである。また、Ⅳ区SX4007からはイヌの骨26gが出土しており、総出土重量は7544.5gである。

３．出土遺体の概要

各土坑別出土骨片数は、左、右が確認されたウマを表１に、ウシを表２に示した。総数ウマが192個、ウシが131個であり、ウシは四肢骨の出土が多い。次に各土坑ごとに出土した歯や骨の概要について述べ、また、計測可能なものについては、筆者らや林田らの方法で年齢と体高の推定を試みた。

SK065土坑（図版Ⅱ１～20参照）からは、ウマの手根骨、中手骨、基節骨など13個（左右不祥も含む。以下同じ）の出土で、１個体のものである。左側中手骨の最大長20.79cmから体高を推定すると125.9cmである。ウシは手根骨、足根骨から指、趾骨までの末端の骨など88個が検出され、距骨の数から少なくとも６個体以上のものと推定される。また、基節骨および中節骨21個の計測値から、体高を推定すると118.23±4.56cmで113.60～122.79cmの範囲にあり、小さい方は雌ウシで、大きい方は雄ウシのものであると推測される。

SK066土坑（図版Ⅱの17～20参照）からは、ウマの切歯、臼歯片、距骨およびウシの距骨片、大腿骨頭など各１個が検出され、各々１個体のものである。

SK067土坑からは、ウマのみの出土で、切歯（８個、以下同じ）、上下顎臼歯（９）、上腕骨（１）など18個が出土している。第一後臼歯の計測値から年齢15才で、体高129.2cmと推定される。

SK079土坑（図版24～28参照）からは、ウマの手根骨、中手骨、大腿骨片、脛骨片、足根骨など23個が出土しており、

少なくとも２個体以上のものである。また、中手骨、基節骨、橈骨などの計測値から体高を推定すると120.45±2.49cmである。一方、ウシは手根骨、基節、中節骨など６個が出土している。

SK086土坑（図版Ⅱの29.30参照）からは距骨、足根骨片など12個が出土し、２個体ものである。

SK087土坑（図版Ⅱの31、32参照）からはウシの下顎骨片、上腕骨片など５個が出土している。下顎第二臼歯から年齢15才、体高118.6cmと推定される。

SK088土坑（図版Ⅱの33～40参照）からはウマの下顎骨、上下顎臼歯、切歯など９個がみられ、１体分である。臼歯の計測値から年齢14才、体高128.9cmと推定される。ウシは大腿骨、距骨など15個が出土し、大腿骨の数から２体以上のものと推測される。また、距骨、中足骨の計測値から体高104.89±2.85cmと推定される。

SK089土坑（図版Ⅲの１参照）からはウシの切歯（２）、上腕骨、距骨の４点のみが出土している。

SK090土坑（図版Ⅱの41～46参照）からは、ウマの下顎切歯、臼歯、中手骨、中足骨など15点が出土しており、２個体のもので、１体は15才で体高114.54cmで、もう１体は11才で130.0cmと推定される。ウシは下顎骨、上腕骨、中手骨など10個が検出され、第二、三後臼歯や中手骨の計測値から15才で体高116.6cmと推定される。

SK0110土坑（図版Ⅲの２、３参照）からは、ウマの上、下顎切歯、臼歯、上腕骨、足根骨など20点が出土しており、臼歯、中足骨から年齢14才、体高135.8cmと推定される。

SK4022土坑(図版22～24参照)からは、ウマの大腿骨、手根骨など４点とウシの肩甲骨、尺骨の２点が検出され、ウマは124.10cm、ウシは104.51cmと推定される。

SK4063土坑(図版Ⅲの４～21参照)からは表１、２に示すようにウマの下顎骨、頸推、助骨、四肢骨など77個がみられ、臼歯や肩甲骨基節骨から16才で116.18±4.42cmと14才で129.91±3.71cmと推定され、小型馬と中型馬が混在してみられる。

以上、ウマ、ウシの遺体について述べたが、Ⅳ区SX4007(図版Ⅲの25、26参照)から、イヌの脛骨と距骨が出土しており、体高50.0cmと推定され、中大型イヌに属する。

４．考察

近世から近代にかけての動物遺体の出土例は極めて少なく、九州では長崎県出島遺跡、鹿児島県の中島ノ下遺跡、平松原遺跡や鶴丸城二之丸跡などからウマやウシの出土例が報告されている。本遺跡も江戸から明治時代にわたる遺跡で、ウマやウシが大量に出土している。また、本遺跡の特徴として12ヶ所の土坑からなり、土坑により遺物の出土状況が異なり、SK065、SK079、SK086などは四肢骨の末端部のみの出土で、また、SK088、SK090、SK0110などからは、頭蓋や歯の出土が多くみられ、SK4063からはほぼ全身の骨格が出土している。SK065のような出土遺物をみると、ウシを解体後、皮革を採取し、四肢の末端は土坑に投棄したものと考えられる。

明治政府は、軍馬の必要性からウマの大型化を計るため洋種を導入し、在来馬との交配を行い、改良したといわれ、また、ウシについても明治33年以降に洋種を導入して、在来牛との交雑を行って現代の和牛を造り出している。本遺跡のウマとウシは老齢のものが多く、また、体高などの推定から、改良以前のウマ、ウシであることがうかがわれる。

本遺跡のウマの推定体高は、115cm前後の小型馬と129cm前後の中型馬の２型があるが、前者は現生のトカラ馬、後者は御崎馬とほぼ同じ大きさである。一方、ウシの推定体高は、112cm前後であり、これは在来牛の見島牛や口之島野生化牛の雌と同じ大きさであり、現代和牛雌（125cm）よりもはるかに小さい。これらのことから改良以前のウシであることは間違いないであろう。

ウマやウシがいつ頃、どこから渡来したかについては、確証が得られていないが、現在の発掘調査では、ウマは福江市大浜遺跡の弥生中期、ウシは東京都伊皿子貝塚の弥生中期とされている。いずれも朝鮮半島経由で北部九州に入ったとされている。本遺跡のウマ、ウシの骨は、それらの末裔のものであり、また、近世の資料として非常に貴重なものである。

野芥大薮遺跡を遺した人々は、トカラ馬のような小型馬と御崎馬のような中型馬を交通の手段として、また運搬のために使役していたと考えられ、一方、ウシも小型で、農耕用として飼養していたことがうかがわれる。しかし、本遺跡の特徴は、解体後土坑に投棄して埋葬していることである。また、イヌの出土も２点みられたが、当時の人々によって飼われていたのであろう。

表１　野芥大薮遺跡の土坑別ウマの出土骨片数

骨名		頭蓋			胴骨							前肢骨								後肢骨								出土骨片数
土坑		頭蓋骨	下顎骨	歯	頸骨	胸椎	腰椎	仙骨	尾椎	肋骨	胸骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨		寛骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足骨	趾骨	
ＳＫ065	L																2	1										11
	R			1												6		1										
ＳＫ066	L			1																								3
	R			1																				1				
ＳＫ067	L			9																								18
	R			8									1															
ＳＫ079	L													3	1	8	1	1		3		2						23
	R															2	1							1				
ＳＫ086	L			2																	1			1				12
	R			1																		1		3	1	3		
ＳＫ088	L			1																								9
	R		1	7																								
ＳＫ090	L			10													1										1	15
	R			2																						1		
ＳＫ0110	L	1		7									1													1		20
	R	1		6																				1		2		
ＳＫ4022	L																											4
	R															2				1								
ＳＫ4063	L	2	1	8							14	1	1	1	1	3	1	1		1			1		1	1		77
	R	1	1	2							6		1	1		5	1	1		1	1				2		2	
骨格別出土骨片数		73 (38.0%)			35 (18.2%)							50 (26.0%)								34 (17.7%)								192

L：左側、R：右側　　歯：遊離した歯のみ

表２　野芥大薮遺跡の土坑別ウシの出土骨片数

骨名		頭蓋				胴骨							前肢骨							後肢骨								出土骨片数
土坑		頭蓋骨	下顎骨	角	歯	頸骨	胸椎	腰椎	仙骨	尾椎	肋骨	胸骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨	寛骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足骨	趾骨	
ＳＫ065	L				2												6		10		1				15	2	8	88
	R	2															16		6				1		9	2	8	
ＳＫ066	L																				1							2
	R				1																				1			
ＳＫ079	L																1		1									5
	R																1		2									
ＳＫ087	L													1														5
	R		1		1																				2			
ＳＫ088	L													1	1						2		1		2	1		15
	R																				1		1		4	1		
ＳＫ089	L													1														4
	R				2																				1			
ＳＫ090	L																				1							10
	R				3									1				1	2						2			
ＳＫ4022	L												1			1												2
	R																											
骨格別出土骨片数		11 (8.4%)				0 (0.0%)							53 (40.5%)							67 (51.1%)								131

L：左側、R：右側　　歯：遊離した歯のみ

※ＳＫ067については土坑が不明

５．まとめ

福岡市野芥大薮遺跡出土の江戸から明治時代の動物遺体について調査した。

１．出土した動物遺体はウマ、ウシ、イヌであり、ウマが4921.2g、ウシが2597.3g、イヌ26gで、総出土骨量7544.5gである。

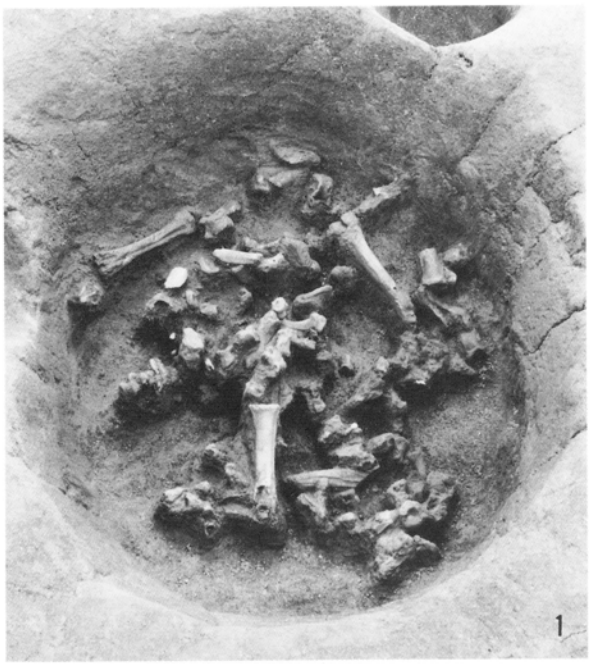
２．ウマ、ウシは11カ所の土坑に投棄または埋葬されており、ウマは115cm前後と129cm前後の体高を有し、14才以上の老齢馬が多い。ウシは112cm前後の体高で、四肢の末端の出土が多い。

３．イヌはわずか２点の出土であるが、体高50.0cmで中大型犬に属する。

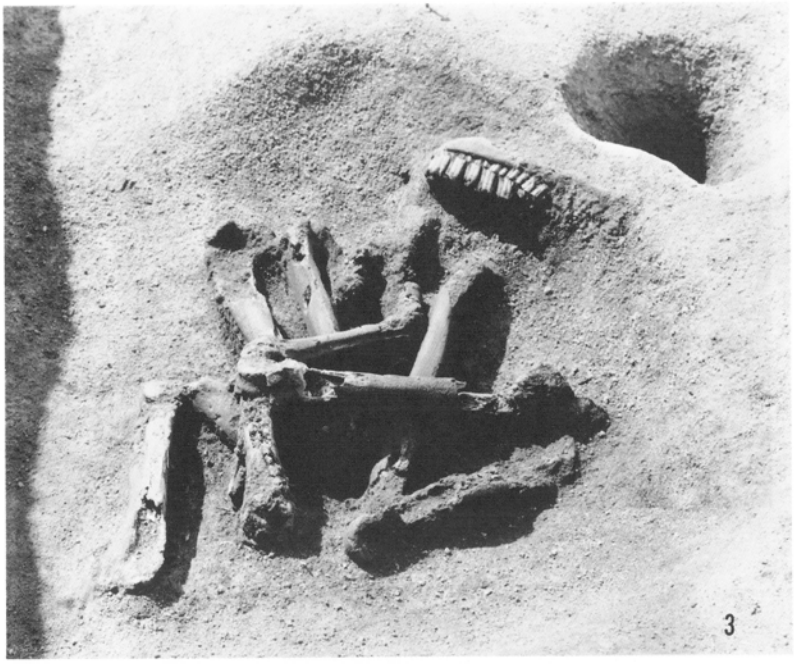
参考文献

１．林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究、P109～120、日本中央競馬会、東京（1978）
２．福岡市教育委員会：立花寺Ｂ遺跡P75～77（1997）
３．　　〃　　：博多11、P35～38（1998）
４．　　〃　　：博多16、P173～176（1991）
５．鹿児島県教育委員会：平松原遺跡P76～80（1991）
６．指宿市教育委員会：甲島ノ下遺跡P119～123（1990）
７．西中川駿他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究、文部省科学研究成果報告者、Ｐ１～95（1991）
８．芸田清吾：日本古代家畜史の研究、P100～293、学術出版社、東京（1969）

図版　Ⅰ

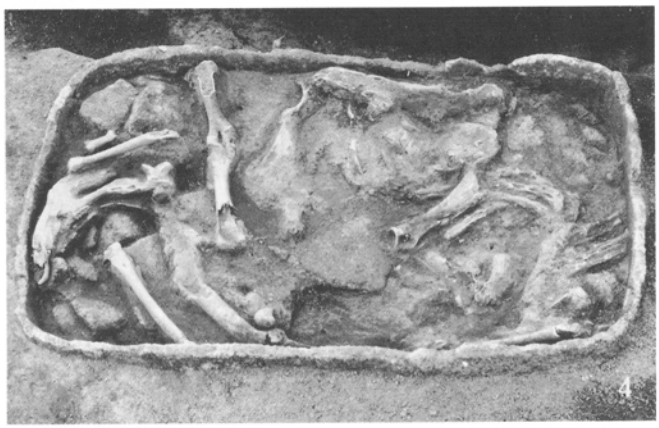


1；SK 065 土坑

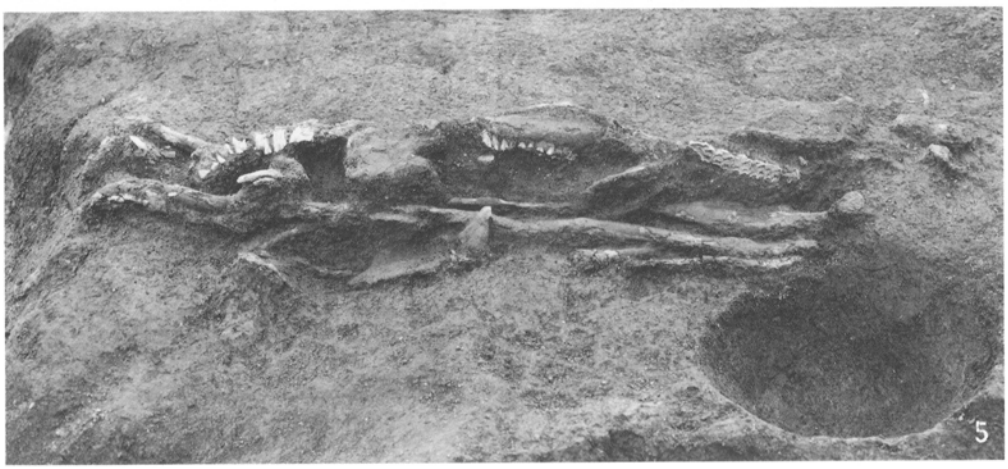


2；SK 079 土坑

3；SK 088 土坑

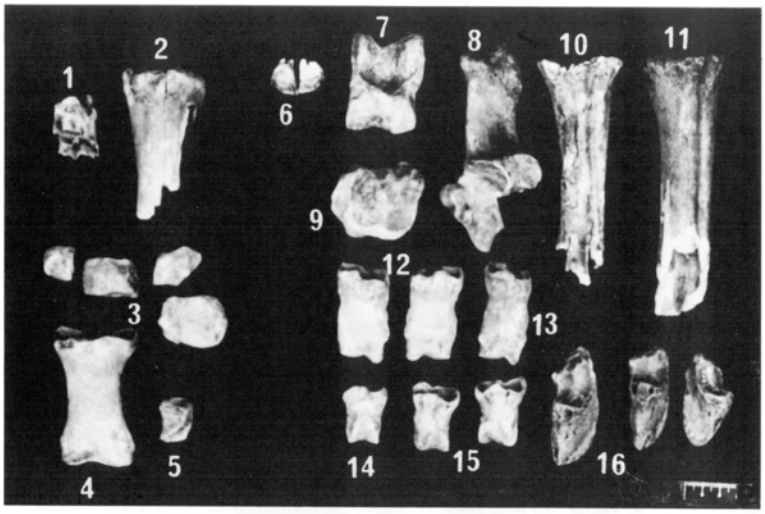


4；SK 4043 土坑

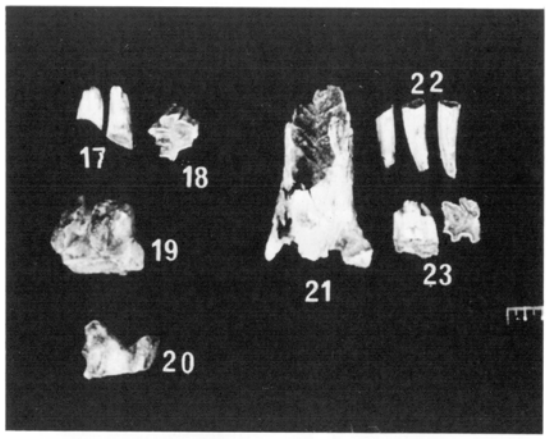


5；SK 0110 土坑

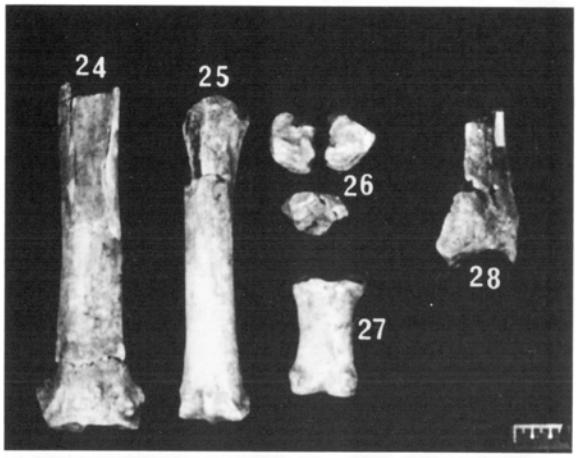
図版　II



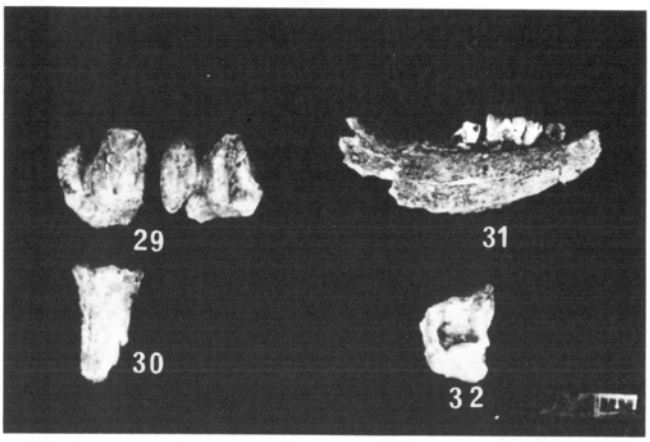
1～16；SK 065（1～5 ウマ、6～16 ウシ）



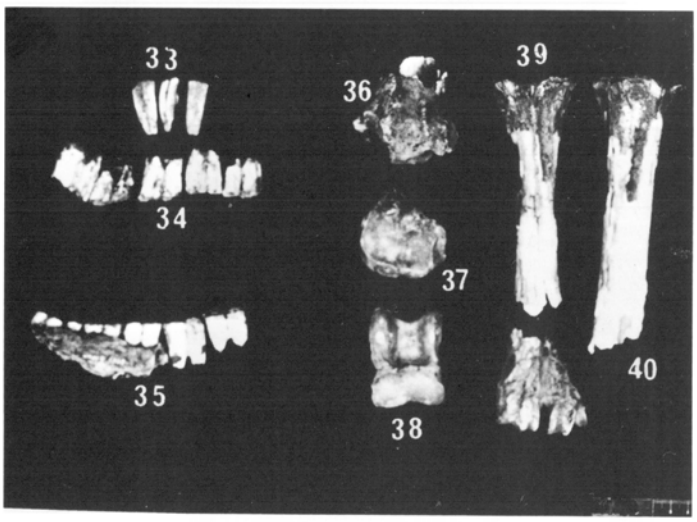
17～20；SK 066（17～19 ウマ、20 ウシ）
21～23；SK 067(ウマ)



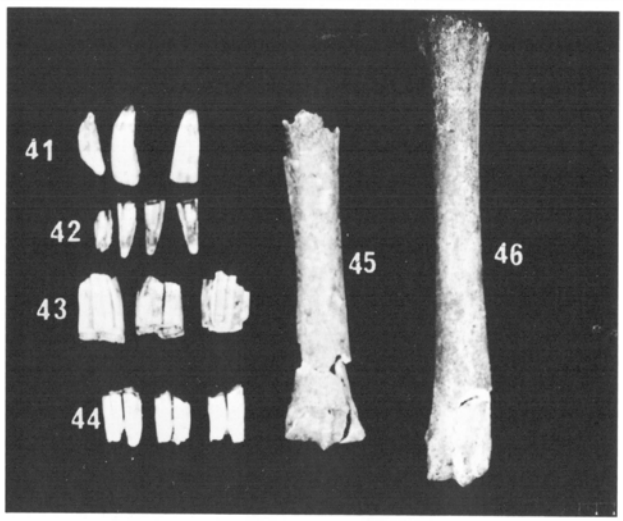
24・28；SK 079（24～27 ウマ、28 ウシ）



29・30；SK 086（ウマ）、31・32；SK 087（ウシ）



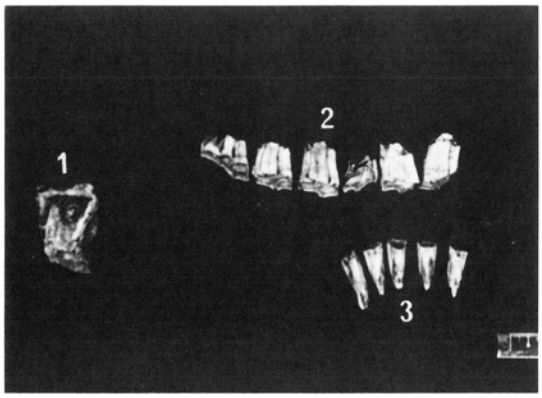
33～40；SK 088（33～35 ウマ、36～40 ウシ）



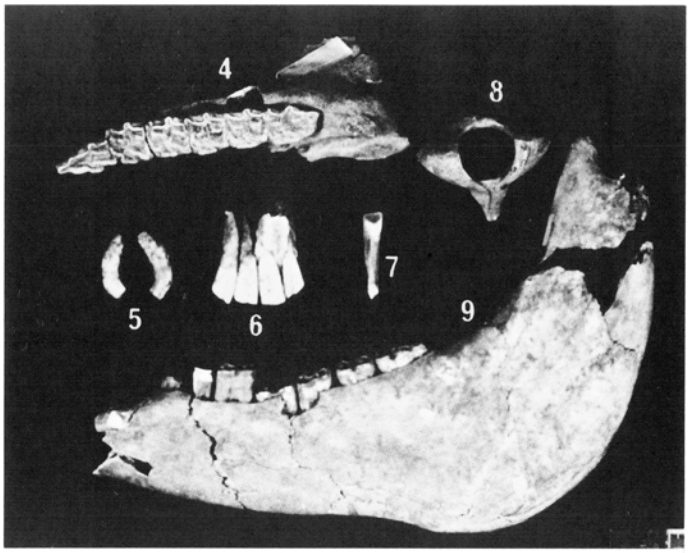
41～46；SK 090（ウマ）L；左側　R；右側

1．上顎第一後臼歯（R）　2．中手骨（R）　3．手根骨　4．基節骨（指、L）　5．種子骨
6．上顎前臼歯　7．距骨（L）　8．踵骨（R）　9．足根骨（L）　10．中足骨（R）
11．中足骨（L）　12．基節骨（L R、指）　13．基節骨（趾、R）　14．中節骨（R、骨）　15．中節骨（趾）
16．末節骨（L、R）　17．上顎切歯（L）　18．上顎臼歯（L）　19．距骨（R）　20．距骨（R）
21．上腕骨（R）　22．下顎切歯（L）　23．上顎第二後臼歯（R）　24．橈骨（L）　25．中手骨（L）
26．手根骨　27．基節骨（R、趾）　28．脛骨（L）　29．距骨（R）　30．基節骨（R、趾）
31．下顎骨と第二後臼歯（R）　32．距骨（R）　33．切歯（L、R）　34．上顎第三前臼歯～第三後臼歯（R、右から）
35．下顎第三前臼歯～第三後臼歯（R，右から）　36．脛骨（L）　37．足根骨（L）　38．距骨（R）
39．中足骨（L）　40．中足骨（R）　41．上顎臼歯（R）　42．下顎臼歯（L、R）　43．上顎臼歯（L、R）
44．下顎臼歯（L、R）　45．中手骨（L）　46．中足骨（R）

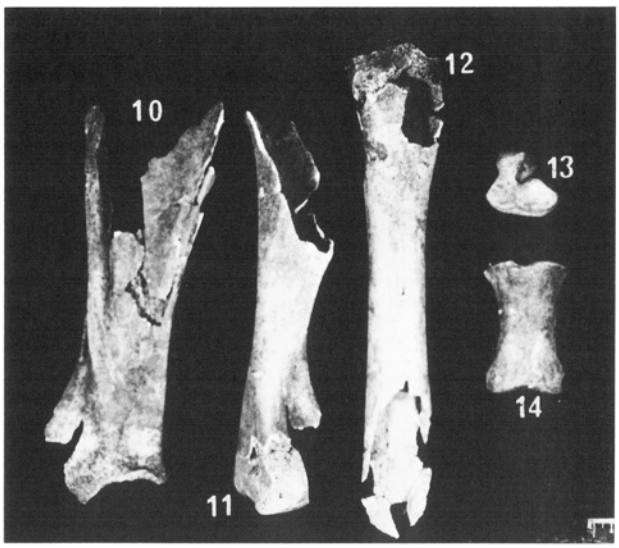
図版　III



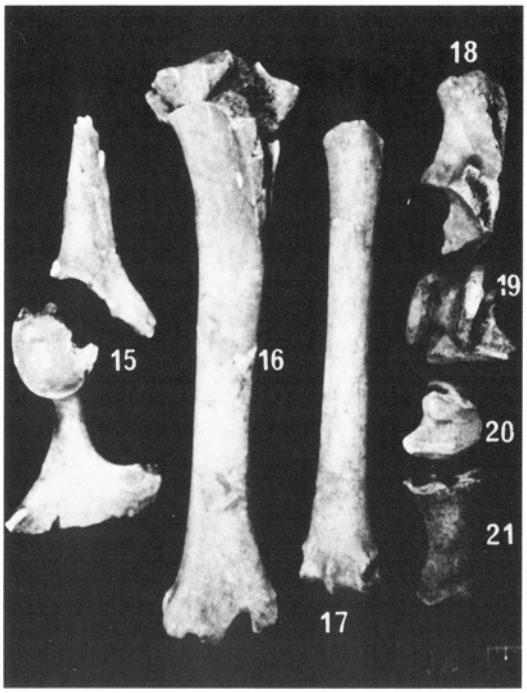
１；SK 089（ウシ）２，３；SK 0110（ウマ）



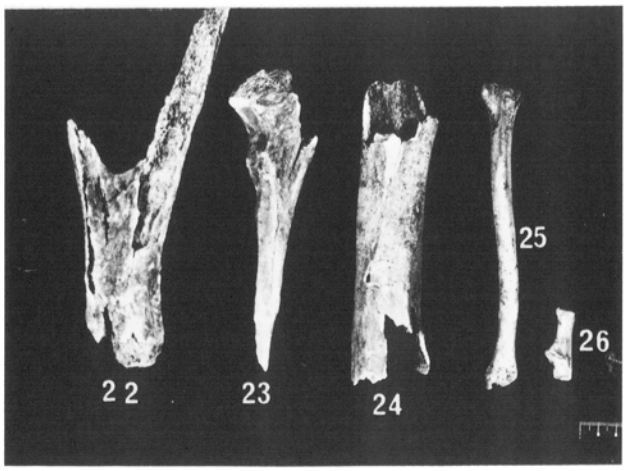
４～９；SK 4063（ウマ）



10～14；SK 4063（ウマ）



15～21；SK 4063（ウマ）



22～24；SK 4022（ウシ）

25・26；SX 4007（イヌ）

1．距骨　2．上顎第二前臼歯～第三後臼歯（R）
3．下顎切歯（L、R）　4．上顎第二前臼歯～第三後臼歯（R、左から）
5．犬歯（L、R）　6．上顎切歯（L、R）　7．下顎切歯（L）
8．頭蓋骨　9．下顎骨（L）　10．肩甲骨（L）
11．上腕骨（R）　12．橈骨（L）　13．第三手根骨
14．基節骨（R、指）　15．寛骨　16．脛骨（R）
17．中足骨（L）　18．踵骨（R）　19．距骨（R）
20．第三足根骨　21．基節骨　22．肩甲骨（L）
23．尺骨（L）　24．大腿骨（R）　25．脛骨（L）
26．踵骨（L）

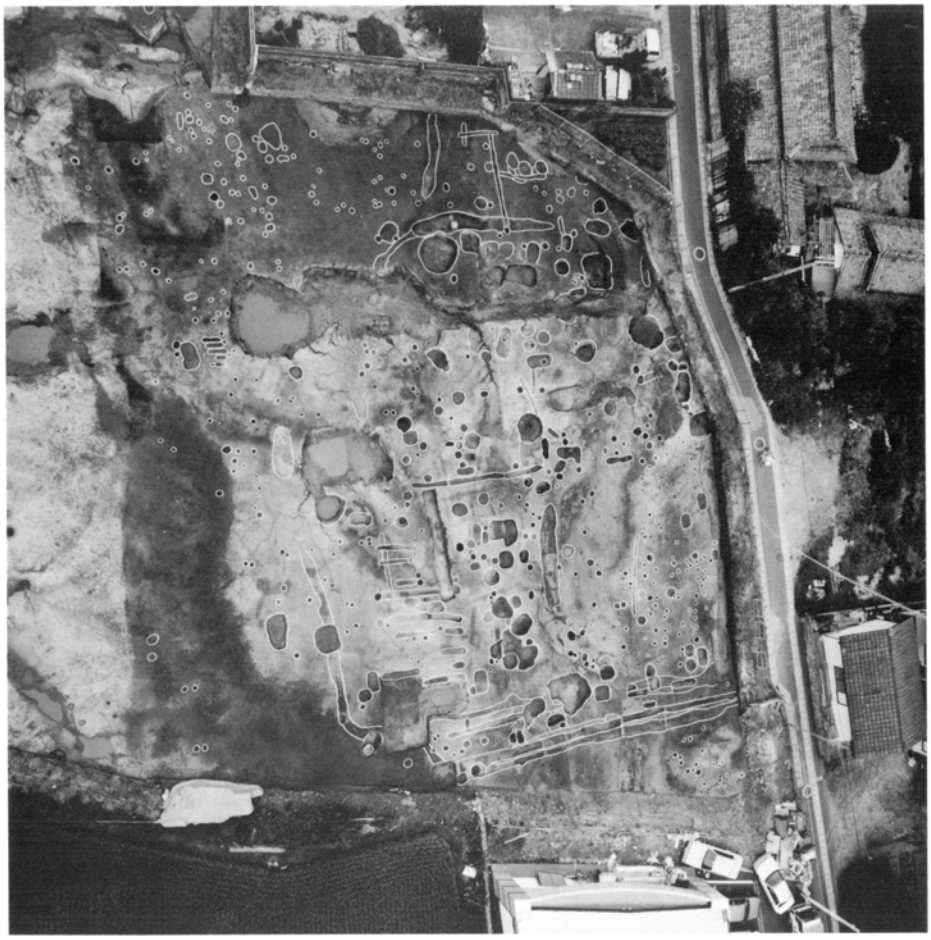
図　　版

工事が進む福岡外環状道路（南東から）

(1)野芥大薮遺跡調査区全景

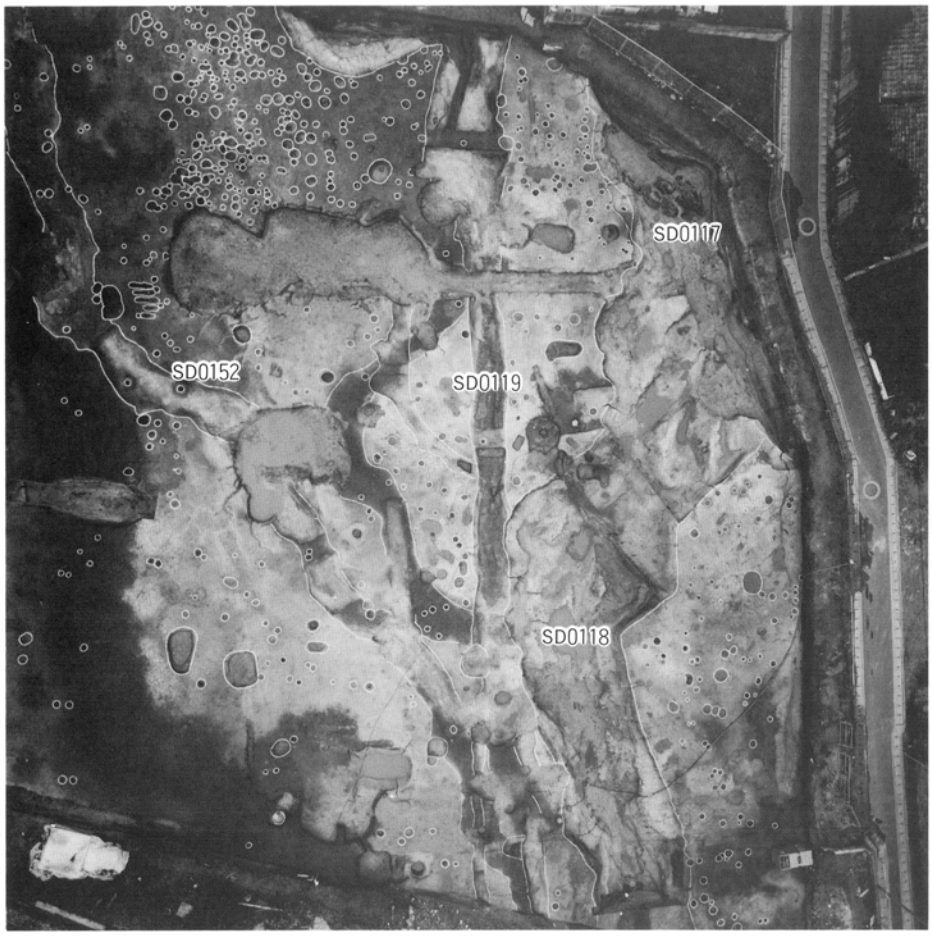
(2) I 区全景

PL. 2



(1) I 区東側上面遺構検出状況

(2)同南側



(1) Ⅰ区東側下面遺構検出状況

(2) Ⅰ区中央部遺構検出状況

PL. 4

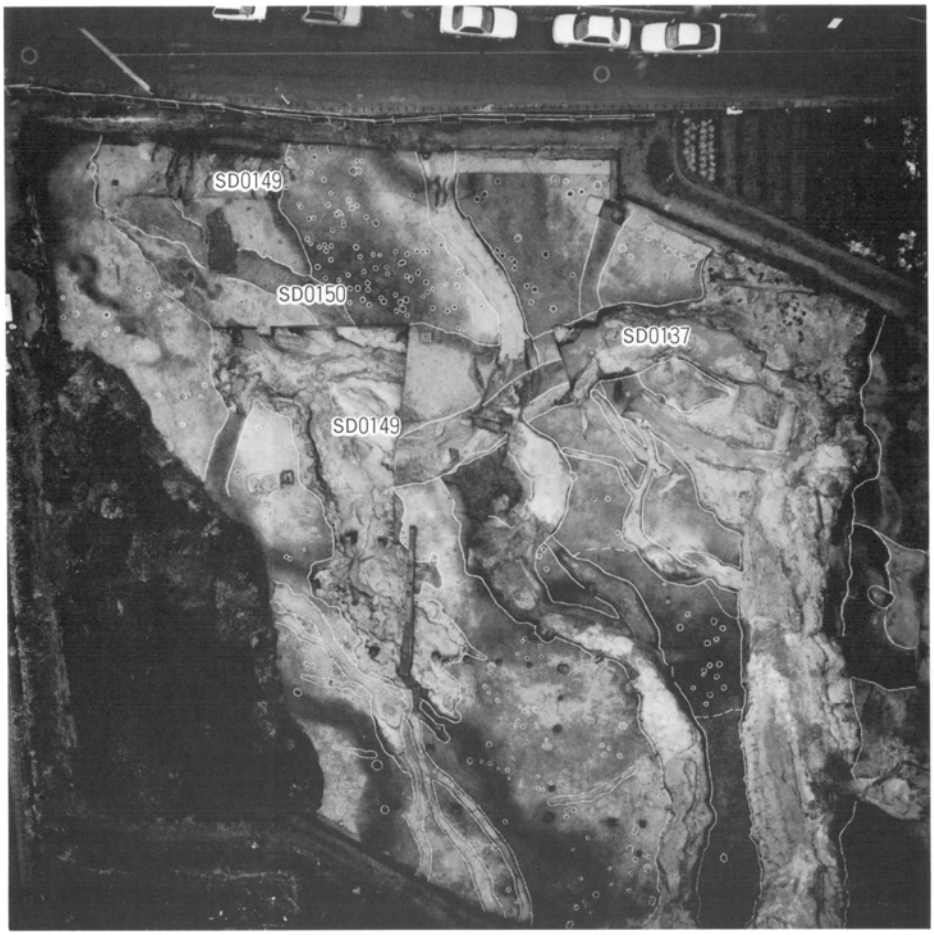
(1) I 区中央部 SD 019・020

(2) I 区西側遺構検出状況

(1) Ⅰ区南西隅遺構検出状況

(2)同下面遺構検出状況（北西から）

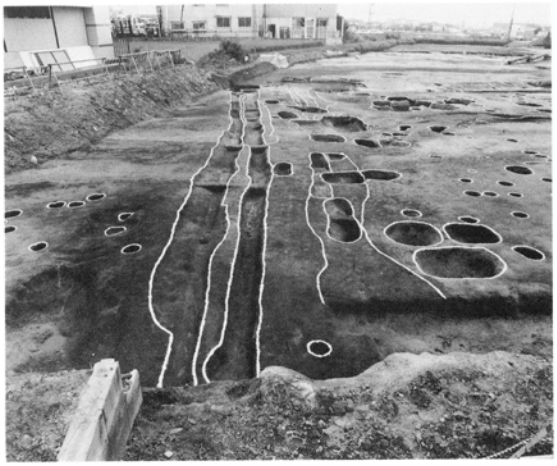
PL. 6



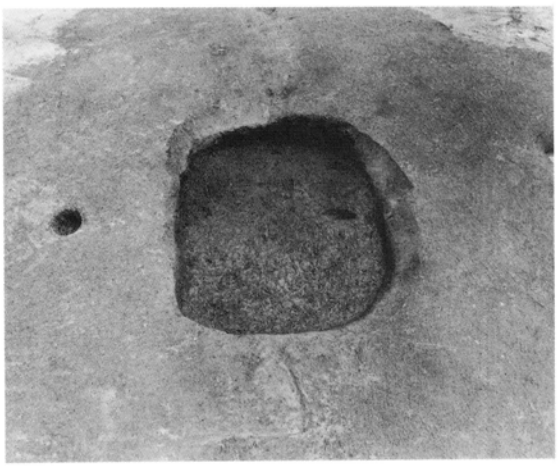
(1) I 区西側遺構検出状況

(2)同検出状況

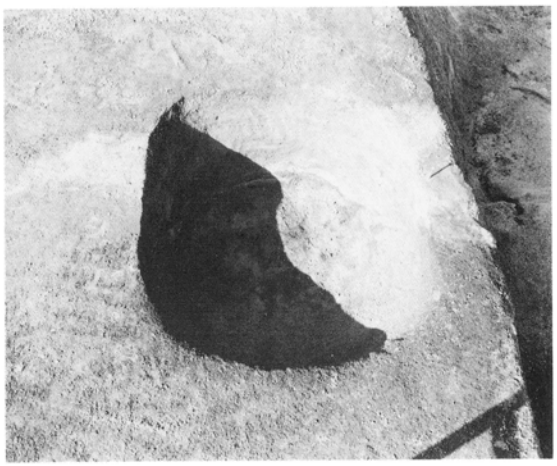
(1) SB 085（北から）



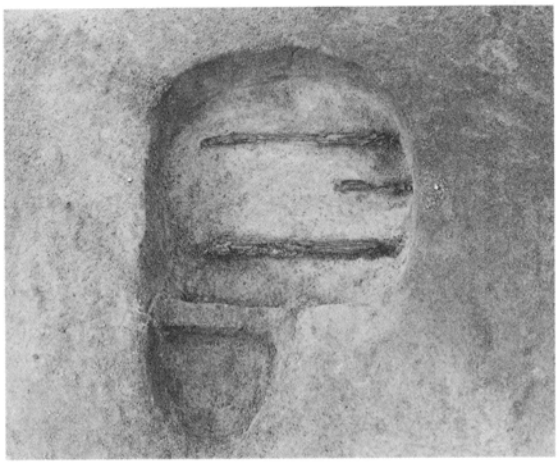
(2) SD 001・002（東から）



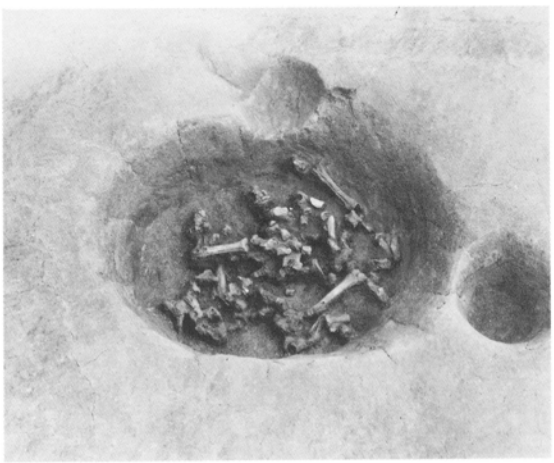
(3) SK 068（北から）



(4) SK 0122（南から）



(5) SK 0160（北から）



(6) SK 065（北西から）

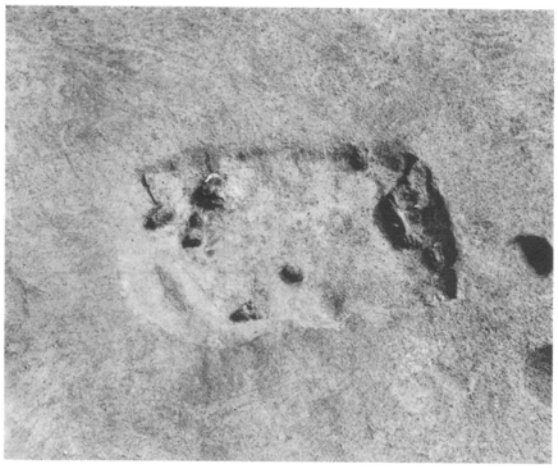
(7) SK 090（西から）

(8)同家畜骨検出状況（北から）

PL. 8

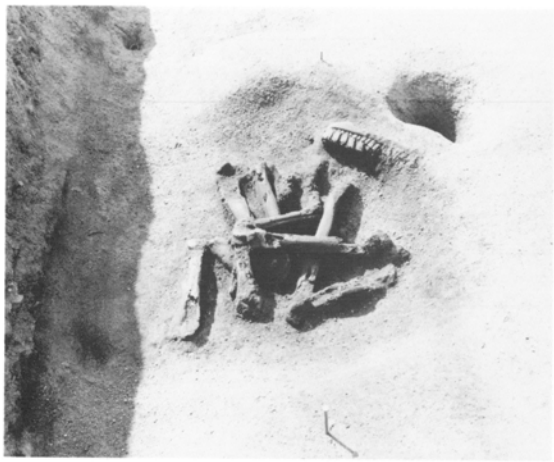
(1) SK 066（南から）

(2) SK 079（南から）

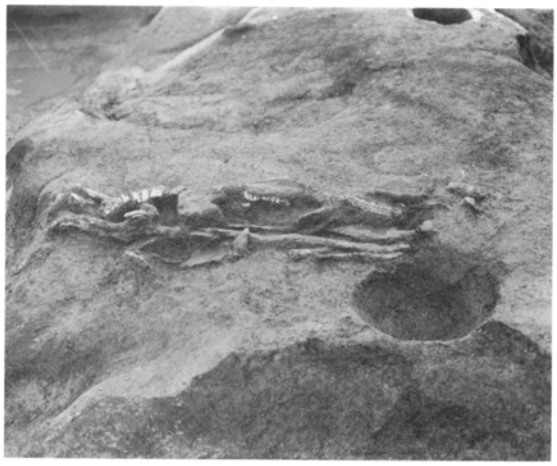


(3) SK 086（西から）

(4) SK 087（北から）



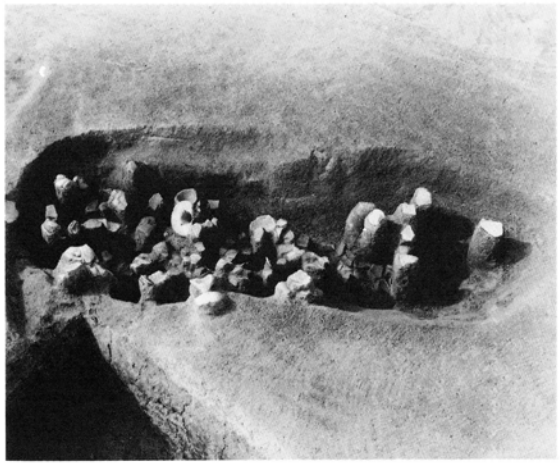
(5) SK 088（北から）



(6) SK 0110（東から）

(7) SK 067（北東から）

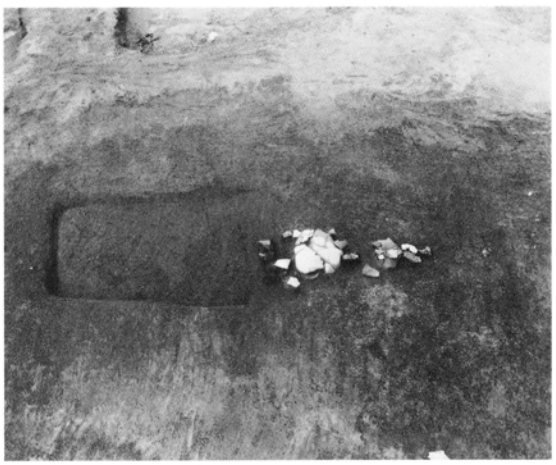
(8)同下面遺物出土状況（北から）



(1) SK 096（北東から）

(2) SK 0102（南から）

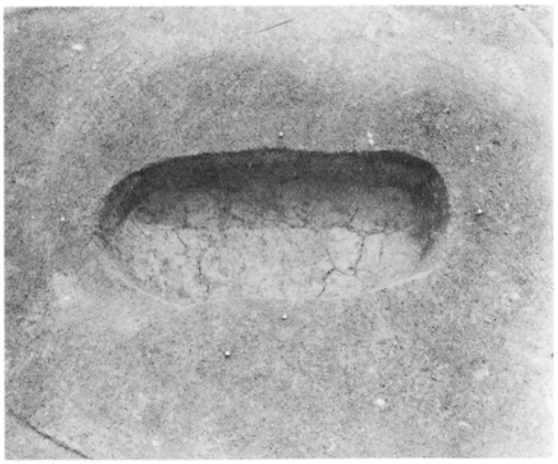
(3) SK 0108（南東から）



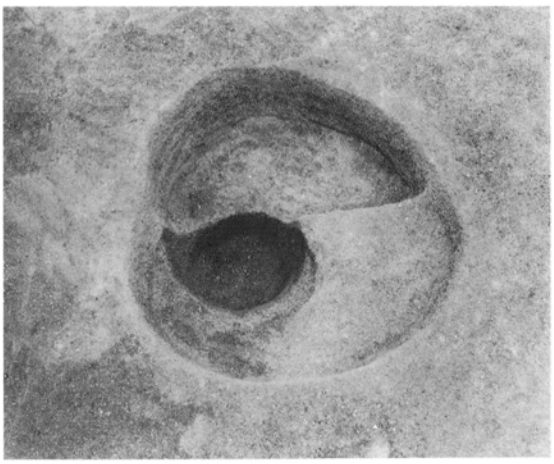
(4) SK 0109（北東から）

(5) SK 0116（北東から）

(6) SK 0140（北西から）



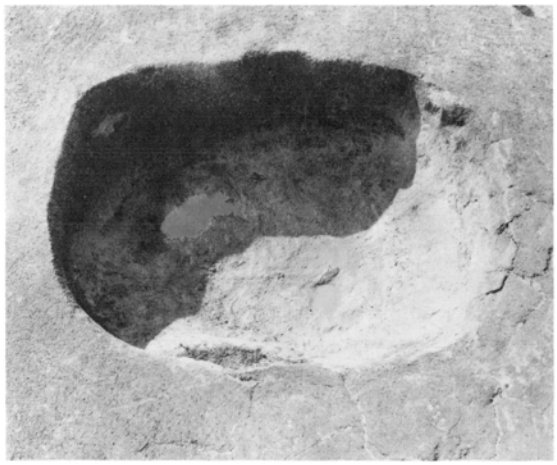
(7) SK 099（北西から）



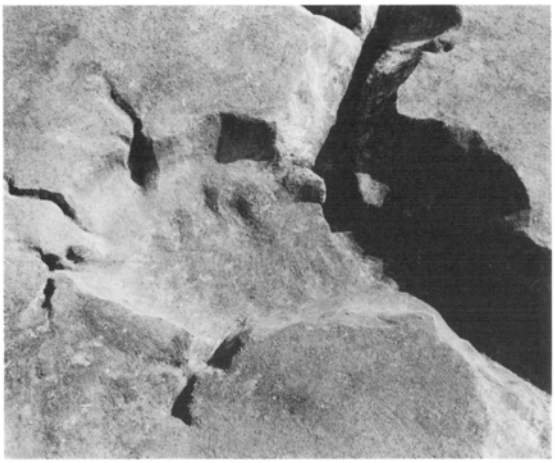
(8) SK 0101（西から）

PL. 10

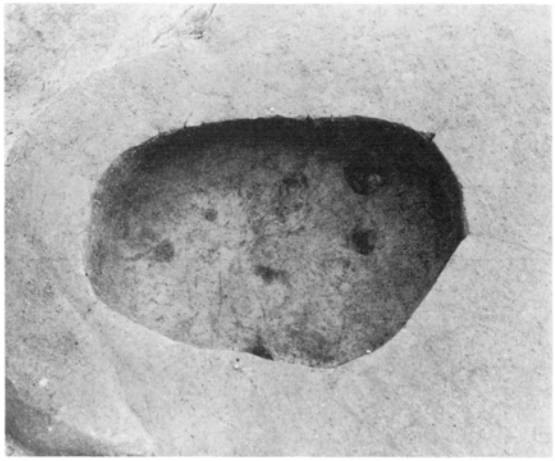
(1) SK 0115（北から）



(2) SK 0121（東から）

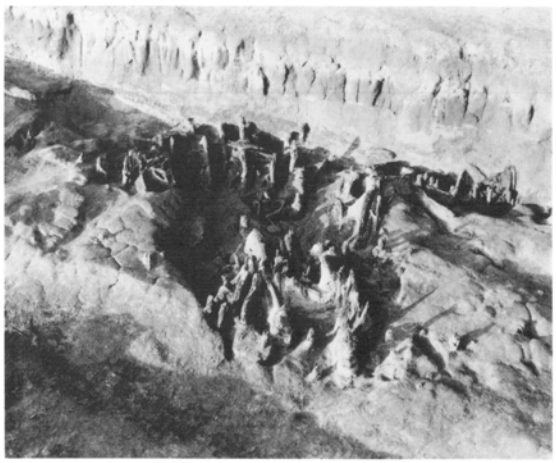


(3) SK 0124（西から）

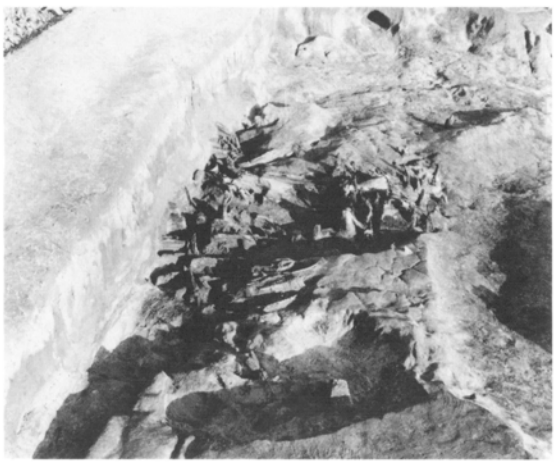


(4) SK 0142（北から）

(5) SK 0143（南東から）



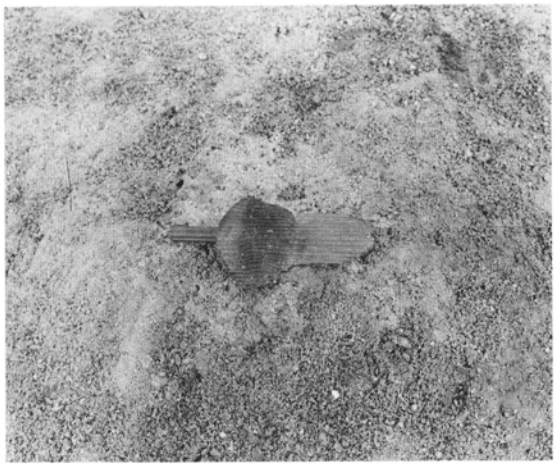
(6) SD 019 堰検出状況（南から）



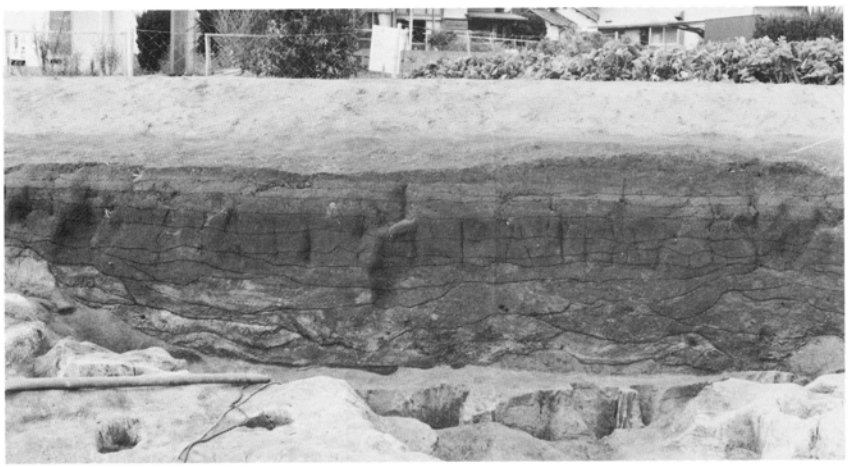
(7) SD 019 堰検出状況（西から）

(8) SD 019 堰断面（南から）

(1) SD 019 内 SX 0123（南東から）



(2) SD 019 内 木製品出土状況



(3) SD 019 北壁土層（南から）

(4) SD 019 2 号ベルト土層（北から）

(5) SD 019 南壁土層（北から）

PL. 12

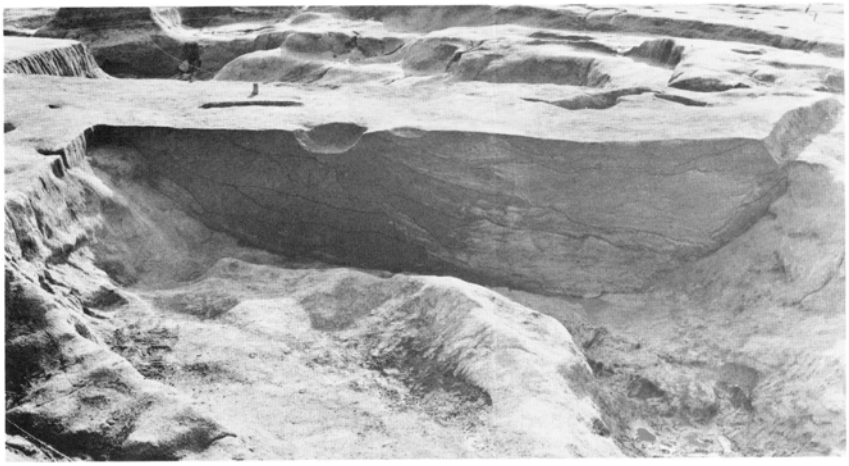
(1) SD 020 東壁土層（西から）

(2) SD 020 西壁土層（東から）

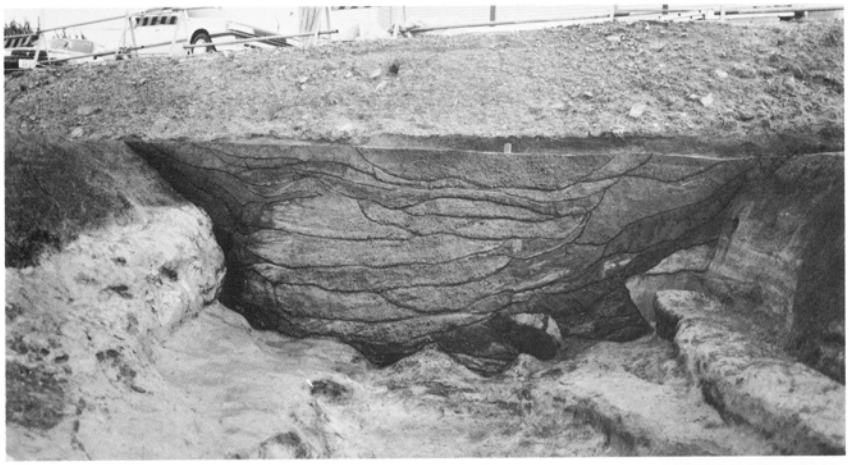
(3) SD 0111 2号ベルト土層（南から）

(4) SD 0111・0112 3号ベルト土層（南から）

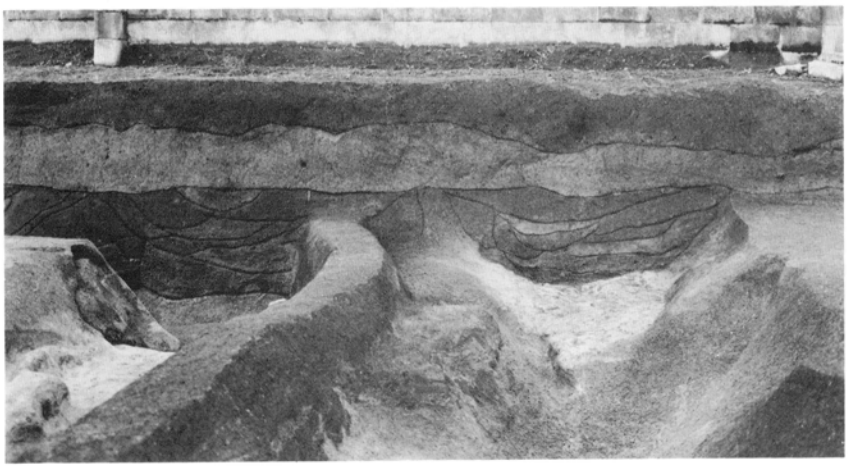
(1) SD 0117・0118 北壁土層（南から）



(2) SD 0118 ベルト土層（北から）



(3) SD 0118 南壁土層（北から）



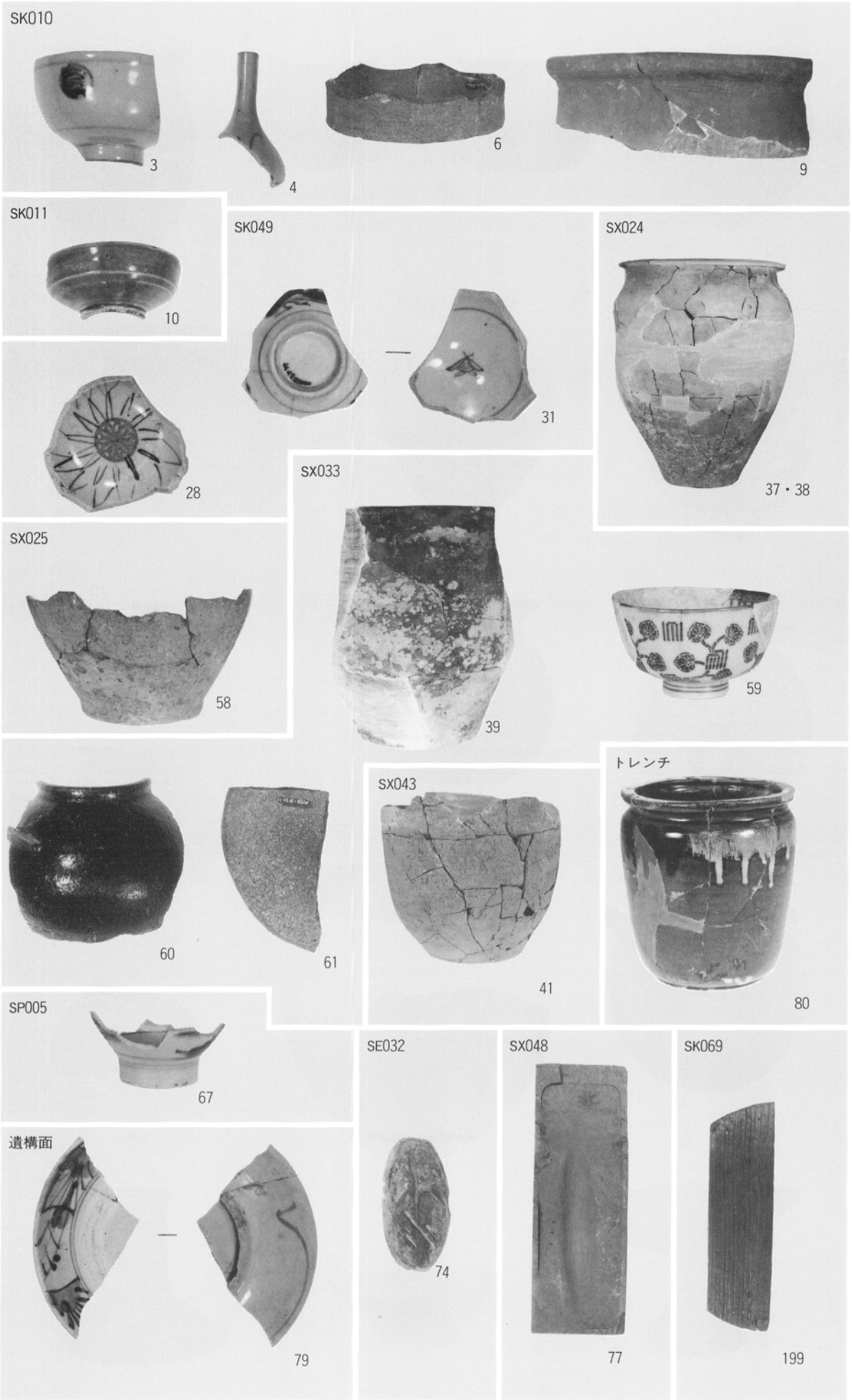
(4) SD 0119・0131 北壁土層（南から）

PL. 14

(1) SD 0137 土層（東から）

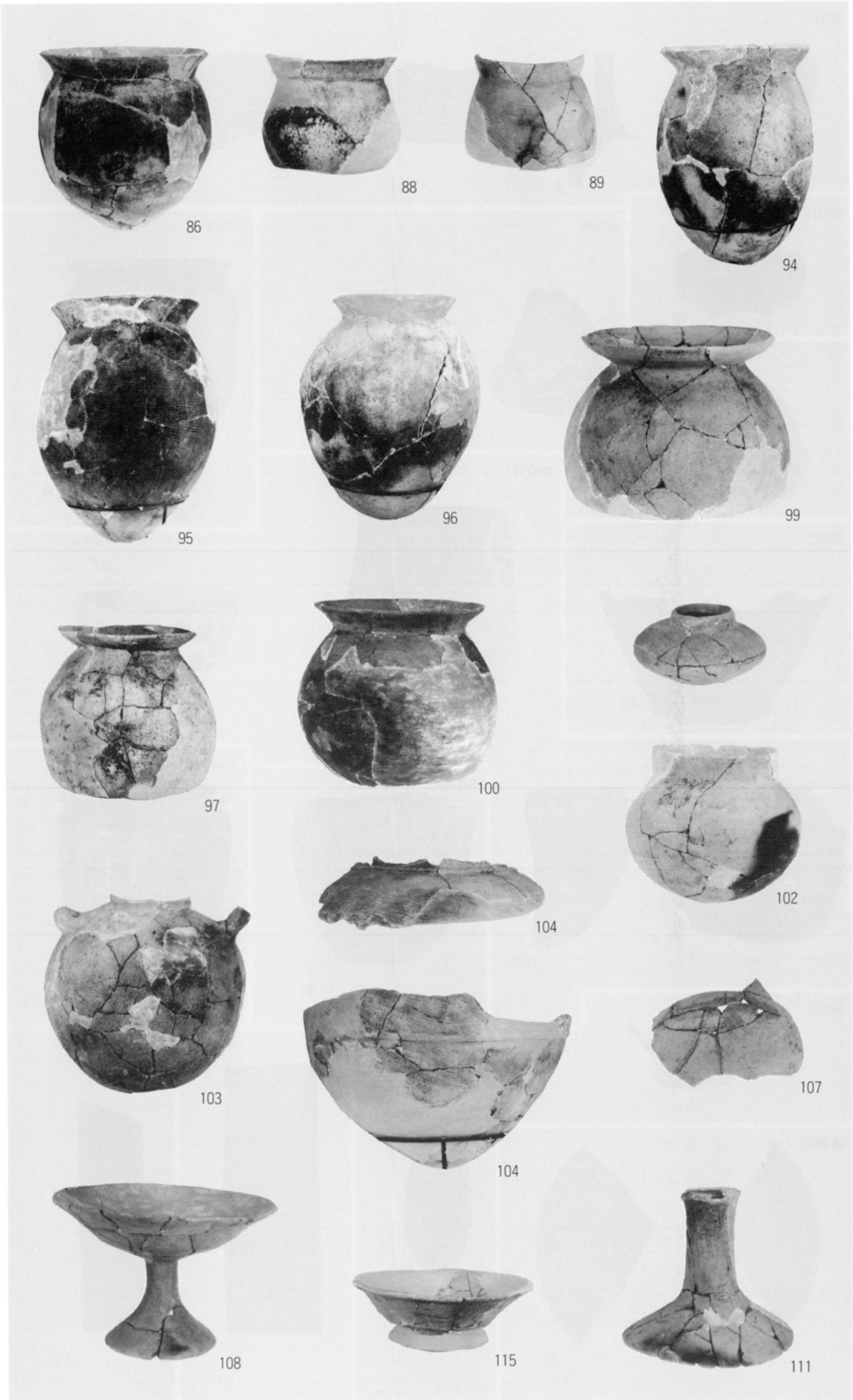
(2) SD 0149 2区東壁土層（西から）

(3) V区 遺構検出状況（西から）

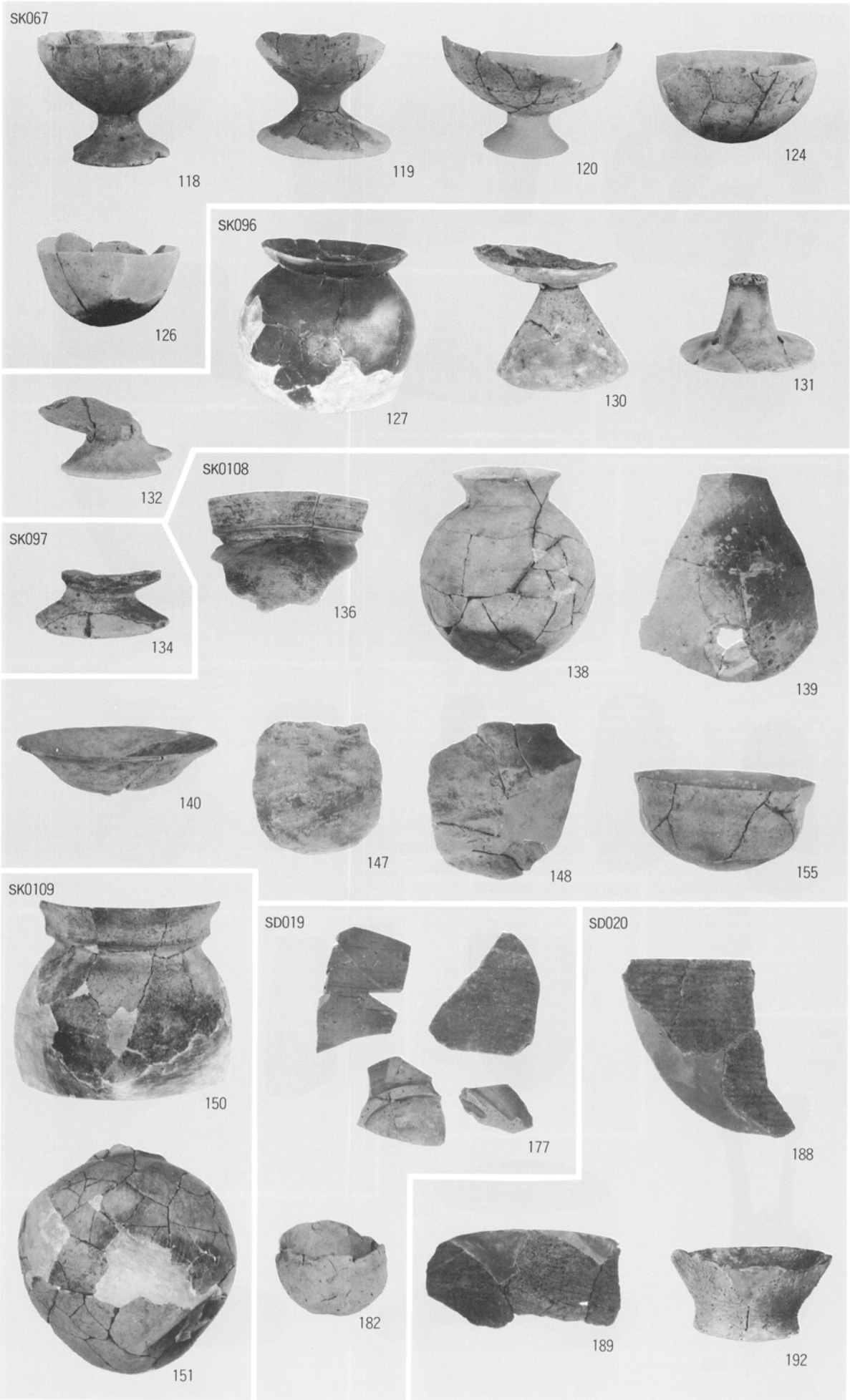


Ⅰ区出土遺物１（縮尺不統一）

PL. 16

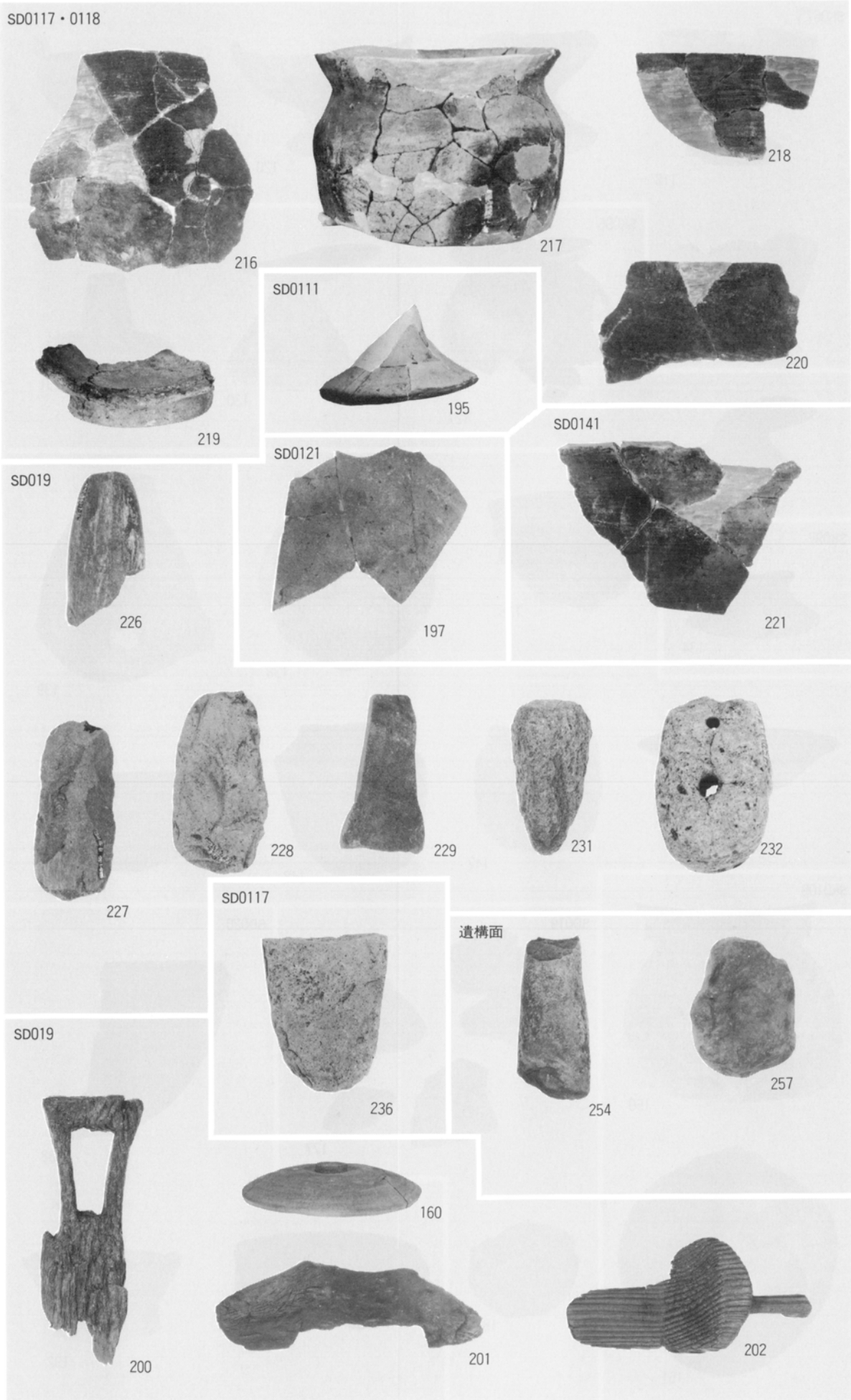


Ⅰ区出土遺物２（縮尺不統一）



Ⅰ区出土遺物３（縮尺不統一）

PL. 18



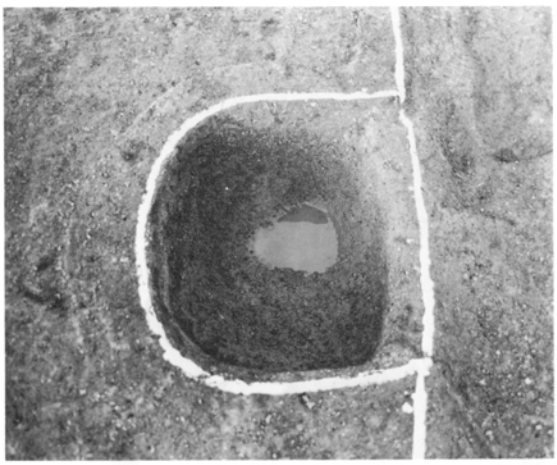
I 区出土遺物 4（縮尺不統一）

(1)II区全景（西から）

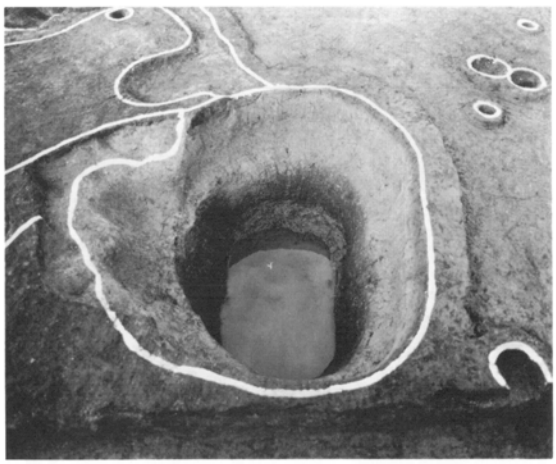
(2)II区全景（南から）

PL. 20

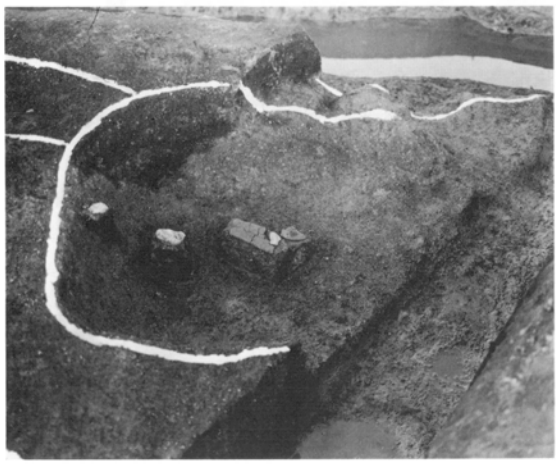
(1) SD 2016（西から）



(2) SK 2007（南から）



(3) SK 2008（南から）



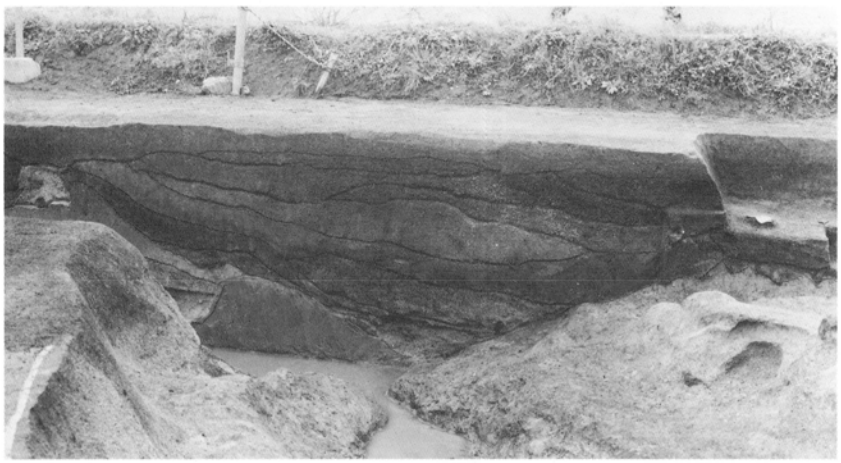
(4) SK 2012（西から）

(5) SK 2024（東から）

(1) SK 2025（東から）

(2) SK 2028（西南から）

(3) SD 2016 ベルト土層（北から）



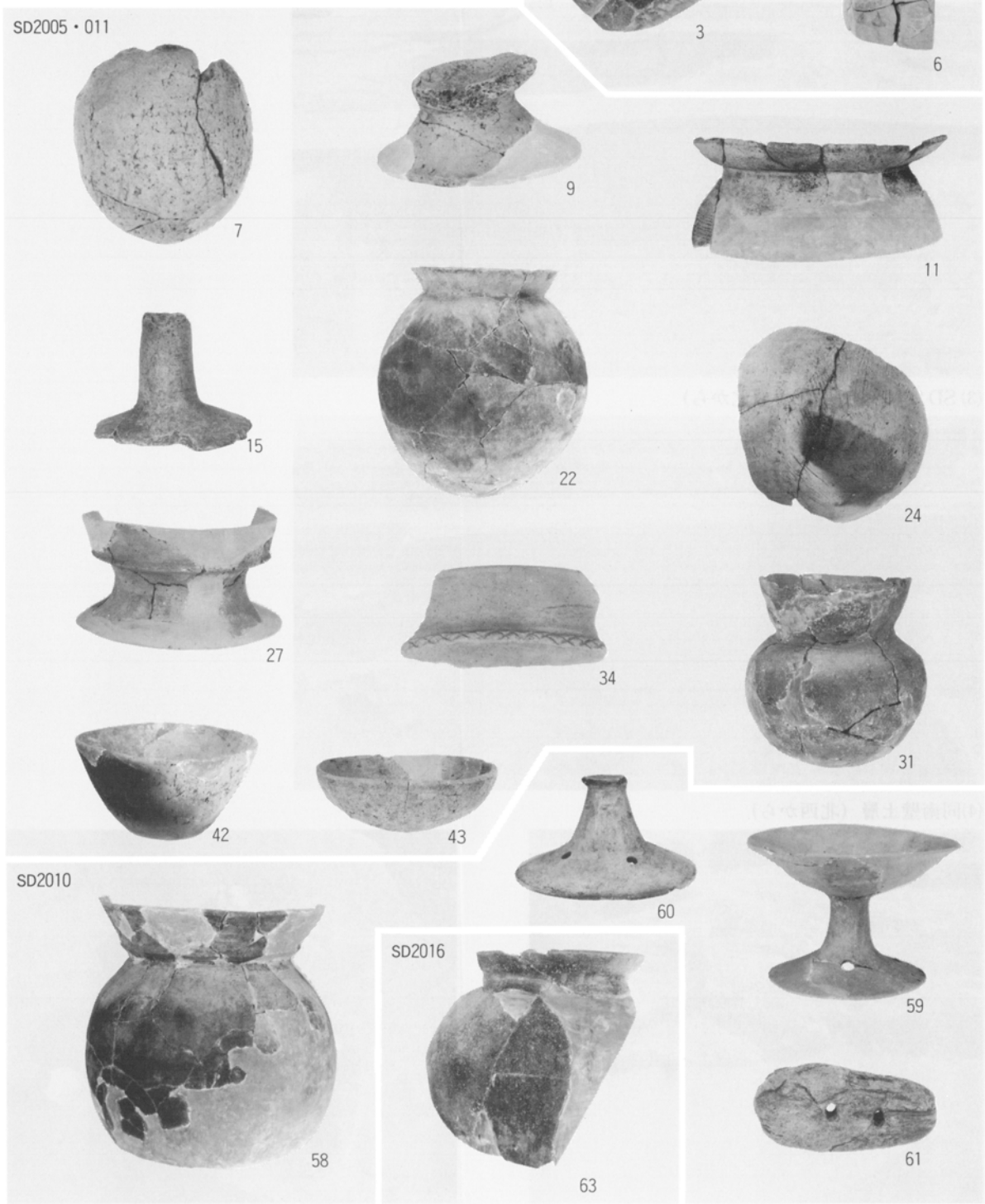
(4)同南壁土層（北西から）

(5) SD 2005・011 内 杭検出状況（北から）

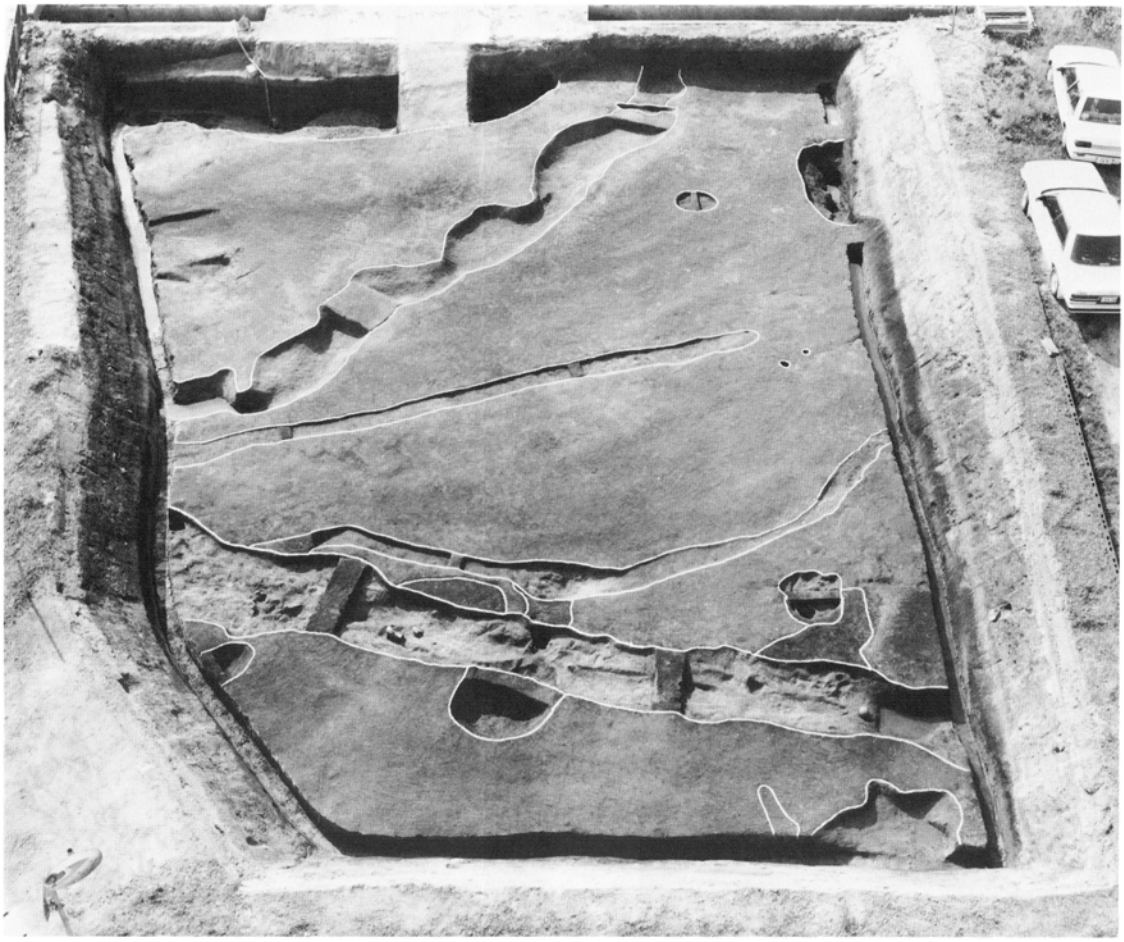
(6)同遺物出土状況（東から）

PL. 22

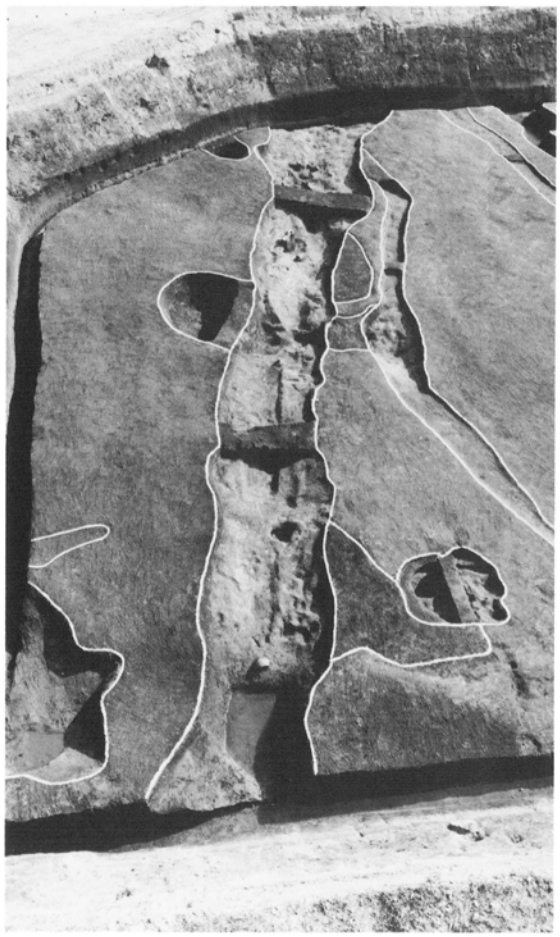
(1) SD 2010 遺物出土状況（西から）



(2)II区出土遺物（縮尺不統一）

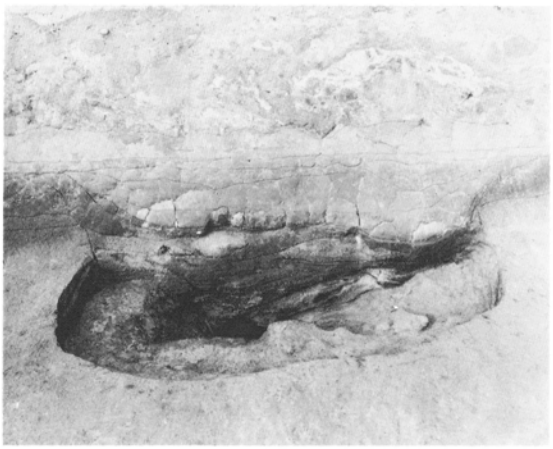


(1)Ⅲ区全景（東から）



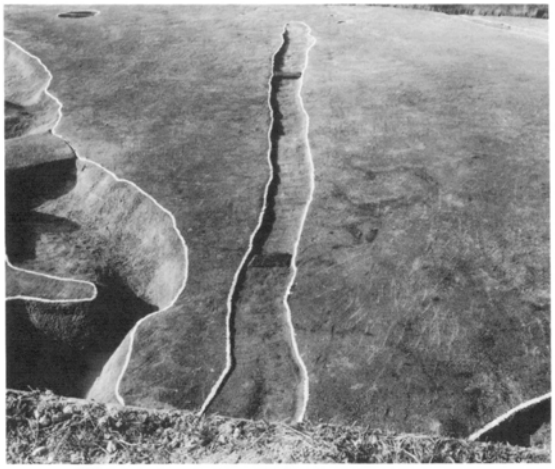
(2) SD 3001（東から）

(3) SK 3009（南東から）



(4) SK 3010（南から）

PL. 24

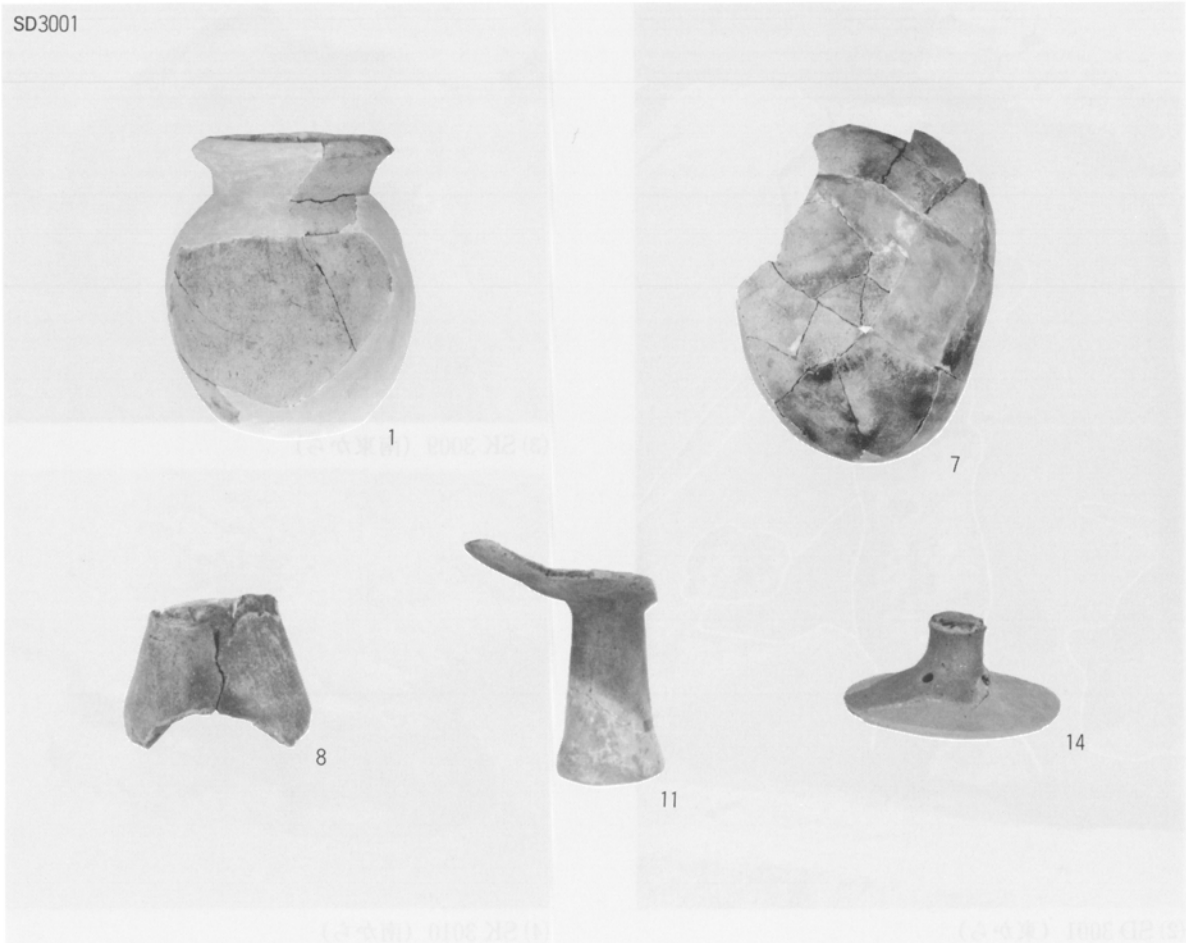


(1) SD 3003（南から）

(2) SD 3005（南から）

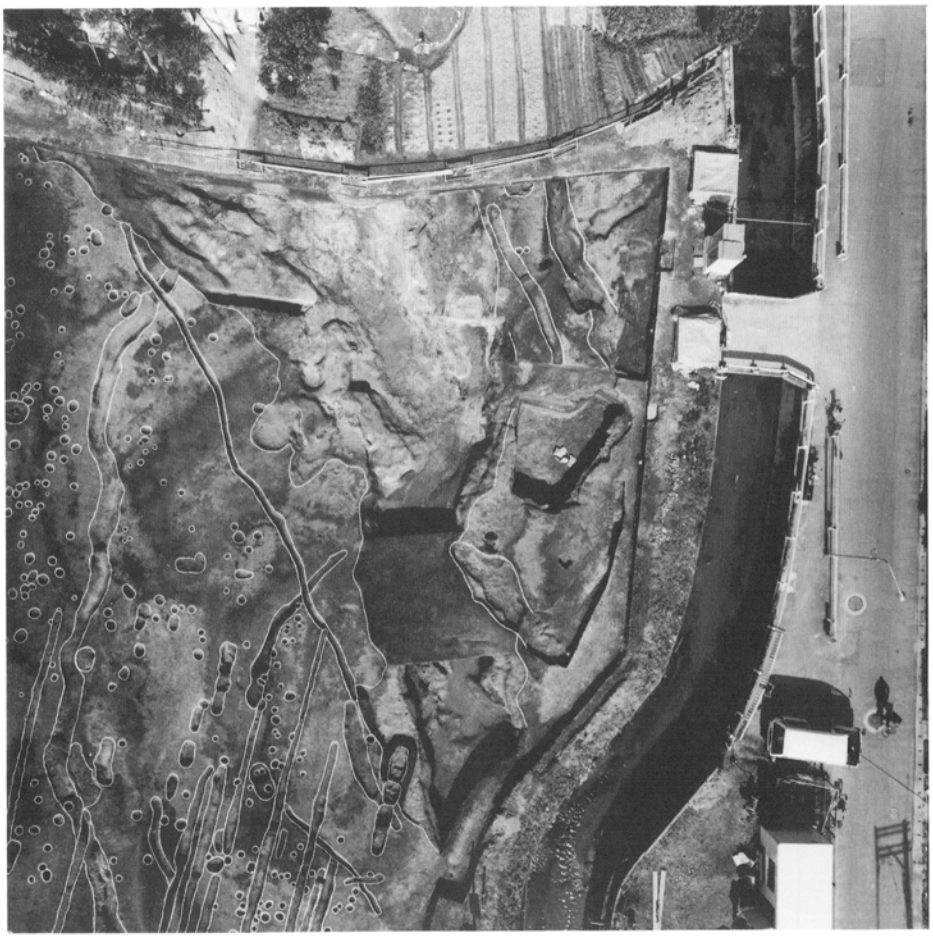
(3) SD 3005 土層（南から）

(4)III区南壁土層（北から）



(5)III区出土遺物（縮尺不統一）

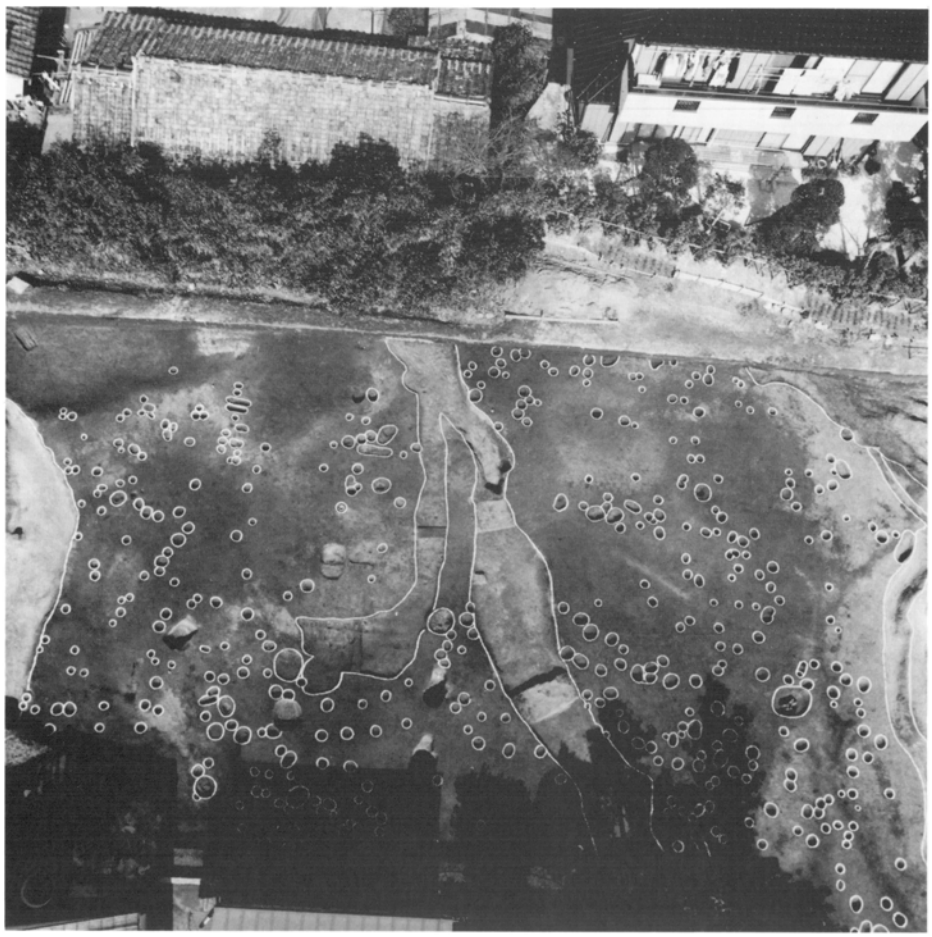
(1)IV区全景



(2)IV区北東側全景

PL. 26

(1)IV区南東側全景



(2)IV区北西側全景

(1)IV区東側第２面全景

(2)IV区南西側全景（北から）

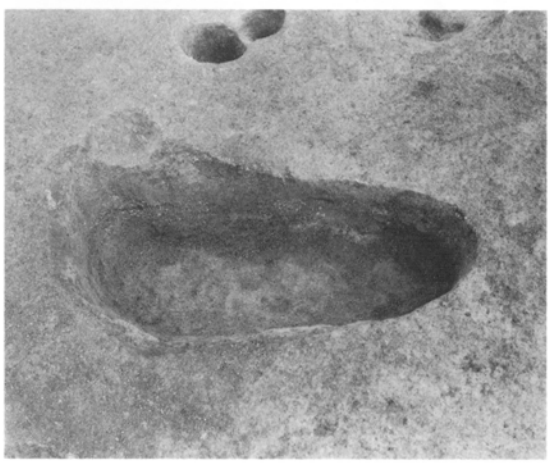
PL. 28

(1)IV区南西側第2面全景

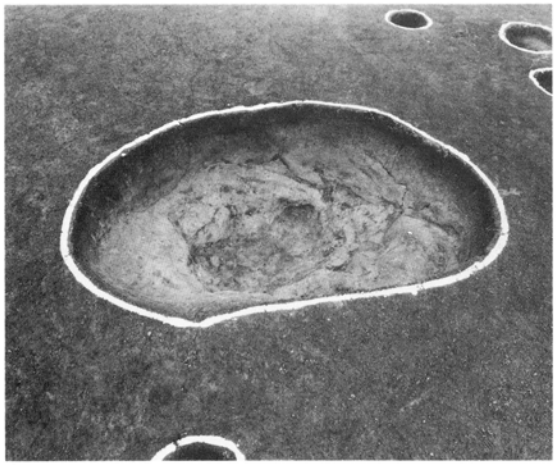
(2)IV区北西隅（東から）

(3) SX 4001（南から）

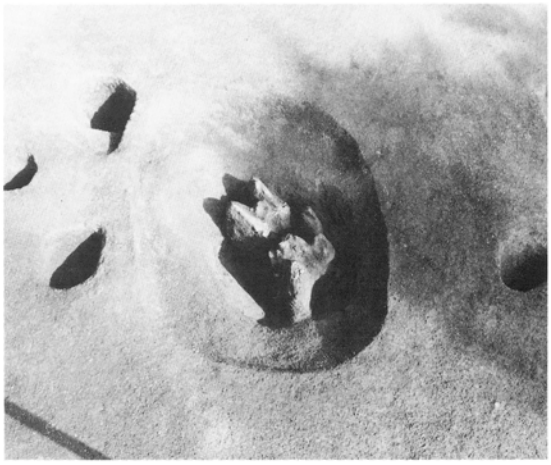
(4) SX 4031（南から）



(5) SK 4036（東から）

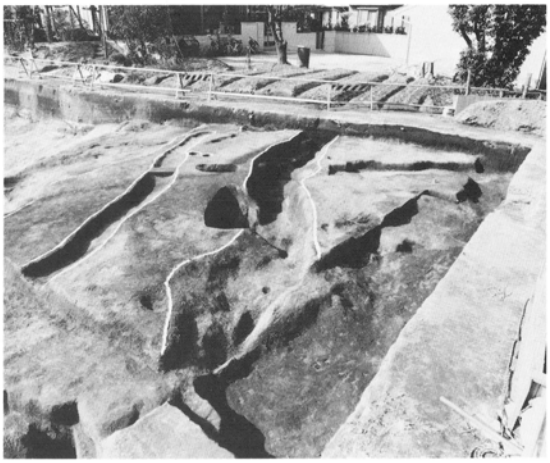


(1) SK 4048（南から）



(2) SK 4022（西から）

(3) SK 4063（南から）



(4) SD 4008（南東から）

(5) SD 4012・013（東から）

(6) SD 4025（南東から）

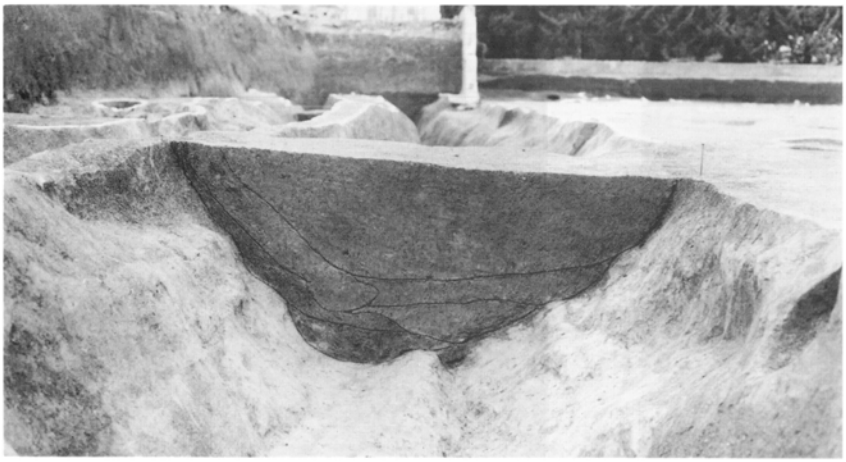
(7) SD 4042 流木検出状況（北東から）

(8)同流木検出状況（北から）

PL. 30

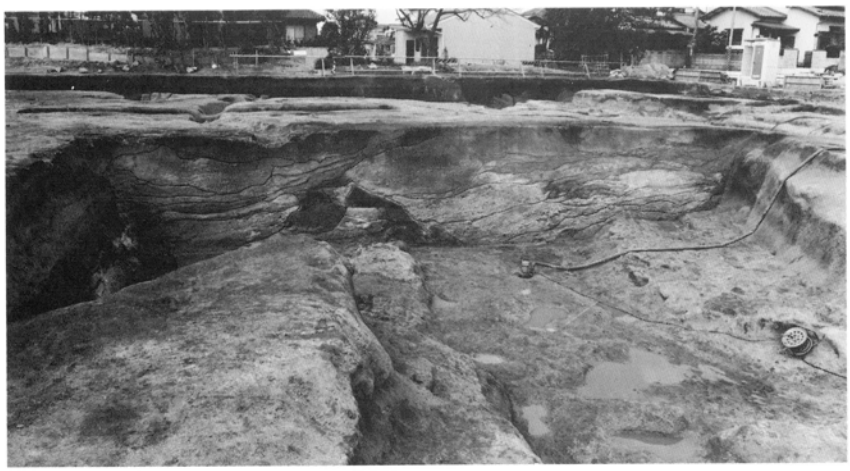
(1) SD 4002 北壁土層（南から）

(2) 同ベルト土層（南から）



(3) SD 4012 ベルト土層（東から）

(4) SD 4043 2区東壁土層（西から）

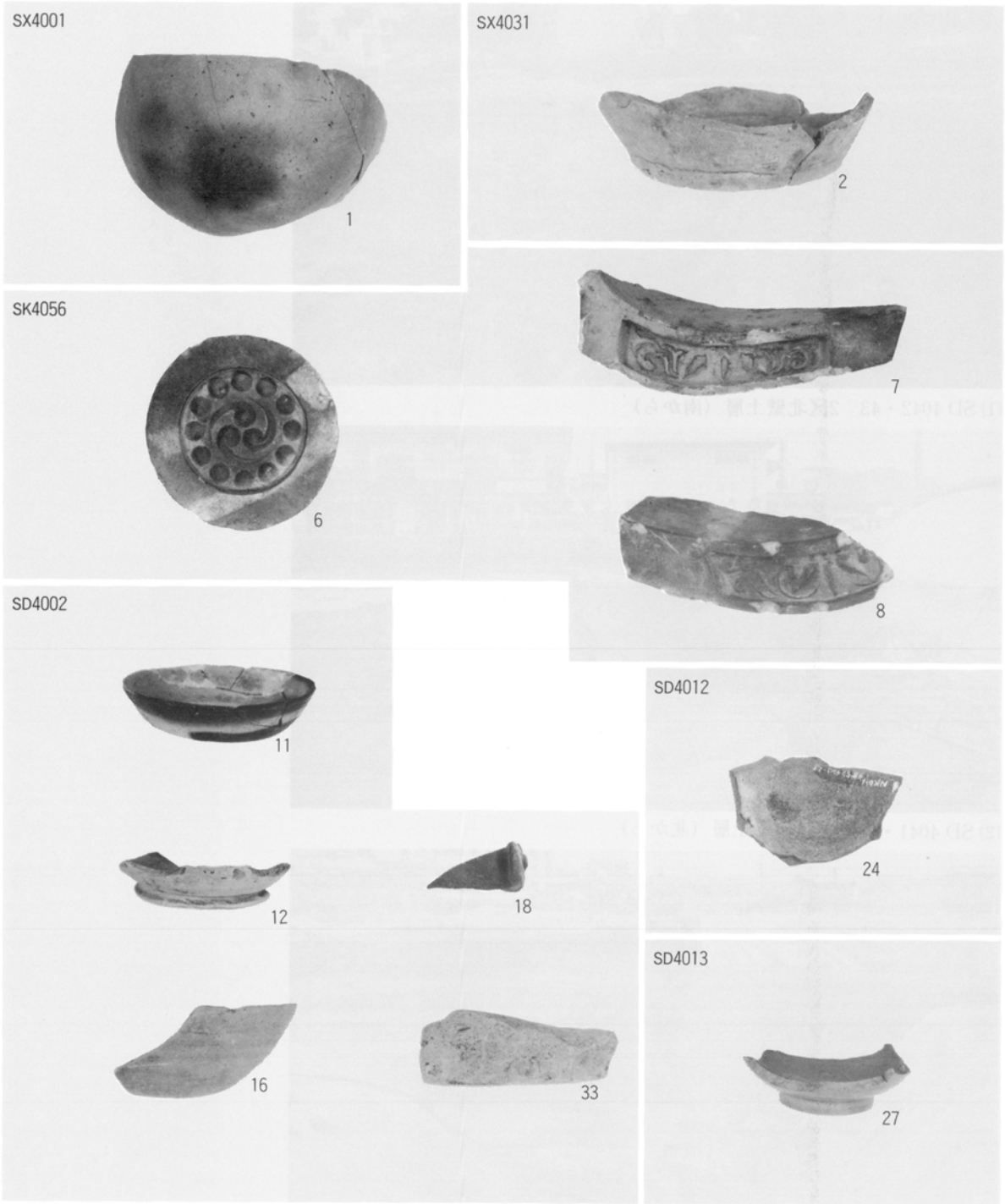


(1) SD 4042・43　2区北壁土層（南から）

(2) SD 4041・043　2区南壁土層（北から）

(3) SD 4060　西壁土層（東から）

PL. 32



(1)IV区出土遺物（縮尺不統一）

(2)V区出土遺物（縮尺不統一）

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告

－ 4 －

野芥大薮遺跡
第１次調査

1998年（平成10年）３月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印刷　金丸印刷株式会社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６－46－１

福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集

福岡外環状道路関係
埋蔵文化財調査報告
—4—

福岡市早良区賀茂所在野芥大薮遺跡第1次調査

(付図2枚在中)